高知市文化財調査報告書第39集

尾　戸　遺　跡

共同住宅立体駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015. 3

高知市教育委員会

尾　戸　遺　跡

共同住宅立体駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015. 3

高知市教育委員会

調査区遠景（北より）

井戸跡SE1半截状況（西より）

能茶山焼染付五寸皿（89）

尾戸焼灰釉小皿（183）

色絵五寸皿（132）

京都系灰吹き（3）

泥面子（361）

施釉土器ミニチュア（359）

施釉土器ミニチュア（163・164）

土人形（11・282）

序

尾戸遺跡は、国史跡高知城跡のある大高坂山を間近に望み、かつて堀の役割を果たしていた大川（江ノ口川）に接する地にあり、城下町の北端、大川筋の家並みや「尾戸焼」の窯元を古絵図にたどることができます。

高知市街地の大半は、古代以前には浦戸湾が深く入り込み、海中にあったとみられます。しかし微高地であった当地周辺では、弥生時代を始原とする遺物の出土や湊とされる「小津」の地名から、人々の居住地として比較的早い時代に拓（ひら）かれていたことが知られます。

この度、開発の計画により事前の緊急発掘調査を実施したところ、高知城下町の侍屋敷跡の遺構が良好な状態で検出され、地域の歴史にとって重要な場所であることが確認されました。

この報告書が高知市の歴史を理解するうえで何らかの役割を果たし、また地域文化の解明への一助ともなれば幸いです。最後になりましたが、調査にご協力いただいた穴吹興産株式会社をはじめとする関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成27年３月

高知市教育委員会

例　　言

1．本書は、高知市教育委員会が平成25年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．調査対象地は、高知市小津町25番地に所在する。

3．調査期間と調査面積は次の通りである。資料整理、報告書作成は平成25年度から26年度にかけて行った。

　試掘調査　平成23年3月15日～3月19日、調査面積32㎡

　　平成23年5月18日～5月20日、調査面積66㎡

　本調査　　平成26年1月7日～1月29日、調査面積245㎡

4．調査体制は以下の通りである。

　調査主体　高知市教育委員会

　調査事務　同　民権・文化財課主査　吉村健吉

　調査担当　同　民権・文化財課指導主事　浜田恵子　梶原瑞司

5．本書の編集と執筆は浜田が行った。遺物写真は梶原が撮影した。

6．調査にあたっては、穴吹興産株式会社、高知県教育委員会文化財課をはじめとする関係諸機関の方々の協力を得た。

7．遺物の資料調査については泉幸代はじめ諸氏のご教示を賜った。（敬称略）

8．発掘作業、整理作業においては下記の方々の協力を得た。

　［発掘作業］岡﨑速男　窪田泰詔　下本益之　武内順一　武内昌子

　［測量補助］片岡和美　田上浩　山﨑佳代子

　［整理作業］樫尾洋子　片岡和美　島村加奈　和田エリ

9．掲載している平面図の方位は国土座標を基準としている。巻末の報告書抄録における経緯度については世界測地系の数値を使用している。

10．遺構の略号は、土坑：SK、井戸：SE、溝：SD、柱穴及び小型の穴：P、性格不明遺構：SXとした。

11．出土遺物は通し番号とし、挿図、写真図版とも同一番号を使用した。遺物は高知市教育委員会が保管した。注記の略号は「13－OD」である。

本文目次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境
　1．地理的環境 …… 2
　2．歴史的環境 …… 2
第Ⅲ章　試掘調査
　1．試掘調査の方法 …… 8
　2．試掘調査の成果 …… 8
第Ⅳ章　調査の方法 …… 10
第Ⅴ章　調査の成果
　第１節　基本層序 …… 12
　第２節　遺構と遺物 …… 14
　　1．近世の遺構と遺物
　　(1) 掘立柱建物跡 …… 14
　　(2) 土坑 …… 18
　　(3) 井戸 …… 44
　　(4) ピット・埋甕 …… 49
　　(5) 杭列 …… 55
　　(6) 性格不明遺構 …… 55
　　(7) 包含層出土遺物・その他の遺物 …… 62
　　2．近代の遺構と遺物
　　(1) 土坑 …… 62
　　(2) 溝 …… 64
　　(3) 道状遺構 …… 69
　　(4) 包含層出土遺物・その他の遺物 …… 69

第Ⅵ章　考察
　第１節　絵図・文献にみる近世の大川筋と尾戸遺跡 …… 93
　第２節　尾戸遺跡検出遺構の性格と変遷 …… 108
　第３節　尾戸遺跡出土遺物の様相 …… 114

挿図目次

Fig. 1　尾戸遺跡調査区位置図 …… 1
Fig. 2　寛文己酉高知絵図（抜粋）…… 6
Fig. 3　尾戸遺跡及び周辺の遺跡 …… 7
Fig. 4　平成23年度試掘調査TP4・5平面図・セクション図・出土遺物実測図 …… 9
Fig. 5　調査区風景 …… 10
Fig. 6　調査区位置図及び平成22・23年度試掘坑配置図 …… 11
Fig. 7　基本層序 …… 13
Fig. 8　検出遺構全体図 …… 15
Fig. 9　SB1平面図・エレベーション図・出土遺物実測図 …… 17
Fig. 10　SB2平面図・エレベーション図・出土遺物実測図 …… 18
Fig. 11　SK1～3・15平面図・セクション図・エレベーション図 …… 19
Fig. 12　SK1～3出土遺物実測図 …… 20
Fig. 13　SK4～9・SX2平面図・セクション図・SK4・7出土遺物実測図 …… 21
Fig. 14　SK11～13平面図・セクション図・エレベーション図 …… 22
Fig. 15　SK12・13出土遺物実測図 …… 24
Fig. 16　SK15出土遺物実測図 …… 25
Fig. 17　SK16～20平面図・セクション図・SK16・20出土遺物実測図 …… 26
Fig. 18　SK19出土遺物実測図 …… 27
Fig. 19　SK21平面図・セクション図・エレベーション図 …… 29
Fig. 20　SK21出土遺物実測図（1）…… 31
Fig. 21　SK21出土遺物実測図（2）…… 32
Fig. 22　SK21出土遺物実測図（3）…… 33
Fig. 23　SK21出土遺物実測図（4）…… 34
Fig. 24　SK21出土遺物実測図（5）…… 35
Fig. 25　SK22・23平面図・セクション図・SK23出土遺物実測図 …… 37
Fig. 26　SK24・25平面図・セクション図・エレベーション図・SK24出土遺物実測図 …… 38
Fig. 27　SK25出土遺物実測図 …… 39
Fig. 28　SK26・30平面図・セクション図・SK26出土遺物実測図 …… 40
Fig. 29　SK27～29平面図・セクション図・SK28・29・30出土遺物実測図 …… 42
Fig. 30　SK31～34・37平面図・セクション図・エレベーション図・SK31・33・34・37出土遺物実測図 …… 43
Fig. 31　SE1平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図（1）…… 45
Fig. 32　SE1出土遺物実測図（2）…… 46
Fig. 33　SE1出土遺物実測図（3）…… 47
Fig. 34　SE1出土遺物実測図（4）…… 48
Fig. 35　P6・21・38・45・47・48・51・56～58・64・73・82・96・105・埋甕1・2平面図・セクション図・エレベーション図 …… 51
Fig. 36　P21・38・45・47・48・51・56～58・73・82・96・105出土遺物実測図 …… 53
Fig. 37　埋甕1・2出土遺物実測図 …… 54
Fig. 38　杭群1平面図・垂直分布図 …… 56
Fig. 39　杭群2・道状遺構1平面図・垂直分布図 …… 57

Fig. 40　SX1平面図・セクション図・出土遺物実測図 …… 58
Fig. 41　SX3平面図・セクション図 …… 59
Fig. 42　SX3出土遺物実測図 …… 60
Fig. 43　Ⅰ・Ⅱ層・撹乱層出土遺物実測図 …… 61
Fig. 44　SK10・14・36平面図・セクション図・エレベーション図・SK10・14出土遺物実測図 …… 63
Fig. 45　SD1平面図・セクション図・礫出土状況図 …… 65
Fig. 46　SD1出土遺物実測図（1） …… 66
Fig. 47　SD1出土遺物実測図（2） …… 67
Fig. 48　SD1出土遺物実測図（3） …… 68
Fig. 49　Ⅰ層・撹乱層出土遺物実測図 …… 70
Fig. 50　絵図にみる尾戸遺跡の変遷（1） …… 104
Fig. 51　絵図にみる尾戸遺跡の変遷（2） …… 105
Fig. 52　尾戸遺跡調査区の推定位置 …… 106
Fig. 53　尾戸遺跡検出遺構の変遷 …… 113

表目次

Tab. 1　遺構一覧表（SK・SE・SX） …… 71
Tab. 2　遺構一覧表（SK・SE・SX） …… 72
Tab. 3　SBピット計測表 …… 72
Tab. 4　ピット一覧表 …… 73
Tab. 5～21　遺物観察表（陶磁器・土器・その他） …… 74
Tab. 22　遺物観察表（石製品・金属製品・ガラス製品・骨格製品） …… 91
Tab. 23　遺物観察表（古銭） …… 91
Tab. 24　遺物観察表（瓦） …… 92
Tab. 25　遺物観察表（木製品） …… 92
Tab. 26　絵図・史料にみる尾戸遺跡の変遷 …… 103
Tab. 27　SK21・25陶磁器の生産地別出土点数と組成比 …… 117

写真図版目次

巻頭図版１　調査区遠景、井戸跡SE1半截状況

巻頭図版２　能茶山焼染付五寸皿、尾戸焼灰釉小皿、色絵五寸皿、京都系灰吹き、泥面子、施釉土器ミニチュア、土人形

PL. 1　調査前風景、完掘状況

PL. 2　南部完掘状況、北部完掘状況

PL. 3　調査区西壁、SE1セクション

PL. 4　SE1セクション、SE1井戸側検出状況

PL. 5　SE1遺物出土状況、SE1井筒半截状況

PL. 6　SK1・2・16・17完掘状況、SK7・SX2・SD1セクション

PL. 7　SK11・12セクション、SK13セクション

PL. 8　SK19礫出土状況、SK19・20完掘状況

PL. 9　SK21・SX3セクション、SK25セクション

PL. 10　SK22・68セクション、埋甕1

PL. 11　P64礫出土状況、SK23・33・SX1遺物出土状況

PL. 12　SD1セクション、SD1礫出土状況

PL. 13　SD1遺物出土状況

PL. 14　SK2セクション、SK6セクション、SK8セクション、SK14・P29セクション・P28、SK26・30完掘状況、SK27セクション、SK28・34完掘状況、SK31セクション・P58・73・74

PL. 15　P6礫出土状況、埋甕2、SK23遺物出土状況、SK33遺物出土状況、SE1遺物出土状況、SX1遺物出土状況、平成23年度試掘調査SK1遺物出土状況

PL. 16　平成23年度試掘調査TP4－SK1・TP3－Ⅱ層・TP4－Ⅱ層・SB1－P6・7・SB2－P5・SK2・3・13・Ⅱ層出土遺物

PL. 17　SK13・15出土遺物

PL. 18　SK16・19・21出土遺物

PL. 19　SK21出土遺物

PL. 20　SK21出土遺物

PL. 21　SK21・23・24出土遺物

PL. 22　SK21・24・25出土遺物

PL. 23　SK25・26・30・31・33・SE1出土遺物

PL. 24　SE1・SX1・P21・57・58・96出土遺物

PL. 25　埋甕1・SX1・Ⅱ層出土遺物

PL. 26　Ⅰ・Ⅱ層・撹乱・SK14出土遺物

PL. 27　SK10・SD1出土遺物

PL. 28　SD1・Ⅰ層・撹乱出土遺物

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

尾戸遺跡は江ノ口川の両岸に広がる遺跡で、江戸時代には北岸の大川筋沿いに侍屋敷が並び、藩窯であった尾戸焼の窯場が所在したことが知られている。本遺跡はかつて河川敷から弥生時代の石斧が採取されたことによって発見されたもので、弥生時代の遺跡として知られていたが、これまで本格的な発掘調査は行われておらず、遺跡の実態については不明な所が多かった。

平成23年、江ノ口川北岸に面した高知市所有の土地の売却が計画されたことから、これに先立って、埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を高知市教育委員会が行った。この調査では数箇所の試掘坑から近世の遺構と遺物が検出され、それまで南岸を分布範囲としていた尾戸遺跡が北岸周辺まで拡張されることとなった。

平成26年1月、対象地が民間に売却されるとともに、共同住宅の立体駐車場建設計画が立ち上がり、それに伴う遺跡内での開発の届け出が高知市教育委員会を経由して、高知県教育委員会に対し提出された。これを受けて、地権者である穴吹興産株式会社、高知県教育委員会と高知市が協議を行い、建設予定地において高知市教育委員会が発掘調査を実施することとなった。本調査は平成26年1月7日から1月29日にかけて実施した。

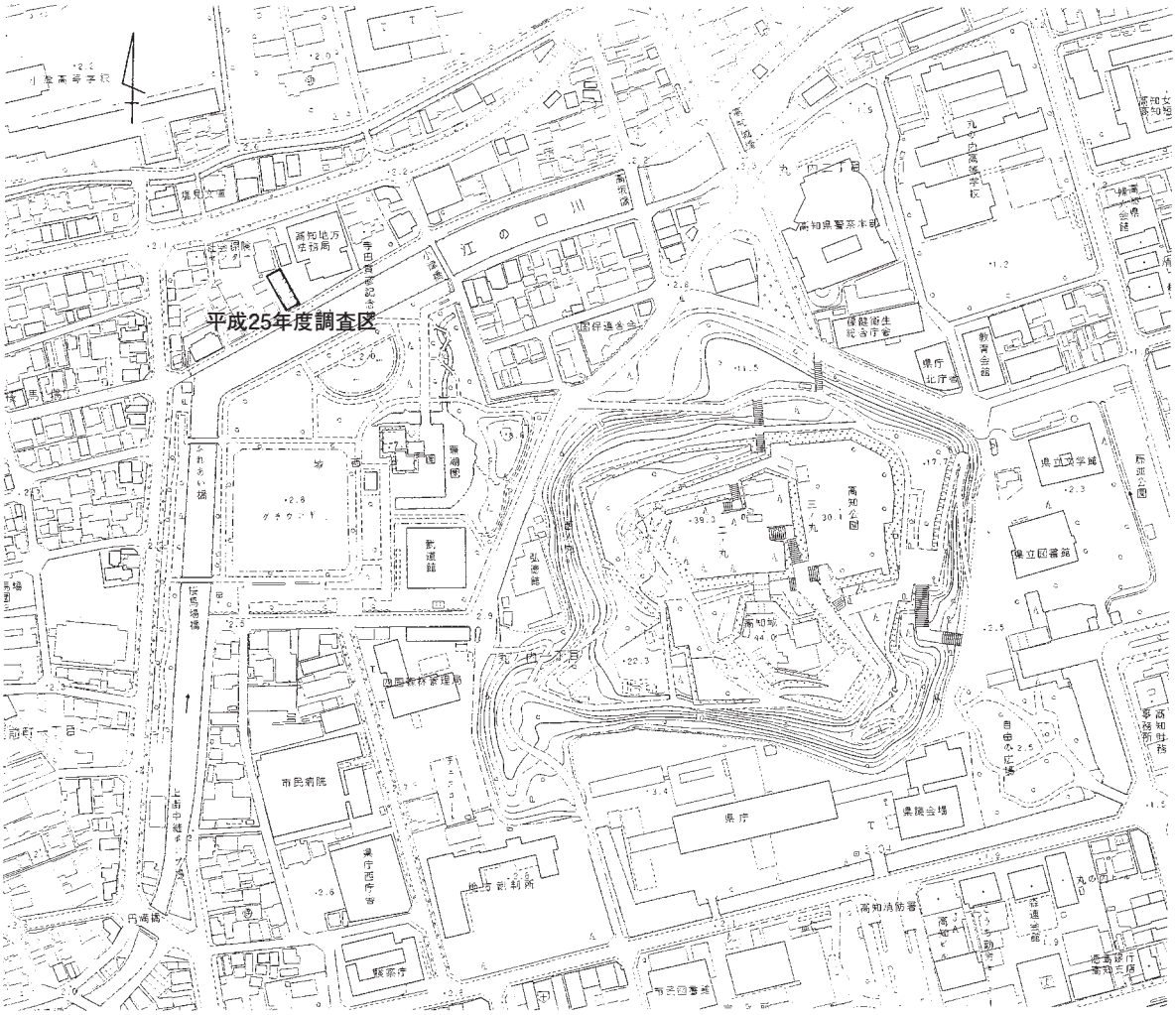


Fig.1　尾戸遺跡調査区位置図

第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

尾戸遺跡が立地する高知市の中心市街地は、北方を標高400～600mの東西に連なる山地、南方を300m級の帯状の山地、西方をなだらかな丘陵によって囲まれた平野部にあり、周囲には大高坂山、小高坂山、能茶山、比島山、葛島山などの小分離丘陵が存在している。河川では、鏡川が市の西北部から湾曲しながら東流して浦戸湾に注ぎ、南国市北部及び香美郡西部域からは国分川が西流し、江の口川、舟入川を合わせて浦戸湾に注いでいる。この平野部は北部山地と南部山地との間の古浦戸湾が、その後鏡川などの堆積によって成立した低地である。

現在の市街地は、かつては鏡川によって形成された三角州上に広がる低湿地であり、近世以降、干拓による埋め立などによってほぼ現在の状態となったものである。平野部には鏡川、久万川、国分川、舟入川、江ノ口川、下田川が注ぐ浦戸湾が内陸深く入り込み自然の良港となっていた。尾戸遺跡はこのうちの江ノ口川北岸に接し、近世には交通至便の立地環境にあったといえる。

江ノ口川の川筋は、もとは大高坂山の北側付近から南へ蛇行し山裾までせまっていたが、大正末から昭和初年にかけて実施された改修工事によって直流とされ、現在の姿になっている。旧江ノ口川の一部は埋め立てられているが、近年行われた立会調査(註1)では、大高坂山北側の道路の地下から、埋め立てに伴う埋土とかつての南岸の石垣が検出され、当時の姿を知ることができる。

2. 歴史的環境

周辺の遺跡

縄文時代の遺跡としては、高知市北部の丘陵に位置する福井遺跡、宇津野遺跡で縄文時代の遺物が検出されている。また、高知市南部のチドノ遺跡から縄文前期の羽島下層式土器、北部の正蓮寺不動堂前遺跡からは縄文中期初頭の船元Ⅰ式土器や石錘、縄文後期～晩期の条痕文土器や磨研土器、高知市西部の柳田遺跡からは縄文後期～晩期の土器が出土している。

弥生時代には、福井遺跡、高知学園裏遺跡、初月遺跡、北秦泉寺遺跡など、丘陵沿いを中心に遺跡が増加する。また、柳田遺跡では弥生前期の大篠式土器などが出土している。弥生時代中期から後期にかけては、山地・丘陵部に立地するかろーと口遺跡、朝倉城山遺跡、高天原弥生遺跡などがある。注目されるものとして、県下最古の中広型Ⅰ式銅矛2本が池長崎遺跡より、県下唯一の有柄石剣と片刃石斧が北秦泉寺遺跡より出土している。また、大高坂山の北西側に立地する尾戸遺跡においても、弥生前期の太型蛤刃石斧の出土が確認されている。

古墳時代では、北部山麓に吉弘古墳、愛宕不動堂前古墳、宇津野1号墳、2号墳等の後期古墳が点在する秦泉寺古墳群が存在する。また、高知市西部から南部にかけての丘陵部には、7世紀前半の横穴式石室をもつ朝倉古墳や、塚ノ原古墳群が存在する。また、平野部においては、中島町遺跡や西秦泉寺遺跡などの遺跡が確認されている。

古代では、白鳳～奈良時代の瓦を出土する秦泉寺廃寺跡がある。この他にも東久万池田遺跡、西秦泉寺遺跡、吉弘遺跡、松葉谷遺跡、高知学園裏遺跡等がある。記録の上では、高知市中心部の北

西側に高坂郷が成立し、以後中世にかけて南側の低湿地へと開拓が進んでいったものと推察される。

中世には、大高坂城跡、福井中城跡、万々城跡、安楽寺山城跡など、多くの山城が丘陵部に立地するようになる。大高坂城跡は南北朝期に土佐の南朝方として活躍した大高坂氏の居城で、大高坂氏が暦応2～3年（1339～1340）に北朝方の攻撃を受け敗退[註2]した後は、天正16年（1588）に長宗我部元親が岡豊城から大高坂山に移り、その後同氏が浦戸へ移る天正19年（1591）までの間、大高坂山が長宗我部氏の居城となった。高知城三ノ丸跡の平成16年度発掘調査では、現存する東石垣の背面で長宗我部の時代に遡る天正期の石垣が検出され、桐文軒丸瓦も出土している。また弘人屋敷跡平成23～25年度発掘調査では、中世の土坑、溝、水路などの遺構が多数検出され、大高坂山周辺での遺跡の広がりが明らかにされている。

近世の遺跡では、高知城跡、高知城伝下屋敷跡、弘人屋敷跡、金子橋遺跡、西弘小路遺跡、追手筋遺跡などが確認されている。平成5年度の高知城跡御台所屋敷跡の発掘調査では、ピット、礎石、溝、石垣などの遺構が検出されている。城下町では、藩関連の屋敷跡である高知城伝下屋敷跡、家老屋敷や上級～中級武士の屋敷跡にあたる弘人屋敷跡、追手筋遺跡、西弘小路遺跡、金子橋遺跡の調査が行われ、近世城下町の様相が明らかになりつつある。この他、窯跡では尾戸窯跡と能茶山窯跡がある。尾戸窯は承応2年（1653）に開かれた藩の陶器窯であり、文政5年（1822）に窯場が能茶山に移転するまで、大高坂山北側の尾戸で窯場が営まれた。また文政3年（1820）には、城下の西方に位置する能茶山に能茶山磁器窯と陶器窯が開かれている。

開成館跡は慶応2年（1866）に土佐藩が創立した勧業貨殖および技術教育の統括機関であり、慶応3年に山内容堂と英公使の通訳官アーネスト・サトウとの会見がなされた。明治初期には外客接待の場として「寅賓館（いんひんかん）」と改まり、明治4年（1871）に、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、杉孫三郎と板垣退助、福岡孝弟による、会談が行われている。

大高坂山と周辺の景観

尾戸遺跡の近隣に所在する大高坂山とその周辺は、古代には高坂郷に属していた。高坂郷の名称は、10世紀初めの『和名類聚鈔（わみょうるいじゅうしょう）』に見えており、そこには「土佐郡　五郷　土佐・高坂・鴨部・朝倉・神戸」とある。こうした記述から、律令制下における高坂郷の開発は、平安時代にはすでに進められていたと考えられる。

南北朝時代には、土佐の在地領主らが二派に分かれて争い、大高坂を主戦場に度々合戦が行なわれたとされる。『佐伯文書』によると、在地の有力地頭とみられる大高坂氏が城を構え、「大手」「一城戸」「西大手」「西之城戸」などがあったとされている。またこの時、城主である大高坂松王丸は戦死し、暦応3年（1340）、所領は堅田氏に恩賞として与えられたと記されている。

中世末期、長宗我部元親は、天正16年（1588）に居城を岡豊城から大高坂に移し、城下町の設営を開始した。『長宗我部地検帳』によると当地には「弓場ヤシキ」「大テンスノ下」「御土居」などの語もみられ、一定の築城がなされていたことが推察される。しかし城下町は2年余りで浦戸城への再移転となる。

近世城下町の形成

関ヶ原合戦後、土佐国を与えられた山内一豊は、慶長6年（1601）に長宗我部氏の居城であった浦

戸城に入城した。その後、国内統治の要衝の地として大高坂山を城地に選び、慶長6年9月に築城を開始した。築城当初、城山の名称は「河中山」とされたが、城下がたびたびの水害に悩まされたためその名を忌んで、慶長15年（1610）に「高智山」と改めた。

正保年間（1644～1648）の「正保城絵図」[註3]、及び慶安5年（1652）の「慶安五年高知郭中絵図」[註4]によると、城の南側と西の搦手門付近には下屋敷があり、南東及び北東には侍屋敷が置かれていた。また、寛文9年（1669）の「寛文己酉高知絵図」[註5]（Fig.2）では、城の南東に「御馬場」、東北には江ノ口川に接して「御作事場」「御米蔵」「御武具蔵」等の藩の施設がみえている。

これらを囲んで、城の東・西・南に内堀が巡らされ、北は江ノ口川（当時の大川）が堀としての役割を果たした。城門は東西南北の4棟が設けられ、東を追手とし、西を搦手とした。

築城に並行して、城下町の造営も進められた。南の鏡川と北の江ノ口川を天然の外堀とし、東側と西側は新たに堀を設けて外堀とした。これらの外堀に囲まれる区域が郭中とされ、上級・中級武士の居住区となった。さらに郭中を挟んで、西には上町、東には下町を配した。上町は主に足軽、武家奉公人など下士の者を住まわせ、下町には武士の生活を賄うための町人の居住地区が設けられた。上町、下町と郭中との境界は、東は廿代橋より南に堀詰を経て鏡川に至る線、西は江ノ口川より南に金子橋、築屋敷に至る線がこれにあたり、郭中との境には外堀とともに、土堤を築いて両者を区画している。

江ノ口川北岸の景観

尾戸遺跡が所在する江ノ口川北岸の一帯は、天正15年（1587）の『大高坂之郷地検帳』[註6]の注記に「比帳大高坂大川ヨリ北地、東ハ島海を詰テ、西ハ杓田境四郎カ岡ヲ限テ、南ハ大川ヲ限、北ハ久万ノ江限此内之田数あり」と記された範囲に含まれる。ここは近世の江ノ口村にあたるが、江ノ口の名称は近世以降につけられたものらしく、村名はみえていない。

『土佐州郡志』[註7]によると、江ノ口村は東西四十町、南北一二町で、村域は全て平地とされている。集落は江ノ口川北側の大川筋、愛宕道沿い、村の南西部にあたる洞ヶ島辺りに集中しており、大川筋の殆どは山内家家臣の侍屋敷となっていた。

江ノ口川北岸の尾戸には、藩の陶器窯である尾戸窯が置かれた。尾戸窯は二代藩主忠義の時、大坂の陶工久野正伯を招いて窯が開かれたもので、正伯のもとで森田久右衛門、山崎平内らが尾戸焼の製法を学んだ。以降、近世を通して森田・山崎家が藩窯での製作に従事しており、文政5年に窯場が能茶山に移転するまで、当地で尾戸焼の製作が行われた。

17世紀後半頃の城下の様子を表わした「寛文己酉高知絵図」[註8]には、大川筋沿いに藩の「御弓場」、「焼物師」と記載した尾戸の窯場、侍屋敷が並ぶ様子が描かれている。18世紀中頃以降は、「御弓場」が移転するなど一部に変化がみえるが、この一帯には幕末まで侍屋敷が引き続き置かれている。

［註］

１）高知市教育委員会による平成17年度立会調査では、大高坂山北面にある辷り山から北西の道路北隅にて旧江ノ口川の南岸に伴うとみられる石垣の一部が確認されている。

２）『土佐國蠹簡集拾遺』

３）「正保城絵図」国立公文書館所蔵

４）「慶安五年高知郭中絵図」高知市民図書館所蔵

５）「寛文己酉高知絵図」高知市民図書館所蔵

６）『長宗我部地検帳　土佐郡上』高知県立図書館　1957年

７）『土佐州郡志』は宝永４年（1707）から享保７年（1722）の間に編纂されたものと推定されている。

８）「寛文己酉高知絵図」高知市立市民図書館蔵。「寛文己酉高知絵図」は作成者や年時を示す奥書は欠落しており、図中の屋敷名などから松野尾章行が寛文９年頃の図と判定したと推測されている。

［参考文献］

横川末吉「第一編 古代・中世」『高知市史 上巻』高知市1958年

平尾道雄「第二編 近世」『高知市史 上巻』高知市1958年

『高知城下町読本－改訂版－』土佐史談会・高知市教育委員会2004年

『描かれた高知市－高知市史絵図地図編』高知市史編さん委員会絵図地図部会・高知市2012年

『史跡高知城跡１－高知市立動物園跡地の史跡整備化に伴う御台所屋敷跡発掘調査報告書』高知県教育委員会1994年

『高知城跡－伝御台所屋敷跡史跡整備に伴う発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター1995年

『高知城三ノ丸跡－石垣整備事業に伴う試掘確認調査概要報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター2001年

『史跡高知城跡　－三ノ丸石垣整備事業に伴う発掘調査報告書』高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター2010年

『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター2002年

『史跡高知城跡－本丸石垣整備事業報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター2004年

『史跡高知城跡－丸ノ内緑地試掘確認調査報告書』高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター2006年

『尾戸窯跡』高知市教育委員会2007年

『開成館』高知市教育委員会2007年

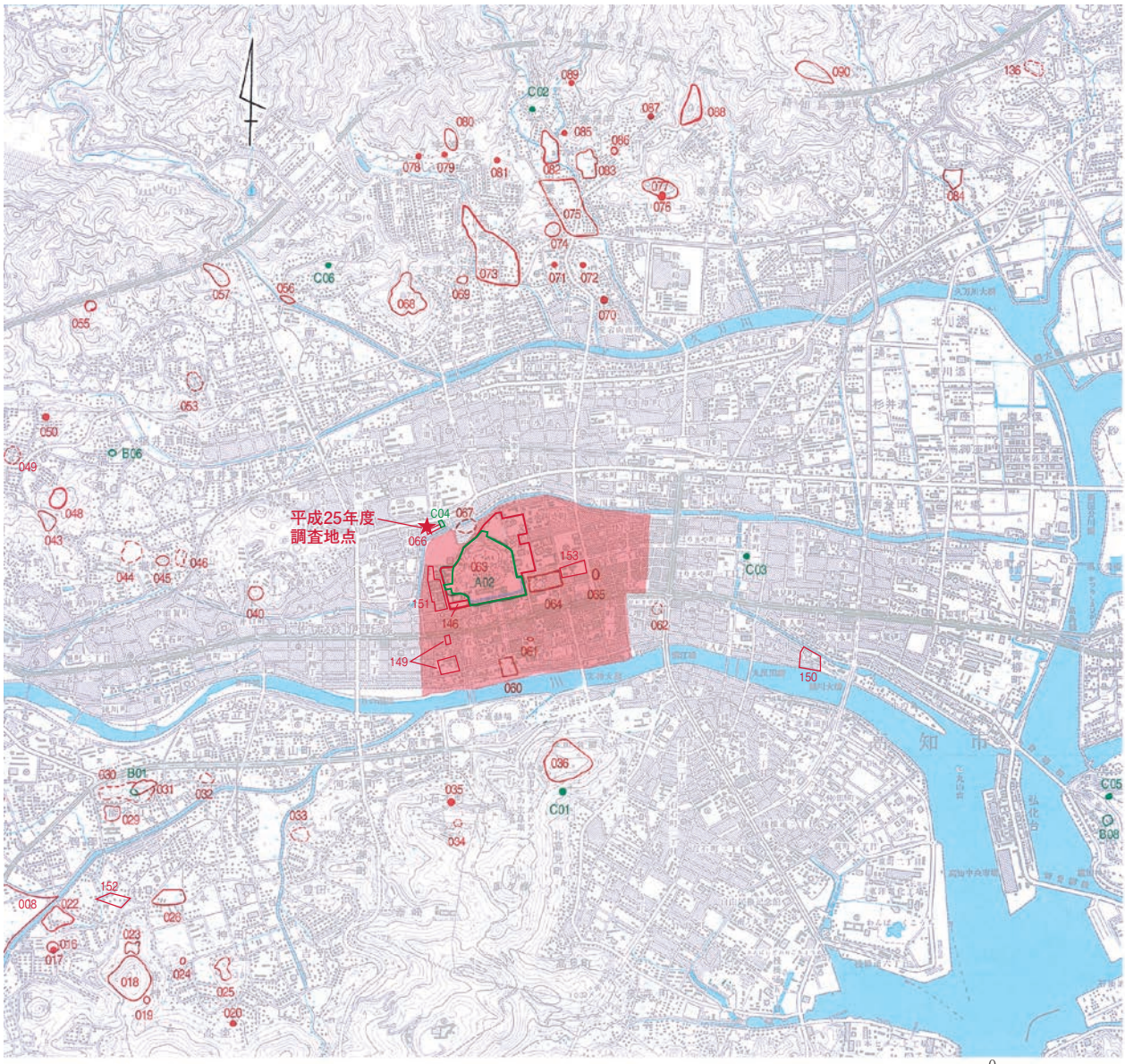
『金子橋遺跡』高知市教育委員会2008年

『西弘小路遺跡』高知市教育委員会2010年

『西弘小路遺跡－高知法務総合庁舎新営埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター2012年

『弘人屋敷跡－新資料館整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県・高知県文化財団埋蔵文化財センター2014年

Fig.2　寛文己酉高知絵図（抜粋）（高知市立市民図書館平尾文庫所蔵）



郭中参考地

0　1km
(S=1/40,000)

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
066	**尾戸遺跡**	**近世**	053	嘉武保宇城跡	中世	084	薊野遺跡	古代
008	柳田遺跡	縄文～古墳	055	福井遺跡	縄文～中世	085	日の岡古墳	古墳
016	舟岡山遺跡	弥生	056	初月遺跡	弥生	086	北秦泉寺遺跡	弥生
017	舟岡山古墳	古墳	057	万々城跡	中世	087	淋谷古墳	古墳
018	神田南城跡	中世	060	南御屋敷跡	近世	088	秦泉寺城跡	中世
019	ケジカ端遺跡	弥生	061	中島町遺跡	古墳	089	秦泉寺仁井田神社裏古墳	古墳
020	高座古墳	古墳	062	国沢城跡	中世	090	薊野城跡	中世
022	鷺泊橋付近遺跡	弥生～中世	063	高知城跡・大高坂城跡	中世・近世	136	一宮別城跡	中世
023	シルタニ遺跡	弥生・古代	064	弘人屋敷跡	近世	146	高知城伝下屋敷跡	古墳～近世
024	高神遺跡	古墳・古代	065	帯屋町遺跡	古墳	149	金子橋遺跡	近世
025	神田遺跡	弥生～中世	067	尾戸窯跡	近世	150	開成館跡	近世～近代
026	神田ムク入道遺跡	弥生～中世	068	安楽寺山城跡	中世	151	西弘小路遺跡	近世
029	鴨部遺跡	縄文・弥生・古代	069	東久万池田遺跡	古代～中世	152	御手洗遺跡	弥生・中世・近世
030	神田旧城跡	中世	070	愛宕不動堂前古墳	古墳	153	追手筋遺跡	近世
031	能茶山窯跡	近世	071	秦小学校校庭古墳	古墳	国指定史跡		
032	石立城跡	中世	072	愛宕神社裏古墳	古墳	A02	高知城跡	近世
033	久寿崎ノ丸遺跡	弥生～中世	073	西秦泉寺遺跡	古墳	高知県指定史跡		
034	小石木町遺跡	弥生	074	秦泉寺別城跡	中世	B01	能茶山窯跡	近世
035	小石木山古墳	古墳	075	秦泉寺廃寺跡	古代	B06	鹿持雅澄邸跡	近世
036	潮江城跡	中世	076	土居の前古墳	古墳	B08	吸江庵跡	中世～
040	井口城跡	中世	077	前里城跡	中世	高知市指定史跡		
043	高知学園裏遺跡	弥生～古代	078	宇津野２号墳	古墳	C01	野中兼山墓	近世
044	福井西城跡	中世	079	宇津野１号墳	古墳	C02	吉弘古墳	古墳
045	福井中城跡	中世	080	宇津野遺跡	縄文	C03	桜井跡	近世
046	福井元尾城跡	中世	081	秦泉寺新屋敷古墳	古墳	C04	寺田寅彦邸跡	明治
048	かろーと口遺跡	弥生	082	吉弘遺跡	古代	C05	伊達兵部宗勝墓	近世
049	福井別城跡	中世	083	松葉谷遺跡	古代～中世	C06	桑名古庵墓	近世
050	福井古墳	古墳						

※No.は高知市遺跡地図による。

Fig.3　尾戸遺跡及び周辺の遺跡

第Ⅲ章　試掘調査

1. 試掘調査の方法

試掘調査は平成21年度から22年度にかけて実施した。平成22年度調査は、調査対象地の東部に4×4mの試掘坑2箇所、平成23年度は西部に5×5mと4×4mの試掘坑3箇所を設定し、遺構検出と堆積状況の確認を行った。(Fig.6)

掘削は主に重機を用い、遺構の検出作業と遺構掘削は人力によった。また、遺構の密度が低い試掘坑については、近世の遺構検出面より下層の堆積状況を確認した。

2. 試掘調査の成果

(1) 平成22年度調査

試掘坑TP1・2を設定した。各試掘坑ともに、現代の整地層の直下（標高1.60～1.75m）で近世の遺物包含層であるにぶい黄褐色シルト層（Ⅱ層）と近世の遺構を検出している。その下位では、にぶい黄褐色砂質シルト層（Ⅲ層）とにぶい黄褐色シルト質砂層（Ⅳ層）、にぶい黄褐色粘質シルト層（Ⅴ層）、褐灰色砂礫層が堆積しており、Ⅲ層以下での出土遺物は確認できていない。(Fig.7)

検出遺構と遺物は平成25年度調査と重複するため、本編にて報告している。

(2) 平成23年度調査 (Fig.4)

試掘坑TP3～5を設定し、現代の整地層（Ⅰ層）、近世の遺物包含層である灰黄褐色シルト層（Ⅱ層）、にぶい黄褐色シルト層（Ⅲ層）、にぶい黄褐色シルト質砂層（Ⅳ層）、灰黄褐色砂層（Ⅴ層）を検出した。近世の遺構はSK1・2・SX1を検出している。

SK1は東西長1.20m、南北確認長0.56m、深さ26㎝を測り、埋土は灰黄褐色シルトで炭化物を含んでいる。遺物は肥前産の染付碗・皿・陶器碗、尾戸窯の甕と碗蓋、土人形、土師質土器小皿などで、18世紀を中心とする遺物が出土している。

SK2は南北長1.36m、東西確認長1.20m、深さ10㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトで炭化物を含んでいる。出土遺物は近世陶磁器、土師質土器、瓦片である。陶磁器は18世紀前半までの遺物が主体をなし、肥前産の染付小杯、京焼風陶器碗、銅緑釉小皿などが出土している。

図示したものはTP4－SK1出土の陶器碗蓋 (2)・甕 (1－ab)、TP3－Ⅱ層出土の陶器灰吹き (3)、TP4－Ⅱ層出土の底部 (4) である。2は尾戸窯の碗蓋で、黒象嵌による暦手文を巡らせ、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。1－abは尾戸窯の灰釉水指又は甕で、外面に鉄絵を描く。3は京都又は尾戸窯の灰吹きで、鉄絵と呉須、白土で笹と梅花を描く。4は尾戸窯の灰釉陶器の底部。内面施釉で、灰白色を帯びる半透明の釉を施し、御本が入る。

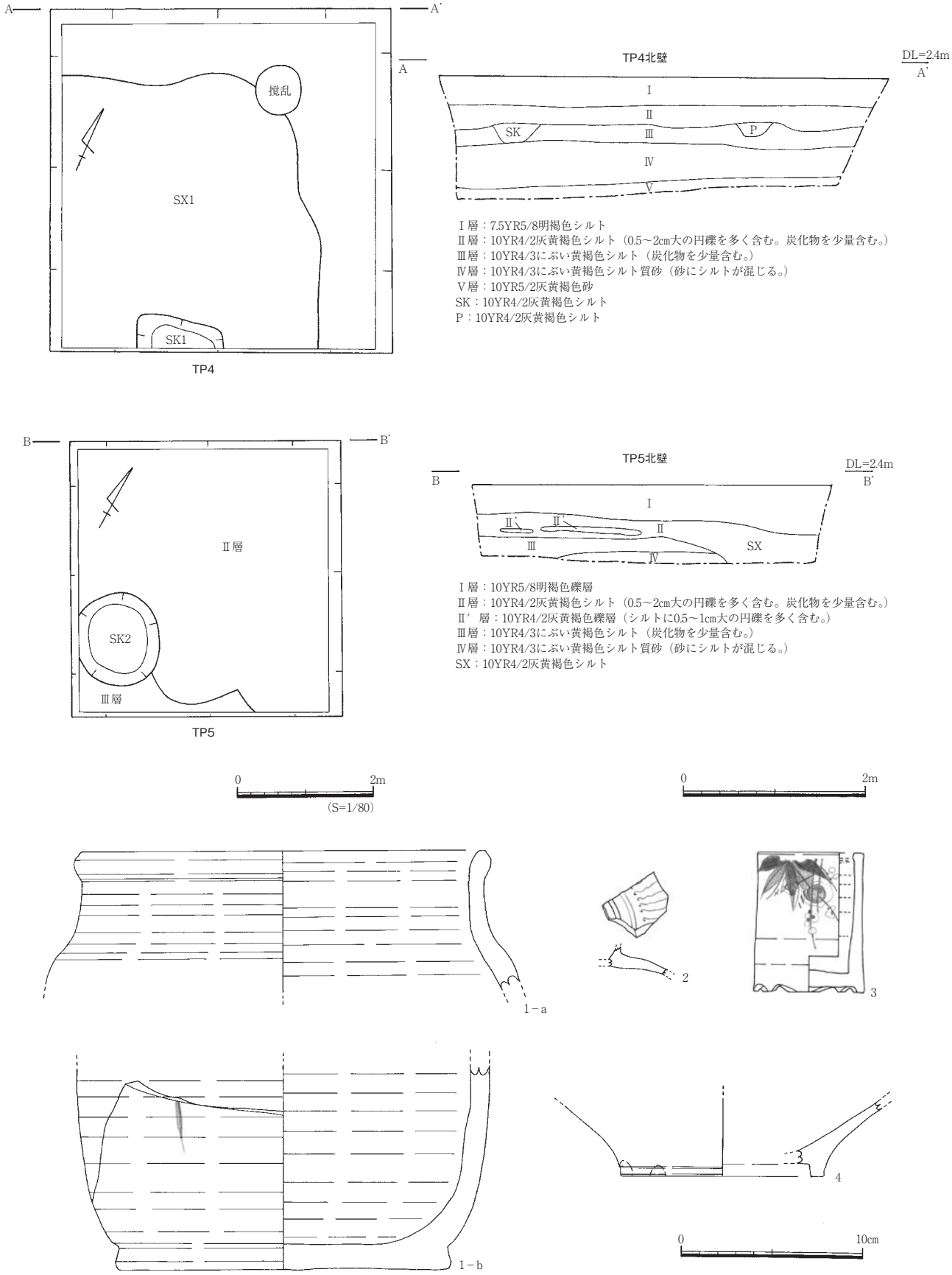


Fig.4　平成23年度試掘調査TP4・5平面図・セクション図・出土遺物実測図

第Ⅳ章　調査の方法

調査にあたっては、重機を用いて表土と撹乱層を除去し、その後、人力にて検出作業と遺構掘削を行った。検出された遺構については、土層観察を行うとともに土層断面図と平面図を作成し、写真撮影を行った。遺構の測量については、世界測地系公共座標に基づく4×4mの方眼区画を設定し、それをもとに実測を行った。平面実測及び土層断面図については、20分の1を基本に適時任意の縮尺を用いた。水準については小津町10－13に設置されている街区多角点より導いた。また、都市再生街区基本調査により設定された基準点を利用して多角測量を行い、調査対象地内にて座標を測定した。

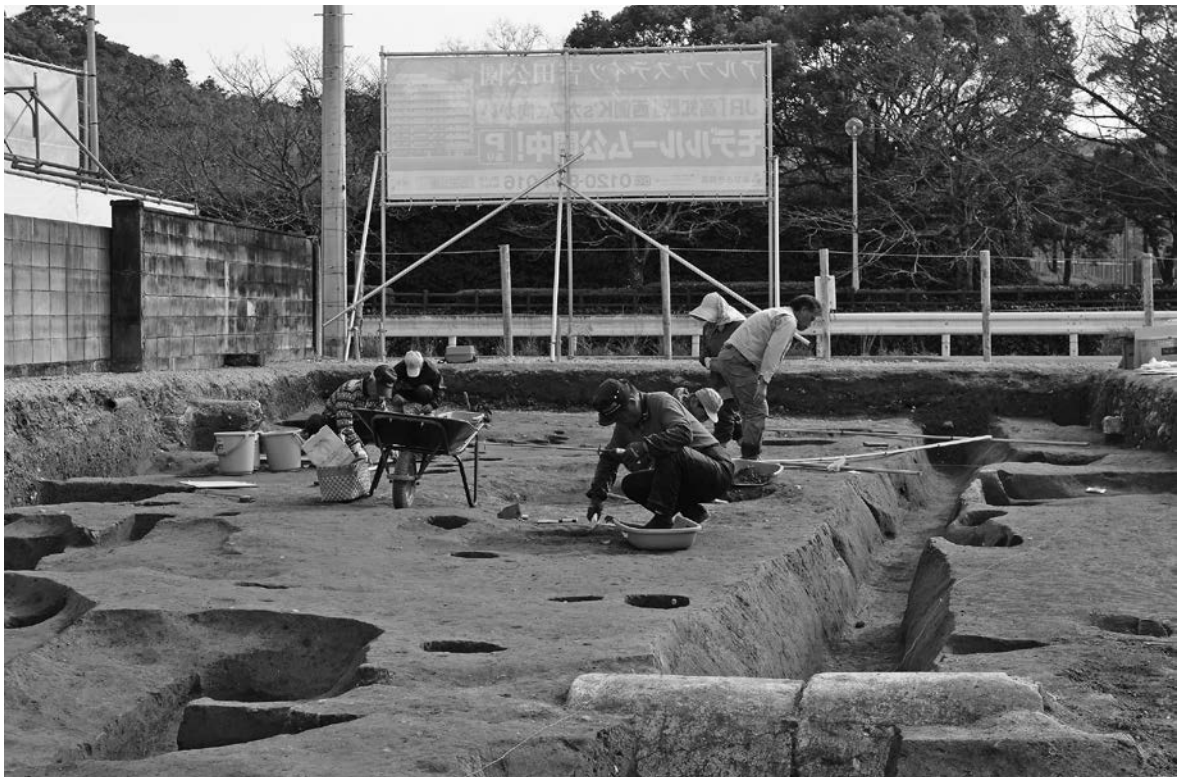
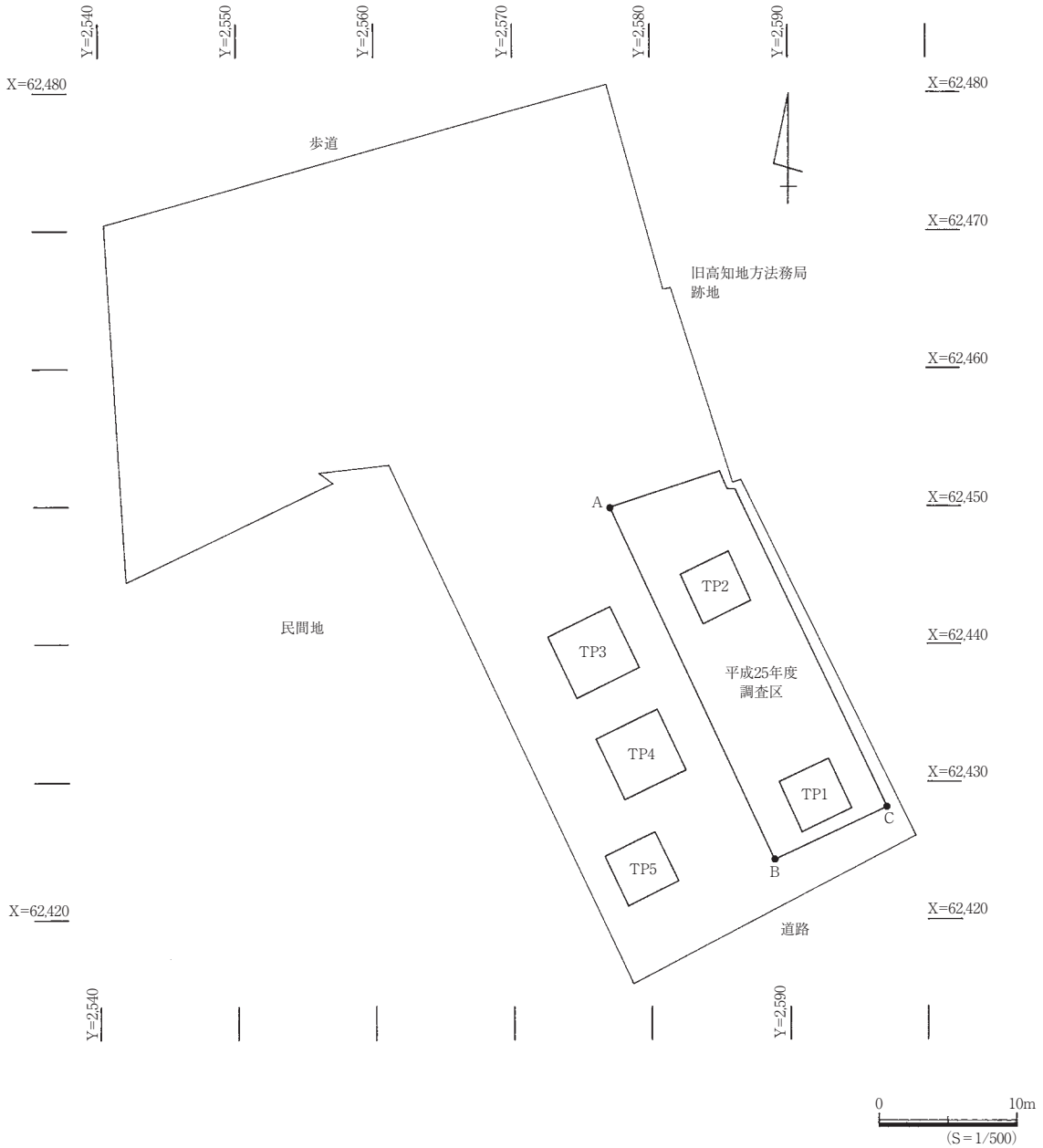


Fig.5　調査区風景



測点	X座標	Y座標
A	62,452.856	2,575.844
B	62,424.414	2,589.032
C	62,428.278	2,597.188

Fig.6　調査区位置図及び平成22・23年度試掘坑配置図

（TP1・2：平成22年度試掘調査、TP3～5：平成23年度試掘調査）

第Ⅴ章　調査の成果

第1節　基本層序

基本層序は調査区西壁にて観察した。また、南部付近の堆積状況については、試掘調査TP1北壁のセクション土層を用いて補足している。層序の概要は次の通りである。(Fig.7)

Ⅰ層：灰黄褐色シルト・灰黄褐色礫層

Ⅱ層：灰黄褐色シルト

Ⅲ層：にぶい黄褐色シルト

Ⅳ層：にぶい黄褐色砂質シルト

Ⅳ′層：にぶい黄褐色シルト質砂

Ⅴ層：にぶい黄褐色粘質シルト

Ⅵ層：褐灰色粗砂

Ⅶ層：褐灰色砂礫

Ⅰ層は近現代の整地層である。

Ⅱ層は近世後期の遺物包含層にあたるシルト層で、標高1.8～2.0m前後に堆積している。近世後期の遺構はⅡ層から掘削されているが、調査区南部（B－B′）付近では、近現代の削平を受けてⅡ層が残存せず、Ⅰ層の直下（標高1.7m前後）が近世の遺構検出面になっている。

Ⅲ層も近世の遺物包含層で、標高1.6～1.8m前後で検出されている。

Ⅳ層とⅣ′層は砂質シルトとシルト質砂層、Ⅴ層は粘質シルト層で、遺構・遺物とも未検出である。

西壁セクションによると、近世の地表面は北部では標高2.0m前後の高さにあり、近現代以降、現在の地表面（標高2.4m前後）まで整地されている。一方、南部では、近代の生活面であったとみられる玉石を敷き詰めた堅化面（道状遺構1）が標高1.71mのレベルで検出されている。(Fig.39) そのため、当時においては、江ノ口川に近い南側の土地と屋敷地本体との間に若干の高低差があったことが窺える。

標高1.0m以下は、河川堆積層とみられるⅥ層（粗砂層）とⅦ層（砂礫層）が堆積しており、この段階には、当地域が河川の影響を受け易い立地環境にあったと考えられる。

調査区西壁

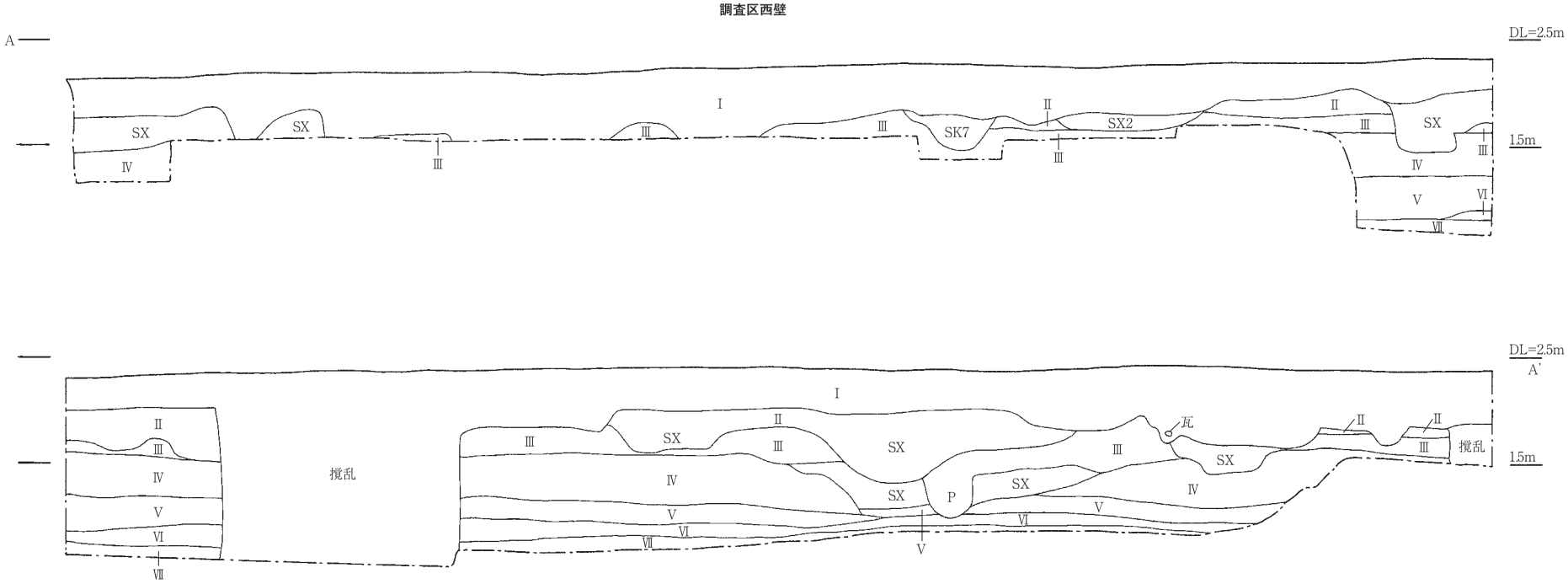


Fig.7　基本層序

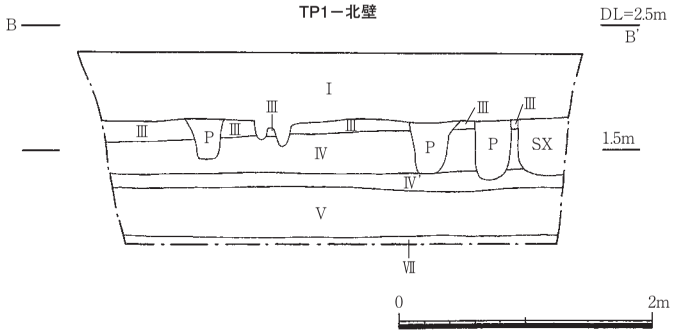
西壁

Ⅰ層：10YR4/2灰黄褐色シルト（1～5cm大の角礫・円礫を多く含む。橙色土をブロック状に含む。）
Ⅱ層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.2～0.5cm大の角礫と0.5～1cm大の円礫を多く含む。炭化物を少量含む。）
Ⅲ層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト（0.2～0.5cm大の角礫・円礫を少量含む。炭化物を少量含む。）
Ⅳ層：10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト
Ⅴ層：10YR5/3にぶい黄褐色粘質シルト
Ⅵ層：10YR5/1褐灰色粗砂
Ⅶ層：10YR4/1褐灰色砂礫（粗砂に1～3cm大の円礫を多く含む。）

TP1－北壁

Ⅰ層：10YR4/2灰黄褐色礫層（1～5cm大の角礫・円礫を多く含む。橙色土をブロック状に含む。）
Ⅲ層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト（0.2～0.5cm大の角礫・円礫を少量含む。炭化物を少量含む。）
Ⅳ層：10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト
Ⅳ'層：10YR5/3にぶい黄褐色シルト質砂
Ⅴ層：10YR5/3にぶい黄褐色粘質シルト（炭化物を少量含む。）
Ⅶ層：10YR5/1褐灰色砂礫（粗砂に1～3cm大の円礫を多く含む。）

TP1－北壁



第2節　遺構と遺物

1. 近世の遺構と遺物

近世の遺構は土坑33基、井戸1基、埋甕2基、杭跡82個、性格不明遺構3基、及び近世又は近世の可能性をもつピット99個を検出した。これらは包含層Ⅱ層の下面で検出したため上面を削平されて浅くなったものが多いが、標高1.6m前後にて近世前期から後期の遺構を検出している。

このうち、SK13・15・19・23・28・31・33・34・SE1・SX1は17世紀後半～18世紀前葉の間に推定されるもので、井戸SE1と性格不明遺構SX1では出土遺物片の接合関係が認められており、複数の遺構の廃絶と遺物廃棄が同時に行われていたことが窺える。

また本地点では、19世紀中葉にもSK16・21・25などの遺物廃棄土坑が掘削され、多量の瓦片とともにまとまった遺物の廃棄が認められている。

(1) 掘立柱建物跡

SB1 (Fig.9)

調査区北部で検出された1間×3間の東西棟建物跡で、N－63°－Eの棟方向をもつ。他遺構との前後関係では、P2がSD1に、P4がSK21に、P2・3・6がSX1に上面を切られている。また、柱穴の直接的な切り合い関係はないが、SB2と重複している。規模は梁間2.14m、桁行5.06mを測る。桁行の柱間寸法は1.50m～1.95mである。

柱穴は7基を検出し、P1が未検出である。柱穴の規模は径25～64㎝、深さはP2～4・6・7が25～56㎝、P5・8が6～14㎝で、削平を受けて浅くなったものや残存しないものが含まれる。埋土はP2～4が灰黄褐色シルト、P5～8がにぶい黄褐色シルトで、P2・6では径18～23㎝の柱痕を検出している。

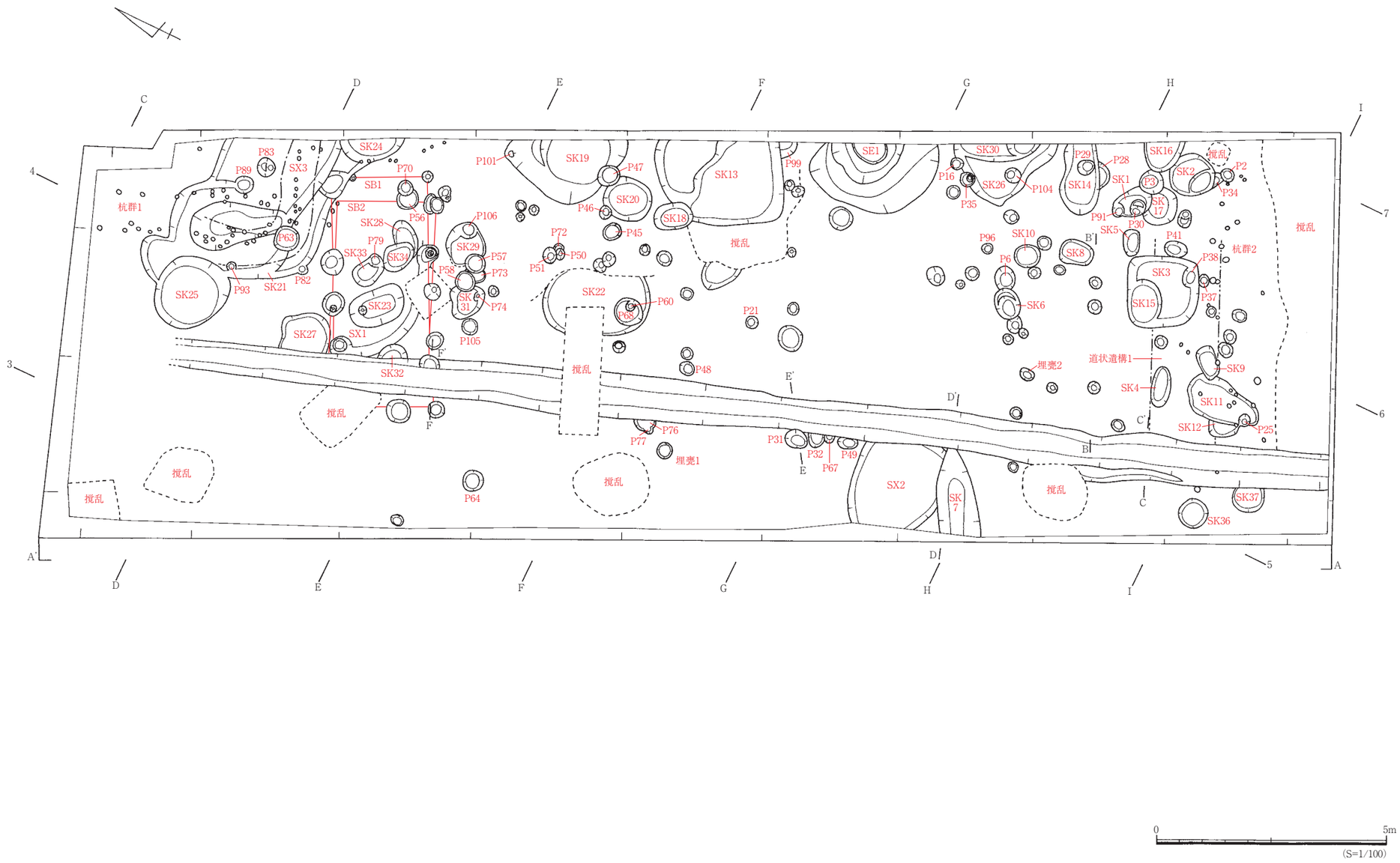
遺物はP3から磁器細片と肥前産京焼風陶器碗の体部、P4から備前焼擂鉢の体部と土師質土器杯又は皿の底部 (9)、P6から青花碗 (5)、唐津系灰釉陶器小皿、肥前内野山窯の銅緑釉小皿、肥前産の灰釉丸形中碗 (6)、陶器小皿、備前焼擂鉢 (8)、土師質土器小皿、瓦片、P7から染付中皿、肥前産の鉢 (7)、土師質土器小皿、瓦片が出土している。

図示したものは5～9である。5は中国景徳鎮窯系の青花碗で、15世紀後半～16世紀前半。外面に波濤文を描く。6は肥前産の灰釉丸形中碗。7は肥前産の刷毛目二彩手とみられる鉢で、白化粧土刷毛目の後鉄釉を流し掛けする。8は備前焼の擂鉢。9は土師質土器の杯又は皿で内外面に強いロクロ目が残る。

出土遺物及び他遺構との切り合い関係からみて、SB1は17世紀後半～18世紀前葉に比定される。

SB2 (Fig.10)

調査区北部で検出された東西棟の建物跡である。重複するSB１とは、軸方向その他の規格が類似しているため、同規模の建物であった可能性もあるが、桁行2間まで確認したのみである。桁行の軸方向はN－65°－Eである。他遺構との前後関係では、P6がSD1に、P2がSX1に切られている。また、柱穴の直接的な切り合い関係はないが、SB1と重複している。規模は梁間2.20m、桁行3.50mを測る。桁行の柱間寸法は1.67m～1.85mである。



0 5m
(S=1/100)

Fig.8　検出遺構全体図

柱穴は4基を検出し、P1・3が未検出である。柱穴の規模は径31～42cm、深さはP2・4・6が25～32cm、P5が10cmで、削平を受けて浅くなったものや残存しないものが含まれる。埋土はP2・4が灰黄褐色シルト、P5・6がにぶい黄褐色シルトで、P2では径14cmの柱痕を検出している。

遺物はP2から肥前産京焼風陶器碗の体部、土師質土器小皿の底部、鉄釘、P4から灰釉小碗（10）、肥前内野山窯の銅緑釉小皿、褐釉壺の体部、P5から土師質土器小皿、土人形（11）、P6から灰釉瓶（12）、土師質土器小皿、瓦片が出土している。

図示したものは10～12である。10は京都系の灰釉半球形小碗。12は瀬戸・美濃産の瓶で、外面ににぶい黄色の釉を施し、外面下位と内面に鉄釉を刷毛塗りする。11は土師質土器の人形で、観音を表わす。型作りで中実である。

出土遺物及び他遺構との切り合い関係からみて、SB2は17世紀後半～18世紀前葉に比定される。

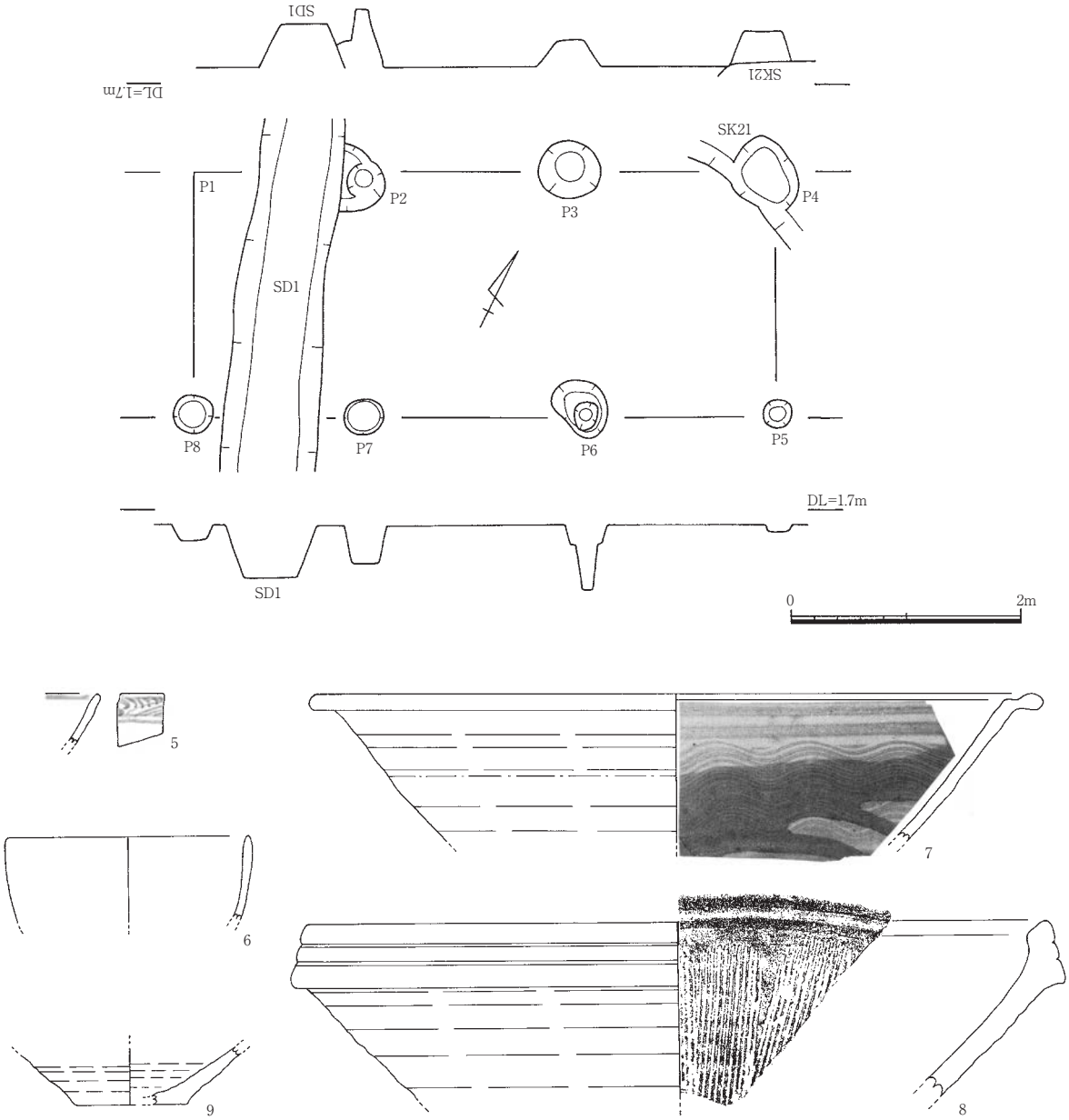


Fig.9　SB1平面図・エレベーション図・出土遺物実測図

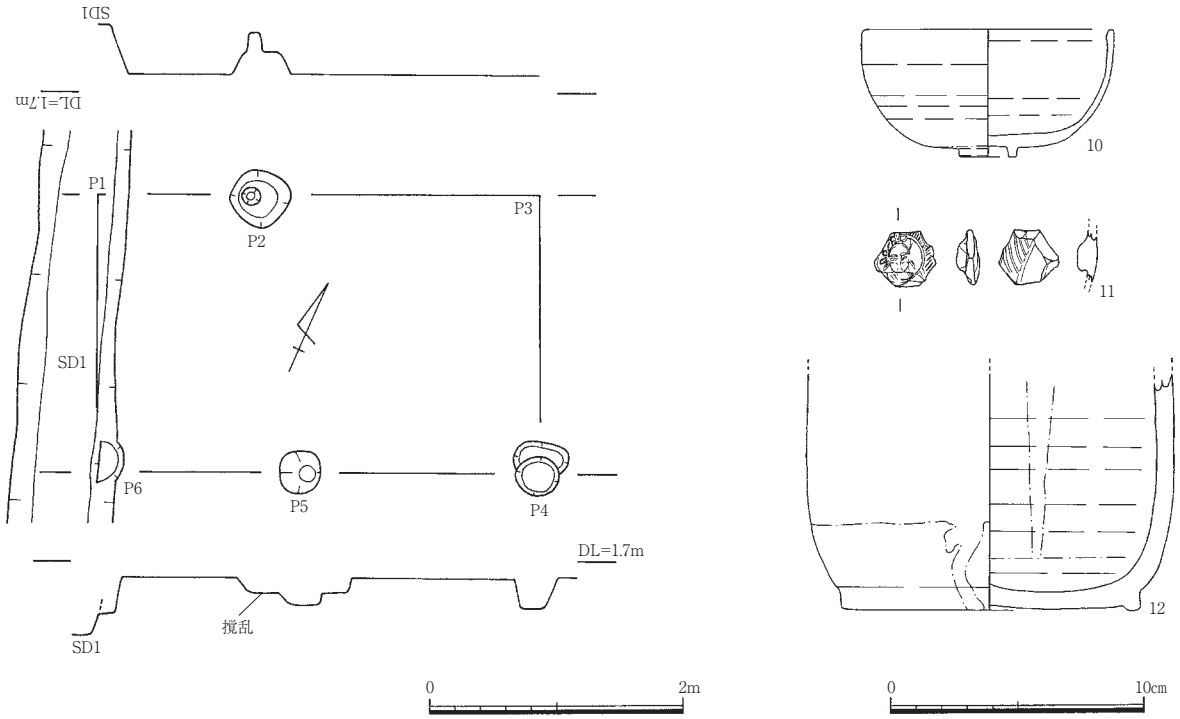


Fig.10　SB2平面図・エレベーション図・出土遺物実測図

(2) 土坑

SK1 (Fig.11・12)

調査区南部に位置する。他遺構との切り合い関係では、SK17・P30・91を切り、P3に切られる。

平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸0.86m、短軸0.60m、深さ18㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中皿1点、磁器色絵小杯1点、陶器中碗2点・皿1点、土師質土器小皿2点である。この他、体部では丹波焼甕、土師質土器焜炉が出土している。

図示したものは13・14である。13は肥前産の磁器色絵小杯で、内面に上絵付による文様を施す。14は肥前産の灰釉皿で、内底に砂目痕が残る。

SK1は19世紀前半～中葉に比定される。

SK2 (Fig.11・12)

調査区南部に位置する土坑で、P34を切り、SK16に切られる。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸1.00m、短軸0.89m、深さ41㎝を測る。断面形は不整形である。埋土はにぶい黄褐色シルトと灰黄褐色シルトである。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗1点・小杯1点・小皿1点・鉢1点・蓋か1点、白磁又は染付小碗1点、陶器中碗2点・小皿2点・擂鉢1点・瓶1点、土師質土器小皿4点、瓦2点、匣鉢1点である。この他、陶器壺の体部、肥前産の刷毛目二彩手中皿の体部などが出土している。

図示したものは15～20である。15～17は肥前産の染付で、15は小杯、16は小皿、17は蓋か。18は尾戸窯の灰釉中碗。19は尾戸窯の鉄釉の瓶で、高台内に渦状の鉋痕が残る。20は窯道具の匣鉢

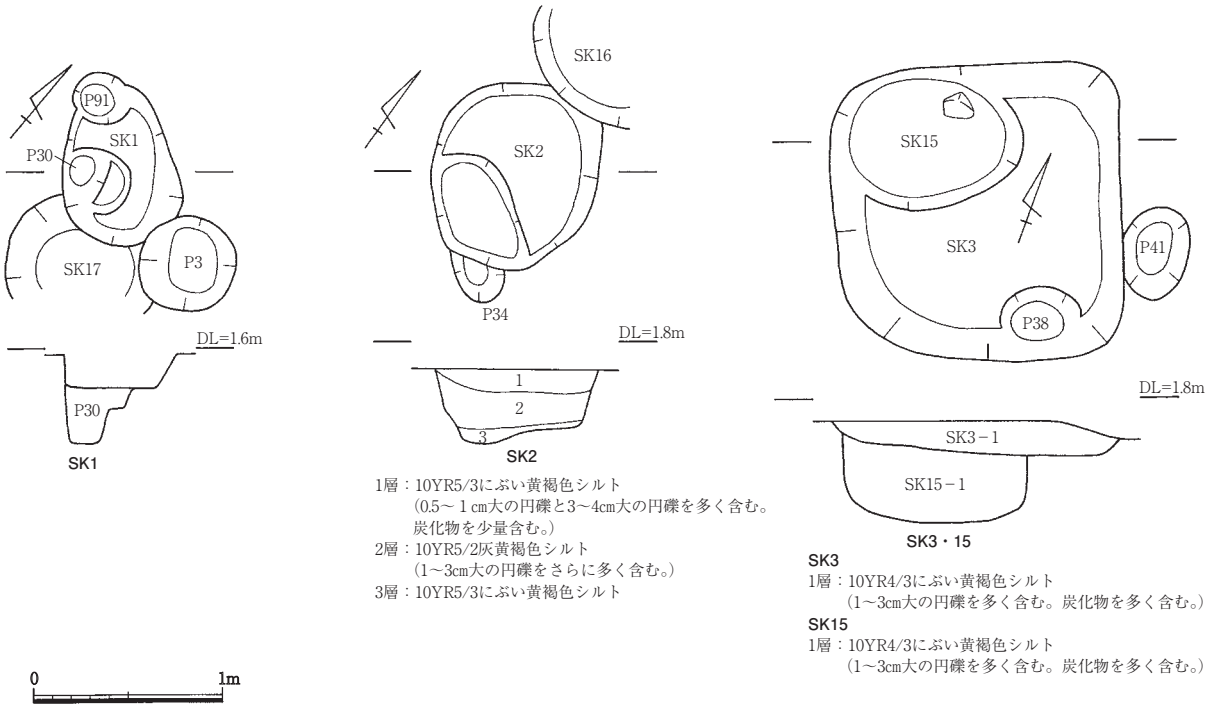


Fig.11　SK1～3・15平面図・セクション図・エレベーション図

で、近隣に所在する尾戸窯からもたらされたものか。

SK2は18世紀前半に比定される。

SK3（Fig.11・12）

調査区南部に位置する土坑で、道状遺構1の下面で検出した。他遺構との切り合い関係ではSK15・P38・41を切っている。平面形は隅丸方形を呈し、検出規模は長軸1.58m、短軸1.50m、深さ18cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付大皿1点・蓋物1点、青磁染付碗蓋1点、陶胎染付中碗1点、陶器甕1点で、この他、灰釉碗の体部、瓦片が出土している。

図示したものは21～25である。22～24は磁器、21は陶胎染付で、何れも肥前産。21は陶胎染付中碗。22・23は染付で、22は蓋物、23は大皿である。24は青磁染付の碗蓋で、摘み内に角枠内渦「福」を描く。25は丹波焼の甕で、外面に鉄釉、内面と口縁端部に灰釉を施す。

SK3は18世紀後半に比定される。

SK4（Fig.13）

調査区南部に位置する土坑で、道状遺構1の下面で検出した。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸0.86m、短軸0.42m、深さ9cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器小皿（26）1点と、尾戸焼の皿又は鉢の体部1点、土師質土器細片である。

SK5（Fig.13）

調査区南部に位置する。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸0.62m、短軸0.36m、深さ11cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、陶器擂鉢の口縁部1点、土師質土器小皿の底部1点である。この他、京都系の陶器色絵小碗、肥前産灰釉丸碗、焼締めの壺又は甕の体部が出土している。

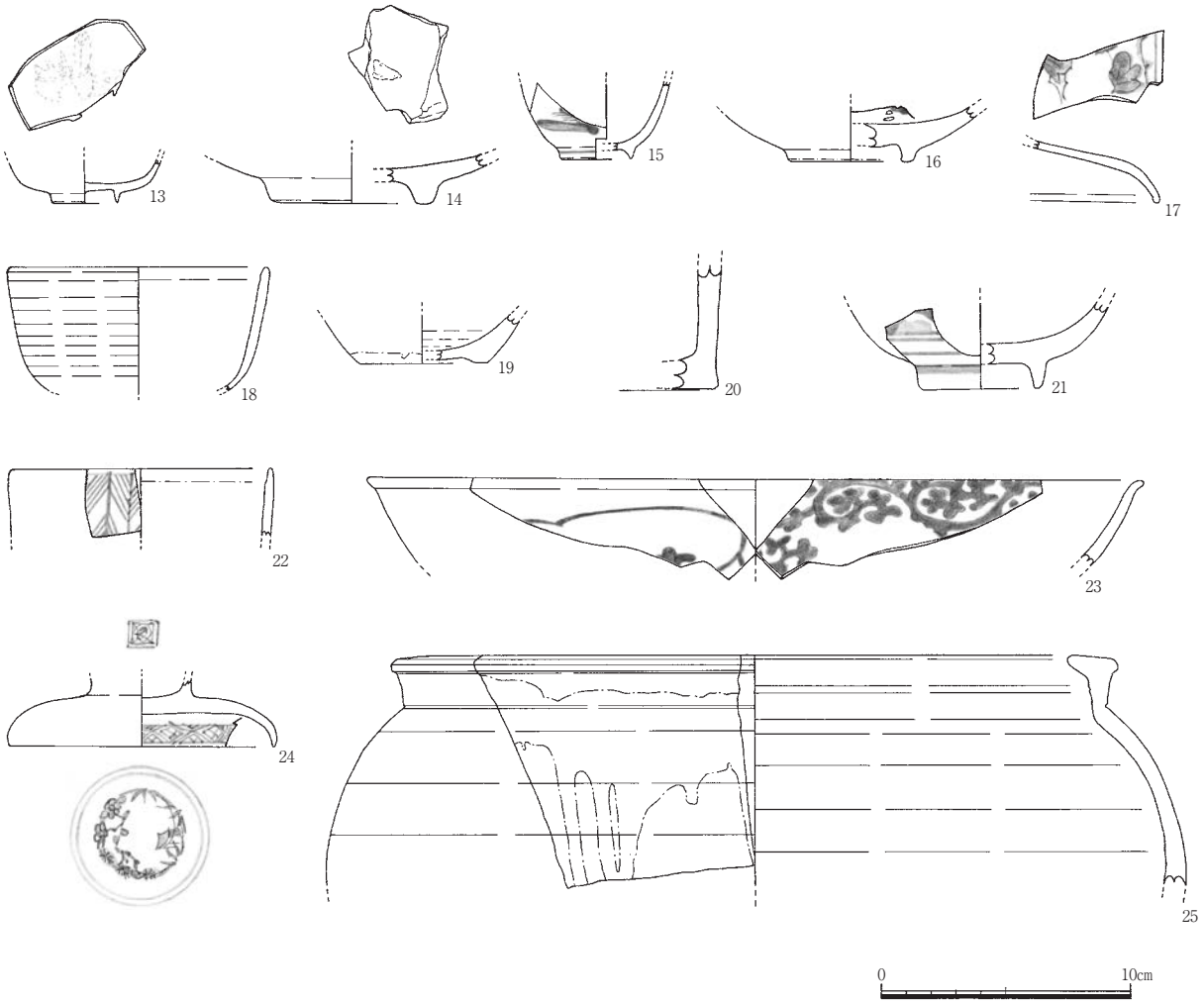


Fig.12　SK1～3出土遺物実測図
（SK1：13・14、SK2：15～20、SK3：21～25）

SK6（Fig.13）

調査区南部に位置する土坑で、P6を切る。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸0.68m、短軸0.54m、深さ28㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして染付小皿1点、陶器小皿1点・施釉土器小皿1点であり、他に擂鉢の体部、染付磁器細片、硯等が出土している。この中には瀬戸・美濃産の染付小皿、在地系の鉄釉小皿、内面に赤褐色の低下度釉を施した土器小皿、備前焼擂鉢などが含まれ、19世紀までの製品が認められる。

SK6は19世紀前半～中葉に比定される。

SK7（Fig.13）

調査区南部に位置する。他遺構との切り合い関係では、SX2を切り、SD1に切られる。西部が調査区外に出るため全体の規模と形態が不明であるが、平面形は楕円形又は溝状とみられ、検出規模は東西確認長1.84m、南北長0.90m、深さ31㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付碗1点・皿1点、陶器中碗1点・擂鉢1点であり、肥

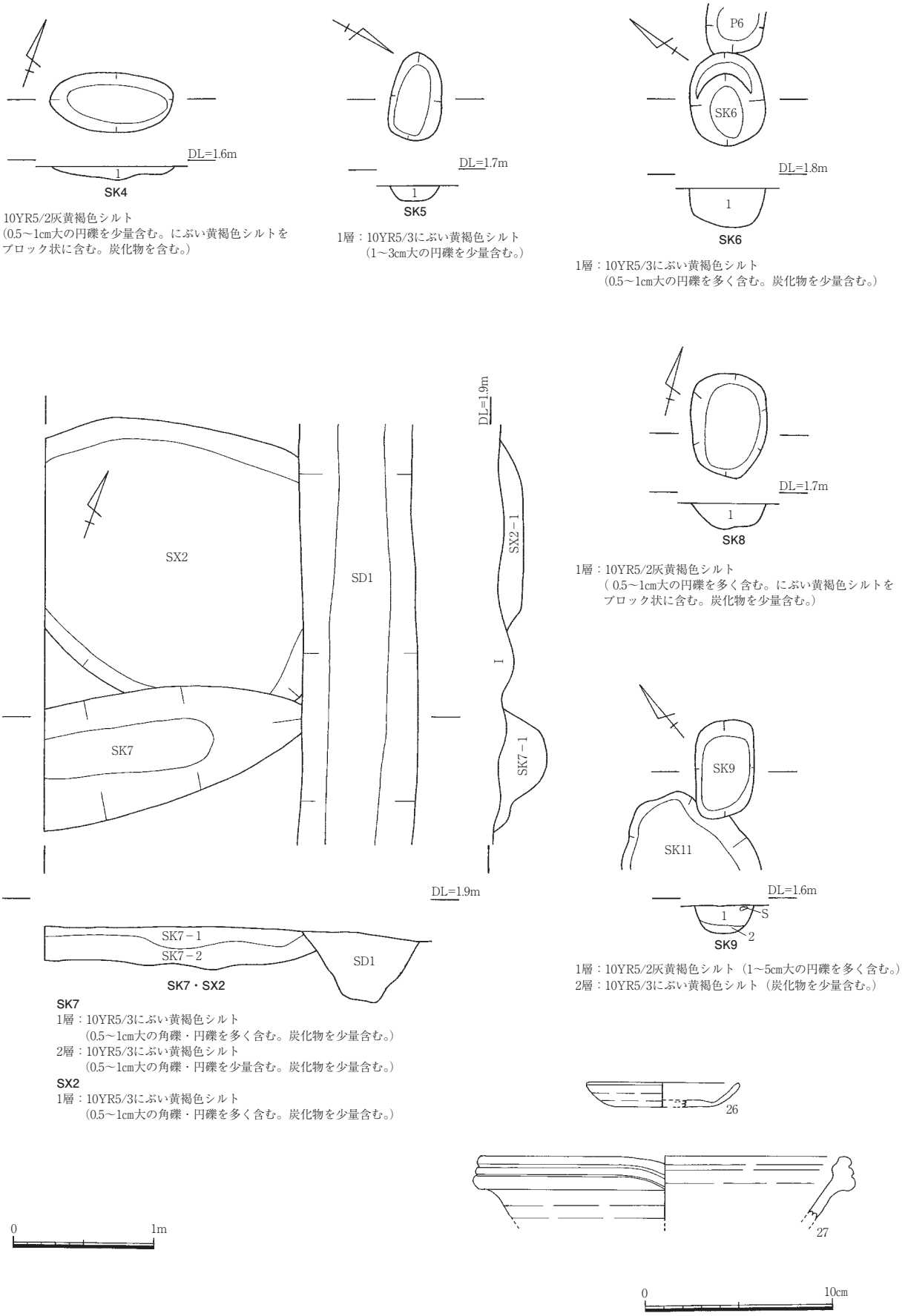


Fig.13　SK4～9・SX2平面図・セクション図・SK4・7出土遺物実測図

（SK4：26、SK7：27）

前産の染付碗、灰釉小皿、備前焼の擂鉢（27）など、17世紀末～18世紀の遺物が含まれている。

SX2との切り合い関係から、SK7は19世紀前半～中葉に比定される。

SK8（Fig.13）

調査区南部に位置する。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸0.75m、短軸0.53m、深さ18㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

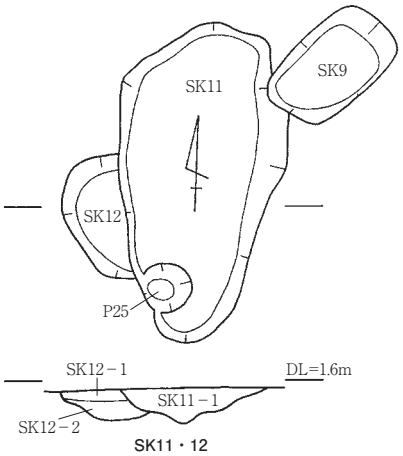
出土遺物は京都系の灰釉碗の体部1点である。

SK9（Fig.13）

調査区南部に位置する土坑で、道状遺構1の下面で検出した。他遺構との切り合い関係では、SK11を切っている。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸0.70m、短軸0.43m、深さ20㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトとにぶい黄褐色シルトである。出土遺物は土師質土器焜炉の底部1点、陶器細片、鉄釘1点、瓦片である。

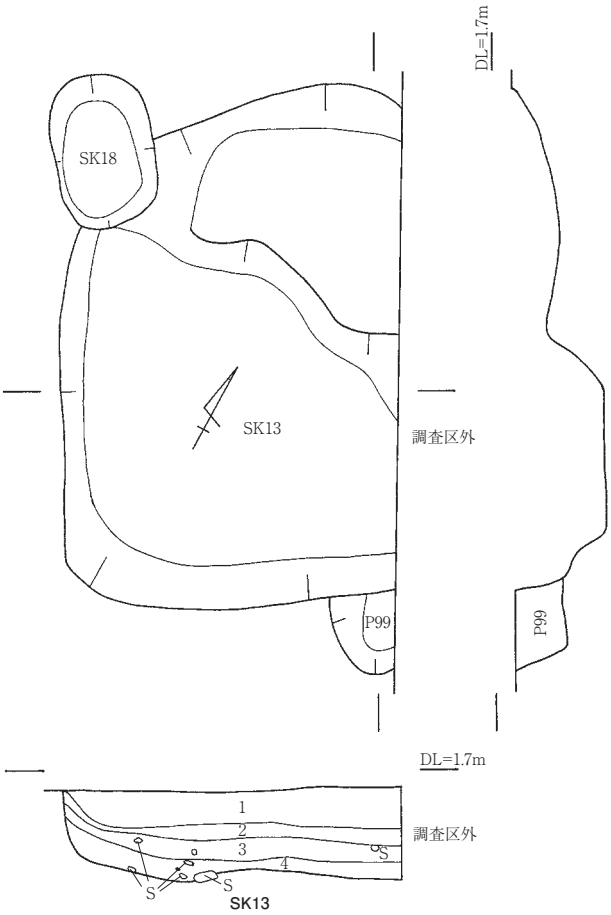
SK11（Fig.14）

調査区南部に位置する。他遺構との切り合い関係では、SK12・P25を切り、SK9に切られている。



SK11
1層：10YR5/2灰黄褐色シルト
（0.5～3㎝大の円礫を多く含む。にぶい黄褐色シルトをブロック状に含む。炭化物を少量含む。）

SK12
1層：10YR5/2灰黄褐色シルト
（0.5～3㎝大の円礫を多く含む。炭化物を少量含む。）
2層：10YR5/3にぶい黄褐色シルト
（0.5～1㎝大の円礫を少量含む。灰黄褐色シルトをブロック状に含む。炭化物を少量含む。）



1層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.5～2㎝大の円礫を多く含む。炭化物を多く含む。）
2層：7.5YR4/2灰褐色シルト（0.5～1㎝大の円礫を少量含む。焼土ブロックと炭化物を少量含む。）
3層：7.5YR4/2灰褐色シルト（0.5～3㎝大の円礫を少量含む。焼土ブロックと炭化物を多く含む。）
4層：10YR4/2灰黄褐色シルト（1～4㎝大の円礫を少量含む。炭化物を少量含む。）

0　1m

Fig.14　SK11～13平面図・セクション図・エレベーション図

また、道状遺構1の下面で検出しており、これに後続する。平面形は不整形を呈し、検出規模は長軸1.69m、短軸0.90m、深さ19㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付皿1点、陶器小皿1点・鉢1点で、肥前産の染付皿、肥前内野山窯の銅緑釉小皿、肥前産の白化粧土刷毛目の鉢など18世紀前半までの製品が含まれている。

出土遺物及びSK12との切り合い関係からみて、SK11は18世紀前半に比定される。

SK12（Fig.14・15）

調査区南部に位置する土坑で、SK11に切られている。全体の規模と形態は不明であるが、検出規模は南北長0.65m、東西残存長0.32m、深さ16㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトとにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗2点、土師質土器中皿1点で、他に陶器小碗と瓶の体部、瓦片等が出土している。この中には肥前産の染付丸形中碗、京都系色絵小碗などの製品が含まれている。

図示したものは陶器瓶（28）である。28は灰釉瓶で、鉄絵による草花文が描かれる。

出土遺物及びSK11との切り合い関係からみて、SK12は18世紀前半に比定される。

SK13（Fig.14・15）

調査区中央部に位置する大型の土坑で、P99を切り、SK18に切られる。東部が調査区外にあるが平面形は不整形とみられ、検出規模は南北長2.70m、東西確認長1.80m、深さ60㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトと灰褐色シルトで、焼土ブロックと炭化物を多く含んでいる。床面は高低差があり、北部にテラス状の高まりをもつ。床面からは石灰岩の角礫が出土している。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗7点・小碗3点・中皿1点・小皿1点・鉢1点・皿又は鉢2点・猪口2点・蓋物2点・水滴1点、白磁又は染付のうがい茶碗1点、白磁盃台1点、磁器色絵瓶1点・合子1点、陶器中碗12点・皿2点・鉢1点・擂鉢1点・小瓶1点・把手1点・灯明受皿1点・餌猪口1点・不明2点、土師質土器小皿7点、瓦質土器火鉢1点、窯道具1点で、他に、軟質施釉陶器人形又は水滴の体部1点、砥石1点、瓦片3点が出土している。

図示したものは29～53である。

29～40は磁器で、何れも肥前産。29～35・37は染付。29・30は小碗で、29はコンニャク印判による菊花文、30は雨降り文を描く。31は丸形小皿、35は皿、32・33は猪口である。34は蓋物で、コンニャク印判による桐文を描く。37は水滴である。36は色絵の瓶で、赤の上絵付で圏線と縞を描く。38は白磁又は染付で、うがい茶碗。39は白磁の盃台である。40は型押し成形による色絵合子で、外面に陽刻文様が施される。内面に透明釉、外面には部分的に黄色と褐色の釉が施される。

41～50は陶器。41・42は尾戸窯の灰釉丸形中碗。43は鉄釉の天目形碗で、高台施釉である。44は肥前産の鉄釉中碗で、暗赤褐色の釉を施す。45は肥前産の三島手の皿で、内面に印花と線彫りによる白象嵌の文様が施される。46は小瓶で、外面上半にオリーブ褐色の釉、内面に灰釉を施す。外底に回転糸切り痕が残る。47は灰釉の餌猪口で、尾戸窯の製品か。48は備前焼の灯明受皿で、内面に錆釉を施す。49は蓋とみられ、外面に灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施している。50は器種

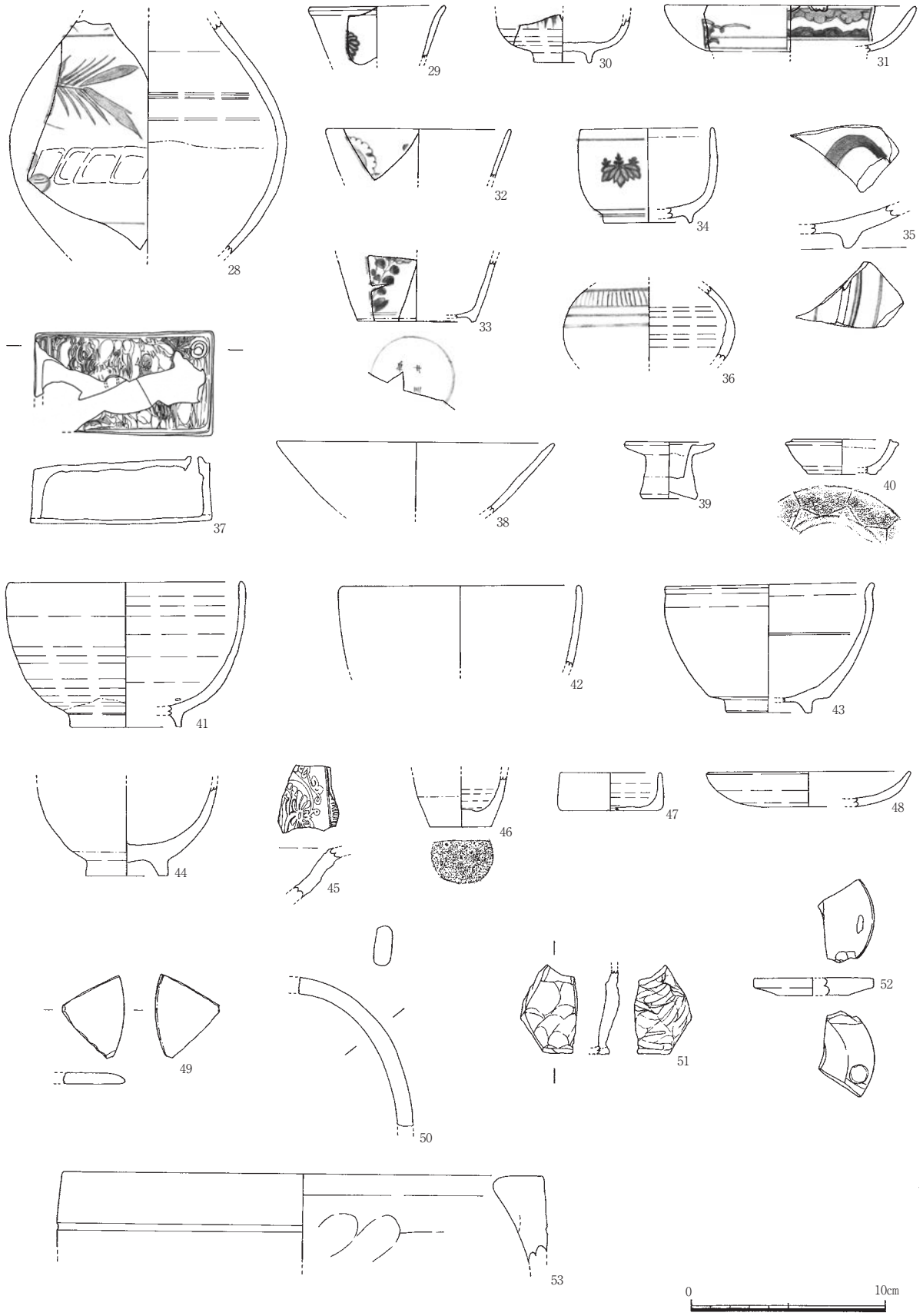


Fig.15　SK12・13出土遺物実測図

（SK12：28、SK13：29～53）

不明の把手で、灰白色を帯びる透明の釉を施しており、尾戸窯の製品とみられる。

51は軟質施釉陶器の人形又は水滴。型押し成形貼り合わせによるもので、外面ににぶい黄褐色の低火度釉を施す。53は瓦質土器の火鉢。52は窯道具のハマで、近隣に所在する尾戸窯からもたらされたものか。上面に別個体の高台溶着痕、下面に円錐ピンの剥離痕が残る。

SK13は18世紀前葉に比定される。

SK15（Fig.11・16）

調査区南部に位置する土坑で、SK3に上面を切られている。平面形は円形を呈し、検出規模は長軸0.82m、短軸0.80m、検出面からの深さは44㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付大碗1点・小碗1点・小杯1点、陶器擂鉢1点・中碗1点、土師質土器小皿4点で、この他、銅製品1点と瓦片、陶磁器・土器の体部が出土している。

図示したものは54～59である。54～56は染付で、何れも肥前産。54は1650～1670年代にかけて生産されたアジア輸出向けの大碗で、外面に雲龍文、見込みに荒磯文を描く。55は小杯、56は小碗である。57・58は陶器。57は杉形の灰釉中碗で、呉須で松竹梅、四方襷などの文様を描く。58は備前の擂鉢。59は銅製の切羽で、刀身を鞘に収める際に鞘口が当たる部分の金具である。楕円形とみられるが欠損している。

SK15は17世紀後半～18世紀前葉に比定される。

SK16（Fig.17）

調査区南部に位置する土坑で、SK2・P3を切っている。東部が調査区外になるため全体の規模と形態は不明であるが、南北長0.80m、東西確認長0.59m、深さ16㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして染付合子蓋1点、白磁小皿1点、陶器土瓶1点、瓦質土器火鉢1点で、この他、染付細片と瓦片が出土している。

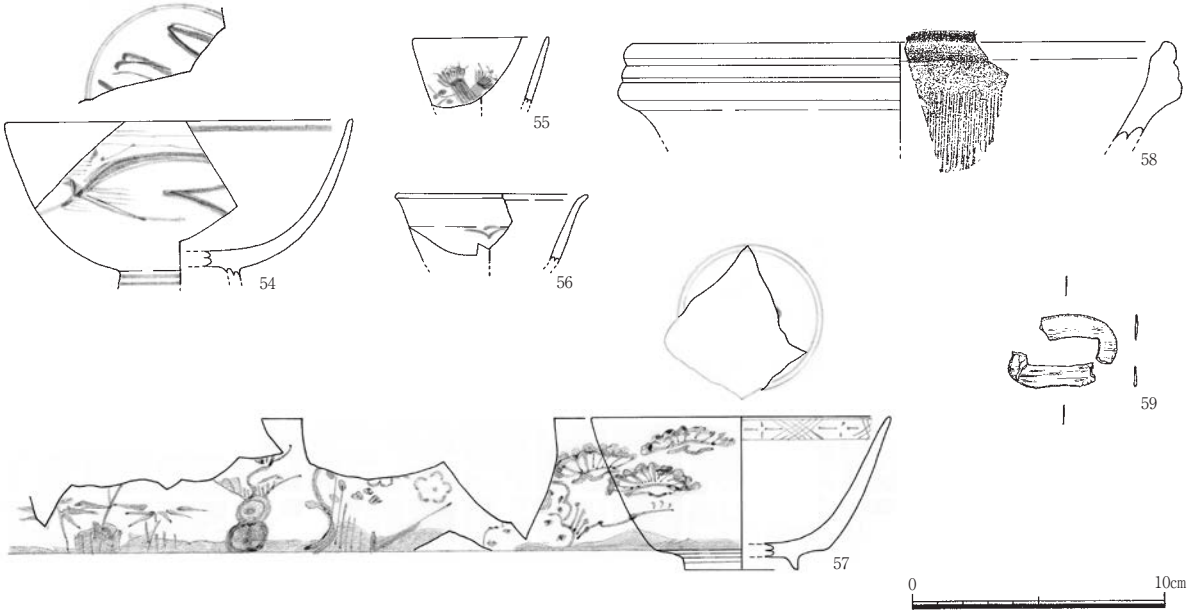
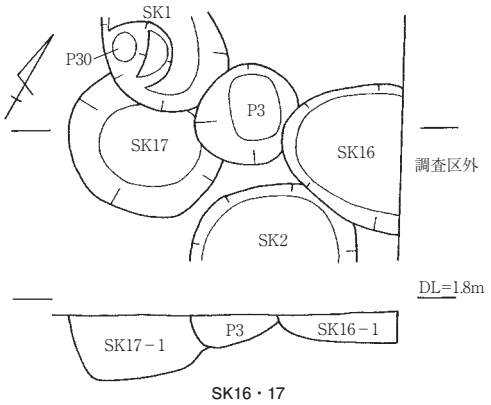
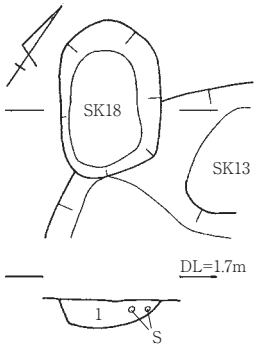


Fig.16　SK15出土遺物実測図



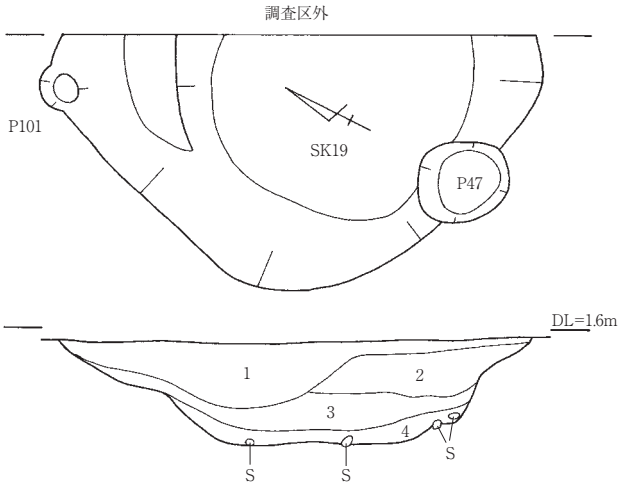
SK16・17



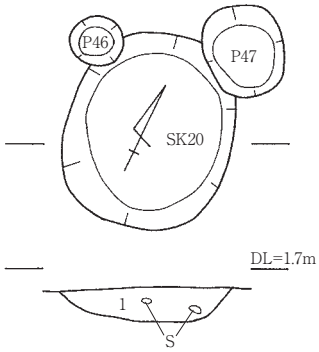
SK18

SK16
1層：10YR5/3にぶい黄褐色シルト（0.5～2cm大の円礫を少量含む。炭化物を少量含む。）
SK17
1層：10YR5/3にぶい黄褐色シルト
（0.5～2cm大の円礫を多く、4～5cm大の円礫を少量含む。炭化物を少量含む。）

1層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト
（0.5～3cm大の円礫を多く含む。炭化物を少量含む。）



SK19



SK20

1層：10YR4/2灰黄褐色シルト
（1～3cm大の円礫を多く含む。炭化物を少量含む。）

1層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.5～2cm大の円礫を多く、3～4cm大の円礫を少量含む。
石灰岩を少量含む。炭化物を少量含む。）
2層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト（0.5～2cm大の円礫を少量含む。炭化物を少量含む。）
3層：10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（炭化物を多く含む。）
4層：10YR5/2灰黄褐色粘質シルト（4～5cm大の角礫・円礫を少量含む。炭化物を多く含む。）

0　1m

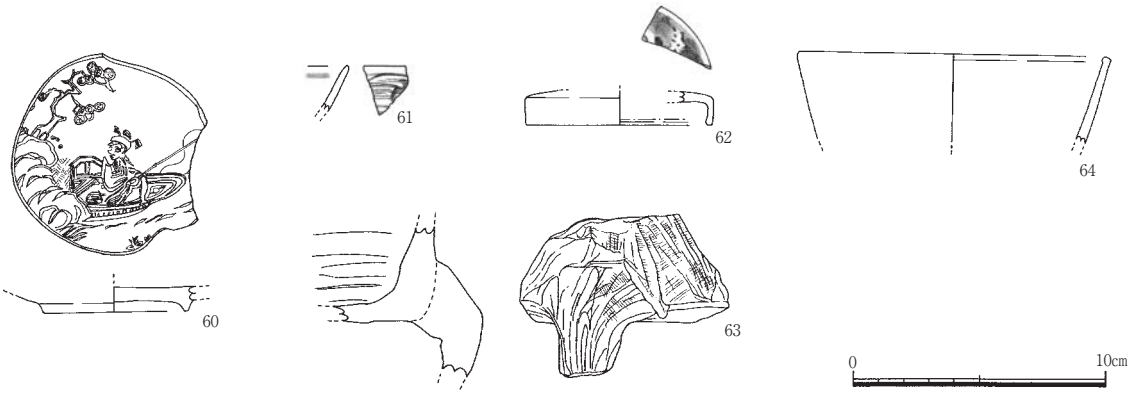


Fig.17　SK16～20平面図・セクション図・SK16・20出土遺物実測図
（SK16：60～63、SK20：64）

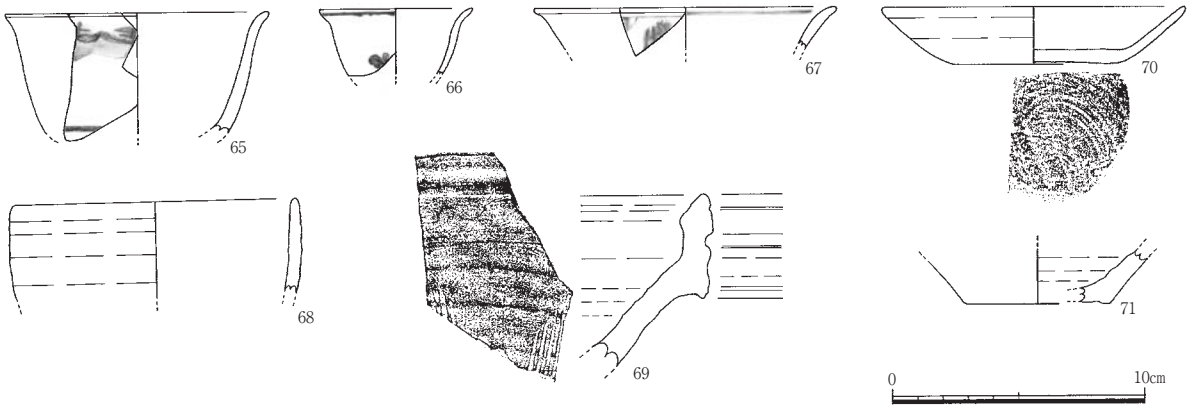


Fig.18　SK19出土遺物実測図

図示したものは60～63である。60～62は磁器で、何れも肥前産。61は染付の碗。62は染付の合子蓋である。60は白磁小皿で、内面に型による陽刻文様を施している。63は瓦質土器で、火鉢か。

SK16は19世紀中葉に比定される。

SK17（Fig.17）

調査区南部に位置する土坑で、SK1とP3に切られている。平面形は円形又は楕円形とみられ、検出規模は東西長0.84m、南北残存長0.68m、深さ35㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は確認できていないが、SK1との切り合い関係からみて、SK17は17世紀後半～18世紀に比定される。

SK18（Fig.17）

調査区中央部に位置し、SK13を切っている。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸0.83m、短軸0.53m、深さ15㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は肥前産の染付端反形中碗の口縁部1点と陶磁器体部、瓦片である。

SK18は19世紀前半～中葉に比定される。

SK19（Fig.17・18）

調査区中央部に位置する大型の土坑で、P47に切られる。またP101と切り合うが前後関係は不明である。東部が調査区外になるため全体の規模が不明であるが、平面形は不整形とみられ、検出規模は南北長2.62m、東西確認長1.36m、深さ55㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトとにぶい黄褐色シルト、灰黄褐色粘質シルトで、下層には炭化物を多く含んでいる。また、床面から南壁にかけて石灰岩、チャート、砂岩、その他川原石からなる5～10㎝大の角礫・円礫が多く出土している。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗3点・小碗1点、青花小杯1点・皿1点、陶器中碗1点・擂鉢1点、土師質土器杯2点・小皿5点、及び青花、陶磁器・土器の体部で、これには漳州窯系青花、唐津系灰釉陶器皿、備前焼甕の体部等が含まれている。

図示したものは65～71である。65は肥前産の染付端反形中碗。66は中国景徳鎮窯系の青花小杯、67は青花皿である。68は肥前産の灰釉丸形中碗。69は備前の擂鉢。71は土師質土器杯、70は小皿である。

SK19は18世紀前葉に比定される。

SK20（Fig.17）

調査区中央部に位置する土坑で、P46・47に切られている。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸1.05m、短軸0.90m、深さ18㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして染付又は白磁瓶1点、陶器中碗4点で、他に陶磁器・土器の体部が出土している。これらには尾戸焼碗、肥前産の呉器手風灰釉丸碗、京都系の灰釉碗、堺産擂鉢など、17世紀後半～18世紀までの遺物が含まれている。

図示したものは灰釉中碗（64）である。

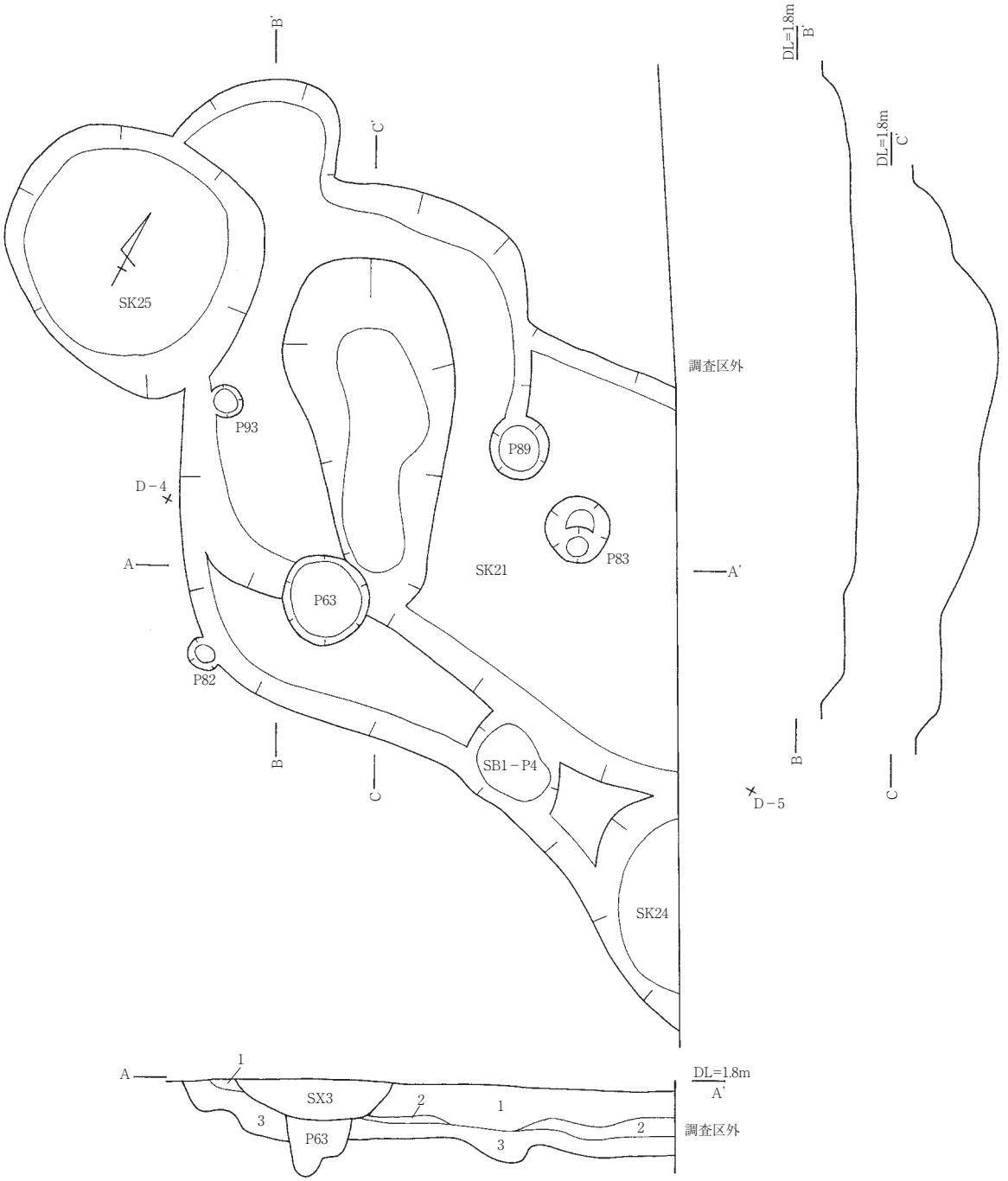
SK20は18世紀に比定される。

SK21（Fig.19～24）

調査区北部に位置する大型の土坑で、SK24・SB1－P4・P82・83・89・93・杭群1を切り、SX3・P63に切られる。また切り合うSK25との前後関係は不明である。平面形は不整形で、複数の掘り込みが重なったように見えるが、埋土が同質で各所の出土遺物間で接合関係が認められる。検出規模は東西確認長3.30m、南北長3.24m、深さ32～58㎝を測る。埋土は1層が灰黄褐色礫層、2層がにぶい黄褐色砂礫、3層が灰黄褐色シルトで、中央の楕円形の窪み内には白色系の角礫が多量に廃棄されている。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗33点・小碗7点・小杯3点・大皿1点・中皿1点・小皿又は五寸皿13点・鉢5点・猪口2点・碗蓋10点・蓋物5点・小瓶5点、青磁染付猪口1点、白磁小碗2点・小皿2点・猪口1点・紅皿2点・瓶1点、磁器色絵小碗4点・小杯3点・薄手酒杯2点・燗徳利1点、陶器中碗18点・小碗5点・小杯1点・中皿1点・小皿13点・捏鉢4点・擂鉢6点・鍋4点・土瓶3点・燗徳利1点・甕7点・瓶3点・柄杓1点・餌猪口2点・灯明受皿3点・火鉢2点・焜炉又は風炉1点・植木鉢1点・器種不明5点、土師質土器杯1点・小皿14点・白土器小皿2点・中皿1点・焙烙3点・焜炉2点・竈1点・火消し壺1点・火消し壺蓋2点・人形1点、瓦質土器火鉢1点・焜炉1点、施釉土器ミニチュア3点・人形1点であり、この他、煙管雁首1点・吸口1点、銅製品匙1点、銅銭（寛永通寶か）2点、雁首銭1点、砥石4点、用途不明棒状製品1点、瓦66点が出土している。また、サザエ・ハマグリの貝殻も出土している。

図示したものは72～176である。72～117は磁器で、112は関西系、72・73・75・83・89・91・98・105・106・110は能茶山窯産及び能茶山窯の可能性をもつもの、その他は肥前産又は肥前系である。72～85・89～101・103～110・113～117は染付、102は青磁染付である。72～76は中碗である。72～74は端反形中碗で、72は花卉文、73は放射状の文様と窓に草花を描く。75は広東形中碗で、外面に草花と雁を描く。76は丸形中碗で、外面に菊唐草文を描く。77～83は小碗。83は端反形小碗で、外面に雷文帯、窓に草花、「福寿」字を描く。84・85は小杯。84は竹文を描く。85はコンニャク印判による文様を施すもので、肥前産17世紀末～18世紀前半の製品である。93は大皿、94は中皿、89は五寸皿、90～92は小皿である。89は能茶山窯の五寸皿で、高台内に角枠内「茶山」銘をもつ。口縁端部に呉須を施し、内面に矢羽根文、鳥と芭蕉、草を描いている。91は能茶山窯の小皿で、口縁端部に呉須を施し、89と同タイプの文様を描く。90は口縁部輪花形の山水文小皿で、蛇ノ目凹形高台をもつ。93は外面に二重線描きによる連続唐草文、内面に牡丹唐草文を描く。95・96・98・99



1層：10YR4/2灰黄褐色礫層（1～4cm大の円礫を多く、10～15cm大の石灰岩の角礫を少量含む。炭化物を少量含む。）
2層：10YR4/3にぶい黄褐色砂礫（粗砂にシルトが混じる。1～3cm大の円礫を多く含む。）
3層：10YR4/2灰黄褐色シルト（にぶい黄褐色シルトをブロック状に含む。0.5～1cm大の円礫を少量含む。）

0　1m

Fig.19　SK21平面図・セクション図・エレベーション図

は鉢、97は鉢か。98は能茶山窯の鉢で、高台内に角枠内「茶」銘をもつ。101・102は猪口、100は猪口か。102は青磁染付の猪口で、見込みに手描きによる五弁花文、高台内に角枠内渦「福」を描く。103～107は碗蓋である。105・106は能茶山窯産とみられる碗蓋で、105は外面に花文と雲、106は東屋と雲気を描く。これらのうち、104は碗74と組、106は碗192と組、また107はSK21・25出土の碗196と組になるとみられるものである。108～110は蓋物。113～116は辣韮形の小瓶である。117は器種不明の体部で、内面無釉。外面に山水文を描く。111は白磁の菊花形紅皿である。86・87・112は色絵。86は小杯で、赤・黒の上絵付で花唐草文を描く。87は薄手酒杯で、内面に赤・その他の上絵付による文様を施している。112は関西系の燗徳利で、黄色の釉が施される。88は瑠璃釉の碗で、外面に紺色の釉、内面に透明釉を施す。高台内に呉須で変形字銘を描く。

118～144は陶器。118～124は尾戸窯の灰釉中碗。118は広東形碗で、鉄絵の竹文を描く。125は肥前産の京焼風陶器碗。高台無釉で、灰黄色を帯びる透明の釉を施す。126は轆轤形の中碗。灰白色の白濁した釉を施し、部分的に鉄釉が流れる。127は京都・信楽系の灰釉碗の底部で、高台内に墨書を認める。128・129は京都・信楽系の灰釉丸形小碗で、129は外面に鉄絵を描く。128は高台内に墨書を認める。130は京都・信楽系の灰釉小杯である。131は尾戸窯又は能茶山窯の鉄釉小皿で、見込みを蛇ノ目釉剥ぎし、外面中位に沈線を巡らせる。132は色絵の五寸皿で、赤・薄緑・暗褐色の上絵付で人物と梅を描く。内面に赤で瓢箪に「唐」文字を描く。133・134は堺・明石系の擂鉢である。135－abは京都・信楽系の柄杓。外面中位に鉄釉で圏線を描き、灰白色を帯びる透明の釉を施す。136は京都・信楽系の灯明受皿。内面に櫛目を入れ、灰白色を帯びる透明の釉を施している。137は灰釉の鍋である。138は丹波焼の甕で、外面に鉄釉、内面と口縁端部に灰オリーブ色の釉を施す。139は鉄釉の小瓶で、能茶山窯の製品か。140は瓶の底部か。鉄釉を施し外底に銘印をもつ。141は器種不明で、白化粧の後、鉄絵で龍を描く。142は瀬戸・美濃産の火鉢で、外面に緑釉を施し獣面の双耳を貼付する。143は灰釉の餌猪口。144は把手の部分で、上面に楕円形の面取りを施している。尾戸窯産の可能性をもつ。

145～157・159・160・162は土師質土器。145～150は小皿で、149は外底に墨書、150は底部中央に焼成後穿孔を認める。151・152は尾戸窯の白土器小皿で、151は内面に陽刻の高砂文、152は松竹梅鶴亀文を施す。151は外面下位と外底に回転ケズリ、152は外面下位に回転ケズリとナデ、外底にナデを施す。153は尾戸窯の小皿で、にぶい橙色の胎土をもち、外面下位に回転ケズリとナデ、外底にナデを施す。154は杯か。外面が強く煤けており、鍋として使用した可能性がある。155は関西系の焙烙。156は竈である。157は焜炉。159は火消し壺。160は火消し壺の蓋である。162は人形で、人物。型作り前後貼り合わせで中実。底部に径1㎝の円錐形の穴が残る。158－ab・161は瓦質土器。158－abは筒形の焜炉で、外面に粒状の陽刻文様が施される。161は火鉢か。外面上位に型による陰刻文様を施す。163～166は施釉土器。163～165はミニチュアである。163・164は型作りで団扇を表わし、黄色の低火度釉を施す。163は内面に鉄絵と白土で梅文を描く。165は碗で、緑色の低火度釉を施す。166は人形で、魚。型押し成形左右貼り合わせにより、外面に橙と緑の低火度釉を掛け分ける。

167～169は石製品。167・169は凝灰岩製、168は砂岩製の砥石で、167・168には刃物を研いだと

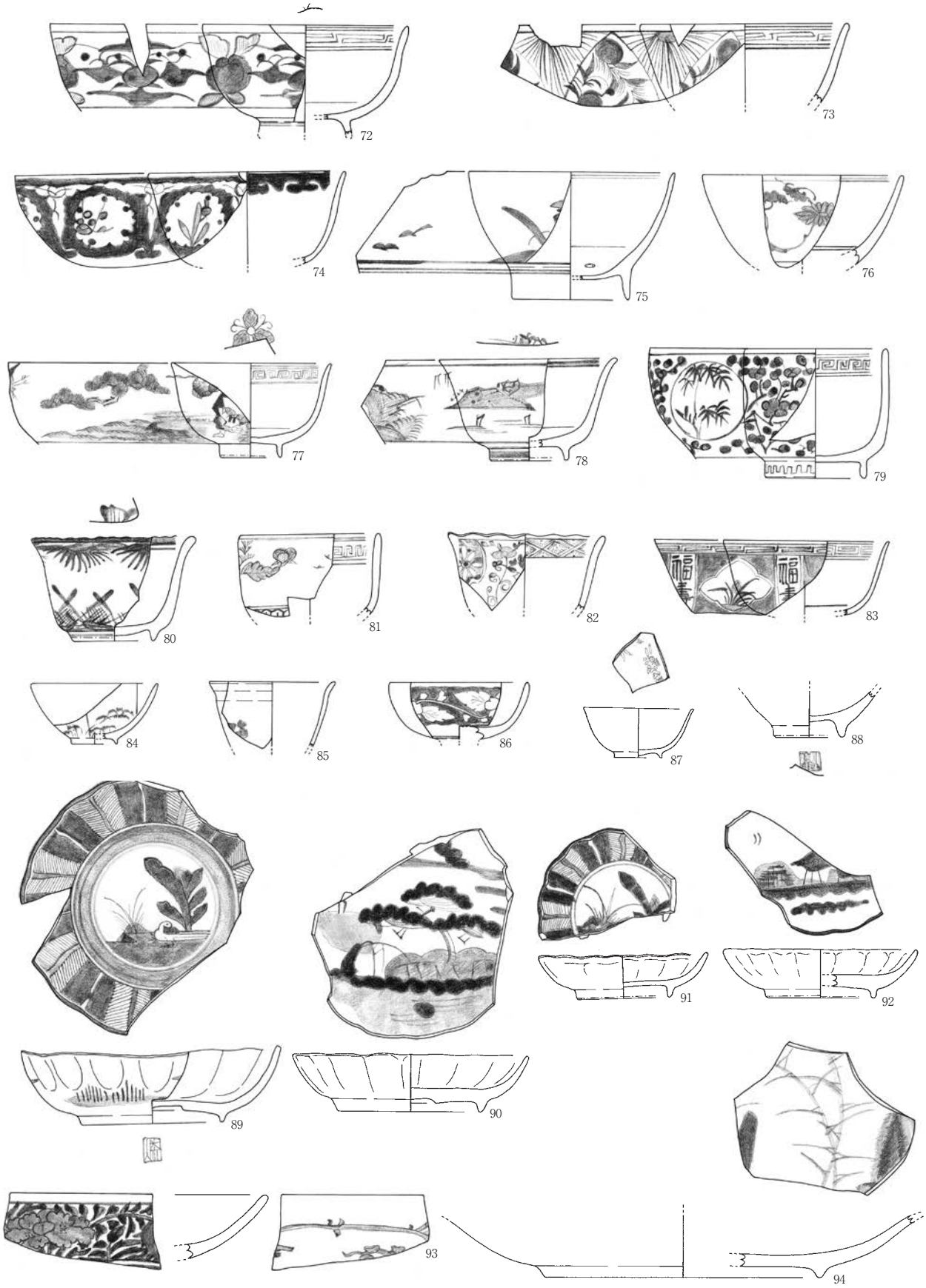


Fig.20　SK21 出土遺物実測図（1）

0　10cm

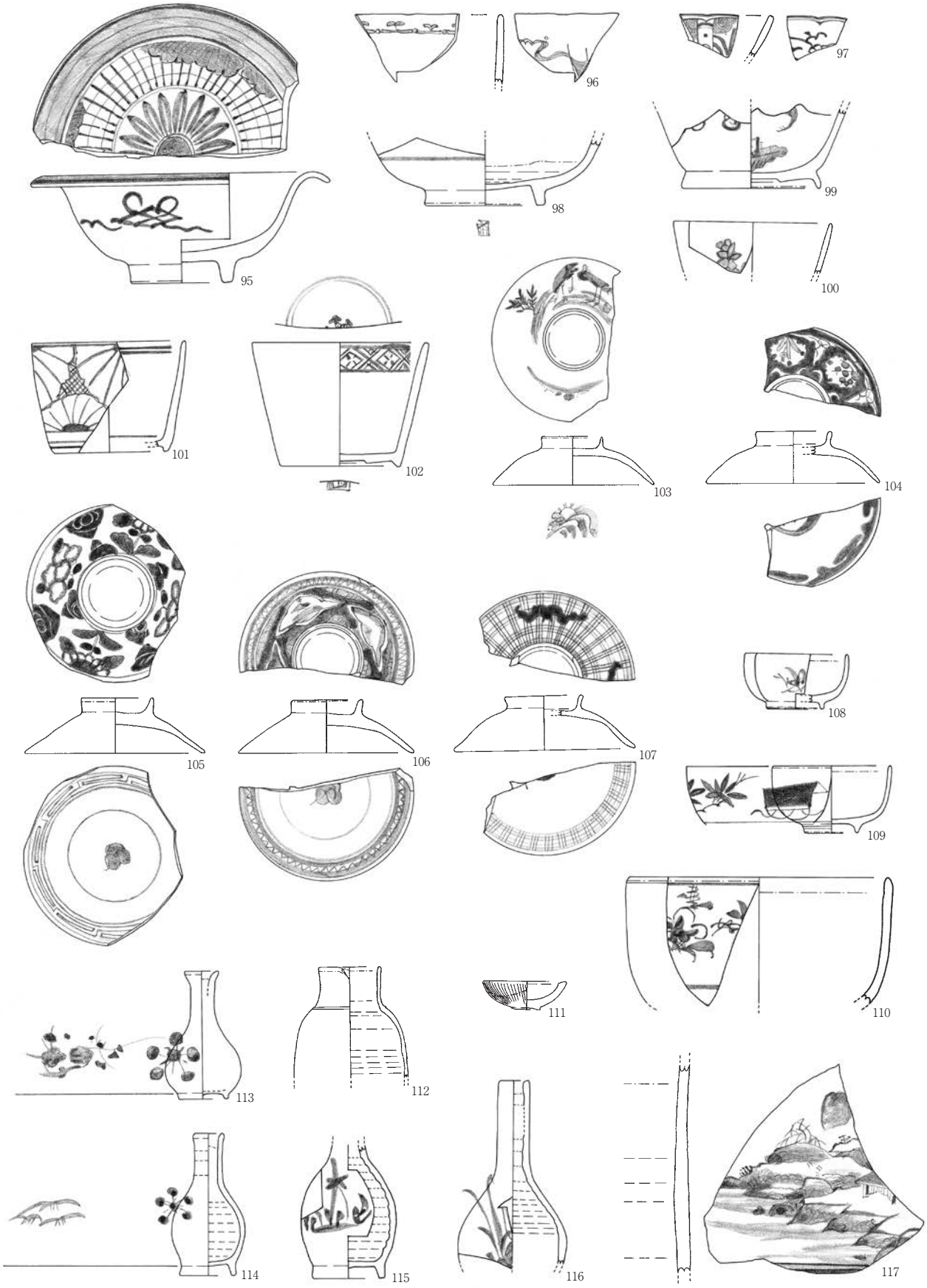


Fig.21　SK21出土遺物実測図（2）

0　10cm

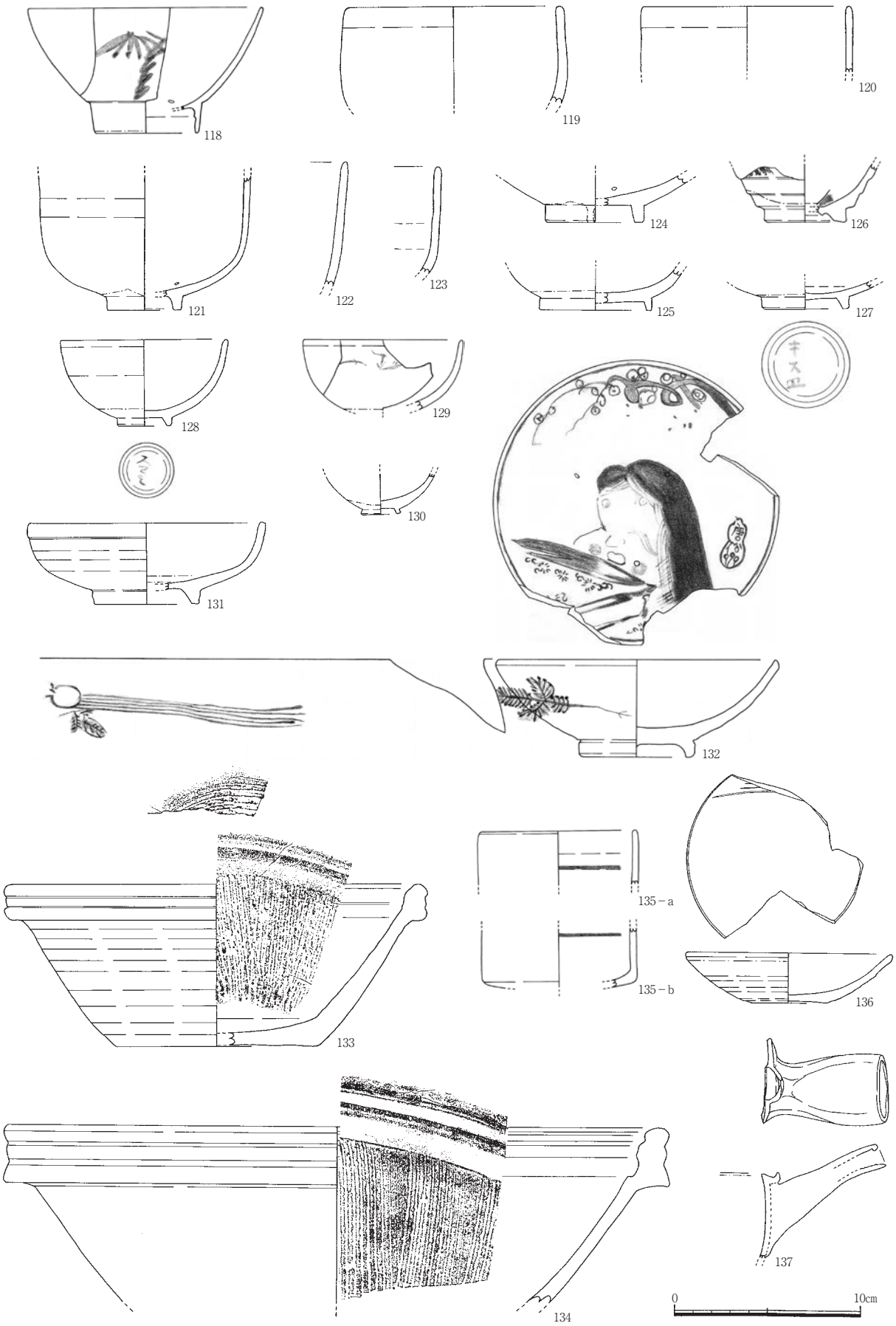


Fig.22　SK21 出土遺物実測図 (3)

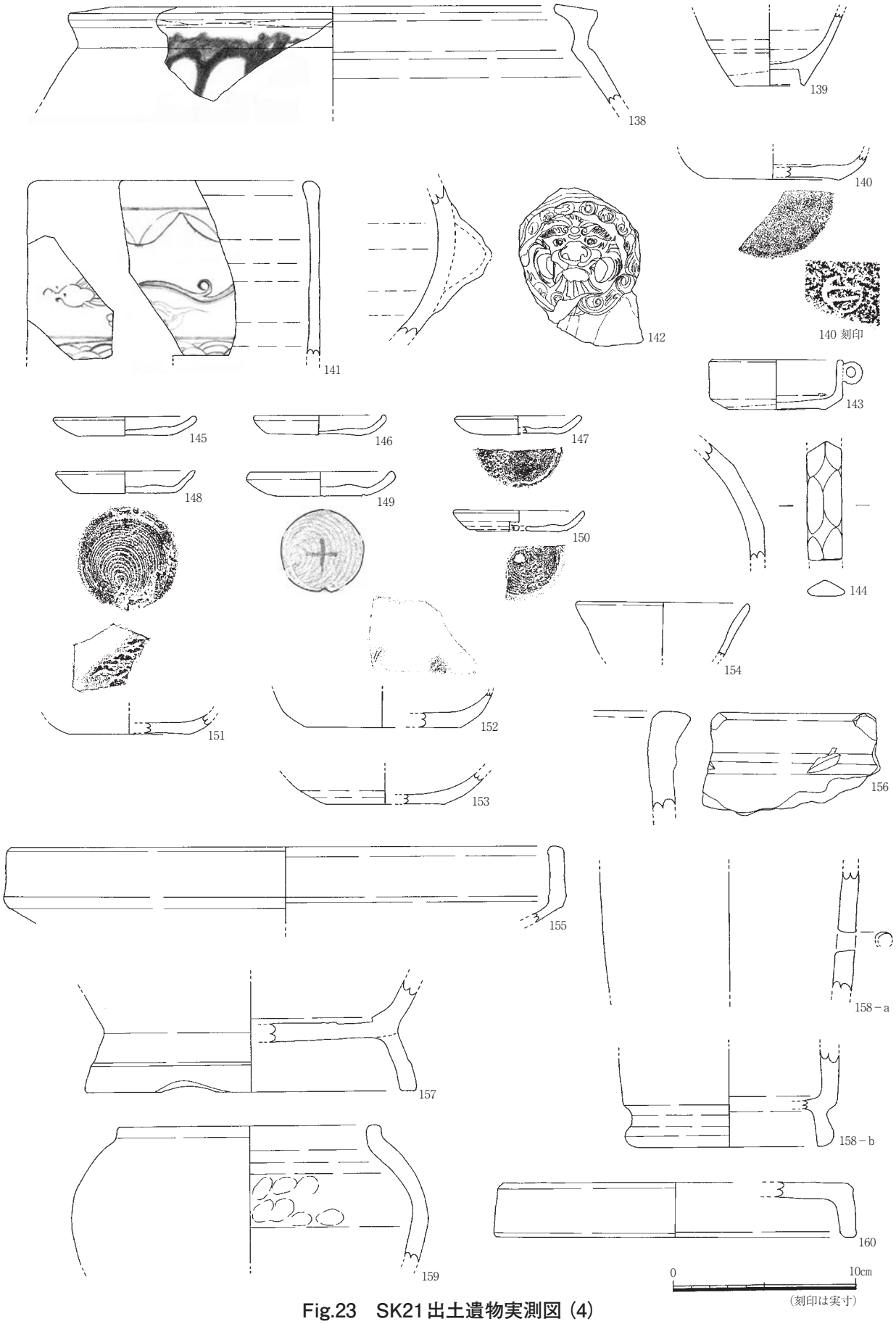


Fig.23　SK21 出土遺物実測図（4）

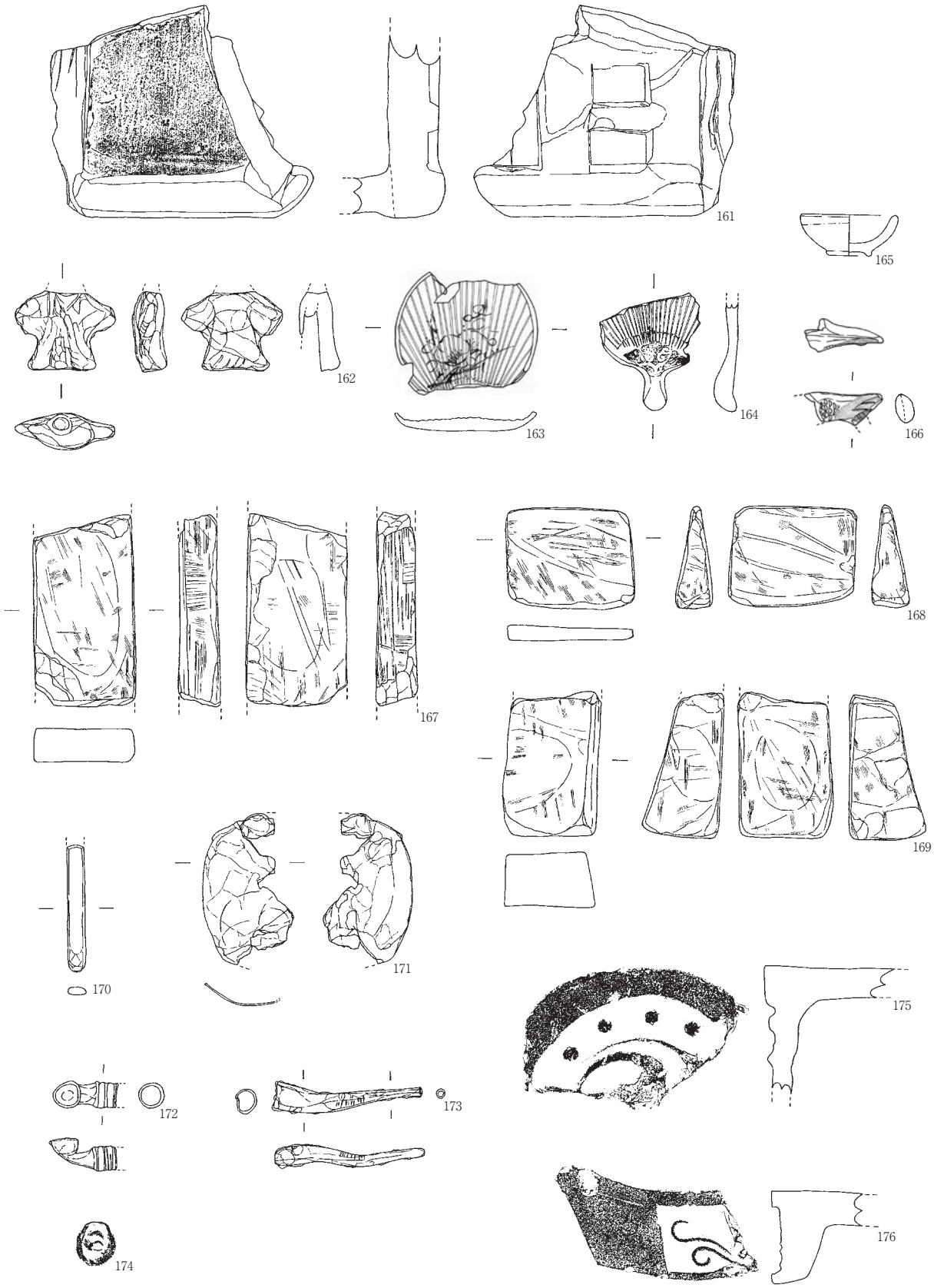


Fig.24　SK21 出土遺物実測図 (5)

みられる筋状の研ぎ痕が残る。170は用途不明の棒状製品で、骨格製品か。171～174は銅製品。171は銅製の匙である。172は煙管の雁首、173は煙管の吸口である。174は雁首銭である。175・176は瓦。175は巴文の軒丸瓦。176は軒桟瓦で、中心飾りは丁字とみられる。

SK21は19世紀中葉に比定される。

SK22（Fig.25）

調査区中央部に位置する土坑で、P68に切られる。また、P60と切り合うが前後関係は不明である。東部が撹乱を受けるため全体の規模は不明であるが、平面形は楕円形とみられ、検出規模は南北長2.37m、東西残存長1.32m、深さ20㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗1点・鉢1点、陶器中碗2点・小皿1点・捏鉢1点、白磁中碗1点・小皿1点、土師質土器小皿1点で、他に陶磁器体部と瓦片が出土している。これには肥前産の染付丸碗、肥前内野山窯の銅緑釉小皿、肥前産の灰釉丸碗、尾戸焼の碗などが含まれ、18世紀までの遺物が出土している。

SK22は18世紀に比定される。

SK23（Fig.25）

調査区北部に位置し、SX1の直下で検出した浅い皿状の土坑である。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸1.25m、短軸0.76m、深さ15㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトで、炭化物を含んでいる。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付小碗1点・小杯1点・猪口1点、青磁中碗1点、陶器中碗5点・碗又は鉢1点・中皿1点・小皿1点・皿又は鉢1点で、他に銅板、サザエの貝殻等が出土している。

図示したものは177～184である。177・178は染付で、ともに肥前産。177は小杯。178は猪口で、高台内に「宣徳□製」銘を描く。179は尾戸窯の灰釉碗又は鉢。180は尾戸窯の灰釉中碗である。181は肥前産の京焼風陶器碗で、外面に鉄絵の山水文を描く。182は灰釉中碗で、高台内に渦状の鉋痕が残る。183は尾戸窯の灰釉変形形小皿で、ロクロ成形の後口縁部を内側に押して変形させている。184は鉄釉の皿又は鉢である。

出土遺物及びSX1との関係性からみて、SK23は18世紀前葉に比定される。

SK24（Fig.26）

調査区北部に位置する土坑で、上面をSK21に切られている。東部の大部分が調査区外となるため全体の規模と形態が不明であるが、検出規模は南北長1.38m、東西確認長0.42m、深さ80㎝を測る。埋土は灰黄褐色砂礫と褐灰色シルトで、上層の砂礫層内からは20～30㎝大のチャートや石灰岩の角礫が出土している。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付小碗2点・小杯2点・五寸皿1点・鉢1点・猪口2点・碗蓋1点・不明1点、青磁染付碗蓋1点、白磁紅皿1点、磁器色絵薄手酒杯1点、陶器中碗5点・小碗2点・中皿1点・小皿1点・捏鉢1点・鍋2点・土瓶1点・灯明受皿1点、土師質土器焙烙1点・焼塩壺蓋1点、及び、寛永通寶1点、紹聖元寶か1点、鉄釘1点、瓦片である。

図示したものは185～191である。185は肥前産の染付五寸皿。186・187は尾戸窯の灰釉中碗で、186は鉄絵による格子文、187は鉄絵と白土による梅花文を描く。188は瀬戸・美濃産の灰釉小皿で、

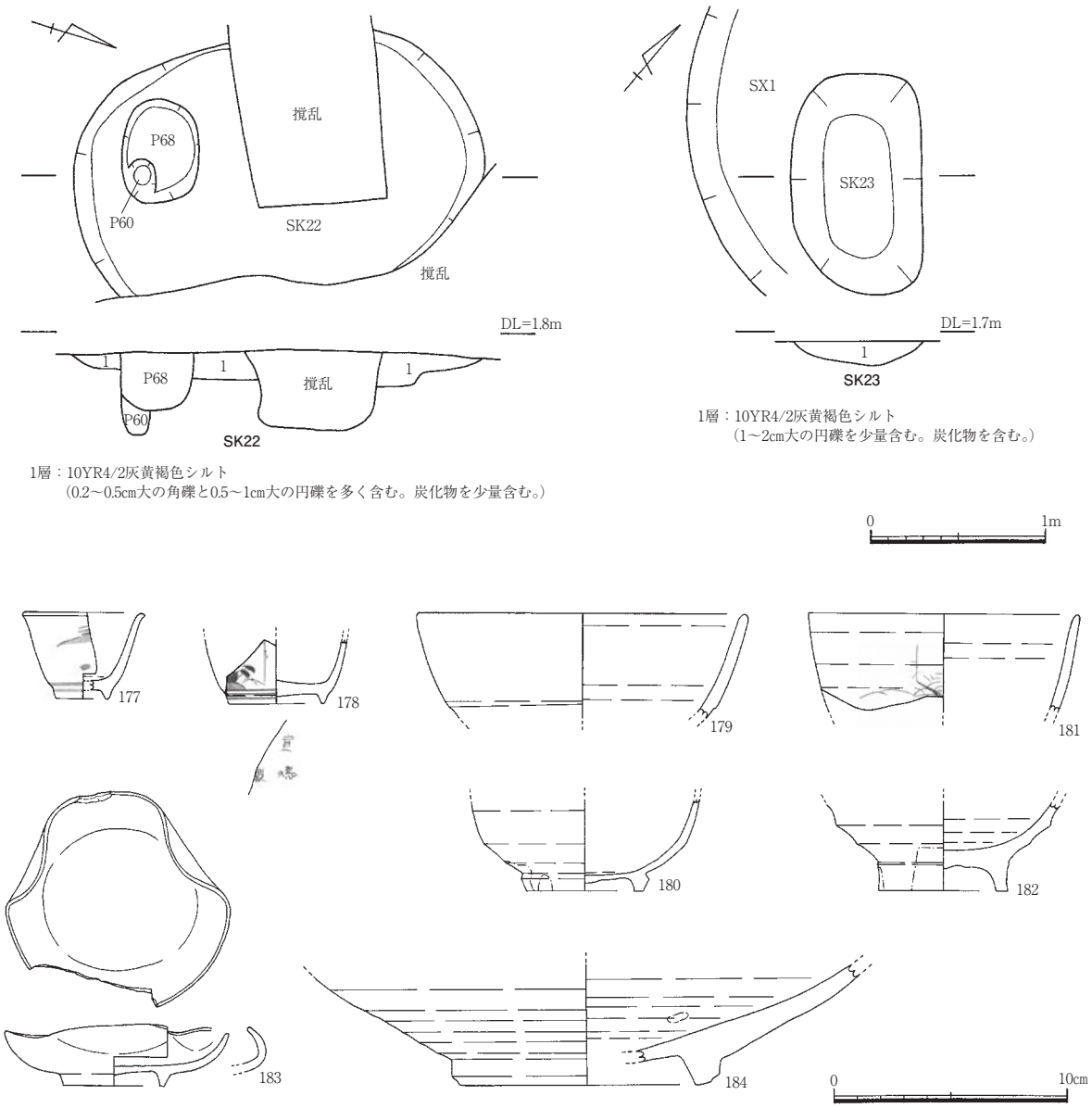


Fig.25　SK22・23平面図・セクション図・SK23出土遺物実測図

口縁部波縁状。オリーブ黄色を帯びる透明の釉を施す。189は京都・信楽系の灰釉灯明受皿である。190・191は銅銭で、190は寛永通寶。191は紹聖元寶か。

SK24は19世紀中葉に比定される。

SK25（Fig.26・27）

調査区北部に位置する。SK21と切り合うが、埋土が共通しており前後関係は不明である。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸1.62m、短軸1.48m、深さ76cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗12点・小碗1点・小杯1点・小皿1点・鉢1点・碗蓋6点・小瓶3点、白磁五寸皿1点・紅皿1点・瓶1点・水滴1点、磁器色絵小碗1点、陶器中碗2点・捏鉢1点・擂鉢1点・鍋1点・片口1点・甕1点・火鉢1点・焜炉1点、土師質土器焜炉1点・白土器小皿1点、及び煙管吸口1点、銅製品1点である。これらの遺物には、SK21出土遺物片と接合される

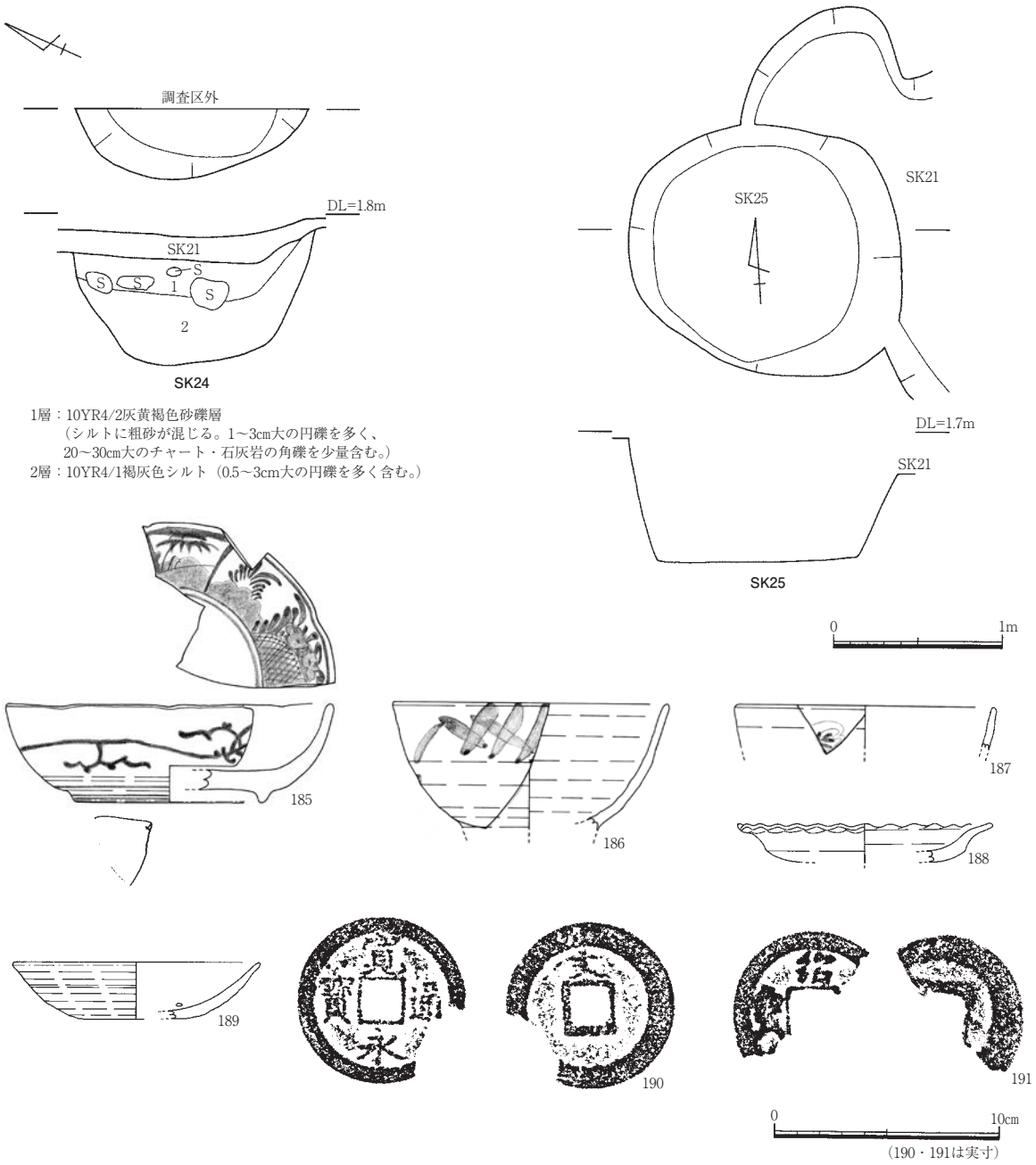


Fig.26　SK24・25平面図・セクション図・エレベーション図・SK24出土遺物実測図

もの（192・194～196・199・201～203）が含まれ、同時期に遺物廃棄が行われたことが窺える。

図示したものは192～208である。192～203は磁器で、192・193・200は能茶山窯産及び能茶山窯の可能性をもつもの、その他は肥前産又は肥前系である。192・193・195～197・199～201は染付。192・193・195・196は中碗。192は能茶山窯の端反形中碗で、高台内に角枠内「茶山」銘をもつ。高台が撥状に開き、帯線に鋸歯文、雲、窓に東屋山水文を描いている。193も能茶山窯産の可能性をもつもので、高台が撥状に開く。外面に帆掛船と波、見込みに帆掛船を描いている。196は格子文と蝙蝠、195は唐草文と鳥を描く。197は小皿で内面に雷文帯と帆掛船、外面に唐草文を描く。199・200は碗蓋。199は広東形碗の蓋で、外面に芭蕉、宝文、草、内面に鷺を描く。200は端反形碗の蓋で、193と組になるとみられる。201は鉢である。194は色絵の端反形小碗で、赤の上絵付で網目文

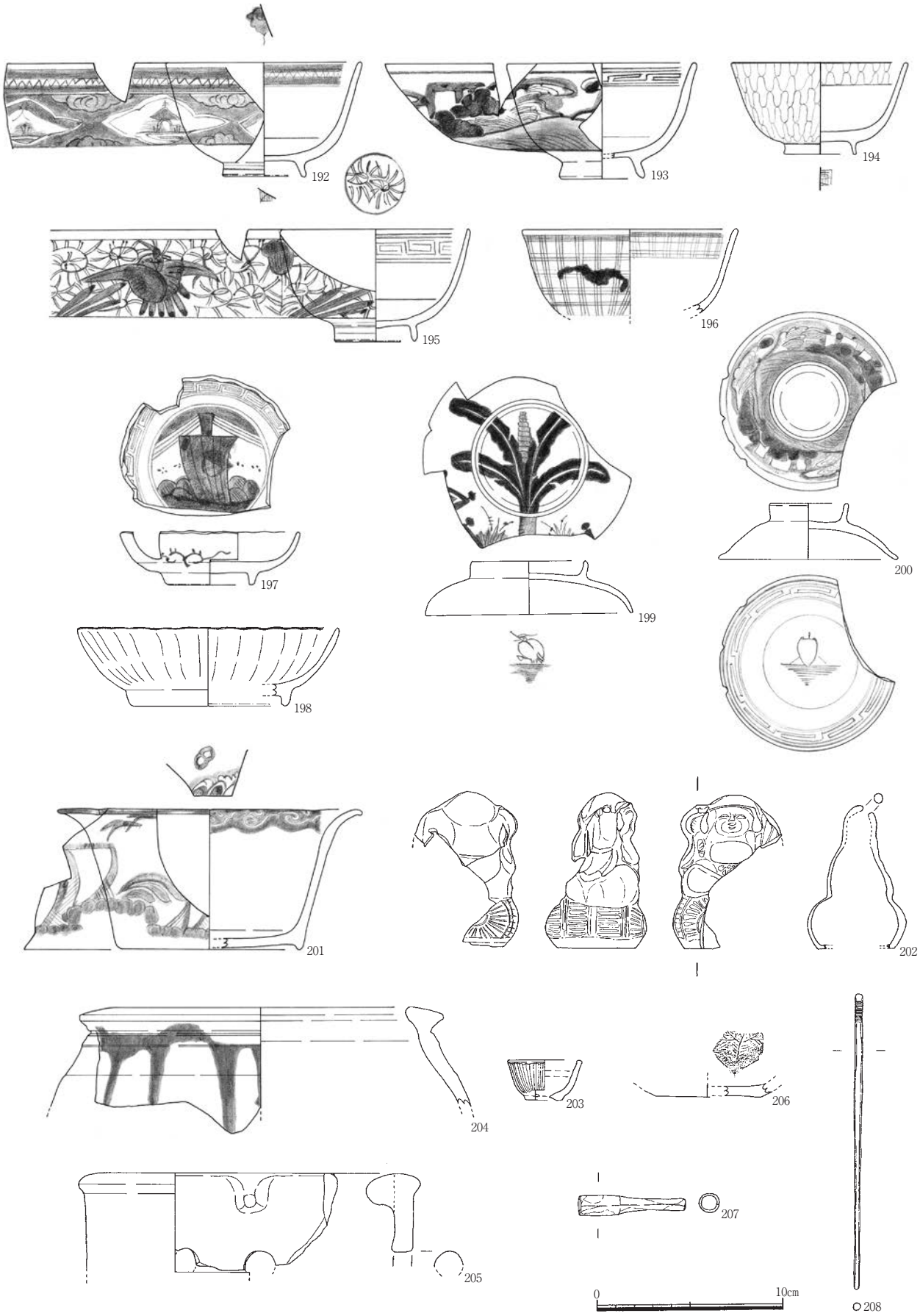


Fig.27　SK25出土遺物実測図

を描き、高台内に角枠内銘をもつ。198・202・203は白磁。198は菊花形の五寸皿で、口錆。202は水滴で、大黒天を表わしている。203は菊花形紅皿で、底部中央に焼成後穿孔を穿つ。

204・205は陶器。204は丹波焼の甕で、外面に鉄釉、体部内面と口縁部内外面に灰釉を施し、外面上位に黒褐色の釉を流し掛けする。205は瀬戸・美濃産の焜炉で、灰釉を施し、上部に緑灰色の釉を流し掛けする。206は土師質土器。206は尾戸窯の白土器小皿で、内面に型による陽刻の松竹梅鶴亀文を施す。外面下位と外底に回転ケズリとナデを施す。207・208は銅製品。207は煙管の吸口。208は用途不明の棒状製品で、球形の頭部をもち、上位に多条の沈線を巡らせる。

SK25は19世紀中葉に比定される。

SK26（Fig.28）

調査区南部に位置する土坑で、SK30・P104を切り、P16・35に切られる。東部が調査区外に出ており全体の規模と形態は不明であるが、平面形は不整形とみられ、南北長2.28m、東西確認長1.38m、

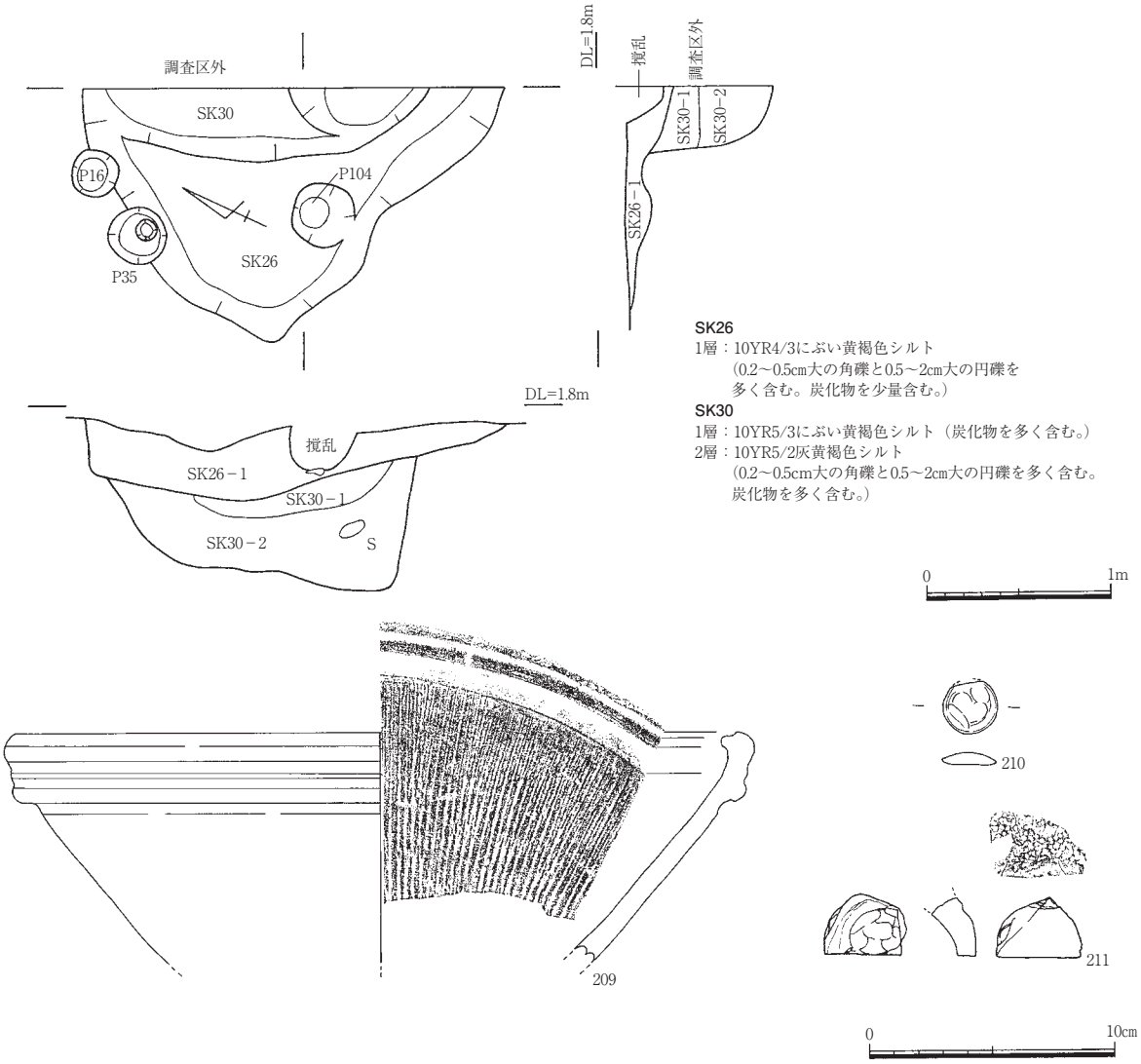


Fig.28　SK26・30平面図・セクション図・SK26出土遺物実測図

深さ40㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトで、埋土中に炭化物と炭化した木片を含む。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗3点・小杯1点、白磁小皿1点、陶器中碗1点・小皿1点・鉢1点・捏鉢1点・擂鉢1点、土師質土器小皿8点・不明1点、及び土人形1点、瓦片であり、肥前波佐見の染付丸碗、肥前内野山窯の銅緑釉小皿、肥前産白化粧土刷毛目の皿又は鉢などが含まれている。

図示したものは209～211である。209は備前焼の擂鉢。210・211は土師質土器。210は円盤状の土製品。211は器種不明の土師質土器で、外面に型押し成形による文様がみられる。

出土遺物、埋土の特徴、周辺遺構との関係性から、SK26は18世紀前葉に比定される。

SK27（Fig.29）

調査区北部に位置する浅い皿状の土坑で、SD1に切られる。西部が削平を受け規模と形態が不明であるが、平面形は不整形とみられ、南北長1.06m、東西残存長0.89m、深さ10㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は瓦片2点である。

SK28（Fig.29）

調査区北部に位置し、SX1の下面で検出した。切り合い関係ではSK34・SX1に切られている。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸0.90m、短軸0.50m、深さ18㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトで、埋土中に炭化物を多く含んでいる。

出土遺物は白磁小杯の口縁部1点、土師質土器小皿の底部1点、及び染付碗、灰釉丸碗、瓦質土器火鉢の体部である。

図示したものは212である。212は白磁小杯で、外面に丸彫りによる鎬を施し、肥前産1630～1650年代の製品である。

出土遺物及びSK34・SX1との関係性からみて、SK28は18世紀前葉に比定される。

SK29（Fig.29）

調査区北部に位置する土坑で、P106を切り、P57に切られる。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸0.85m、短軸0.80m、深さ24㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付小碗1点・小皿1点、陶器中碗2点、土師質土器小皿3点、尾戸窯の白土器小皿1点であり、他に青磁皿の体部、備前焼擂鉢の体部等が出土している。

図示したものは土師質土器小皿（213）である。

SK29は18世紀前半に比定される。

SK30（Fig.28・29）

調査区南部に位置する土坑で、SK26に切られる。東部の大半が調査区外に出るため全体の規模や形態は不明であるが、南北長1.66m、東西確認長0.42m、検出面からの深さは70㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトと灰黄褐色シルトで、埋土中に炭化物を多く含んでいる。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗1点・小碗1点、陶器中碗1点・小皿2点・鉢1点・擂鉢1点・小瓶1点・灯明受皿1点・器種不明1点、土師質土器小皿8点、及び鉄釘3点と瓦片である。

図示したものは214～219である。214は肥前産の染付小碗で、草花文を描く。215は灰釉の陶器

で、尾戸窯の製品とみられる。216は鉄釉の小瓶で茶入か。外面中位を押圧して窪ませ、灰赤色の釉を施す。217は備前の擂鉢。218・219は土師質土器小皿である。

SK30は18世紀前葉に比定される。

SK31（Fig.30）

調査区北部に位置する土坑で、P74を切り、P58に切られる。平面形は不整形を呈し、検出規模は長軸0.87m、短軸0.73m、深さ11㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は完形の白磁小杯1点、唐津系灰釉陶器皿の体部1点、肥前産灰釉丸碗の体部1点である。図示したものは肥前産の白磁小杯（220）である。

SK31は17世紀後半～18世紀前葉に比定される。

SK32（Fig.30）

調査区北部に位置する浅い皿状の土坑で、SD1に切られる。西部の殆どが削平されるため全体の

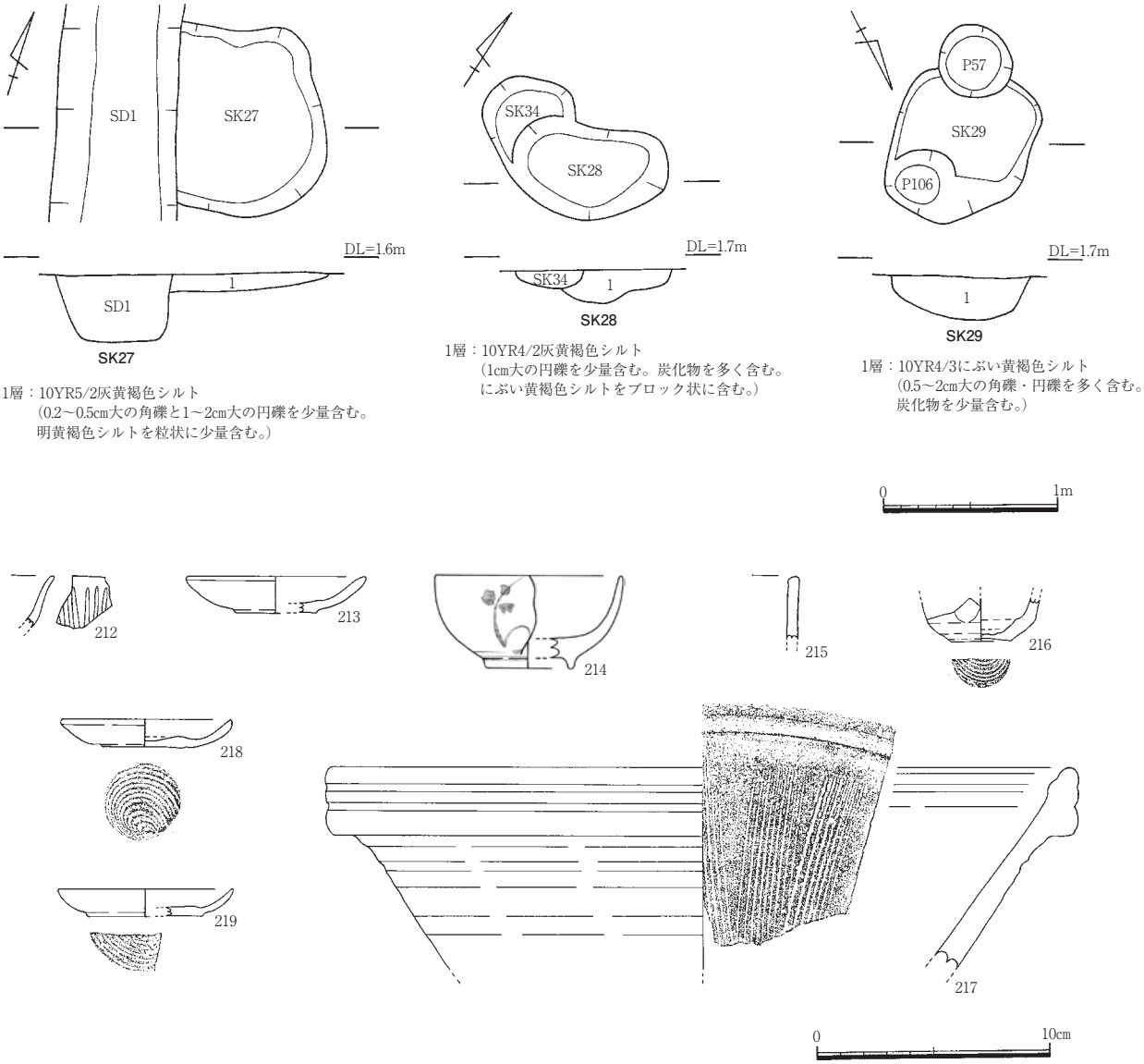


Fig.29　SK27～29平面図・セクション図・SK28・29・30出土遺物実測図
（SK28：212、SK29：213、SK30：214～219）

規模と形態は不明であるが、南北長0.73m、東西残存長0.33m、深さ10㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は焼締めの陶器体部１点と瓦片２点である。

SK33（Fig.30）

調査区北部に位置し、SX1の下面で検出した浅い皿状の土坑である。切り合い関係では、P79を切り、SX1に切られる。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸0.70m、短軸0.52m、深さ8㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトで、炭化物を含んでいる。

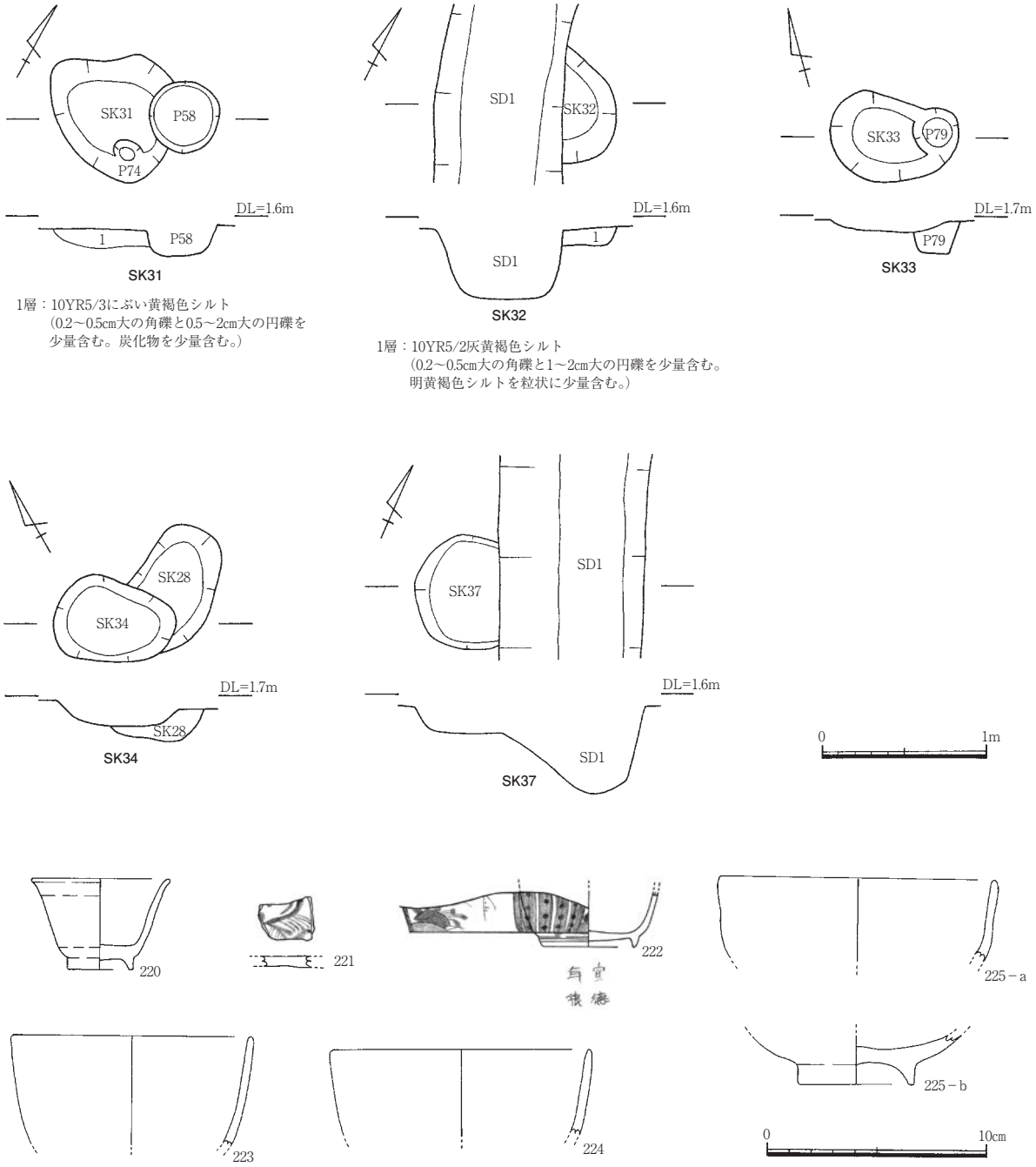


Fig.30　SK31～34・37平面図・セクション図・エレベーション図・SK31・33・34・37出土遺物実測図
（SK31：220、SK33：221・222、SK34：223・224、SK37：225）

出土遺物は青花皿の体部１点、染付猪口の底部１点、染付体部、肥前内野山窯の銅緑釉小皿の体部、土師質土器小皿細片である。

図示したものは221・222である。221は青花皿で、内面に玉取獅子を描き、中国景徳鎮窯系15世紀後半～16世紀前半。222は染付猪口で、高台内に「宣徳年製」銘を描き、肥前17世紀後半の製品である。

出土遺物及びSX1との関係性からみて、SK33は18世紀前葉に比定される。

SK34（Fig.30）

調査区北部に位置し、SX1の下面で検出した浅い皿状の土坑である。切り合い関係ではSK28を切り、SX1に切られる。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸0.72m、短軸0.53m、深さ16㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトで、炭化物を含んでいる。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付猪口１点、陶器中碗２点である。

図示したものは肥前産の灰釉中碗（223・224）である。

出土遺物及びSX1との関係性からみて、SK34は18世紀前葉に比定される。

SK37（Fig.30）

調査区南部に位置する土坑で、SD1に切られる。東部が削平されるため全体の規模と形態が不明であるが、平面形は円形又は楕円形とみられ、検出規模は南北長0.70m、東西残存長0.53m、深さ15㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は肥前産の灰釉丸形中碗（225－ab）である。

(3) 井戸

SE1（Fig.31～34）

調査区中央部に位置する井戸跡である。東部が調査区外にあり西半分のみの検出にとどまるが、掘方の検出面の径2.78m、井戸側床までの深さ1.84mを測る。掘方の下層付近には、板組による井戸側が残存している。井戸側板は上部が変質し、標高0.6m以上では残存しないが、検出できた板の腐食土層と側板の長さは86㎝、径は69㎝を測る。上部構造は不明であるが、下部は側板を円形に組み合わせ、竹紐のタガで下位を締めている。

埋土は、井戸の掘方にあたる１層がにぶい黄褐色シルトで、標高0.7m以下は灰色に変色している。2～4層は井戸廃絶後の埋め戻し土にあたり、2層と3層がにぶい黄褐色シルト、4層が褐灰色シルトである。このうち、2層下位からに3層にかけては20～30㎝大の角礫が含まれている。また4層にはチャート・砂岩からなる5～10㎝大の礫や腐食した植物片が多く含まれている。5層は井戸側の下面に広がる褐灰色砂礫層である。5層が井戸掘方の埋土にあたるのかどうかは特定できていないが、粗砂と円礫に混じって、木片や木屑、瓦片が少量出土している。この5層の上面は井戸側下端に相当するが、標高－0.3mのレベルにあり、井戸側の内側では標高0m前後から水が湧き出す状態であった。

出土遺物は陶磁器、土師質土器、木製品、木片、瓦片である。このうち陶磁器・土器は口縁部及び底部点数にして、染付中碗２点・小碗３点・小碗又は猪口１点・小杯３点・猪口２点・蓋物蓋１点・

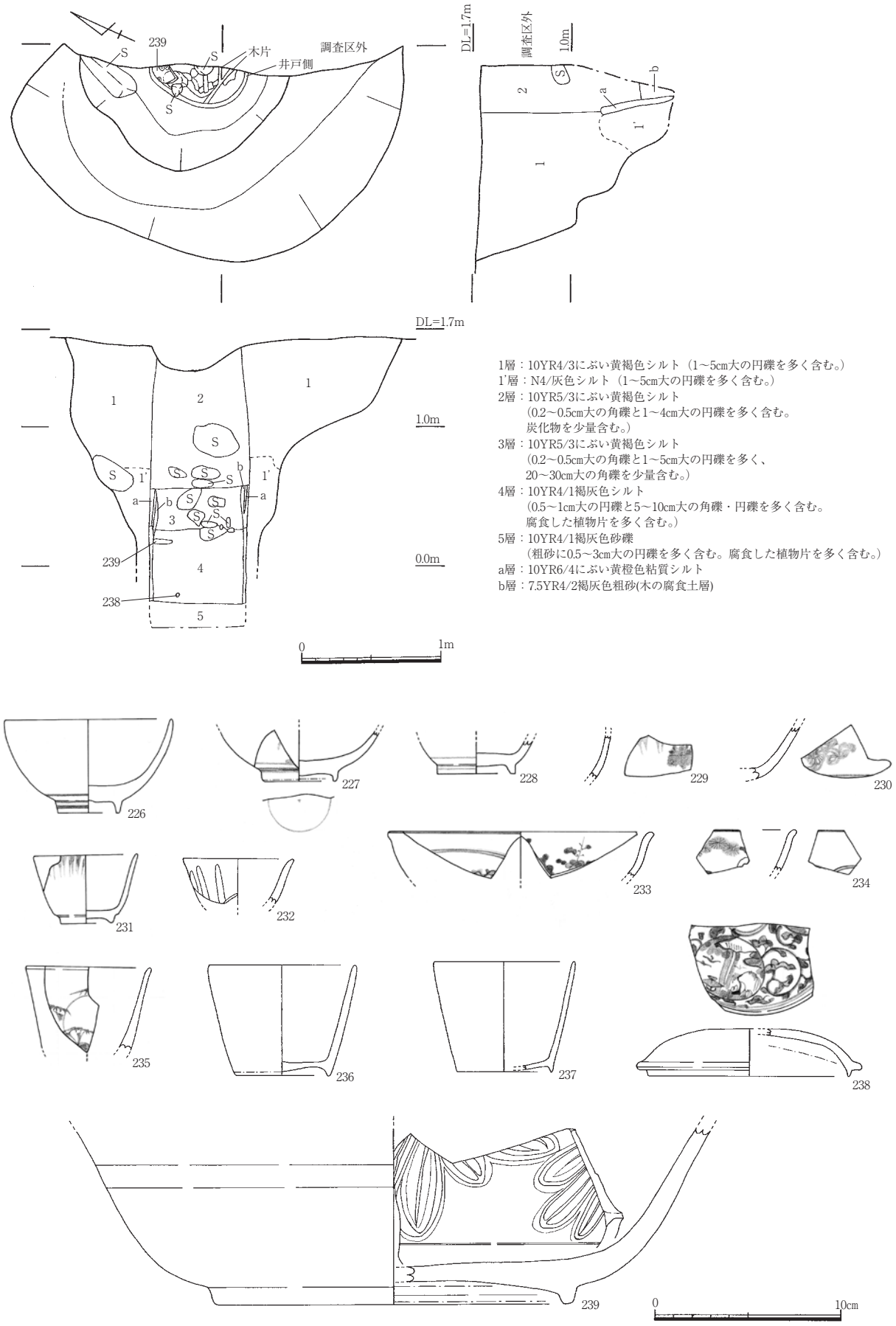


Fig.31　SE1平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図（1）

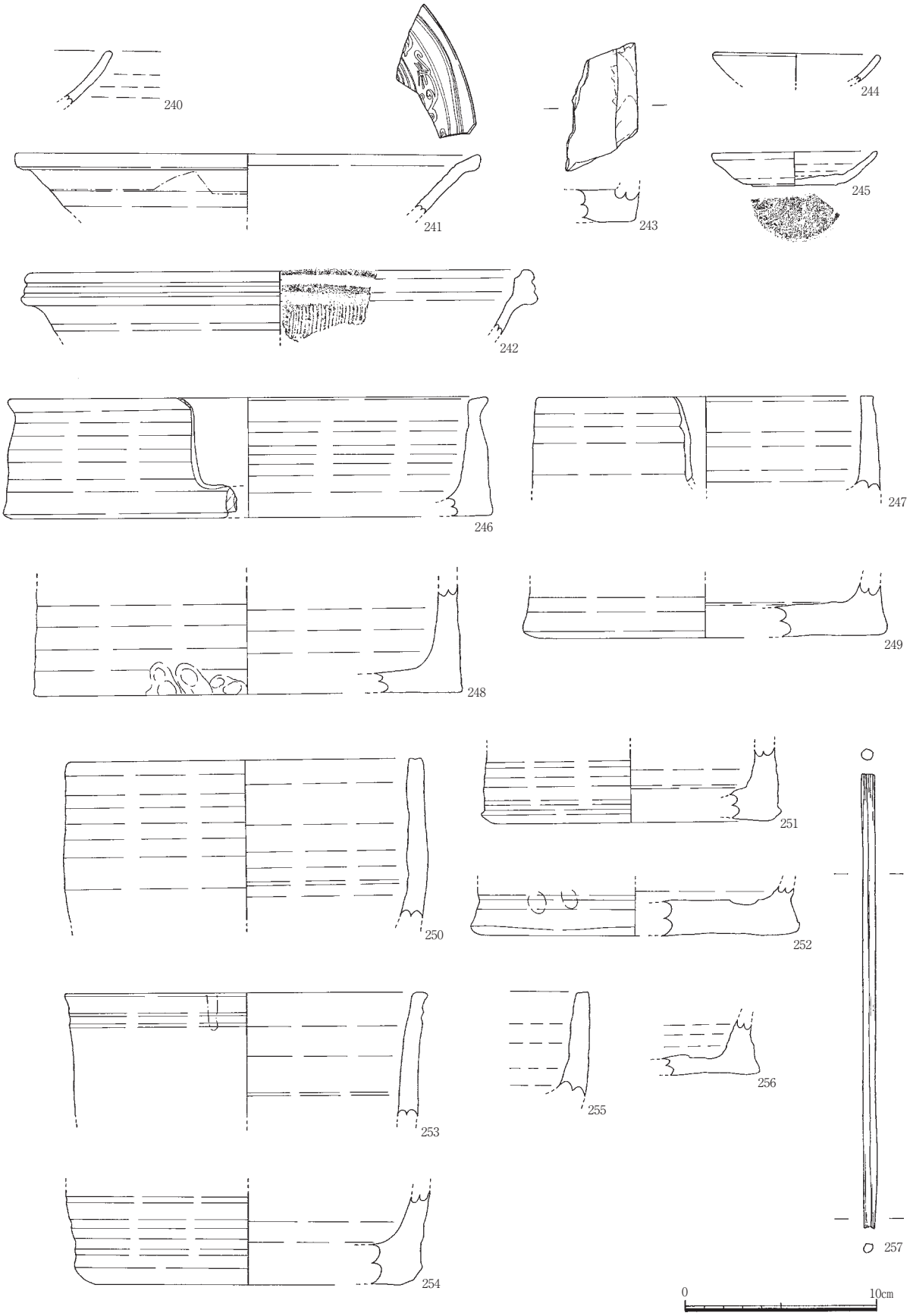


Fig.32　SE1 出土遺物実測図 (2)

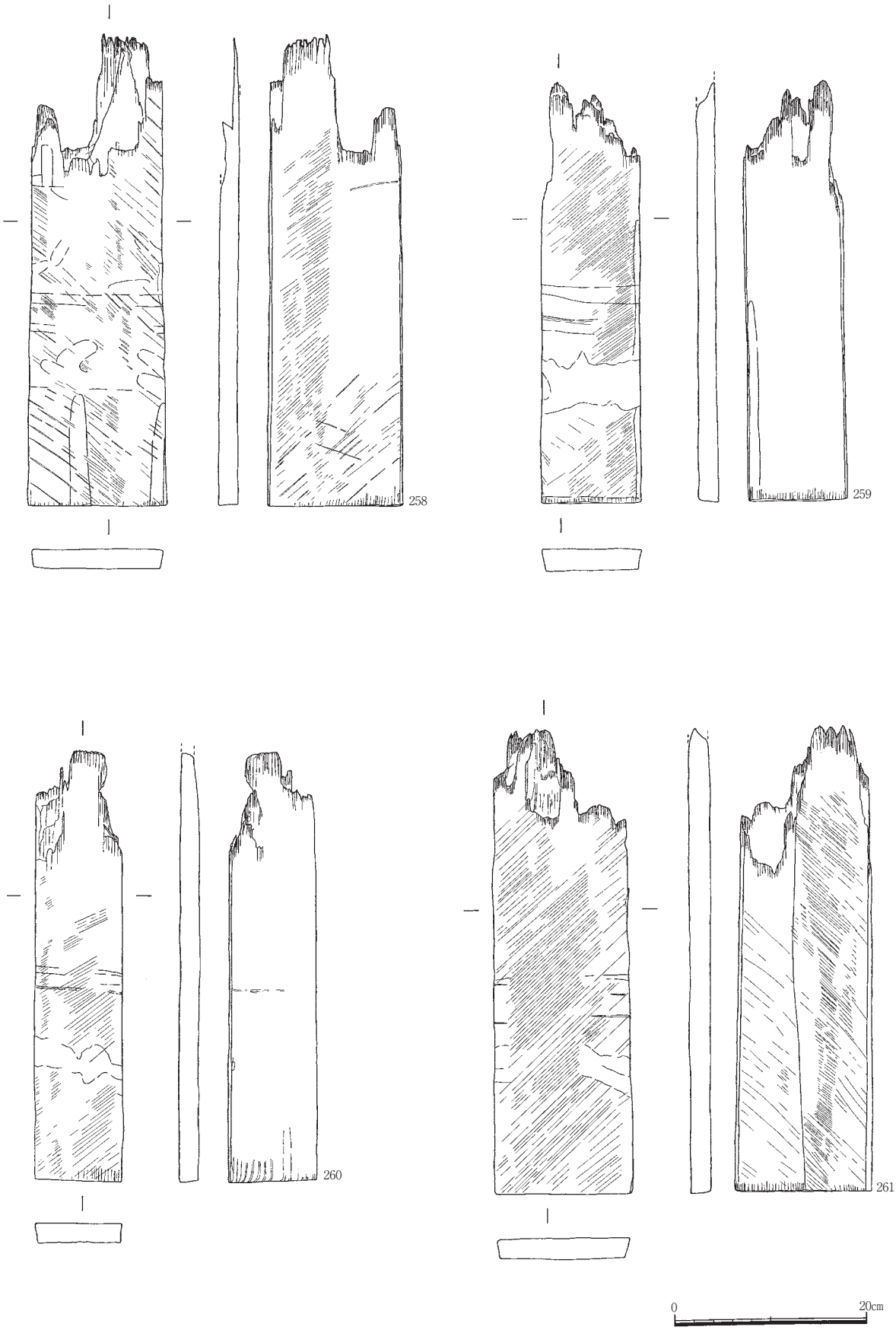


Fig.33　SE1 出土遺物実測図 (3)

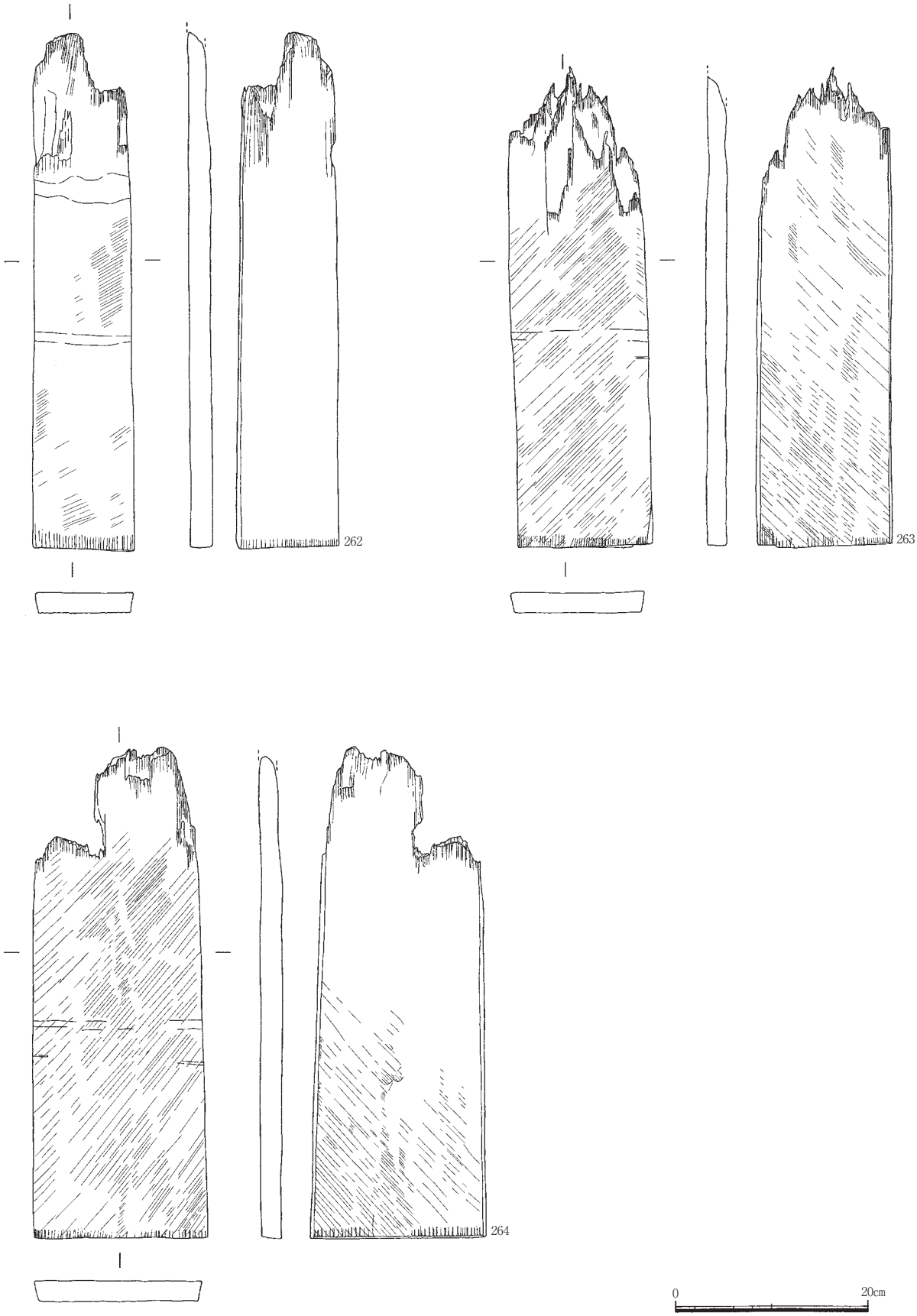


Fig.34　SE1出土遺物実測図（4）

小皿又は五寸皿2点、白磁小杯1点・猪口1点、青磁鉢1点・猪口1点、陶器中碗1点・中皿3点・小皿3点・擂鉢2点・灯明受皿1点・不明1点、土師質土器小皿3点、この他、匣鉢17点、瓦片8点が出土している。また陶磁器・土器の体部、木片等がみられ、17世紀後半を主体に18世紀前半までの遺物が含まれている。

層位別にみると多くが1層からの出土であり、井戸側の埋土下層にあたる3層から白磁小杯(232)、白磁猪口(237)、土師質土器小皿(244)が、井戸側の最下層にあたる4層から染付蓋物蓋(238)、青磁鉢(239)、箸(257)、匣鉢1点、肥前産灰釉丸碗の体部細片1点、土師質土器細片1点が出土している。また、井戸側下側の堆積層にあたる5層から匣鉢(254)と瓦片1点が出土している。

図示したものは226～264である。226～239は磁器で、何れも肥前産。226～231・233～235・238は染付。226・228は小碗、227・229・230は碗で、229は雨降り文とコンニャク印判による桐文、230はコンニャク印判による花唐草文を描く。231は小杯で、雨降り文を描く。233は五寸皿、234は皿で、ともに内面に松文、外面に2本線描きによる唐草文を描く。235は小碗又は猪口で竹文を描く。238は蓋物の蓋で、唐草文と丸に東屋山水文を描く。232・237は白磁。232は小杯で、外面に丸彫りによる鎬を施す。237は猪口である。236・239は青磁。236は猪口で、外面に青磁釉、内面に透明釉を施す。239は鉢で、内面に片切彫りによる花文を施す。高台内は蛇ノ目釉剥ぎし、釉剥ぎ部分に錆釉を施している。

240～243は陶器。240は尾戸窯の製品で、皿か。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施す。241は肥前産の三島手の皿で、内面に印花による白象嵌を施す。242は備前の擂鉢である。243は尾戸窯の製品で、器種不明。内面施釉で灰白色を帯びる半透明の釉を施す。

244・245は土師質土器小皿。246～256は窯道具の匣鉢で、近隣に所在する尾戸窯からもたらされた可能性をもつ。257は木製品で、箸。258～264は井戸側板である。

掘り方埋土中の出土遺物の内容からみて、SE1の掘削時期は17世紀末以降に比定される。また、埋め戻し埋土中の出土遺物やSX1との関係等から、18世紀前葉には廃絶に至ったと推定される。

(4) ピット・埋甕

P6 (Fig.35)

調査区南部に位置し、SK6に切られている。検出規模は径52×30㎝、深さ34㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトで、床面から20㎝前後の石灰岩の角礫が2個出土している。

P21 (Fig.35・36)

調査区中央部に位置する。検出規模は径25㎝、深さ37㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。出土遺物は口縁部及び底部点数にして、青花皿1点、染付碗又は皿1点、小皿1点・灯明受皿1点で、この他肥前産の灰釉丸碗の体部が出土している。

図示したものは265～267である。265は肥前産の染付碗又は皿。266は唐津系灰釉陶器の小皿で、肥前産1610～1630年代。灰白色を帯びる半透明の釉を施し、内底に砂目痕が残る。267は備前の灯明受皿である。

P21は17世紀後半～18世紀前半に比定される。

P38（Fig.35・36）

調査区南部に位置するピットで、道状遺構1の下で検出した。他遺構との切り合い関係では、SK3に切られている。検出規模は径40×35㎝、深さ20㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は肥前産の染付丸形中碗の口縁部1点と、陶胎染付中碗の底部（268）である。

P38は17世紀末～18世紀前半に比定される。

P45（Fig.35・36）

調査区中央部に位置する。検出規模は径33㎝、深さ6㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。出土遺物は土師質土器小皿の底部1点、匣鉢の底部（269）1点、瓦片1点である。

P47（Fig.35・36）

調査区中央部に位置し、SK19・20を切っている。検出規模は径43㎝、深さ25㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付大皿1点、陶器小碗1点・皿又は鉢1点、土師質土器小皿2点で、その他京都系の灰釉碗の体部、壺又は甕の体部が出土している。

図示したものは肥前産の染付大皿（271）、陶器小碗（272）である。272は鉄釉小碗で、暗赤褐色の釉を施す。

P47は18世紀に比定される。

P48（Fig.35・36）

調査区中央部に位置する。検出規模は径28㎝、深さ25㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。出土遺物は肥前産の青磁鉢口縁部（273）1点、唐津系灰釉陶器小皿の底部1点、瓦片である。

P48は17世紀後半に比定される。

P51（Fig.35・36）

調査区中央部に位置し、P50・72を切っている。検出規模は径29㎝、深さ20㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。出土遺物は肥前産の白磁紅皿（270）1点、及び土師質土器小皿の体部である。

P51は18世紀後半～19世紀に比定される。

P56（Fig.35・36）

調査区北部に位置し、P70に切られている。検出規模は径39㎝、深さ21㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は陶器小皿の口縁部1点、肥前内野山窯の銅緑釉小皿の底部1点、備前焼甕の体部1点、土師質土器小皿の底部1点である。

図示したものは274である。274は肥前産の陶器小皿で、内面に白化粧土打刷毛目を施す。

P56は17世紀後半～18世紀前半に比定される。

P57（Fig.35・36）

調査区北部に位置し、SK29・P73を切る。検出規模は径38㎝、深さ13㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗1点・小碗1点、白磁小杯1点、磁器色絵小碗1点、陶器碗2点・皿2点、土師質土器小皿1点であり、この他甕の体部等が出土している。

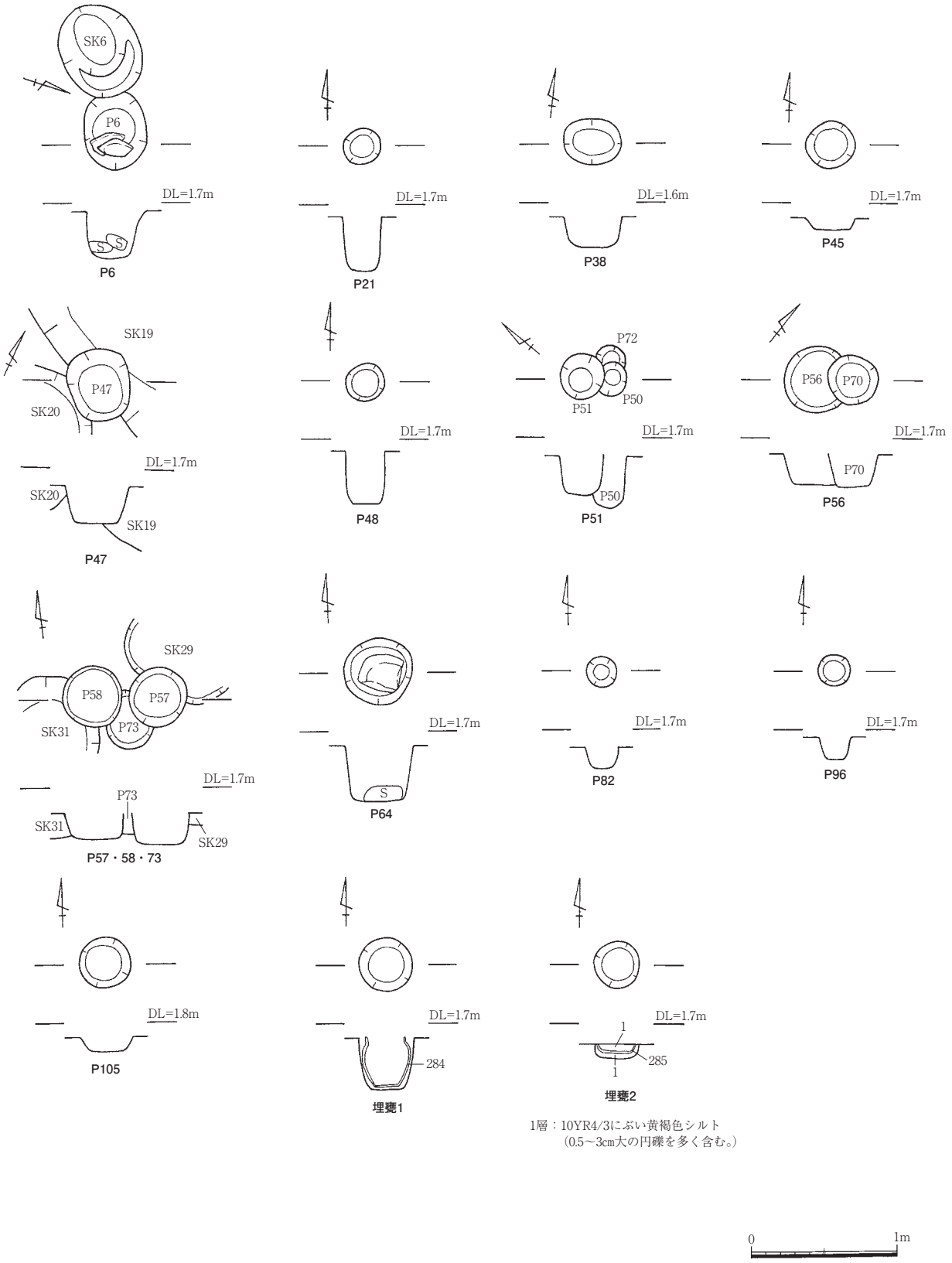


Fig.35　P6・21・38・45・47・48・51・56～58・64・73・82・96・105・埋甕1・2
平面図・セクション図・エレベーション図

図示したものは肥前産の染付端反形小碗（275）、肥前産の灰釉丸形中碗（276）である。

P57は18世紀前半に比定される。

P58（Fig.35・36）

調査区北部に位置し、SK31・P73を切る。検出規模は径39㎝、深さ13㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は土師質土器小皿の口縁部と底部2点、磁器細片、陶器細片、土師質土器人形、石臼である。

図示したものは282・283である。282は土師質土器の人形で観音。型作り前後貼り合わせによるもので、背面は接合部で剥離している。283は砂岩製の石臼である。

P64（Fig.35）

調査区北部に位置する。検出規模は径44㎝、深さ38㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトで、床面から径30㎝の扁平な砂岩礫が出土している。出土遺物は染付碗の口縁部2点・皿の体部1点、陶器灰釉小皿の口縁部1点・灰釉丸碗の体部1点・鉄釉碗の体部1点、土師質土器細片、鉄釘3点である。

P64は18世紀に比定される。

P73（Fig.35・36）

調査区北部に位置し、P57・58に切られている。検出規模は径39㎝、深さ16㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は陶器皿又は鉢（277）1点である。277は尾戸窯の皿又は鉢で、口縁部稜花形。口錆で、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。

P73は18世紀に比定される。

P82（Fig.35・36）

調査区北部に位置し、SK21に切られる。検出規模は径18㎝、深さ15㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。出土遺物は灰釉鉄絵碗の体部1点、土師質土器杯又は小皿の底部（278）1点、土師質土器細片である。

P96（Fig.35・36）

調査区南部に位置する。検出規模は径21㎝、深さ15㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。出土遺物は青磁碗である。

出土遺物は青磁碗の体部（281）1点と瓦片1点である。281は中国龍泉窯系の青磁碗で、15世紀～16世紀前半の製品である。外面に細線刻蓮弁文を描き、灰オリーブ色の半透明の釉を施している。

P105（Fig.35・36）

調査区北部に位置する。検出規模は径36㎝、深さ10㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。出土遺物は陶器中碗（280）1点と土瓶（279）の口縁部1点である。280は灰釉の丸形中碗で、尾戸窯の製品か。釉は焼成不良気味で白濁し、御本が入る。279は土瓶で、銅緑釉を施す。

埋甕1（Fig.35・37）

調査区中央部に位置する。検出規模は径38㎝、深さ36㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。埋土中には完形の甕が埋められている。

図示したものは鉄釉甕（284）である。284は能茶山窯の製品とみられるもので、外面上位に多条

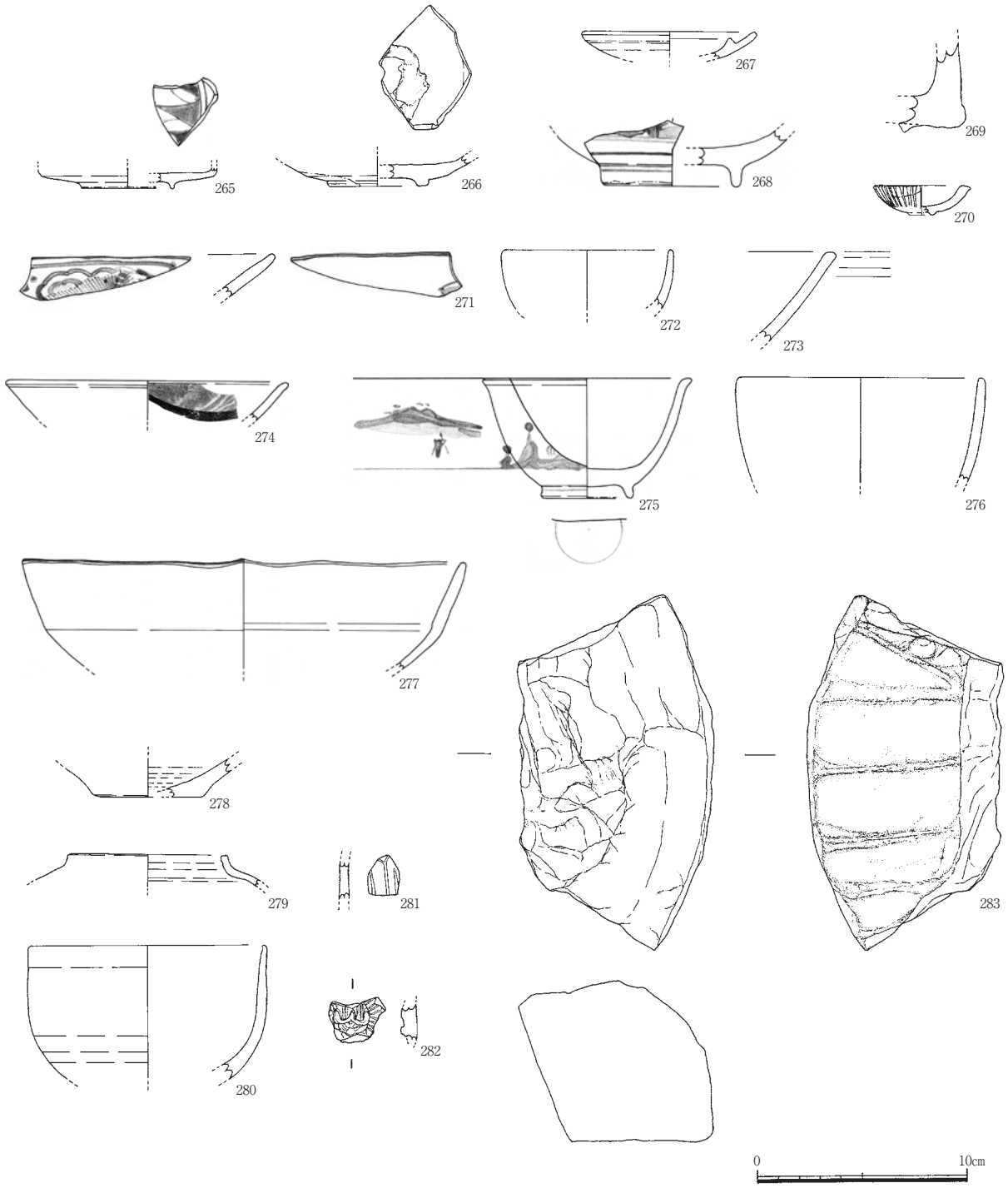
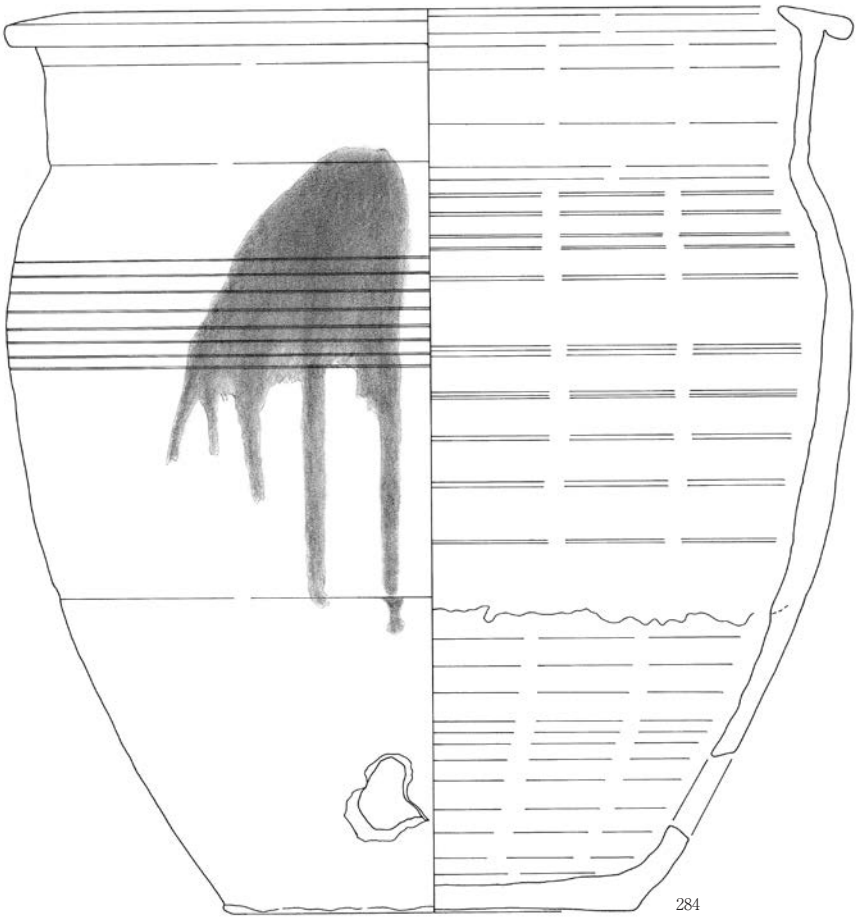
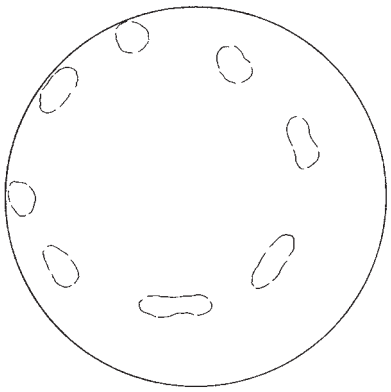


Fig.36　P21・38・45・47・48・51・56～58・73・82・96・105出土遺物実測図

（P21：265～267、P38：268、P45：269、P47：271・272、P48：273、P51：270、
P56：274、P57：275・276、P58：282・283、P73：277、P82：278、P96：281、P105：279・280）





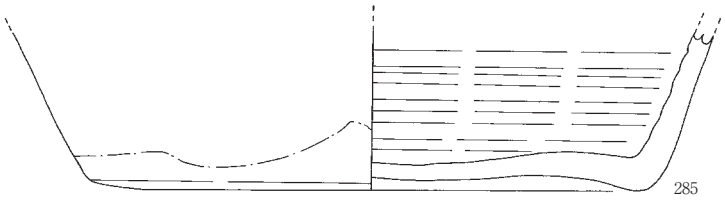


Fig.37　埋甕1・2出土遺物実測図　0　10cm

（埋甕1：284、埋甕2：285）

の沈線を巡らせる。外面に灰褐色の釉を施し、上位に黒色の釉を流し掛けする。内面は暗褐色の釉を刷毛塗りする。内底に円形の砂目痕が残る。底部の横に使用痕とみられる穿孔が穿たれている。

埋甕1は19世紀前半～中葉に比定される。

埋甕2（Fig.35・37）

調査区南部に位置する。検出規模は径31㎝、深さ10㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。上部が削平されているため、本来の形態は不明であるが、甕の底部が据えられた状態で出土しており、埋甕の遺構であった可能性がある。

図示したものは鉄釉甕（285）である。285は能茶山窯の製品とみられるもので、外面ににぶい赤褐色の釉、内面に褐灰色の釉を施す。内底に5足の目痕が残る。

埋甕2は19世紀前半～中葉に比定される。

(5) 杭列

杭群1（Fig.38）

調査区北部に分布する杭群で、南北7.6mの範囲に分布する57基の杭穴を検出している。これらは北部では2条の列が0.8～0.9m前後の幅をもって並列する傾向がみえ、途中東へ屈曲し、その後再び南方向に向かう様子がみられる。

杭穴の検出面は標高1.6m前後にあり、近世の包含層Ⅱ層面から掘削されている。また、一部のものはSK21に上面を切られ、SK21の床面にて検出されている。穴の規模は径4～11㎝で、削平されたものを除くと深さは33～60㎝を測る。埋土は褐灰色シルト又は褐灰色粘質シルトである。

SK21との切り合い関係からみて、杭群1は19世紀中葉以前に比定される。

杭群2（Fig.39）

調査区南部に分布する杭群で、南北1.9m、東西7mの範囲に広がる25基の杭穴を検出している。検出面は標高1.6m前後にあり、近世の包含層Ⅱ層面から掘削されている。杭穴の規模は径5～15㎝で、深さは5～31㎝である。埋土は褐灰色シルト又は褐灰色粘質シルトである。これらの杭穴は不規則に分布しており、列をなすものは確認できなかったが、東西方向への広がりが確認できる。他遺構との前後関係では、SK11・12とSD1に切られるものがあり、18世紀以前の杭穴であった可能性が考えられる。

なお、杭群2の上面では、江戸後期～近代の可能性をもつ道状遺構1が検出されている。両者は分布の軸方向が類似しており、柵や塀など屋敷地の境界部分に関連した施設の一部と推察される。

(6) 性格不明遺構

SX1（Fig.40）

調査区北部で検出した浅い掘り込み状の遺構である。試掘トレンチで確認した堆積状況では、近世の遺物包含層Ⅱ層の下面にあり、Ⅲ層を掘り込んで掘削されている。他遺構との切り合い関係では、SK23・28・33・34・SB1－P2・3・6・SB2－P2の上面を切り、SD1に切られる。また直接的な切り合いはないが、P79の上面で検出されており、これに後続する。南西部が検出されたのみで、分

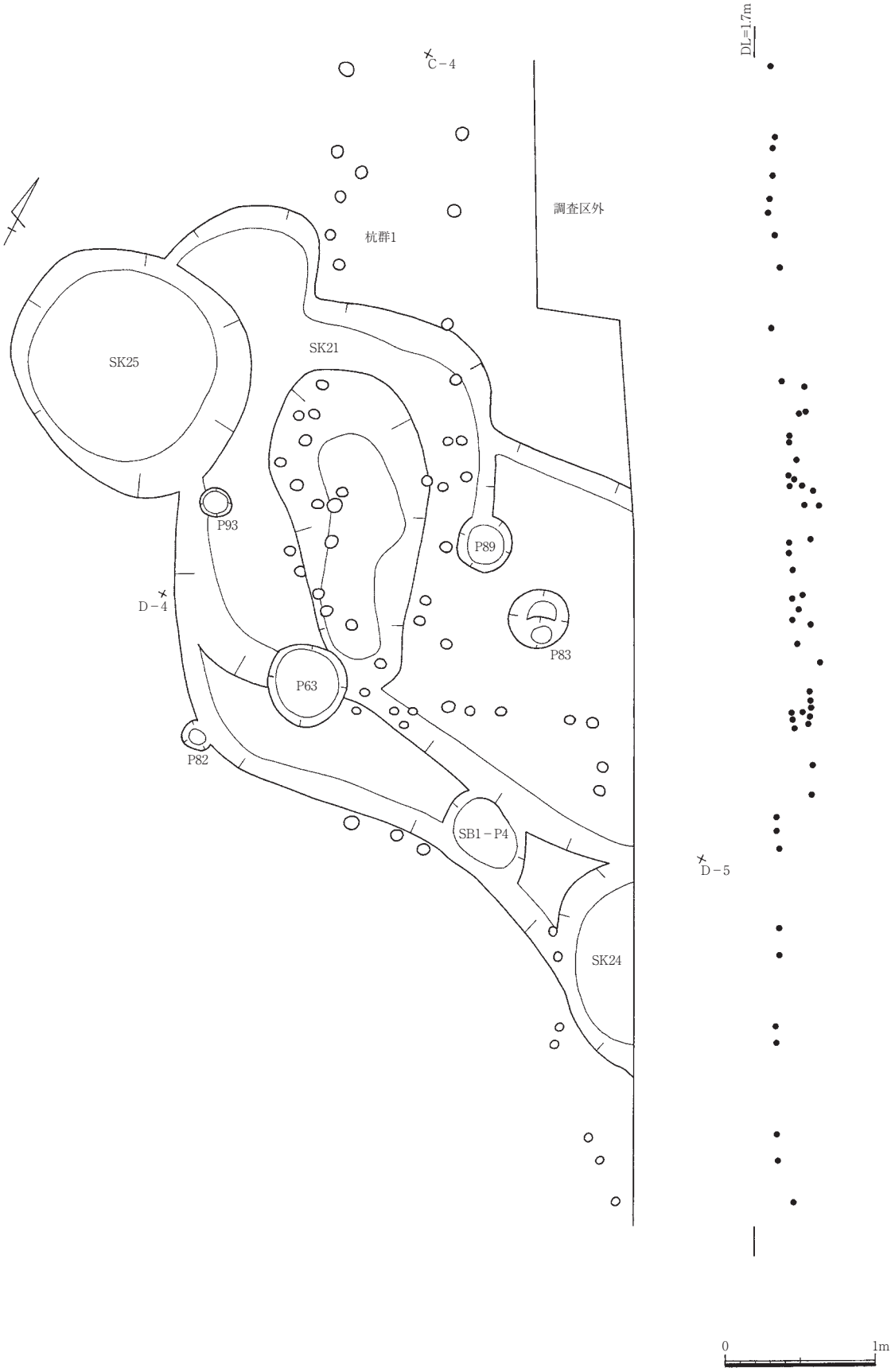


Fig.38　杭群１平面図・垂直分布図

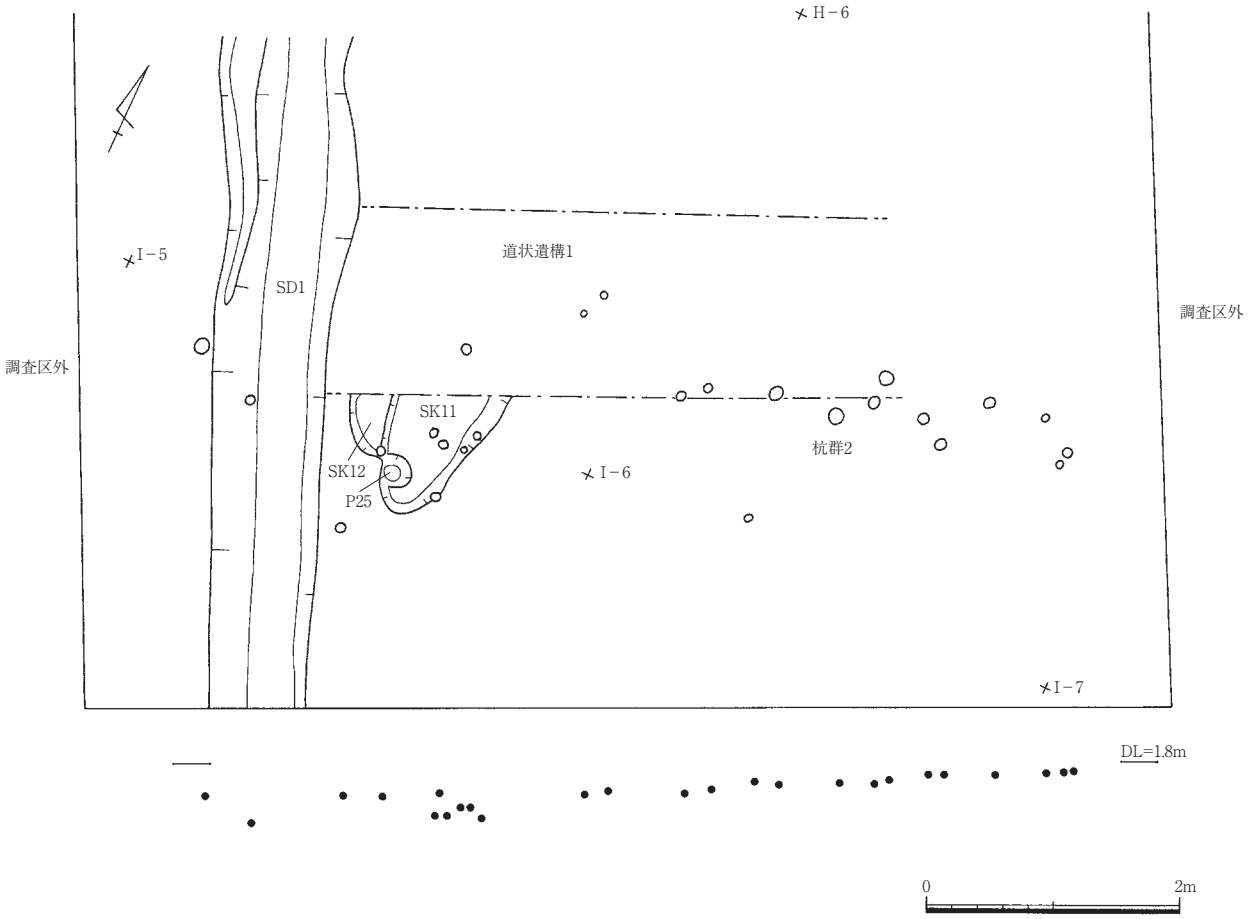


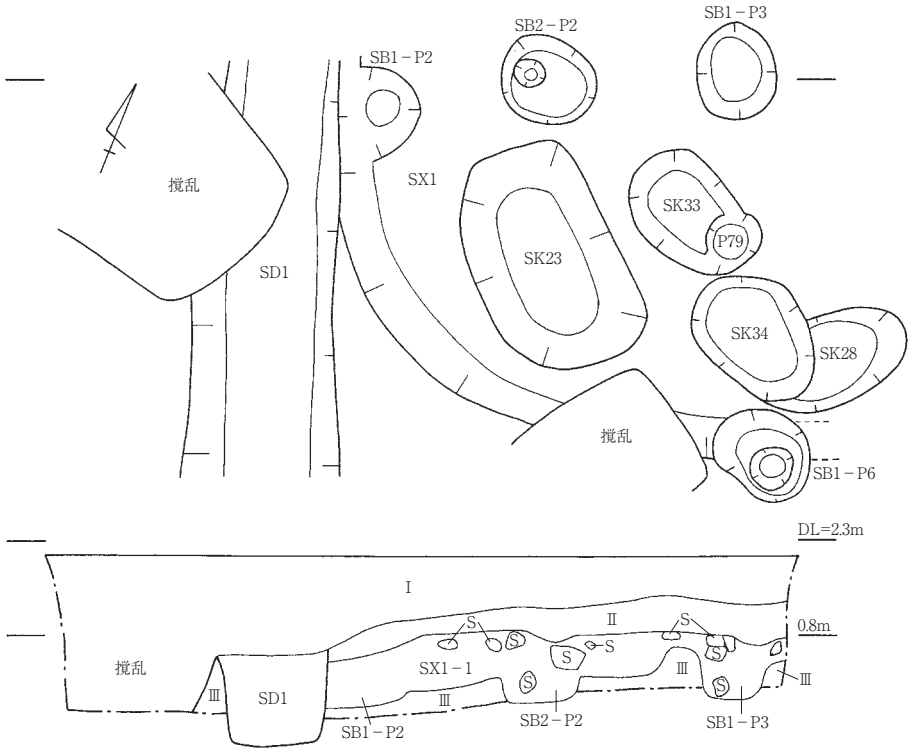
Fig.39　杭群2・道状遺構1平面図・垂直分布図

布範囲が不明瞭であったが、検出規模は東西残存長2.40m、南北残存長2.00mを測る。床面は高低差があり、深さ12～25㎝である。埋土は灰黄褐色シルトで、埋土中に5～10㎝前後の石灰岩の角礫が含まれている。同様の角礫はSB1－P3・SB2－P2埋土中にも含まれており埋土が共通している。また、直下で検出したSK23・28・33・34は埋土や遺物の出土状況が共通することから、これらの土坑群がSX1と同時期に掘削された可能性がある。さらに、SX1出土遺物の中には、SE1下層出土の青磁鉢（239）と接合される遺物片があり、両遺構への遺物廃棄が同時期に行われていたことが窺える。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、青花碗1点、染付小碗1点・中皿1点・皿1点・猪口1点、白磁又は染付の鉢2点、白磁小碗1点・猪口1点、青磁碗1点、陶器中碗5点・碗1点・小皿1点・中皿1点・擂鉢1点・灯明受皿1点、土師質土器小皿3点・杯又は小皿1点であり、その他陶磁器・土器の体部、窯道具のトチン、瓦片が出土している。

図示したものは286～301である。286～290は磁器で、何れも肥前産。286・289・290は染付。286は小碗で、宝文を描く。290は折縁形の中皿で、櫛歯文と不明文様を描く。289は猪口である。287は青磁の中碗。288は白磁の端反形小碗である。

291～299は陶器。291・295は尾戸窯の灰釉中碗である。292は灰釉中碗で、尾戸窯産の可能性をもつ。293は尾戸窯又は京都の灰釉中碗で、透明の釉を薄く施し、外面下位は無釉である。296は京



1層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.5～1cm大の礫を少量含む。5～10cm大の石灰岩の角礫を少量含む。）

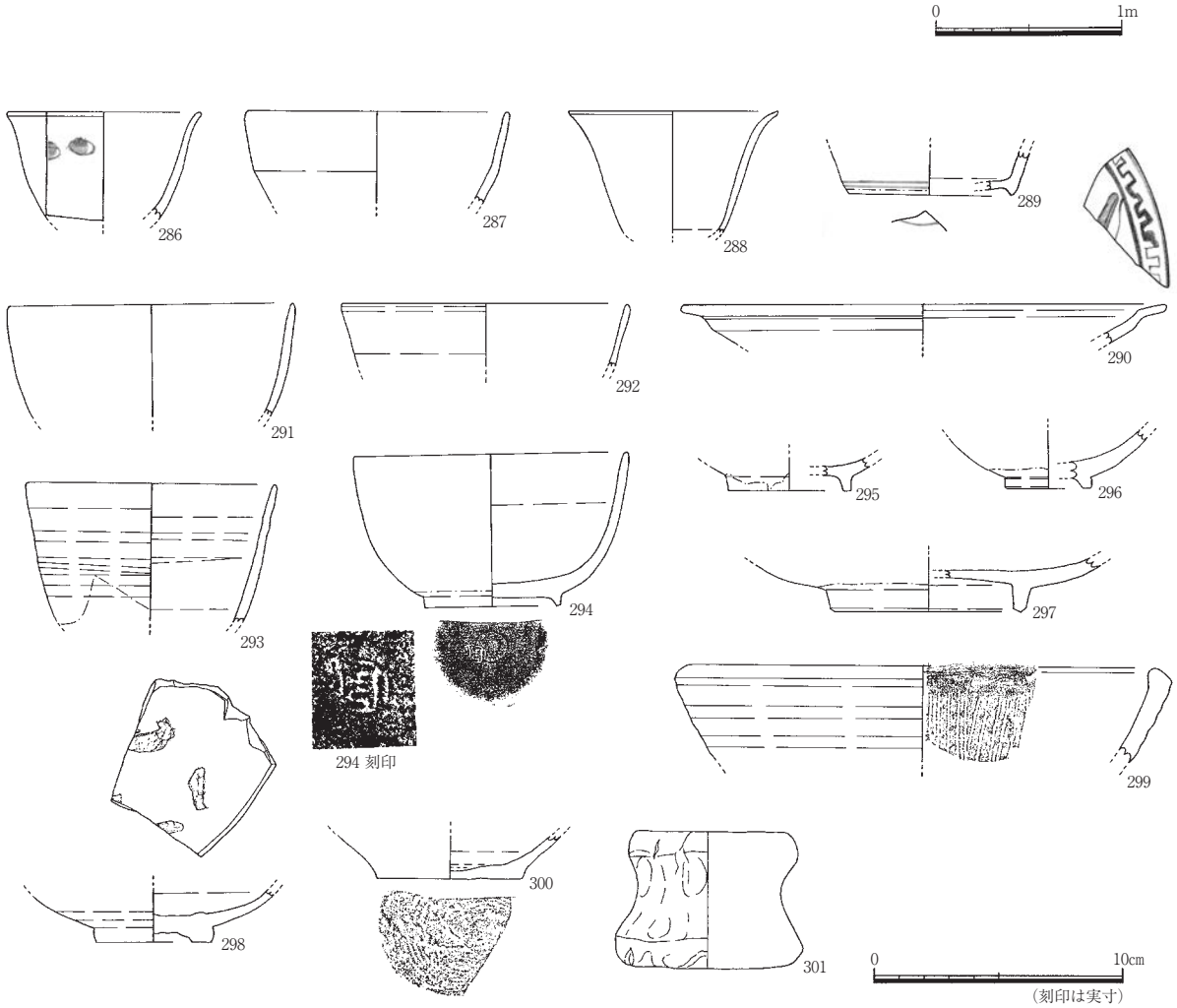


Fig.40　SX1平面図・セクション図・出土遺物実測図

都又は京都系の灰釉碗である。294は肥前産の京焼風陶器碗で、高台内に銘印をもち、17世紀後半。高台無釉で、灰黄色を帯びる透明の釉を施す。297は京焼風陶器とみられる肥前産の灰釉中皿である。文様の有無は不明であるが、高台無釉で灰黄色を帯びる透明の釉を施す。298は唐津系灰釉陶器の小皿で、内底に砂目痕が残る。299は擂鉢。300は土師質土器の杯又は小皿。301は窯道具で、トチンである。301は近隣に所在する尾戸窯からもたらされた可能性をもつ。

SX1は18世紀前葉に比定される。

SX2（Fig.13）

調査区南部で検出した浅い皿状の遺構で、SK7・SD1に切られる。検出規模は東西確認長2.20m、南北長2.00m、深さ17㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は染付丸碗の口縁部1点、備前焼擂鉢の口縁部1点、鉄釉鍋の口縁部1点と底部1点、徳利の口縁部1点、土師質土器杯の底部1点、染付広東形碗の体部である。

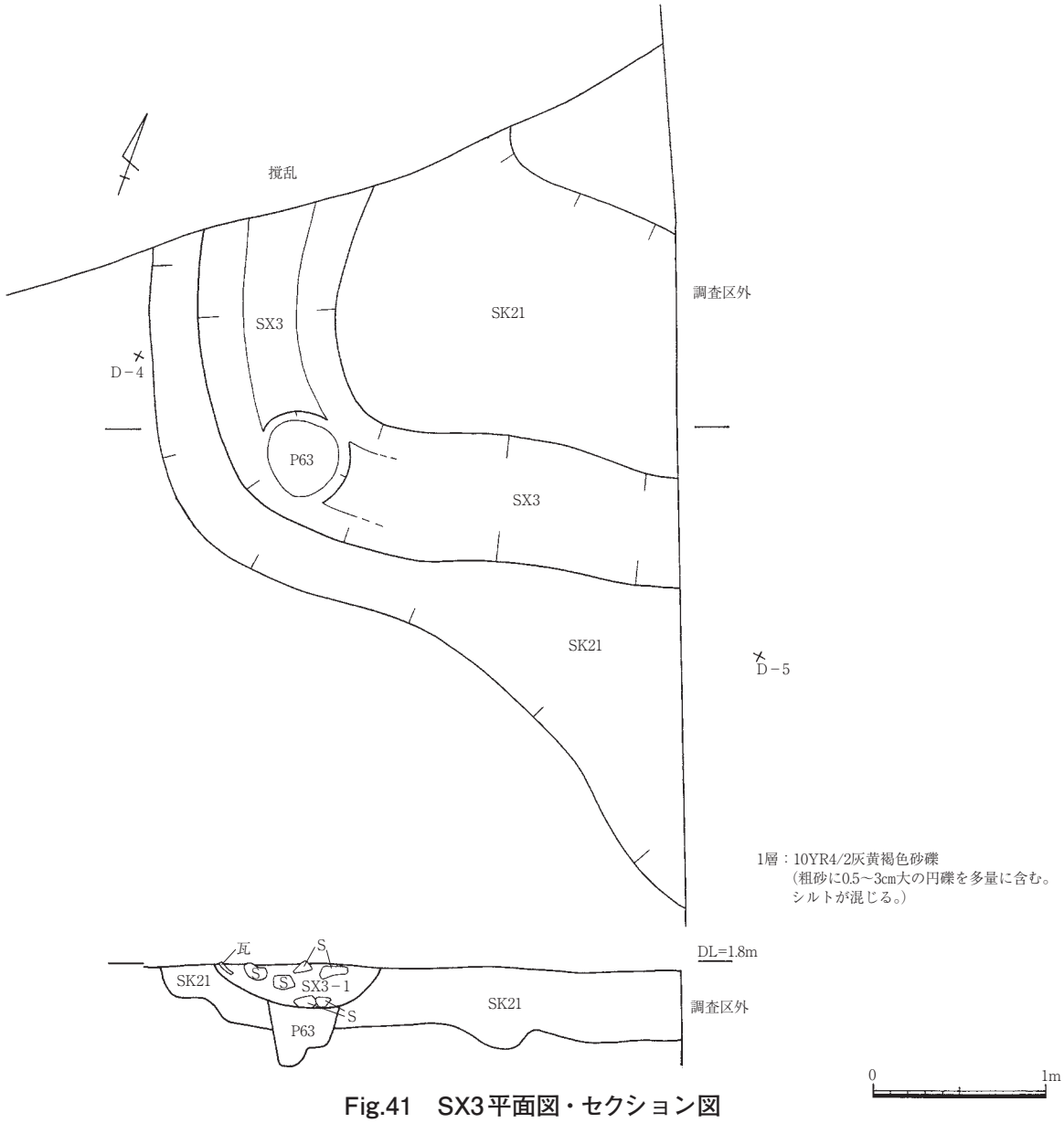


Fig.41　SX3平面図・セクション図

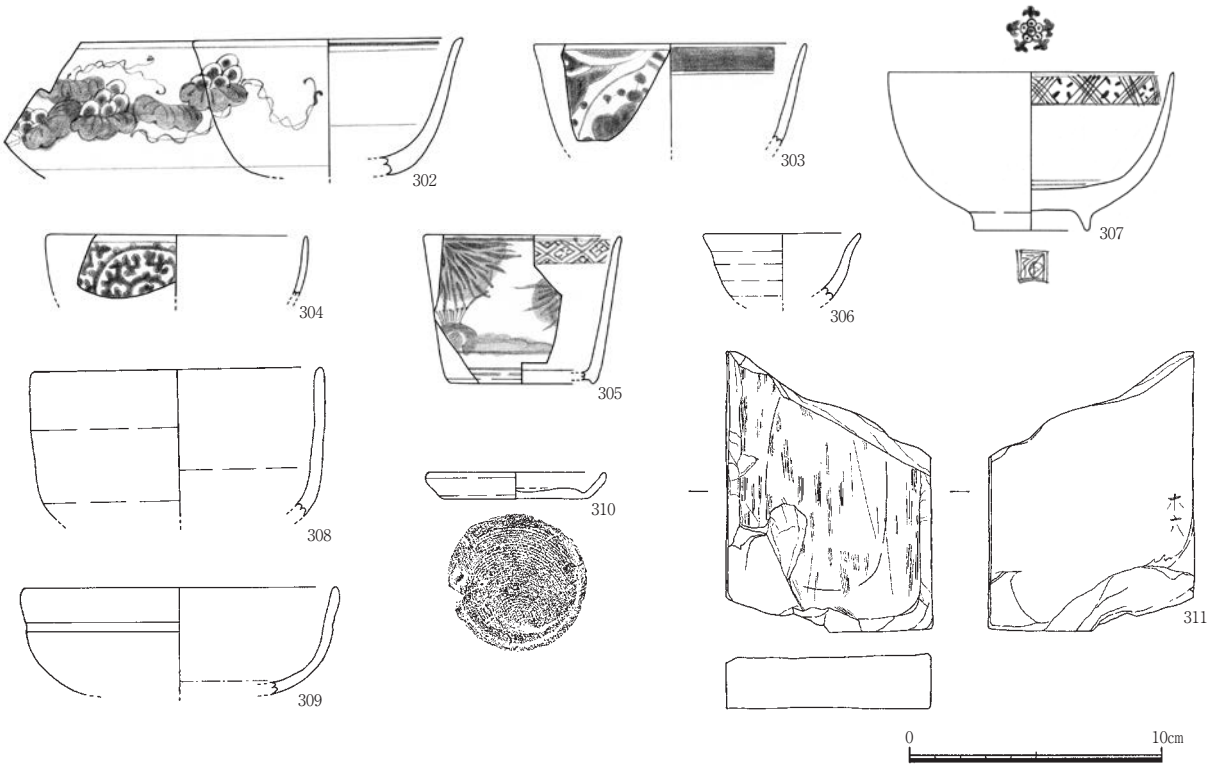


Fig.42　SX3出土遺物実測図

SX2は19世紀前半～中葉に比定される。

SX3（Fig.41・42）

調査区北部で検出した溝状の遺構で、SK21・P63を切る。また、直接的な切り合いはないが、P93の上面で検出されており、これに後続する。北部側が撹乱を受け残存しないが、南北から東西方向に屈曲して延びる様子が確認され、検出長4.10m、幅0.96m、深さ26cmを測る。埋土は灰黄褐色砂礫で、粗砂に円礫が多量に含まれる。また、埋土中には白色系のチャート、石灰岩からなる10～15cm大の角礫が多く含まれており、特に上面に集中している。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗5点・皿2点・猪口1点・碗蓋1点・蓋物蓋1点、青磁染付中碗1点、白磁又は染付の小碗1点・猪口1点、白磁小杯1点、磁器色絵小杯1点、陶器中碗4点・小杯1点・小皿1点・鍋1点・蓋物蓋1点、土師質土器小皿1点・焙烙1点であり、この他、陶磁器・土器体部、焜炉のさな、瓦質土器火鉢、硯、瓦片等が出土している。

図示したものは302～311である。302～307は磁器で、302が関西系、その他は肥前産である。302～305は染付。302は端反形中碗で、外面に植物を描く。303は端反形中碗で、花卉とみられる文様を描く。304は丸形中碗で、唐草文を描く。305は桶形の猪口である。307は青磁染付の丸形中碗で、口縁部内面に四方襷、見込みに手描きによる五弁花文、高台内に角枠内渦「福」を描く。306は白磁の端反形小杯で、高台無釉である。308・309は陶器。308は尾戸窯の灰釉中碗。309は能茶山窯の鉄釉小皿で、見込みを蛇ノ目釉剥ぎし、釉剥ぎ部分に白土を施している。310は土師質土器小皿で、口縁端部に灯芯油痕が残る。311は硯で、外底に釘彫りを認める。

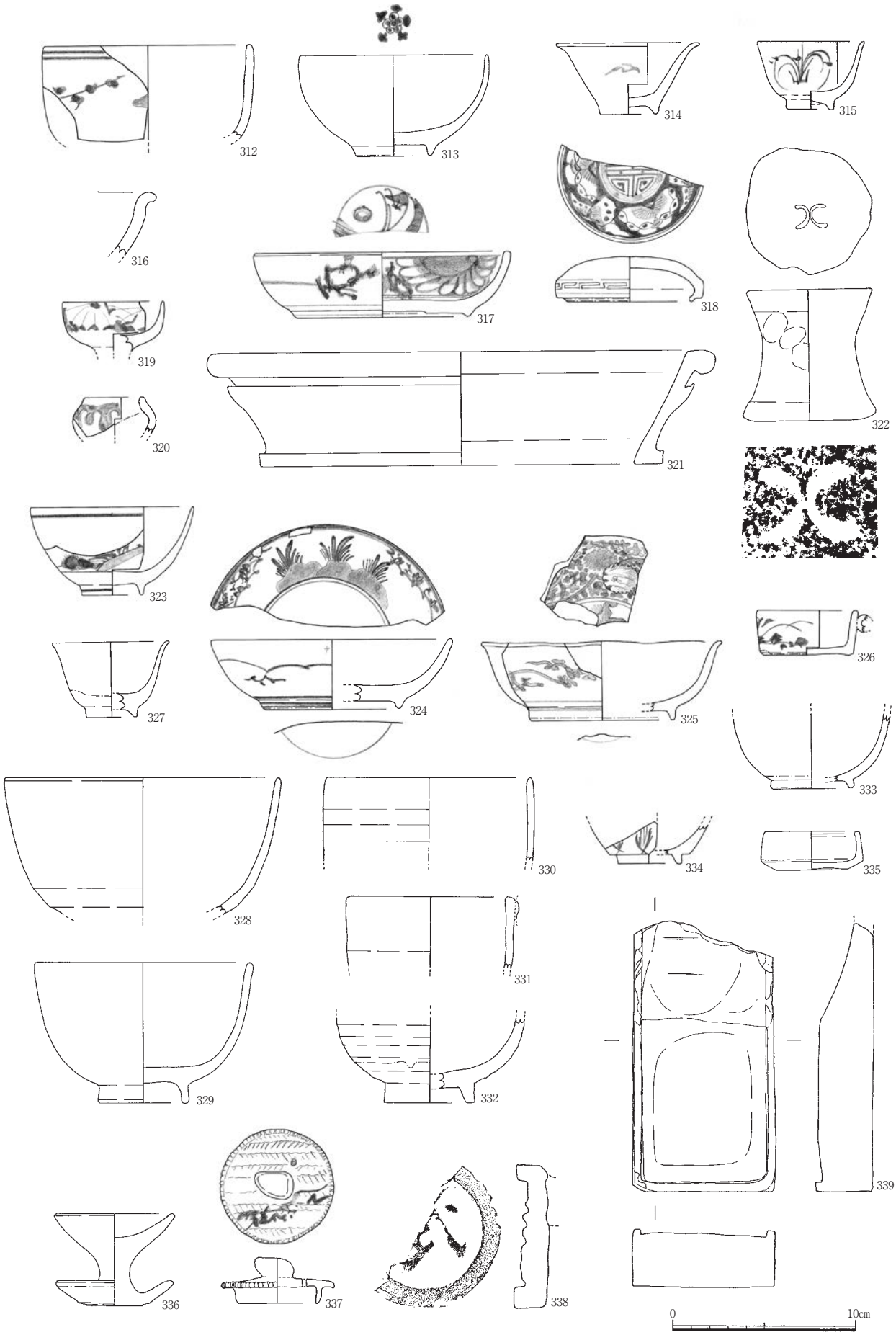


Fig.43　Ⅰ・Ⅱ層・撹乱層出土遺物実測図

（Ⅱ層：312～322、Ⅰ層：323～328・330～334・337・339、撹乱層：329・335・336・338）

SX3は19世紀中葉に比定される。

(7) 包含層出土遺物・その他の遺物

Ⅱ層出土遺物（Fig.43）

近世の遺物包含層であるⅡ層から、近世の遺物が出土している。

図示したものは312～322である。313～320は磁器、312は陶胎染付で、何れも肥前産。312は中碗で、外面は東屋山水文か。313は青磁染付の丸形中碗で、外面に明緑灰色の釉を施し、見込みに手描きによる五弁花文を描く。314・315・317～320は染付。314は端反形小杯。315は小杯で、外面に蘭を描く。317は蛇ノ目凹形高台の五寸皿で、内面に菊花と丸に不明文様、外面に如意頭連続唐草文を描く。318は蓋物の蓋で、外面に変形字と蝶を描く。319は仏飯器で、半菊文を描く。320は器種不明。316は青磁の鉢である。321は土師質土器の五徳か。322は窯道具のトチンで、上面に刻印を認める。322 は近隣に所在する尾戸窯からもたらされた可能性をもつ。

Ⅰ層・撹乱層出土遺物（Fig.43）

近現代の整地層であるⅠ層と撹乱層からも近世の遺物が出土している。

図示したものは323～339である。323～327は磁器で、何れも肥前産。323～326は染付。323は丸形小碗で、山水文を描く。324・325は五寸皿で、324は内面に花唐草文と土坡に草、外面に連続唐草文、325は内面に唐草文と雪輪、外面に連続唐草文を描く。326は餌猪口。327は白磁の小杯で、高台無釉である。

328～337は陶器。328は灰釉大碗で、尾戸窯の製品か。329は肥前産の灰釉丸形中碗で、高台施釉で浅黄色を帯びる透明の釉を施す。330～332は灰釉中碗。333は尾戸窯の灰釉小碗である。334は京都・信楽系の灰釉杉形小碗で、鉄絵の若松文を描く。335は灰釉の餌猪口。336は能茶山窯の灯明受皿で、黒褐色の釉を施す。337は灰釉の土瓶又は急須蓋で、外面に型による籠状の陽刻文様を施し、松笠形の摘みを貼付する。339は凝灰岩製の硯。338は棟飾瓦である。

2. 近代の遺構と遺物

近代の遺構は、SK10・14・36、SD1、その他ピット、道状遺構を検出した。

(1) 土坑

SK10（Fig.44）

調査区南部に位置する。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸0.55m、短軸0.49m、深さ14㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトで円礫を多く含み、埋土中から径20×30㎝大の砂岩角礫が出土している。出土遺物は近代の陶器瓶、陶器皿又は鉢、捏鉢、ガラス瓶、及び近世の染付猪口・瓶、陶器中碗である。

図示したものは341・342である。341は外面に白化粧土と透明釉、内面に鉄釉を施し、外面に酸化コバルトで「廿代筋　土佐酒造株式會社　名酒　若□」の文字を描く。342は鉄釉の徳利で、外面に白土イッチン描きで「高知　篠原□　□形北通」「銘□一等賞　富士　未三十七号」の文字を描く。341・342は形態と法量が同じで、褐灰色の胎土をもっており、能茶山窯で注文生産された通い徳利

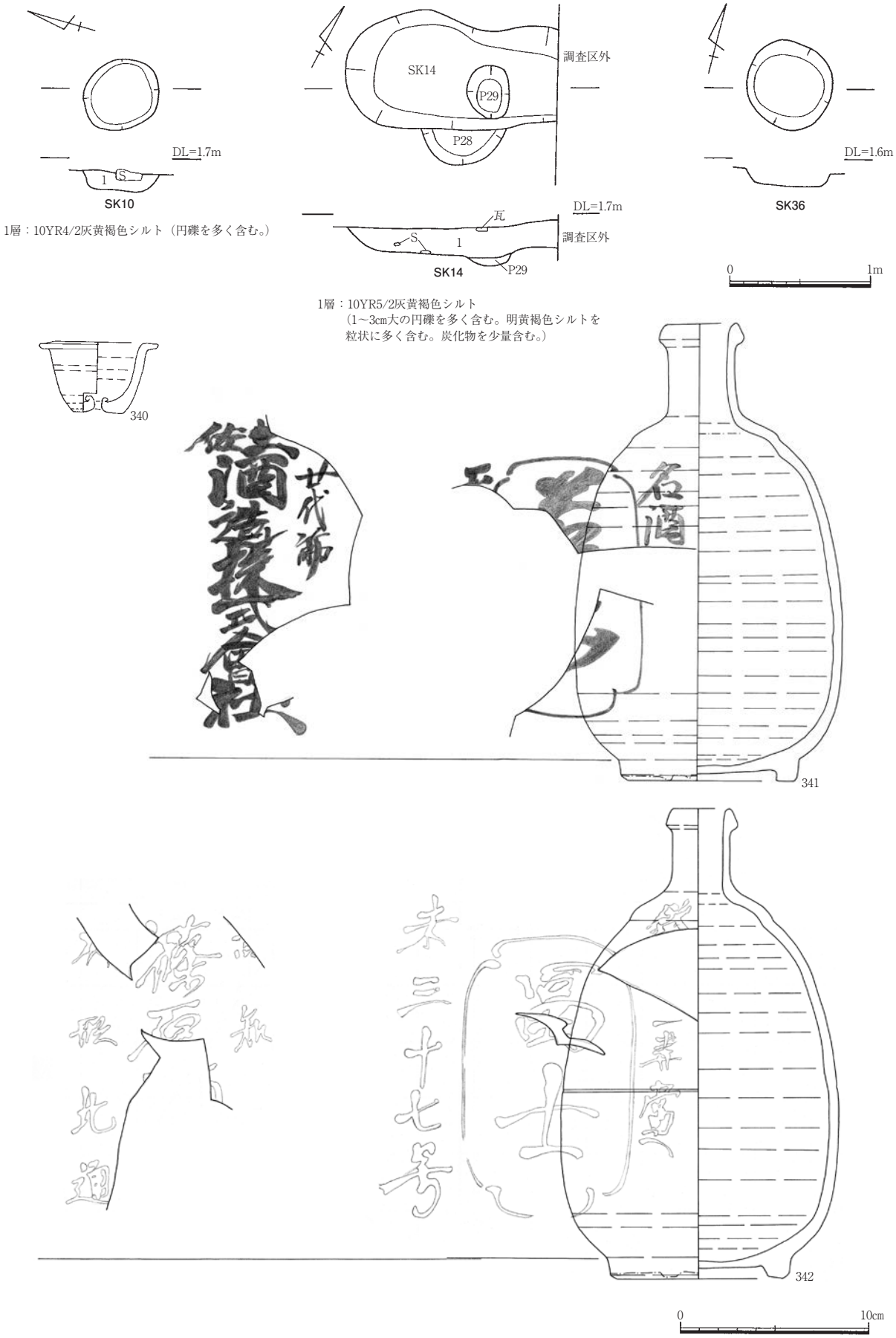


Fig.44　SK10・14・36平面図・セクション図・エレベーション図・SK10・14出土遺物実測図
（SK10：341・342、SK14：340）

とみられる。

SK14（Fig.44）

調査区南部に位置する土坑で、P28・29を切る。平面形は楕円形を呈し、検出規模は東西確認長1.50m、南北長0.86m、深さ23㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は酸化コバルトの型紙刷りの染付皿、能茶山窯の鉄釉小皿・植木鉢・擂鉢、軟質施釉陶器の焙烙、近世の白磁瓶、陶器の灯明受皿、瓦片である。

図示したものは陶器植木鉢（340）である。

SK36（Fig.44）

調査区南部に位置する。平面形は円形を呈し、検出規模は径0.62m、深さ11㎝を測る。埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は酸化コバルト型紙刷りの中碗1点、白磁小皿1点、鉄釉灯明受皿1点、急須の体部、瓦片である。

(2) 溝

SD1（Fig.45～48）

調査区南西部から北部にかけて延びる南北方向の溝でN－20°－Wの軸方向をもつ。他遺構との切り合い関係では、近世のSK7・27・32・37・SX2・SB1－P2・SB2－P6・P32・49・67・76・道状遺構1を切り、近代のP31に切られる。検出長は27.5m、規模は南部で幅0.98m、深さ46㎝、北部で幅0.84m、深さ44㎝を測り、断面形は逆台形を呈する。埋土は1層と2層が灰黄褐色シルト又はにぶい黄褐色シルト、3層が灰黄褐色砂質シルト又は灰黄褐色シルトである。埋土中には部分的に大型の石灰岩の角礫が含まれており、南部付近では床面から上層にかけて20～30㎝大の石灰岩の角礫がまとまって廃棄されている。

出土遺物は陶磁器、土器、石製品、骨格製品、ガラス製品、瓦片で、近世～近代の遺物が含まれている。

図示したものは近世の343～348・351・352・359～364・366～369、近世又は近代の349・350・353・354・355・356・357・358・365・370、近代の371～380である。

343～347は染付で、何れも肥前産。343は丸形小碗で、高台内に角枠内渦「福」を描く。344は盤形小皿で、山水文を描く。345は丸形五寸皿で、内面に桜、外面に連続唐草文を描く。346は変形形の極小皿で、内面にコンニャク印判による文様を施す。347は薄手酒杯である。

348～355は陶器。348は肥前産の京焼風陶器碗で、高台内に「清水」銘印をもつ。349は珉平焼の色絵小皿で、内面に型による陽刻文様を配し、鮮やかな緑色の釉を施す。350は珉平焼の底部片で、黄橙色の釉を施す。351は肥前産の唐津系灰釉陶器小皿で、口縁部溝縁状。灰黄色を帯びる半透明の釉を施す。352は肥前内野山窯の灰釉小皿で、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。内底と畳付に砂目痕が残る。353は尾戸窯の灰釉蓋で、手捏ねによる亀形の摘みを貼付する。灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施す。354は蓋で、白化粧の後透明の釉を施し、鉄絵の竹文を描く。355は樽形の灰釉陶器で、底部隅の1箇所に長方形の孔を穿ち、注口を貼付している。灰白色の白濁した釉を施し、尾戸窯産の可能性をもつ。

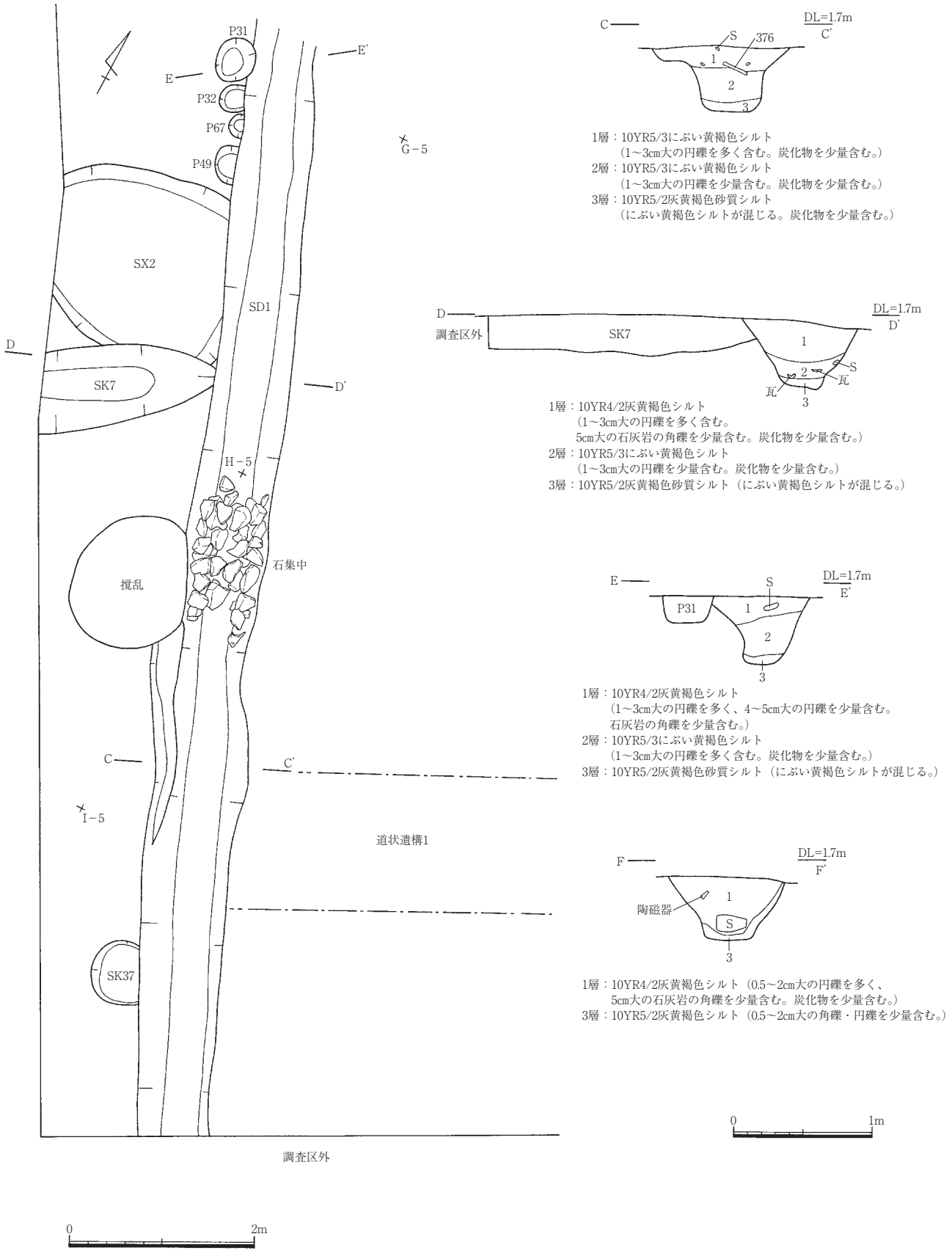


Fig.45　SD1平面図・セクション図・礫出土状況図

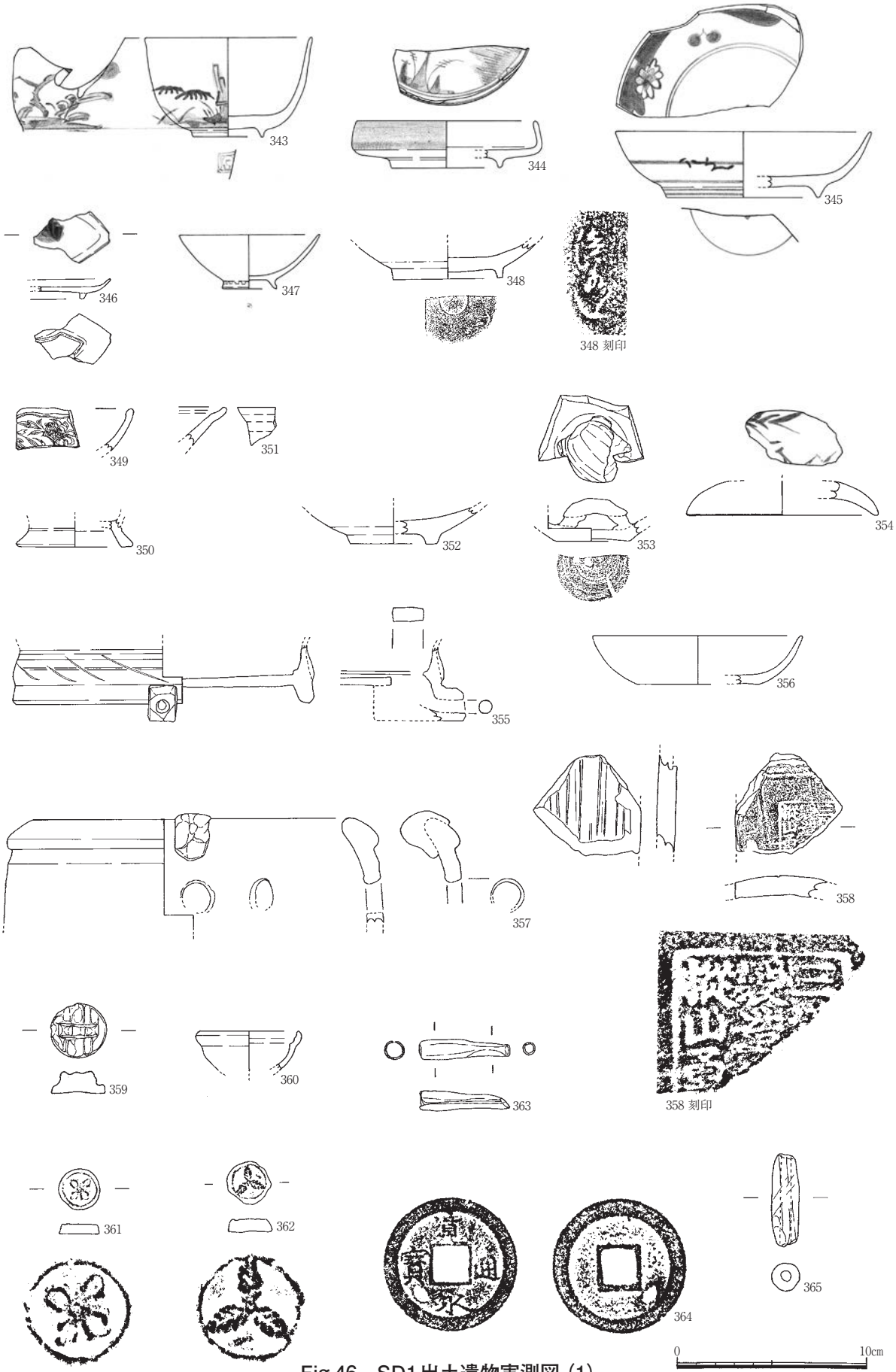


Fig.46　SD1 出土遺物実測図（1）

（361・362・364 拓本、358 刻印は実寸）

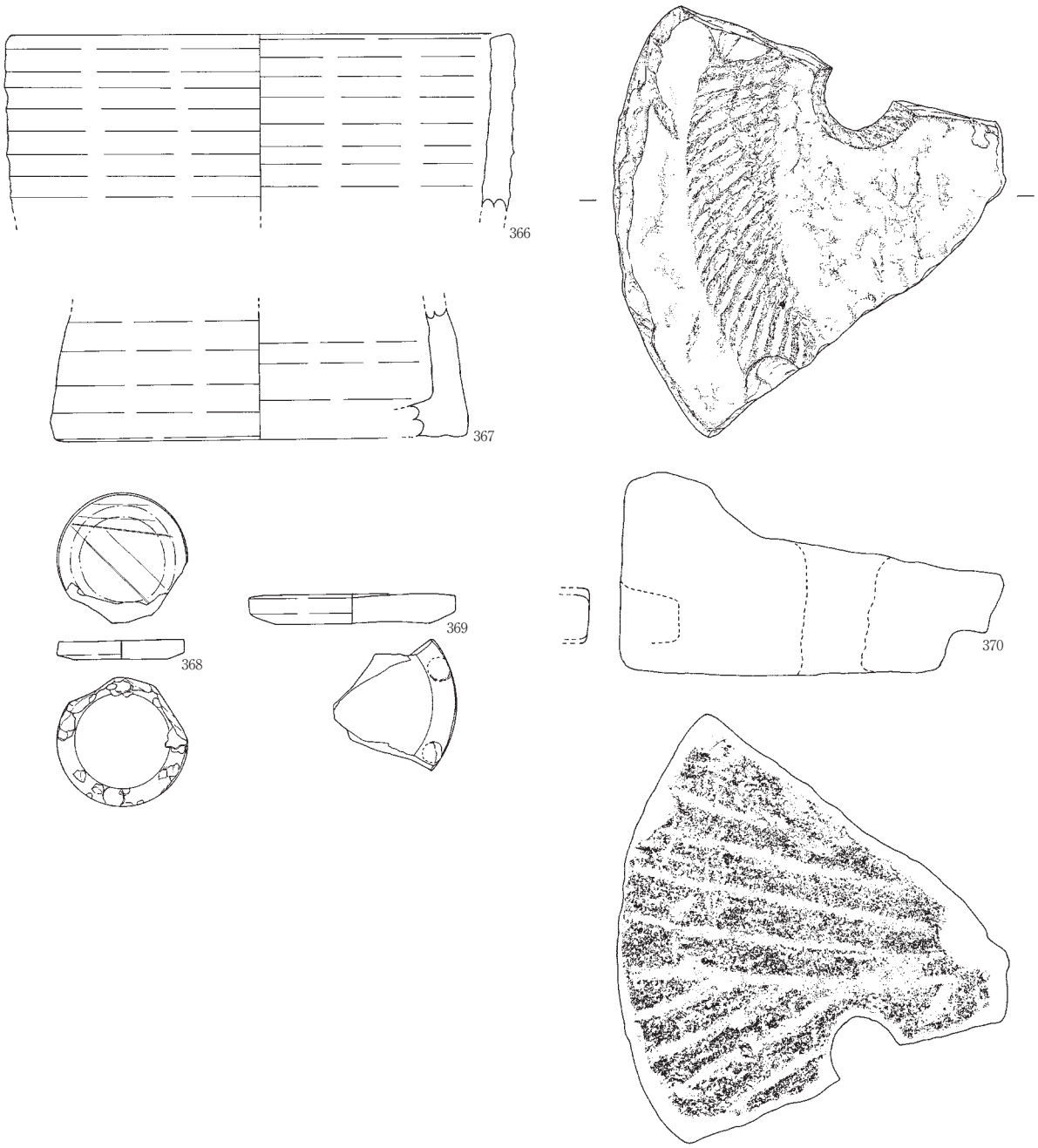


Fig.47　SD1出土遺物実測図（2）

356～358・361・362・365は土師質土器。356は尾戸窯の白土器小皿で、無文。357は土師質土器の焜炉で、内外面に白土を施す。358は関西産の土師質土器焜炉で、窓の右側に「三□□製造□樅山勇」の銘印を認める。361・362は泥面子で、361は型による陽刻の花文、362は三ッ葉柏文を施す。365は土錘である。359・360は施釉土器。359はミニチュアの釜蓋で、橙色の低火度釉を施す。360はミニチュアの鍋で、橙色の低火度釉を施している。363は銅製品。363は煙管の雁首で、火皿を欠損している。364は寛永通寶である。366～369は窯道具で、ともに近隣の尾戸窯からもたらされたものとみられる。366・367は匣鉢、368・369はハマである。370は砂岩製の石臼である。

371・372は近代の染付中碗、373は碗蓋で、ともに酸化コバルトによる型紙刷りの文様を施す。

374は段重で、酸化コバルトによる銅板刷りの文様を施す。375は近代の能茶山窯製品とみられる鉄釉擂鉢で、外面と内面上位に暗赤褐色の釉が施される。376はロクロ成形による陶器の土管。内外面に鉄釉を施し、接合部は無釉である。胎土特徴等から近代の能茶山窯製品の可能性をもつ。377は型押し成形の蓋である。青の顔料で鹿と「鹿印 練歯磨」の文字が描かれており、明治26年に発売を開始した鹿印練り歯磨きの容器の蓋とみられる。378はガラス製の小瓶である。外底に型による陽刻の「二八水」の文字が入り、明治33年に発売を開始した花王「二八水」の化粧瓶とみられる。379・380は骨製品で、牛骨を加工した歯ブラシの柄の部分か。

SD1の廃絶は近代（明治末か）に比定される。

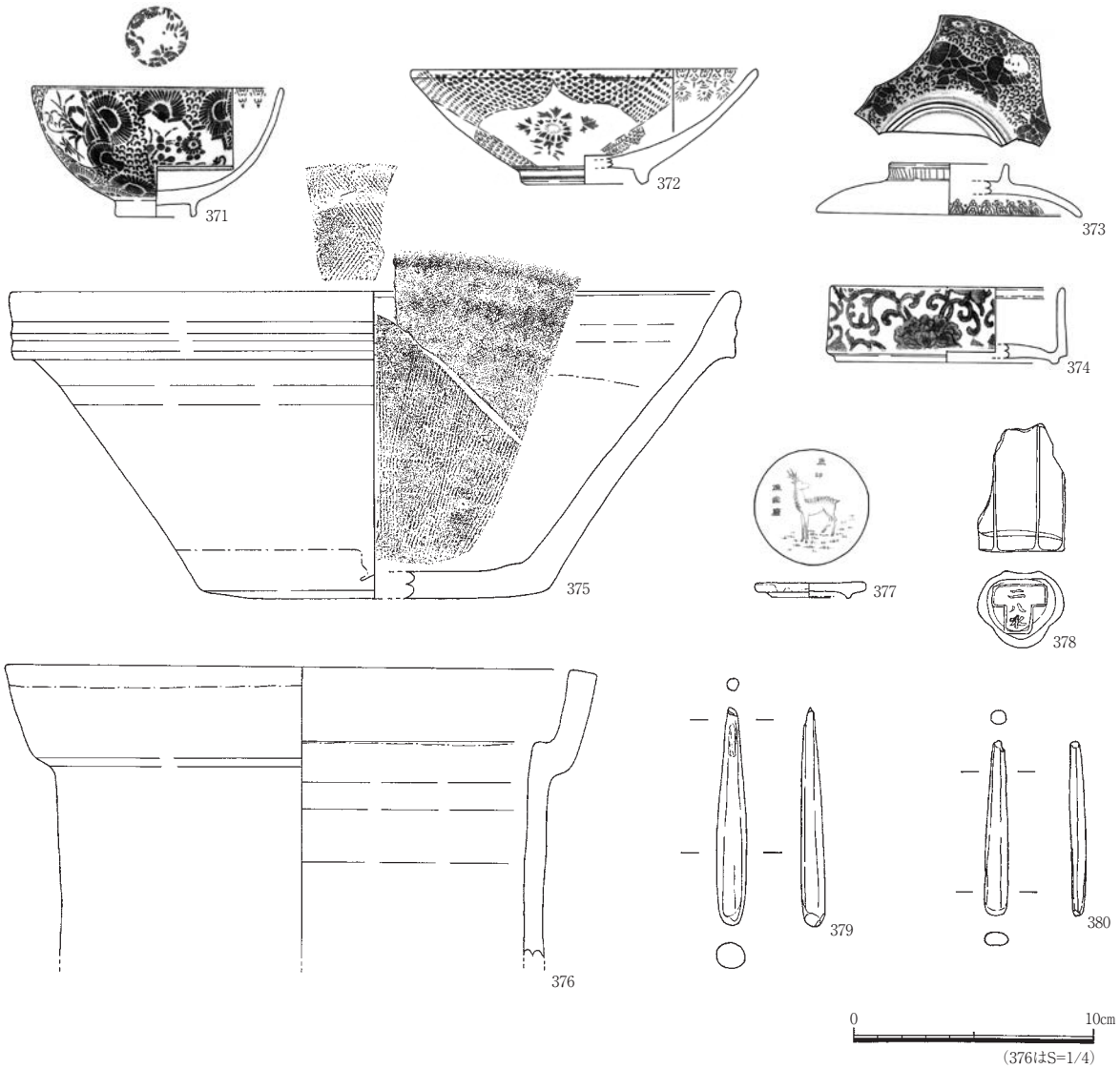


Fig.48　SD1出土遺物実測図（3）

(3) 道状遺構

道状遺構1（Fig.39）

調査区南部で検出した東西方向の道路状遺構で、N－66°－Eの軸方向をもつ。検出規模は、幅1.42㎝、検出長4.00mを測る。検出面のレベルは標高1.71m前後で、近世の遺物包含層にあたるⅡ層を掘り込んで1㎝前後の玉石を敷き詰めた帯状の堆積層が検出されたものである。玉石の上面は堅く締まり、硬化面が帯状に広がっている。他遺構との前後関係をみると、近世のSK3・4・9・11・15・P37・38・41・杭群2の上面で検出されている。中でも、道状遺構1の下面で杭群2が検出されることから、敷地南端の通路や境界に関わる施設の位置は、近世から近代を通じて変化が殆どなかったことが窺われる。

(4) 包含層出土遺物・その他の遺物

Ⅰ層・撹乱層出土遺物（Fig.49）

近現代の整地層であるⅠ層と撹乱層から、近代又は近現代とみられる遺物が出土している。

図示したものは381～388である。381は酸化コバルトの銅板転写による丸形中碗で、玩具を描いており、子ども用の食器と考えられる。384～387は陶器で、近代の能茶山窯製品の可能性をもつ。385・386は鉄釉の擂鉢で、外面と口縁部内面に黒褐色と暗赤褐色の釉を施す。384は灰釉のおろし皿。387は鉄釉の灯明受皿で、明赤褐色の釉を施す。382は褐灰色の胎土に白化粧と透明釉を施した陶器片で、酸化コバルトで「銘酒」の文字が描かれることから、近代の能茶山窯で生産された通い徳利の体部とみられる。383は外底に緑色の釉下彩による裏印をもつ。388は土師質土器焜炉である。

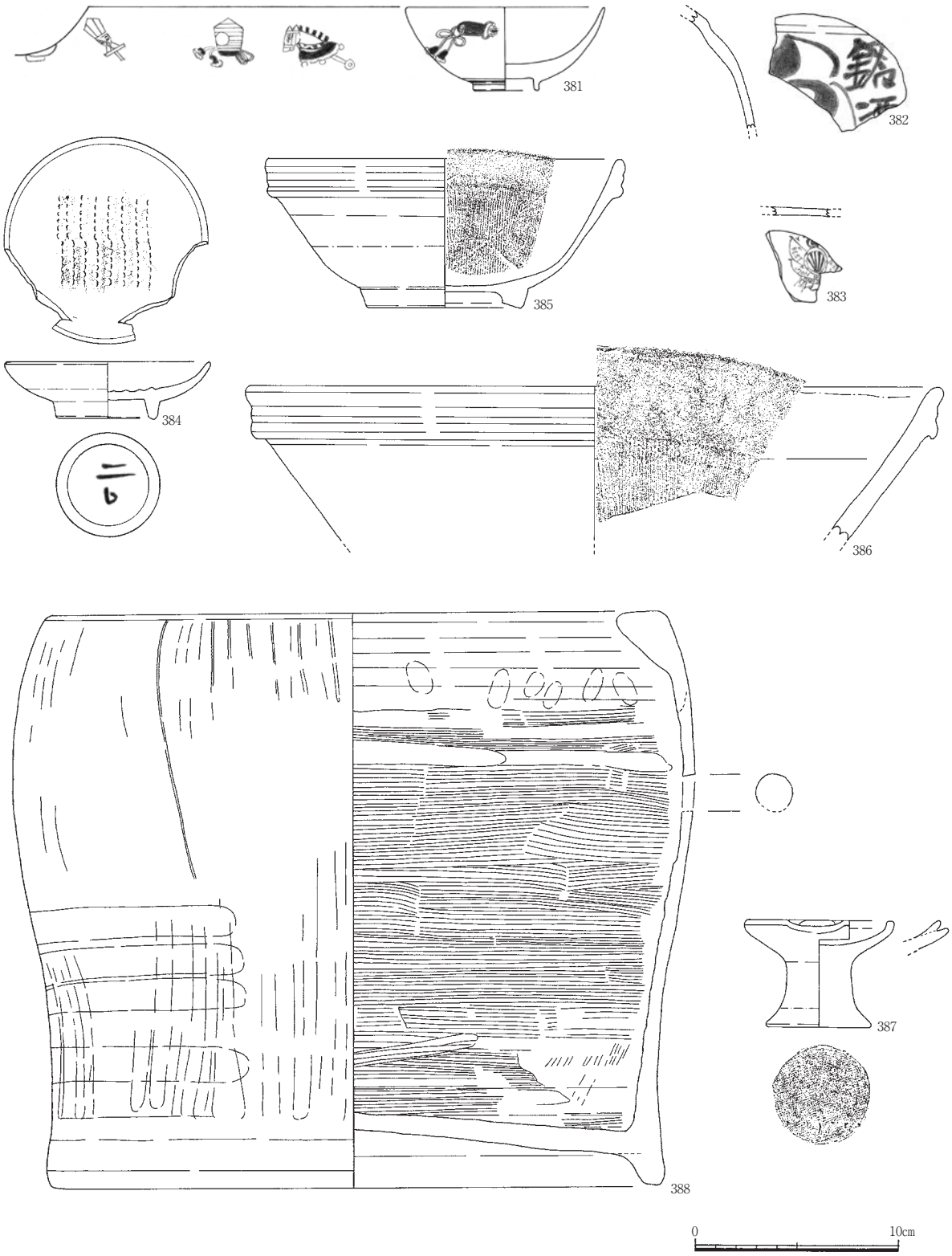


Fig.49　Ⅰ層・撹乱層出土遺物実測図

（Ⅰ層：382・385・387、撹乱層：381・383・384・386・388）

Tab.1　遺構一覧表（SK・SE・SX）

遺構名	グリッド	形態	長軸（m）	短軸（m）	深さ（cm）	切り合い関係	時期
SK1	H－6	楕円形	0.86	0.60	18	SK17・P30・91を切る。P3に切られる。	19世紀前半～中葉
SK2	H－6	楕円形	1.00	0.89	41	P34を切る。SK16に切られる。	18世紀前半
SK3	H－5・6	隅丸方形	1.58	1.50	18	SK15・P38・41を切る。道状遺構1の下面で検出。	18世紀後半
SK4	H－5	楕円形	0.86	0.42	9	道状遺構1の下面で検出。	18世紀か
SK5	H－6	楕円形	0.62	0.36	11		18世紀か
SK6	G－5	楕円形	0.68	0.54	28	P6を切る。	19世紀前半～中葉
SK7	G－4・H－4	楕円形又は溝状	東西確認長1.84	南北長0.90	31	SX2を切る。SD1に切られる。	19世紀前半～中葉
SK8	G－6・H－6	楕円形	0.75	0.53	18		18世紀か
SK9	H－5	楕円形	0.70	0.43	20	SK11を切る。道状遺構1の下面で検出。	19世紀前半～中葉
SK10	G－5・6	楕円形	0.55	0.49	14		近代（明治）
SK11	H－5・I－5	不整形	1.69	0.90	19	SK12・P25を切る。SK9に切られる。道状遺構1の下面で検出。	18世紀前半
SK12	H－5・I－5	不明	南北長0.65	東西残存長0.32	16	SK11に切られる。	18世紀前半
SK13	E－5・F－5	不整形か	南北長2.70	東西確認長1.80	60	P99を切る。SK18に切られる。	18世紀前葉
SK14	G－6	楕円形	東西確認長1.50	南北長0.86	23	P28・29を切る。	近代
SK15	H－5・6	円形	0.82	0.80	44	SK3に切られる。	17世紀後半～18世紀前葉
SK16	H－6	不明	南北長0.80	東西確認長0.59	16	SK2・P3を切る。	19世紀中葉
SK17	H－6	円形又は楕円形	東西長0.84	南北残存長0.68	35	SK1・P3に切られる。	17世紀後半～18世紀
SK18	E－5	楕円形	0.83	0.53	15	SK13を切る。	19世紀前半～中葉
SK19	D－5・E－5	不整形	南北長2.62	東西確認長1.36	55	P47に切られる。P101と切り合う。	18世紀前葉
SK20	E－5	楕円形	1.05	0.90	18	P46・47に切られる。	18世紀
SK21	C－3・4 D－4	不整形	東西確認長3.30	南北長3.24	32～58	SK24・SB1－P4・P82・83・89・93・杭群1を切る。SX3・P63に切られる。SK25と切り合う。	19世紀中葉
SK22	E－4	楕円形	南北長2.37	東西残存長1.32	20	P68に切られる。P60と切り合う。	18世紀
SK23	D－4	楕円形	1.25	0.76	15	SX1に切られる。	18世紀前葉
SK24	D－4・5	不明	南北長1.38	東西確認長0.42	80	SK21に切られる。	19世紀中葉
SK25	C－3	楕円形	1.62	1.48	76	SK21と切り合う。	19世紀中葉
SK26	G－6	不整形	南北長2.28	東西確認長1.38	40	SK30・P104を切る。P16・35に切られる。	18世紀前葉
SK27	D－3	不整形	南北長1.06	東西残存長0.89	10	SD1に切られる。	近世
SK28	D－4	楕円形	0.90	0.50	18	SK34・SX1に切られる。	18世紀前葉
SK29	D－4	楕円形	0.85	0.80	24	P106を切る。P57に切られる。	18世紀前半
SK30	G－6	不明	南北長1.66	東西確認長0.42	70	SK26に切られる。	18世紀前葉
SK31	D－4・E－4	不整形	0.87	0.73	11	P74を切る。P58に切られる。	17世紀後半～18世紀前葉
SK32	D－3・4	不明	南北長0.73	東西残存長0.33	10	SD1に切られる。	近世
SK33	D－4	楕円形	0.70	0.52	8	P79を切る。SX1に切られる。	18世紀前葉
SK34	D－4	楕円形	0.72	0.53	16	SK28を切る。SX1に切られる。	18世紀前葉

Tab.2　遺構一覧表（SK・SE・SX）

遺構名	グリッド	形態	長軸（m）	短軸（m）	深さ（cm）	切り合い関係	時期
SK36	Ⅰ－5	円形	0.62	0.62	11		近代（明治）
SK37	Ⅰ－5	円形又は楕円形	南北長 0.70	東西残存長 0.53	15	SD1に切られる。	17世紀後半～18世紀前半
SE1	F－5・6	円形	掘方径 2.78	井筒径 0.69	184		18世紀前葉
SX1	D－3・4	不明	東西残存長 2.40	南北残存長 2.00	22～25	SK23・28・33・34・SB1－P2・3・6・SB2－P2を切る。SD1に切られる。P79の上面で検出。	18世紀前葉
SX2	G－4	不整形	東西確認長 2.20	南北長 2.00	17	SK7・SD1に切られる。	19世紀前半～中葉
SX3	C－4・D－4	溝状	検出長 4.10	幅 0.96	26	SK21を切る。P63・93の上面で検出。	19世紀中葉

Tab.3　SBピット計測表

遺構名	ピット番号	径（cm）	深さ（cm）	柱痕・礫
SB1	P1	—	—	
	P2	49	39	柱痕（径23cm）
	P3	50	25	
	P4	64×60	32	
	P5	25	6	
	P6	54×40	56	柱痕（径18cm）
	P7	33	27	
	P8	34	14	
SB2	P1	—	—	
	P2	40	32	柱痕（径14cm）
	P3	—	—	
	P4	31	25	
	P5	32	10［復元22］	
	P6	42	31	

［　］は他の柱穴に検出面を揃えた深度。

Tab.4　ピット一覧表

遺構名	グリッド	径（cm）	深さ（cm）	切り合い関係	時期
P2	H－6	23	8	P34を切る。	17世紀後半～18世紀前半
P3	H－6	53	10	SK1・17を切る。SK16に切られる。	19世紀前半～中葉
P6	G－5	52×30	34	SK6に切られる。	不明
P16	G－6	24	19	SK26を切る。	不明
P21	F－4	25	37		17世紀後半～18世紀前半
P25	I－5	31	25	SK11に切られる。	不明
P28	G－6	56	19	SK14に切られる。	不明
P29	G－6	28	5［26］	SK14に切られる。	不明
P30	H－6	33	28［49］	SK1に切られる。	17世紀後半～18世紀
P31	F－4・G－4	40	18	SD1を切る。	近代
P32	G－4	30	24	SD1に切られる。	不明
P34	H－6	25	19	SK2・P2に切られる。	17世紀後半～18世紀前半
P35	G－6	25	22	SK26を切る。	17世紀後半～18世紀前半
P37	H－6	23	14	道状遺構1の下面で検出。	18世紀
P38	H－6	40×35	20	SK3に切られる。道状遺構1の下面で検出。	17世紀末～18世紀前半
P41	H－6	45×32	8	SK3に切られる。道状遺構1の下面で検出。	17世紀後半～18世紀
P45	E－5	33	6		17世紀後半～18世紀前半
P46	E－5	27	10	SK20を切る。	近世
P47	E－5	43	25	SK19・20を切る。	18世紀
P48	F－4	28	25		17世紀後半
P49	G－4	40	25	SD1に切られる。	不明
P50	E－4	20	15	P72を切る。P51に切られる。	近世
P51	E－4	29	20	P50・72を切る。	18世紀後半～19世紀
P56	D－4	39	21	P70に切られる。	17世紀後半～18世紀前半
P57	D－4・E－4	38	13	SK29・P73を切る。	18世紀前半
P58	D－4・E－4	39	13	SK31・P73を切る。	近世
P60	E－4	20	20	P68に切られる。SK22と切り合う。	不明
P63	D－4	54	19［41］	SK21を切る。SX3に切られる。	19世紀前半～中葉
P64	E－3	44	38		18世紀
P67	G－4	16	24	SD1に切られる。	不明
P68	E－4	58×42	33	SK22・P60を切る。	近世
P70	D－4	34	23	P56を切る。	18世紀
P72	E－4	22	33	P50・51に切られる。	18世紀後半～19世紀
P73	E－4	39	16	P57・58に切られる。	18世紀
P74	E－4	20	6［32］	SK31に切られる。	17世紀後半
P76	F－4	47	9	SD1に切られる。P77と切り合う。	不明
P77	F－4	20	3	P76と切り合う。	18世紀後半～19世紀
P79	D－4	25	20	SK33に切られる。SX1の下面で検出。	17世紀後半
P82	D－4	18	15	SK21に切られる。	近世
P83	C－4	40	36［47］	SK21に切られる。	19世紀前半～中葉
P89	C－4	40	15［22］	SK21に切られる。	近世
P91	H－6	29	36	SK1に切られる。	近世
P93	C－4	21	16［30］	SK21に切られる。SX3の下面で検出。	19世紀前半～中葉
P96	G－5	21	15		近世
P99	F－5	残存長42	27	SK13に切られる。	17世紀後半
P101	D－5	25	13	SK19と切り合う。	不明
P104	G－6	36	15［24］	SK26に切られる。	17世紀後半～18世紀
P105	E－4	36	10		近世
P106	D－4	38	5［28］	SK29に切られる。	17世紀後半～18世紀

深さの［　］は標高1.6mからの復元深度。

Tab.5　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
1－ab	試掘TP4－SK1	陶器	水指又は甕	22.3	—	18.2	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白N8/	外）鉄絵 灰釉	内外面ロクロ目。内面施釉。外底無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
2	試掘TP4－SK1	陶器	碗蓋	—	—	—	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）灰白2.5Y7/1	外）黒象嵌による暦手文 灰釉	内面施釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
3	試掘TP3－Ⅱ層	陶器	灰吹き	5.8	7.6	6.0	—	外）灰白5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2	外）鉄絵と呉須・白土による笹と梅花 灰釉	高台の8箇所にアーチ状の抉り。枝と葉は鉄絵と呉須、花弁は白土で描く。灰白色を帯びる半透明の釉。	京都又は尾戸窯 口縁端部に敲打痕。
4	試掘TP4－Ⅱ層	陶器	不明	—	—	1.0	—	外）灰白2.5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1 ・にぶい橙7.5YR7/4	灰釉	内面施釉。高台外側まで施釉し高台内無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。御本が入る。	尾戸窯
5	SB1－P6	青花	碗	—	—	—	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白N8/	外）波濤文 口縁内）圏線		中国 景徳鎮窯系 15世紀後半～16世紀前半
6	SB1－P6	陶器	中碗丸形	10.5	—	—	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白10YR8/2	灰釉	淡黄色を帯びる透明の釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
7	SB1－P7	陶器	鉢	31.0	—	—	—	外）灰白2.5Y8/2 断）にぶい橙2.5YR6/4	内）白化粧土刷毛目・鉄釉 灰釉	刷毛目二彩手か。内面白化粧土刷毛目の後鉄釉を流し掛け。外面下半無釉。	肥前産
8	SB1－P6	陶器	擂鉢	32.0	—	—	—	外）にぶい赤褐色2.5YR5/4・暗赤褐5YR3/3 断）にぶい赤褐色2.5YR5/4	焼締め	口縁部外面に2条の凹線。口縁部内面回転ナデ。体部外面回転ナデ。内面櫛目。外面ロクロ目。	備前 17世紀後半
9	SB1－P4	土師質土器	杯又は皿	—	—	4.8	—	にぶい黄橙10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内外面に強いロクロ目。	
10	SB2－P4	陶器	小碗半球形	9.8	5.0	2.2	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y8/1	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる透明の釉。	京都系
11	SB2－P5	土師質土器	人形	—	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/3	観音	型作り。中実。外面にキラ粉。	
12	SB2－P6	陶器	瓶	—	—	11.6	—	外）にぶい黄2.5Y6/3 断）灰白2.5Y8/2	外）灰釉・鉄釉 内）鉄釉	外面ににぶい黄色の釉。外面下位と内面に鉄釉を刷毛塗り。	瀬戸・美濃
13	SK1	磁器色絵	小杯	—	—	2.6	—	外）白 断）白	内）上絵付による文様	上絵付は剥離し不明。	肥前産
14	SK1	陶器	皿	—	—	6.4	—	外）灰7.5Y6/1 断）灰黄2.5Y7/2	灰釉	高台施釉。灰白色を帯びる透明の釉。内底に砂目。	肥前産 1610～1630年代
15	SK2	磁器染付	小杯	—	—	2.8	—	外）白 断）白	外）不明 高台外）圏線		肥前産
16	SK2	磁器染付	小皿	—	—	4.8	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	内）不明	透明釉は貫入が入る。畳付に灰白色の粗砂が付着。内底に目痕。	肥前産
17	SK2	磁器染付	蓋か	—	—	—	—	外）白 断）白	外）唐草文・圏線	内面施釉。	肥前産
18	SK2	陶器	中碗丸形	10.3	—	—	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y7/1	灰釉	外面ロクロ目。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
19	SK2	陶器	瓶	—	—	5.1	—	外）黒褐10YR3/2 内）にぶい黄橙10YR7/2 断）灰白10YR7/1	鉄釉	高台内に渦状の鉋痕。内面と外底無釉。黒褐色の釉。	尾戸窯
20	SK2	窯道具	匣鉢	—	—	約15.8	—	外）灰褐7.5YR6/2 断）明褐灰7.5YR7/2	胎土中に粗砂を含む。	内外面回転ナデ。外底糸切り。	尾戸窯か
21	SK3	陶胎染付	中碗	—	—	4.7	—	外）灰白10Y7/1 断）灰白2.5Y7/1	外）不明・圏線 高台外）二重圏線	内外面白化粧後透明釉。	肥前産 17世紀末～18世紀前半
22	SK3	磁器染付	蓋物	10.4	—	—	—	外）灰白7.5Y8/1 断）白	外）矢羽根文	内面施釉。口縁部内面と端部無釉。	肥前産
23	SK3	磁器染付	大皿	31.1	—	—	—	外）灰白10Y8/1 断）白	外）連続唐草文 内）唐草文	透明釉は貫入が入る。	肥前産
24	SK3	青磁染付	碗蓋	笠部径10.6	—	—	—	外）明緑灰7.5GY7/1 内）白 断）白	外）青磁釉 内）四方襷・二重圏線・松竹梅円形文 摘み内）角枠内渦「福」		肥前産 18世紀後半

Tab.6　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
25	SK3	陶器	甕	29.0	—	—	—	外）灰赤2.5YR4/2・暗オリーブ褐2.5Y3/3 断）黄灰2.5Y6/1	外）鉄釉 内）灰釉	内外面ロクロ目。外面灰赤色の釉。内面と口縁端部に暗オリーブ褐色の釉。外面上位に暗オリーブ褐色の釉を流し掛け。	丹波
26	SK4	土師質土器	小皿	8.0	1.3	5.3	—	にぶい橙7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
27	SK7	陶器	擂鉢	19.5	—	—	—	外）にぶい褐7.5YR5/3 断）にぶい赤褐5YR5/4	焼締め	口縁部外面に2条の凹線。内面櫛目。	備前 17世紀
28	SK12	陶器	瓶	—	—	—	約14.2	外）灰白5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1	外）鉄絵による草花文・圏線 灰釉	内面下半無釉。釉は焼成不良気味で白濁。	
29	SK13中層	磁器染付	小碗	7.0	—	—	—	外）白 断）白	外）コンニャク印判による菊花文		肥前産 17世紀末～18世紀前半
30	SK13上層	磁器染付	小碗	—	—	2.9	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白N8/	外）雨降り文	外面ロクロ目。呉須は青灰色に発色。畳付に粗砂が付着。	肥前産 17世紀末～18世紀前半
31	SK13中層	磁器染付	小皿丸形	12.8	—	—	—	外）白 断）白	外）連続唐草文・圏線 内）不明・圏線		肥前産
32	SK13中層	磁器染付	猪口	9.4	—	—	—	外）白 断）白	外）雪輪・植物		肥前産
33	SK13	磁器染付	猪口	—	—	6.0	—	外）白 断）白	外）草花文 高台内）圏線・「大明年□」		肥前産
34	SK13中層	磁器染付	蓋物腰張形	6.6	4.9	4.5	—	外）白 断）白	外）コンニャク印判による桐文・圏線 高台外）二重圏線	内面施釉。口縁部内面と端部無釉。	肥前産 17世紀末～18世紀前半
35	SK13上層	磁器染付	皿	—	—	—	—	外）白 断）白	外）圏線 高台外）二重圏線 内）不明 高台内）圏線	透明釉は貫入が入る。	肥前産
36	SK13中層	磁器色絵	瓶	—	—	—	8.8	外）灰白10Y7/1 断）灰白N8/	外）赤の上絵付による圏線・縞	内面施釉。	肥前産
37	SK13中層	磁器染付	水滴箱形	全長9.1	3.6	全幅5.1	—	外）白 断）白	外）型による陽刻の青海波文他	上部に径5㎜の円孔。型押し成形底部貼り合わせ。内面ユビオサエ。外底と内底に布目。外面の一側面と内面無釉。底部隅に別個体水滴の注口部が溶着。	肥前産
38	SK13中層	白磁又は染付	うがい茶碗	14.2	—	—	—	外）白 断）白			肥前産
39	SK13上層	白磁	盃台	4.4	2.9	2.7	—	外）灰白2.5Y8/1 断）白	白磁釉	外底回転ケズリ。外面下半と内面下位無釉。灰白色の釉。	肥前産
40	SK13上層	磁器色絵	合子	受部径4.9	1.8	3.4	—	外）白 断）白	外）型による陽刻文様 黄色・褐色の釉 内）透明釉	型押し成形。外底にチヂレ目。外面の一部に黄色と褐色の釉。内面に透明釉。	肥前産
41	SK13中層	陶器	中碗丸形	11.8	7.4	5.7	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y7/1	灰釉	内外面ロクロ目。高台無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。内底に目痕。	尾戸窯
42	SK13中層	陶器	中碗丸形	約12.2	—	—	—	外）灰5Y6/1 断）灰白5Y7/1	灰釉	灰白色を帯びる透明の釉。	尾戸窯
43	SK13中層	陶器	中碗天目形	10.6	6.7	4.3	—	外）暗赤褐5YR3/3 断）灰白2.5Y7/1	鉄釉	高台施釉。暗赤褐色の釉。	
44	SK13中層	陶器	中碗	—	—	4.2	—	外）暗赤褐5YR3/2 断）灰褐5YR6/2	鉄釉	唐津系陶器。高台内兜巾状。高台無釉。暗赤褐色の釉。	肥前産 1590～1630年代
45	SK13下層	陶器	皿	—	—	—	—	外）灰黄褐10YR5/2 断）褐灰10YR6/1	内）印花と線彫りによる白象嵌 灰釉	三島手。外面ロクロ目。灰白色を帯びる半透明の釉。	肥前産
46	SK13	陶器	小瓶	—	—	3.1	—	外）オリーブ褐2.5Y4/3 断）灰白2.5Y7/1	外）鉄釉 内）灰釉	内面ロクロ目。外底回転糸切り。内面施釉。外面下位無釉。外面オリーブ褐色の釉。	

Tab.7　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
47	SK13	陶器	餌猪口	5.1	1.9	5.0	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	把手の有無は不明。内面ロクロ目。外底ナデ。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯か
48	SK13 上層	陶器	灯明受皿	10.3	1.8	5.2	—	外）にぶい赤褐 2.5YR5/3 断）にぶい赤褐 2.5YR5/4	錆釉	内面と外面上半回転ナデ。外底回転ケズリ。内面に錆釉。	備前 口縁部内外面にタール状の焦げ。
49	SK13 上層	陶器	蓋か	笠部径 11.9	—	—	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	上面回転ナデ。下面ナデ。下面無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	
50	SK13 上層 ・下層	陶器	不明	—	全厚 0.9	全幅 2.0	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	把手。断面長方形。灰白色を帯びる透明の釉。	尾戸窯か
51	SK13 下層	軟質施釉陶器	人形又は水滴	—	—	—	—	外）にぶい黄褐 10YR4/3 断）灰白2.5Y8/1	にぶい黄褐色の低火度釉	型押し成形貼り合わせ。内面ユビオサエ。外底に布目。	
52	SK13 上層	窯道具	ハマ	径 6.2	0.9	3.6	—	外）にぶい黄橙 10YR6/3 断）にぶい黄橙 10YR7/2		上面ナデ。下面回転ナデ。上面に別個体の高台溶着痕。下面に円錐ピンの剥離痕。	尾戸窯か
53	SK13	瓦質土器	火鉢	24.6	—	—	—	外）灰5Y4/1 断）灰5Y6/1		外面上位に沈線。外面ナデ・ミガキ。内面ヨコナデ。内面上位に粘土帯接合痕。	
54	SK15	磁器 染付	大碗 丸形	13.8	—	—	—	外）灰白N8/ 断）白	外）雲龍文 高台外）二重圏線 口縁内）圏線 見込み）荒磯文・二重圏線		肥前産 1650～1670年代
55	SK15	磁器 染付	小杯	5.3	—	—	—	外）白 断）白	外）稲束		肥前産
56	SK15	磁器 染付	小碗 端反形	7.5	—	—	—	外）明オリーブ灰 5GY7/1 断）灰白N8/	外）千鳥か		肥前産
57	SK15	陶器	中碗 杉形	11.8	6.0	4.5	—	外）灰白7.5Y7/1 断）灰白5Y7/1	呉須による文様 外）松竹梅 高台外）二重圏線 口縁内）四方襷 見込み）二重圏線・不明 灰釉	呉須は青灰色に発色。御本が入る。	
58	SK15	陶器	擂鉢	21.2	—	—	—	外）にぶい赤褐 2.5YR5/3 断）にぶい橙 2.5YR6/4	焼締め	口縁部外面に2条の凹線。体部外面回転ナデ。内面回転ナデ後櫛目。	備前
60	SK16	白磁	小皿	—	—	5.6	—	外）白 断）白	内）型による陽刻文様、人物・船・松		肥前産
61	SK16	磁器 染付	碗	—	—	—	—	外）白 断）白	外）龍か 口縁内）圏線		肥前産
62	SK16	磁器 染付	合子蓋	笠部径 7.3	—	—	—	外）白 断）白	外）不明	内面施釉。端部無釉。	肥前産
63	SK16	瓦質土器	火鉢か	—	—	—	—	外）灰N4/ 断）灰白2.5Y7/1・灰N4/		手捏ねによる脚を貼付。外面カキ目。外底ナデ。内面ヨコナデ。	
64	SK20	陶器	中碗	12.2	—	—	—	外）灰黄2.5Y6/2 断）にぶい黄橙 10YR7/2	灰釉	灰黄色を帯びる半透明の釉。	
65	SK19 上層	磁器 染付	中碗 端反形	10.3	—	—	—	外）灰白7.5Y7/1 断）灰白7.5Y7/1	外）山水文・圏線		肥前産
66	SK19	青花	小杯 端反形	6.1	—	—	—	外）白 断）白	外）草花文か・圏線	口縁端部の釉が虫食い状に剥がれる。	中国 景徳鎮窯系 17世紀前葉～中葉
67	SK19 上層	青花	皿	11.8	—	—	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	外）蓮華唐草文 内）圏線		中国 景徳鎮窯系 15世紀後半～16世紀前半
68	SK19	陶器	中碗 丸形	11.2	—	—	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白10YR8/2	灰釉	外面ロクロ目。淡黄色を帯びる透明の釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半

Tab.8　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
69	SK19 上層	陶器	擂鉢	—	—	—	—	外）褐灰7.5YR5/1 内）灰褐5YR5/2 断）褐灰5YR5/1	焼締め	口縁部外面に２条の凹線。体部外面ヨコナデ。内面回転ナデ後櫛目。	備前 17世紀
70	SK19 床	土師質土器	小皿	12.0	2.2	6.4	—	にぶい橙5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
71	SK19 上層	土師質土器	杯	—	—	5.8	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内面に強いロクロ目。	
72	SK21 上層	磁器 染付	中碗 端反形	11.0	—	—	—	外）灰白2.5GY8/1 断）灰白N8/	外）花卉文・圏線 高台外）二重圏線 口縁内）雷文帯 見込み）圏線・不明	透明釉は貫入が入る。	能茶山窯か 1820～1860年代
73	SK21 上層 ・下層	磁器 染付	中碗 端反形	11.0	—	—	—	外）白 断）白	外）窓に草花・放射状の文様 口縁内）雷文帯	透明釉は貫入が入る。	能茶山窯か 1820～1860年代
74	SK21 上層	磁器 染付	中碗 端反形	10.5	—	—	—	外）白 断）白	外）雪輪に梅・植物・波濤文 口縁内）波濤文		肥前産又は肥前系 1820～1860年代 74・104組。
75	SK21	磁器 染付	中碗 広東形	11.0	6.8	6.2	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	外）草花文・雁 高台外）二重圏線 口縁内）二重圏線 見込み）圏線	透明釉は貫入が入る。内底に目痕。	能茶山窯か 1820～1860年代
76	SK21 上層	磁器 染付	中碗 丸形	10.6	—	—	—	外）白 断）白	外）菊唐草文・圏線 口縁内）二重圏線 見込み）二重圏線		肥前産 17世紀後半
77	SK21	磁器 染付	小碗 端反形	8.6	5.0	3.2	—	外）白 断）白	外）人物・松・鶴 口縁内）雷文帯 見込み）圏線・花文		肥前産 1820～1860年代
78	SK21 上層	磁器 染付	小碗 端反形	9.5	5.1	4.1	—	外）白 断）白	外）山水文・圏線 高台外）圏線 口縁内）二重圏線 見込み）圏線・不明		肥前産 1820～1860年代
79	SK21 上層	磁器 染付	小碗 筒形	7.5	6.9	5.2	—	外）白 断）白	外）丸に竹・梅・圏線 高台外）櫛歯文 口縁内）雷文帯		肥前産 19世紀中葉
80	SK21 上層	磁器 染付	小碗 端反形	8.4	5.5	4.2	—	外）白 断）白	外）松・柵 高台外）圏線 口縁内）帯線・圏線 見込み）不明		肥前産
81	SK21 上層	磁器 染付	小碗 筒丸形	7.4	—	—	—	外）白 断）白	外）草花文・蓮弁文・圏線 口縁内）雷文帯		肥前産 19世紀前葉～中葉
82	SK21 上層	磁器 染付	小碗 端反形	8.2	—	—	—	外）灰白5Y8/1 断）白	外）窓に菊花・花唐草文 口縁内）四方襷	口縁部波縁状。焼成不良気味で透明釉は白濁する。	肥前産
83	SK21 上層	磁器 染付	小碗 端反形	8.9	—	—	—	外）白 断）白	外）雷文帯・窓に草花・「福寿」 口縁内）雷文帯 見込み）圏線	透明釉は貫入が入る。	能茶山窯か 1820～1860年代
84	SK21 上層	磁器 染付	小杯 丸形	6.8	3.2	2.4	—	外）灰白N8/ 断）白	外）竹文	呉須は暗緑灰色に発色。	肥前産
85	SK21	磁器 染付	小杯 端反形	6.8	—	—	—	外）白 断）白	外）コンニャク印判による文様		肥前産 17世紀末～18世紀前半
86	SK21 上層	磁器 色絵	小杯 丸形	7.3	—	—	—	外）灰白N8/ 断）白	外）赤・黒の上絵付による花唐草文・二重圏線	赤の地埋めと白抜きによる文様。葉脈は黒で描く。	肥前産
87	SK21 上層	磁器 色絵	薄手酒杯	5.9	2.6	2.5	—	外）白 断）白	内）赤・その他の上絵付による文様	文様は剥離し不明。	肥前産 19世紀前葉～中葉

Tab.9　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
88	SK21	磁器 瑠璃釉	碗	—	—	3.5	—	外）紺 断）白	外）紺色の釉 内）透明釉 高台内）変形字銘		肥前産
89	SK21 上層	磁器 染付	五寸皿	13.8	4.0	7.5	—	外）灰白10Y8/1 断）白	外）土坡・草 内）矢羽根文・鳥・芭蕉・草 高台内）角枠内「茶山」 口縁部に呉須	口縁部輪花形。蛇ノ目凹形高台。透明釉は貫入が入る。	能茶山窯 1820～1860年代 角枠内「茶山」銘あり。
90	SK21	磁器 染付	小皿	12.6	3.1	7.7	—	外）灰白5GY8/1 断）白	内）山水文	口縁部輪花形。蛇ノ目凹形高台。釉剥ぎ部にアルミナを塗布。	肥前産又は肥前系
91	SK21	磁器 染付	小皿	9.1	2.3	5.0	—	外）灰白10Y8/1 断）白	内）矢羽根文・芭蕉・草 口縁部に呉須	透明釉は貫入が入る。	能茶山窯 1820～1860年代
92	SK21	磁器 染付	小皿	10.4	2.6	5.8	—	外）白 断）白	内）東屋山水文 口錆	口縁部輪花形。	肥前産又は肥前系
93	SK21 上層	磁器 染付	大皿 丸形	約26.0	—	—	—	外）白 断）白	外）連続唐草文 内）牡丹唐草文	外面の唐草は輪郭を線描きする。	肥前産
94	SK21 上層	磁器 染付	中皿 端反形	—	—	14.6	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）灰白N8/	内）不明	呉須は青色で滲む。	肥前産又は肥前系
95	SK21	磁器 染付	鉢 端反形	16.0	5.8	5.5	—	外）白 断）白	外）宝文 内）格子文・菊花		肥前産又は肥前系
96	SK21 上層	磁器 染付	鉢	約8.9	—	—	—	外）白 断）白	外）船・波 口縁内）不明		肥前産
97	SK21	磁器 染付	鉢か	約13.2	—	—	—	外）白 断）白	外）花唐草文 内）芙蓉手		肥前産
98	SK21 上層	磁器 染付	鉢	—	—	6.2	—	外）灰白5Y8/1 断）白	外）圏線 高台内）角枠内「茶」	内面下位無釉。透明釉は貫入が入る。呉須は暗緑灰色に発色。	能茶山窯 1820～1860年代 角枠内「茶」銘あり。
99	SK21	磁器 染付	鉢	—	—	7.3	—	外）白 断）白	外）宝文 内）蝙蝠・植物	高台が撥状に開く。蛇ノ目凹形高台。釉剥ぎ部にアルミナを塗布。	肥前産又は肥前系
100	SK21	磁器 染付	猪口か	8.5	—	—	—	外）白 断）白	外）コンニャク印判による花文		肥前産 17世紀末～18世紀前半
101	SK21	磁器 染付	猪口 桶形	8.3	5.9	6.0	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白10Y8/1	外）半菊文・二重圏線 口縁内）二重圏線 内）圏線	蛇ノ目凹形高台。	肥前産
102	SK21	青磁 染付	猪口 桶形	9.5	6.6	6.4	—	外）明オリーブ灰5GY7/1 内）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	外）青磁釉 口縁内）四方襷見込み）二重圏線・手描きによる五弁花文 高台内）角枠内渦「福」		肥前産 18世紀後半
103	SK21 上層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 8.7	2.5	—	摘み径 3.3	外）白 断）白	外）鶴・土坡と植物 内）岩波		肥前産又は肥前系
104	SK21	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.2	2.8	—	摘み径 3.9	外）白 断）白	外）雪輪に梅・植物・波濤文 内）波濤文・不明		肥前産又は肥前系 1820～1860年代 74・104組。
105	SK21 上層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.6	3.0	—	摘み径 3.8	外）灰白7.5Y8/1 断）白	外）花文・雲 内）雷文帯・圏線・雲	透明釉は貫入が入る。	能茶山窯か 1820～1860年代
106	SK21 上層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.4	2.8	—	摘み径 3.7	外）灰白5GY8/1 断）白	外）帯線に鋸歯文・窓に東屋・雲気 内）帯線に鋸歯文・圏線・雲		能茶山窯 1820～1860年代 106・192組か。
107	SK21	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.6	2.9	—	摘み径 4.0	外）白 断）白	外）格子文・蝙蝠 内）格子文・不明		肥前産 1820～1860年代 107・196組。
108	SK21 上層	磁器 染付	蓋物	5.4	2.9	3.0	—	外）灰白5Y8/1 断）白	外）植物	内面施釉。口縁部内面と端部無釉。	肥前産

Tab.10　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
109	SK21 上層	磁器 染付	蓋物 腰張形	6.2	3.6	2.8	—	外）白 断）白	外）宝文・花文・圏線 高台外）二重圏線	内面施釉。口縁部内面と端部無釉。	肥前産又は肥前系
110	SK21	磁器 染付	蓋物	13.8	—	—	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	外）草花文・圏線	内面施釉。口縁部内面と端部無釉。透明釉は貫入が入る。	能茶山窯か 1820～1860年代
111	SK21 上層	白磁	紅皿 菊花形	4.4	1.5	1.4	—	外）白 断）白	外）型による菊弁	型押成形。外面無釉。外面にチヂレ目。	肥前産 1780～1860年代
112	SK21	磁器 色絵	燗徳利	3.3	—	—	—	外）白 断）白	黄色の釉	口縁の一箇所を前方に折り曲げる。内面ロクロ目。内面施釉。口縁部内外面に黄色の釉。胎土は透明感をもつ。	関西系
113	SK21 上層	磁器 染付	小瓶 端反辣韮形	1.8	6.8	2.6	4.0	外）灰白10Y8/1 断）不明	外）梅花文	外面に緩やかなロクロ目。内面無釉。呉須は暗青灰色に発色。	肥前産
114	SK21	磁器 染付	小瓶 辣韮形	1.5	7.5	2.8	4.0	外）灰白5GY8/1 断）白	外）梅花文・笹文	内面ロクロ目。外面に緩やかなロクロ目。内面無釉。	肥前産
115	SK21	磁器 染付	小瓶 辣韮形	—	—	3.8	5.1	外）灰白10Y8/1 断）灰白N8/	外）若松文	内面ロクロ目。内面無釉。畳付に粗砂が付着。	肥前産
116	SK21	磁器 染付	小瓶 辣韮形	1.6	—	—	5.8	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	外）草文・若松文	内面ロクロ目。内面無釉。	肥前産
117	SK21	磁器 染付	不明	—	—	—	約 15.0	外）灰白5GY8/1 断）白	外）山水文・二重圏線	内面ロクロ目。内面無釉。内面上位まで施釉。	肥前産又は肥前系
118	SK21 上層	陶器	中碗 広東形	12.4	6.6	5.4	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y7/1	外）鉄絵による竹文 灰釉	高台施釉。灰黄色を帯びる透明の釉。内底に目痕。	尾戸窯
119	SK21 上層	陶器	中碗	11.3	—	—	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	灰白色を帯びる透明の釉で部分的に白濁する。	尾戸窯
120	SK21	陶器	中碗	11.0	—	—	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	灰白色を帯びる透明の釉。	尾戸窯
121	SK21 上層	陶器	中碗 腰張形	—	—	3.9	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1・灰白2.5Y8/2	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。内底に目痕。	尾戸窯
122	SK21	陶器	中碗	—	—	—	—	外）灰白5Y7/2 断）灰黄2.5Y7/2	灰釉	外面ロクロ目。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
123	SK21 上層	陶器	中碗	—	—	—	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	内面ロクロ目。灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	尾戸窯
124	SK21 上層	陶器	中碗	—	—	5.2	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰黄2.5Y7/2	灰釉	高台無釉。灰黄色を帯びる半透明の釉。内底に目痕。	尾戸窯
125	SK21	陶器	中碗	—	—	6.0	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰黄2.5Y7/2	灰釉	京焼風陶器。文様は不明。高台無釉。灰黄色を帯びる透明の釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
126	SK21	陶器	中碗 轆轤形	—	—	4.1	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y7/1	藁灰釉・鉄釉	外面下位に回転ケズリによる段。高台内に強い渦状の鉋痕。高台無釉。灰白色の釉。部分的に鉄釉が流れ滲む。	
127	SK21	陶器	碗	—	—	4.5	—	外）灰白2.5Y7/1 断）灰白N8/	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる透明の釉。	京都・信楽系 高台内に墨書。
128	SK21 上層	陶器	小碗 丸形	9.0	4.6	2.9	—	外）灰白5Y8/2 断）灰白5Y8/1	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる透明の釉。	京都・信楽系 18世紀第2・3四半期 高台内に墨書。
129	SK21 床	陶器	小碗 丸形	8.4	—	—	—	外）灰白5Y8/2 断）灰白5Y8/1	外）鉄絵 灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる透明の釉。	京都・信楽系 18世紀後葉～19世紀前葉
130	SK21	陶器	小杯	—	—	2.0	—	外）灰白5Y8/1 断）灰白5Y8/1	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	京都・信楽系
131	SK21 上層	陶器	小皿 丸形	12.4	4.4	5.6	—	外）黒褐10YR3/1 断）にぶい橙7.5YR6/4	鉄釉	外面中位に沈線。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。高台無釉。黒褐色の釉。	尾戸窯又は能茶山窯
132	SK21	陶器 色絵	五寸皿 丸形	15.4	5.2	5.8	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白2.5Y8/2	外）赤・薄緑・暗褐色の上絵付による蕪 内）赤・薄緑・暗褐色の上絵付による人物・梅・圏線・瓢箪に「唐」 灰釉	外面下位無釉。外底回転ケズリ後ナデ。	

Tab.11　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
133	SK21	陶器	擂鉢	21.8	8.6	10.8	—	外）にぶい赤褐 2.5YR5/4 断）赤10R5/6	焼締め	口縁部外面に２条の凹線。口縁部内面櫛目後回転ナデ。体部外面回転ケズリ後ナデ。内面櫛目。内底に不定方向の櫛目。外底に凹凸。	堺・明石系
134	SK21 上層	陶器	擂鉢	35.0	—	—	—	外）にぶい赤褐 2.5YR5/4 断）赤10R5/6	焼締め	口縁部外面に２条の凹線。口縁部内面櫛目後回転ナデ。体部外面回転ナデ。内面櫛目。	堺・明石系
135－ab	SK21 上層	陶器	柄杓	8.2	—	—	—	外）灰白5Y8/2 断）灰白5Y8/1	内）鉄釉による圏線 灰釉	灰白色を帯びる透明の釉。	京都・信楽系
136	SK21 上層	陶器	灯明受皿	11.0	2.6	4.1	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	内面に櫛目。外面下半と外底回転ケズリ。外面無釉。灰白色を帯びる透明の釉。	京都・信楽系 口縁部外面にタール状の焦げ。
137	SK21	陶器	鍋	—	—	—	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	把手を貼付。把手は押圧し潰す。内面施釉。受部無釉。淡黄色を帯びる半透明の釉。	
138	SK21 上層	陶器	甕	28.8	—	—	—	外）暗赤褐5YR3/3 内）灰オリーブ5Y5/2 断）灰白N7/	外）鉄釉 内）灰釉	外面に暗褐色の釉を施し、黒褐色の釉を流し掛け。口縁端部と内面に灰オリーブ色の釉。	丹波
139	SK21	陶器	小瓶	—	—	3.8	—	外）にぶい黄褐 10YR5/4 断）にぶい橙 2.5YR6/4	鉄釉	内面施釉。にぶい黄褐色の釉。	能茶山窯か
140	SK21 上層	陶器	瓶か	—	—	7.2	—	外）暗赤褐5YR3/3 断）灰N6/	鉄釉	外底施釉。内面無釉。暗赤褐色の釉。	外底に銘印あり。
141	SK21 上層	陶器	不明	15.0	—	—	—	外）淡黄2.5Y8/3 内）にぶい黄橙 10YR6/3 断）灰黄2.5Y7/2	外）鉄絵による龍・青海波文 白化粧土・灰釉	内面ロクロ目。内面外面と口縁部内面まで白化粧を施し、内外面に透明の釉を施す。	
142	SK21	陶器	火鉢	—	—	—	—	外）緑 内）橙7.5YR7/6 断）灰白2.5Y8/1	外）緑釉 内）緑釉・錆釉	型作りによる獣面の双耳を貼付。外面と内面上位に緑釉。内面に錆釉を刷毛塗り。	瀬戸・美濃
143	SK21	陶器	餌猪口	7.0	2.7	5.3	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	把手を貼付。外底回転ケズリ。外底無釉。淡黄色を帯びる半透明の釉。内底に目痕3足。	
144	SK21 上層	陶器	不明	—	—	—	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y8/1	灰釉	把手。上面に楕円形の面取りを施す。灰白色を帯びる透明の釉。	尾戸窯か
145	SK21	土師質土器	小皿	7.6	1.1	5.2	—	浅黄橙10YR8/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油痕。
146	SK21	土師質土器	小皿	7.1	1.0	5.0	—	灰白10YR8/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油痕。
147	SK21 床	土師質土器	小皿	6.8	1.0	4.4	—	にぶい橙7.5YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油痕。
148	SK21	土師質土器	小皿	7.6	1.2	5.5	—	浅黄橙10YR8/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油痕。
149	SK21	土師質土器	小皿	7.8	1.3	5.0	—	にぶい橙5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	外底に墨書。
150	SK21 上層	土師質土器	小皿	7.0	1.1	4.6	—	橙5YR6/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	底部中央に径3㎜の焼成後穿孔。
151	SK21	土師質土器	白土器小皿	—	—	約6.4	—	灰白2.5Y8/1	内）型による高砂文	内底型による陽刻文様。内底ヨコナデ。外面下位と外底回転ケズリ。	尾戸窯
152	SK21 上層	土師質土器	白土器小皿	—	—	約8.5	—	灰白2.5Y8/1	内）型による松竹梅鶴亀文	内底型による陽刻文様。内面周縁ナデ。外面下位回転ケズリ後ナデ。外底ナデ。	尾戸窯
153	SK21	土師質土器	小皿	—	—	6.4	—	にぶい橙7.5YR6/4		外面下位回転ケズリ後ナデ。内面ナデ。外底直線方向のナデ。	尾戸窯
154	SK21 上層	土師質土器	杯か	9.2	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。	外面に煤。
155	SK21 上層	土師質土器	焙烙	29.8	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4		底部型作り。口縁部内外面回転ナデ。外底にチヂレ目。	関西系 外面に煤。
156	SK21	土師質土器	竈	約45.0	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4		外面上位に断面三角形の隆起帯とヘラ彫りによる列点文。内外面回転ナデ。	内面に煤。

Tab.12　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
157	SK21	土師質土器	焜炉	—	—	18.0	—	にぶい橙7.5YR7/4		輪高台を貼付。高台にアーチ状の抉りあり。高台内外面回転ナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。内底ナデ。外底に板状の圧痕。外底周縁回転ナデ。	
158－ab	SK21	瓦質土器	焜炉筒形	—	—	10.1	—	外）灰5Y5/1 内）灰白5Y7/1 断）灰白5Y7/1		窓の有無は不明。体部中位に径1.1cmの円孔。体部外面に粒状の圧痕。内面ヨコナデ。高台内外面回転ナデ。	
159	SK21	土師質土器	火消し壺	14.0	—	—	19.5	にぶい橙7.5YR7/4		外面ナデ。内面上位回転ナデ、中位ユビオサエ・ヨコナデ。	内面上位に煤。
160	SK21上層	土師質土器	火消し壺蓋	笠部径19.6	—	—	—	外）にぶい黄橙7.5YR7/3 断）にぶい黄橙7.5YR7/3・褐灰10YR5/1		天井部ナデ。口縁部外面と内面回転ナデ。	内面に煤。
161	SK21上層	瓦質土器	火鉢か	—	—	—	—	外）灰N4/ 断）灰N4/・灰白N8/		外面上位に型による陰刻文様。外面ナデ・ミガキ。内面イタナデ。粘土板接合部にナデ。	
162	SK21	土師質土器	人形	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	人物	型作り前後貼り合わせ。中実。底部に径1cmの円錐形の穴あり。胎土中に金雲母を含む。	関西産
163	SK21床	施釉土器	ミニチュア団扇	—	—	全幅7.3	—	外）にぶい黄橙10YR7/4 内）にぶい黄橙10YR7/4 断）にぶい橙7.5YR7/3	団扇 内）型による陽刻文様・鉄絵と白土による梅文 黄色の低火度釉	型作り。外面ナデ。	
164	SK21上層	施釉土器	ミニチュア団扇	—	—	—	—	外）にぶい黄橙10YR7/3 内）にぶい黄橙10YR7/3 断）にぶい橙7.5YR7/3	団扇 内）型による陽刻文様 黄色の低火度釉	型作り。外面ナデ。	
165	SK21	施釉土器	ミニチュア碗	5.0	2.1	2.0	—	外）灰白10YR8/2 内）緑 断）灰白10YR8/2	緑色の低火度釉	型押し成形。外面ナデ・チヂレ目。外面無釉。	
166	SK21上層	施釉土器	人形	—	—	—	—	外）橙5YR6/6・緑 断）にぶい橙7.5YR7/4	魚 橙・緑色の低火度釉	型押し成形左右貼り合わせ。	
177	SK23	磁器染付	小杯端反形	5.0	3.6	2.1	—	外）白 断）白	外）山水文か・圏線 高台外）圏線		肥前産
178	SK23	磁器染付	猪口	—	—	4.1	—	外）白 断）白	外）区画間に土坡・草 高台外）二重圏線 高台内）「宣徳□製」		肥前産 17世紀後半
179	SK23	陶器	碗又は鉢	14.0	—	—	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	内面ロクロ目。外面下位に回転ケズリによる稜線。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
180	SK23	陶器	中碗	—	—	5.0	—	外）灰白2.5Y7/1 断）にぶい黄橙10YR7/4	灰釉	外面ロクロ目。外面下位に回転削りによる稜線。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
181	SK23	陶器	中碗丸形	11.6	—	—	—	外）にぶい黄2.5Y6/3 断）灰黄2.5Y7/2	外）鉄絵による山水文	京焼風陶器。外面緩やかなロクロ目。にぶい黄色を帯びる透明の釉。	肥前産 1660年代～18世紀後半
182	SK23	陶器	中碗	—	—	5.5	—	外）灰白2.5Y8/2 断）淡黄2.5Y8/3	灰釉	外面下位に強いロクロ目。内面に緩やかなロクロ目。高台内に強い渦状の鉋痕。	
183	SK23	陶器	小皿変形形	9.6	2.6	4.3	—	外）灰白7.5Y7/1 断）灰白7.5Y7/1	灰釉	ロクロ成形の後口縁部を内側に押し変形させる。高台内に渦状の鉋痕。畳付と内底に灰白色の粗砂が付着。高台施釉。灰白色を帯びる半透明の釉。御本が入る。	尾戸窯

Tab.13　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
184	SK23	陶器	皿又は鉢	—	—	10.6	—	外）にぶい赤褐 5YR4/3 断）褐灰10YR6/1	鉄釉	内外面ロクロ目。高台施釉。にぶい赤褐色の釉。内底に目痕。	
185	SK24 上層	磁器 染付	五寸皿	14.2	4.3	8.4	—	外）灰白2.5GY8/1 断）白	外）如意頭連続唐草文・圏線 高台外）二重圏線 内）区画間に草花文・竹文 高台内）圏線・不明	口縁部輪花形。	肥前産 18世紀
186	SK24 下層	陶器	中碗 丸形	12.3	—	—	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白5Y7/1	外）鉄絵による格子文 灰釉	内外面ロクロ目。灰白色を帯びる透明の釉。	尾戸窯
187	SK24 下層	陶器	中碗	11.4	—	—	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白5Y7/1	外）鉄絵と白土による梅花文 灰釉	外面ロクロ目。灰白色を帯びる半透明の釉。梅花は花弁を白土、花芯を鉄釉で描く。	尾戸窯
188	SK24 上層	陶器	小皿	—	—	—	—	外）浅黄5Y7/3 断）灰白2.5Y8/1	灰釉	口縁部波縁状。オリーブ黄色を帯びる透明の釉。	瀬戸・美濃
189	SK24	陶器	灯明受皿	10.9	2.5	4.7	—	外）灰白7.5Y7/1 断）灰白2.5Y8/1	灰釉	外面下位と外底回転ケズリ。外面無釉。灰白色を帯びる透明の釉。内底に目痕。	京都・信楽系
192	SK21・SK25 下層	磁器 染付	中碗 端反形	10.5	6.1	4.4	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）帯線に鋸歯文・窓に東屋・雲気 口縁内）帯線に鋸歯文 見込み）雲・圏線 高台外）二重圏線 高台内）角枠内「茶山」	高台が撥状に開く。	能茶山窯 1820～1860年代 角枠内「茶山」銘あり。 106・192組か。
193	SK25 上層・下層	磁器 染付	中碗 端反形	10.2	6.2	4.4	—	外）白 断）白	外）波・帆掛船・圏線 口縁内）雷文帯 見込み）圏線・帆掛船	高台が撥状に開く。透明釉は貫入が入る。	能茶山窯か 1820～1860年代 193・200組か。
194	SK21・SK25 下層	磁器 色絵	小碗 端反形	9.4	4.9	3.8	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	赤の上絵付による文様 外）網目文 口縁内）網目文 高台内）角枠内銘		肥前産
195	SK21・SK25 下層	磁器 染付	中碗 端反形	10.3	6.0	4.4	—	外）白 断）白	外）唐草文・鳥・圏線 高台外）二重圏線 口縁内）雷文帯 見込み）唐草文・圏線		肥前産又は肥前系 1820～1860年代
196	SK21・SK25	磁器 染付	中碗 端反形	11.5	—	—	—	外）白 断）白	外）格子文・蝙蝠 口縁内）格子文		肥前産 1820～1860年代 107・196組。
197	SK25 下層	磁器 染付	小皿	9.5	2.8	4.5	—	外）白 断）白	外）唐草文 内）雷文帯・帆掛船	口縁部輪花形。	肥前産
198	SK25	白磁	五寸皿 菊花形	14.0	4.2	8.2	—	外）明緑灰10GY6/1 断）白	口錆	内面に型による菊弁。口縁部輪花形。透明釉は明緑灰色を帯びる。	肥前産又は肥前系
199	SK21 上層・SK25 下層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 11.2	2.9	—	摘み径 6.2	外）灰白5GY8/1 断）白	外）芭蕉・草・宝文 内）鷺	広東形碗の蓋。	肥前産又は肥前系 1780～1860年代
200	SK25 下層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.6	3.0	—	摘み径 4.3	外）灰白10Y8/1 断）白	外）帆掛船・波 内）雷文帯・圏線・水に帆掛船	透明釉は貫入が入る。	能茶山窯か 1820～1860年代 193・200組か。
201	SK21・SK25 下層	磁器 染付	鉢	16.2	7.5	9.6	—	外）白 断）白	外）帆掛船・波 口縁内）墨弾きによる波濤文 見込み）波 口縁端部に呉須	口縁部輪花形。	肥前産又は肥前系

Tab.14　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
202	SK21・SK25下層	白磁	水滴	—	7.7	—	—	外）白 断）白	型作りによる大黒天 透明の釉	型押成形前後貼り合わせ。上部と背面に径3㎜の円孔。内面ユビオサエ・ユビナデ。外底に布目。内面と外底無釉。	肥前産
203	SK25	白磁	紅皿 菊花形	3.9	2.1	1.8	—	外）白 断）白	外）型による菊弁	型押成形。外底にチヂレ目。内外面施釉。	肥前産 底部中央に焼成後穿孔。
204	SK25下層	陶器	甕	19.6	—	—	—	外）褐7.5YR4/3 内）灰オリーブ5Y5/2 断）灰白2.5Y7/1	外）鉄釉 内）灰釉	外面に褐色の釉。上位に黒褐色の釉を流し掛け。内面と口縁部内外面に灰オリーブ色の釉。	丹波
205	SK25	陶器	焜炉	16.2	—	—	—	外）緑灰10GY5/1 内）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y8/1	灰釉・銅緑釉	口縁部内面に手捏ねによる突起を貼付。体部上位に径1.5㎝の円孔。口縁部外面に緑灰色の釉を流し掛け。	瀬戸・美濃
206	SK25下層	土師質土器	白土器 小皿	—	—	5.5	—	灰白2.5Y8/1	内）型による松竹梅鶴亀文	内底型による陽刻文様。内面周縁ナデ。外面下位と外底回転ケズリ後ナデ。	尾戸窯
209	SK26下層	陶器	擂鉢	29.2	—	—	—	外）にぶい赤褐2.5YR5/4 断）橙2.5YR6/6	焼締め	口縁部外面に2条の凹線。口縁部内面櫛目後回転ナデ。体部外面回転ケズリ後ナデ。内面櫛目。	備前
210	SK26	土師質土器	不明	径2.2	全厚0.5	—	—	にぶい黄橙10YR7/2		円盤状の土製品。外面ナデ。	
211	SK26	土師質土器	不明	—	—	—	—	にぶい橙5YR6/4	外）型による文様	型押し成形。内面ユビオサエ・ナデ。	
212	SK28	白磁	小杯 端反形	—	—	—	—	外）白 断）白	外）丸彫りによる鎬		肥前産 1630～1650年代
213	SK29	土師質土器	小皿	7.7	1.5	3.4	—	橙5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
214	SK30	磁器 染付	小碗 丸形	8.0	3.9	3.4	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白N8/	外）草花文・圏線 高台外）二重圏線	畳付に砂が付着。	肥前産
215	SK30	陶器	不明 箱形か	—	—	—	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	たたら成形。内面施釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
216	SK30	陶器	小瓶	—	—	2.6	—	外）灰赤2.5YR4/2 断）褐灰7.5YR6/1	鉄釉	外面中位を押圧し窪ませる。内面ロクロ目。外底回転糸切り。内面無釉。灰赤色の釉。	
217	SK30	陶器	擂鉢	31.6	—	—	—	外）にぶい赤褐2.5YR4/4 断）橙2.5YR6/6	焼締め	口縁部外面に2条の凹線。口縁部内面回転ナデ。体部外面回転ナデ。内面櫛目。外面ロクロ目。	備前 17世紀後半
218	SK30	土師質土器	小皿	7.2	1.2	3.4	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
219	SK30	土師質土器	小皿	7.4	1.2	4.8	—	浅黄橙7.5YR8/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
220	SK31	白磁	小杯	6.2	4.1	3.0	—	外）白 断）白		外面に鉋痕が残る。高台内兜巾状。高台施釉。畳付に砂が付着。	肥前産
221	SK33	青花	皿	—	—	—	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白N8/	内）玉取獅子		中国 景徳鎮窯系 15世紀後半～16世紀前半
222	SK33	磁器 染付	猪口	—	—	4.1	—	外）白 断）白	外）区画間に土坡・草 高台外）二重圏線 高台内）「宣徳年製」		肥前産 17世紀後半
223	SK34	陶器	中碗 丸形	11.0	—	—	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	淡黄色を帯びる透明の釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
224	SK34	陶器	中碗 丸形	11.7	—	—	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	灰黄色を帯びる透明の釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
225－ab	SK37	陶器	中碗 丸形	12.6	—	5.2	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	高台内兜巾状。高台施釉。淡黄色を帯びる透明の釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
226	SE1 1層	磁器 染付	小碗 丸形	9.0	5.0	3.3	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白N8/	外）圏線 高台外）二重圏線	呉須は暗青灰色に発色。畳付に砂が付着。	肥前産 18世紀

Tab.15　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
227	SE1 1層	磁器 染付	碗	—	—	3.8	—	外）白 断）白	外）草花文・圏線 高台外）二重圏線 高台内）圏線	畳付に白色の砂が付着。	肥前産
228	SE1 1層	磁器 染付	小碗	—	—	4.2	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）圏線 高台外）二重圏線	透明釉は白濁する。	肥前産
229	SE1 1層	磁器 染付	碗	—	—	—	—	外）白 断）白	外）雨降り文・コンニャク印判による桐文	呉須は暗青灰色に発色。	肥前産 17世紀末～18世紀前半
230	SE1 1層	磁器 染付	碗	—	—	—	—	外）白 断）白	外）コンニャク印判による花唐草文・圏線	呉須は暗青灰色に発色。	肥前産 17世紀末～18世紀前半
231	SE1 1層	磁器 染付	小杯	5.6	3.6	2.8	—	外）白 断）白	外）雨降り文		肥前産 17世紀末～18世紀前半
232	SE1 3層	白磁	小杯 端反形	5.9	—	—	—	外）白 断）白	外）丸彫りによる鎬		肥前産 1630～1650年代
233	SE1 1層	磁器 染付	五寸皿 端反形	14.0	—	—	—	外）白 断）白	外）唐草文か 内）松文 口錆	唐草文は2本線描きによる。	肥前産 17世紀後半 233・234同一個体又は揃い。
234	SE1 1層	磁器 染付	皿 端反形	—	—	—	—	外）白 断）白	外）唐草文か 内）松文 口錆	唐草文は2本線描きによる。	肥前産 17世紀後半 233・234同一個体又は揃い。
235	SE1 1層	磁器 染付	小碗又は猪口	6.6	—	—	—	外）白 断）白	外）竹文		肥前産
236	SE1 1層	青磁	猪口 桶形	8.0	5.9	5.0	—	外）明オリーブ灰2.5GY7/1 内）灰白10Y8/1 断）灰白N8/	外）青磁釉 内）透明釉	釉は焼成不良で白濁。	肥前産
237	SE1 3層	白磁	猪口 桶形	7.5	5.9	5.1	—	外）白 断）白			肥前産
238	SE1 4層	磁器 染付	蓋物蓋	笠部径 12.1	—	かえり径 10.7	—	外）白 断）白	外）丸に東屋山水文・唐草文・二重圏線	内面施釉。かえり無釉。	肥前産
239	SE1 4層 ・SX1	青磁	鉢	—	—	18.6	—	外）灰オリーブ7.5YR6/2 断）灰白N8/	内）片切彫りによる花文	高台内を蛇ノ目釉剥ぎし錆釉を塗布。釉剥ぎ部にチャツとみられる円圏状の溶着痕。	肥前産
240	SE1 1層	陶器	皿か	—	—	—	—	外）灰5Y6/1 断）灰白5Y7/1	灰釉	外面に緩やかなロクロ目。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
241	SE1 1層	陶器	中皿	24.2	—	—	—	外）にぶい褐7.5YR6/3 内）灰褐7.5YR6/2 断）にぶい褐7.5YR6/3	内）印花による白象嵌 灰釉	三島手。外面下半無釉。	肥前産
242	SE1 1層	陶器	擂鉢	26.0	—	—	—	外）灰黄褐10YR5/2・にぶい褐7.5YR5/3 断）灰褐7.5YR6/2	焼締め	口縁部外面に2条の凹線。口縁部内面回転ナデ。体部外面回転ナデ。内面櫛目。外面ロクロ目。	備前
243	SE1 1層	陶器	不明	—	—	—	—	外）明褐灰7.5YR7/2・灰白5Y7/1 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	外底ナデ。内面施釉。外底無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
244	SE1 3層	土師質土器	小皿	7.4	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/2		内外回転ナデ。	口縁部に灯芯油痕。
245	SE1 1層	土師質土器	小皿	8.5	1.7	4.4	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
246	SE1 1層	窯道具	匣鉢	24.8	6.2	25.0	—	外）褐灰7.5YR6/1 断）浅黄橙7.5YR8/3	胎土中に粗砂・小礫を多く含む。	口縁部から切り込む窓をもつ。内外面ロクロ目。外底糸切り。外面は使用により変色。	尾戸窯か
247	SE1 1層	窯道具	匣鉢	17.5	—	—	—	外）灰黄褐10YR6/2 断）浅黄橙7.5YR8/3	胎土中に粗砂・小礫を多く含む。	口縁部から切り込む窓をもつ。内外面強いロクロ目。外面は使用により変色。	尾戸窯か
248	SE1 1層	窯道具	匣鉢	—	—	22.2	—	外）にぶい橙7.5YR7/4 断）にぶい橙7.5YR7/4	胎土中に粗砂・小礫を多く含む。	内外面ロクロ目。外底糸切り。底部脇に指痕あり。	尾戸窯か

Tab.16　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
249	SE1 1層	窯道具	匣鉢	—	—	18.8	—	外）にぶい褐 7.5YR5/3 断）にぶい黄橙 10YR7/2	胎土中に粗砂・小礫を多く含む。	内外面ロクロ目。外底糸切り。外面は変色。	尾戸窯か
250	SE1 1層	窯道具	匣鉢	18.5	—	—	—	外）にぶい橙5YR6/4 断）浅黄橙10YR8/3	胎土中に粗砂・小礫を多く含む。	内外面ロクロ目。外面は変色。	尾戸窯か
251	SE1 1層	窯道具	匣鉢	—	—	14.4	—	外）灰褐7.5YR5/2 断）黄灰2.5Y6/1	胎土中に粗砂を多く含む。	内外面ロクロ目。外底糸切り。外底周縁に別個体匣鉢の口縁部溶着痕あり。外面に自然釉。	尾戸窯か
252	SE1 1層	窯道具	匣鉢	—	—	16.8	—	外）にぶい橙 7.5YR6/4 断）にぶい橙 7.5YR7/4	胎土中に粗砂・小礫を多く含む。	内外面ロクロ目。外底糸切り。	尾戸窯か
253	SE1 1層	窯道具	匣鉢	18.8	—	—	—	外）にぶい赤褐 5YR4/3 断）灰白2.5Y8/1	胎土中に粗砂を多く含む。	窓の有無は不明。内外面ロクロ目。口縁部外面に粘土塊の剥離痕が残る。外面に自然釉。	尾戸窯か
254	SE1 5層	窯道具	匣鉢	—	—	16.0	—	外）にぶい褐 7.5YR6/3 断）浅黄橙7.5YR8/3	胎土中に粗砂・小礫を多く含む。	内外面ロクロ目。外底糸切り。外面は変色。	尾戸窯か
255	SE1 1層	窯道具	匣鉢	—	—	—	—	外）灰黄褐10YR5/2 断）にぶい黄橙 10YR7/2	胎土中に粗砂を多く含む。	内外面ロクロ目。外面は変色。外面に自然釉がかかる。	尾戸窯か
256	SE1 1層	窯道具	匣鉢	—	—	—	—	外）灰褐7.5YR6/2 断）灰白10YR7/1	胎土中に粗砂・小礫を多く含む。	内外面強いロクロ目。外底糸切り。外面は変色。内底に自然釉がかかる。	尾戸窯か
265	P21	磁器染付	碗又は皿	—	—	4.4	—	外）白 断）白	内）不明		肥前産
266	P21	陶器	小皿	—	—	4.6	—	外）灰5Y6/1 断）にぶい褐 7.5YR6/3	灰釉	唐津系灰釉陶器。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。内底に砂目。	肥前産 1610～1630年代
267	P21	陶器	灯明受皿	8.2	—	—	—	外）赤褐10R4/3 断）赤褐10R5/4	錆釉	外面回転ケズリ。内面と口縁部外面施釉。外面無釉。赤褐色の釉。	備前
268	P38	陶胎染付	中碗	—	—	6.4	—	外）灰白10Y7/1 断）灰白5Y7/1	外）山水文・圏線 高台外）二重圏線	呉須は青灰色に発色。透明釉は貫入が入る。	肥前産 17世紀末～18世紀前半
269	P45	窯道具	匣鉢	—	—	約17.0	—	外）にぶい橙5YR6/4 断）にぶい黄橙 10YR7/2	胎土中に小礫を含む。	内外面ロクロ目。外底糸切り。外底に粘土塊が溶着。	尾戸窯か
270	P51	白磁	紅皿菊花形	4.6	1.4	1.2	—	外）白 断）白	外）型による菊弁	型押成形。外面チヂレ目。外面下半無釉。	肥前産 1780～1860年代
271	P47	磁器染付	大皿	約32.5	—	—	—	外）白 断）白	外）不明 内）宝文 口縁部に呉須	口縁部稜花形。	肥前産
272	P47	陶器	小碗	8.0	—	—	—	外）暗赤褐5YR3/3 断）灰白2.5Y8/1	鉄釉	暗赤褐色の釉。	
273	P48	青磁	鉢	約34.6	—	—	—	外）灰白10Y7/2 断）灰白5Y8/1	青磁釉	オリーブ灰色を帯びる半透明の釉。	肥前産
274	P56	陶器	小皿	13.2	—	—	—	外）灰褐7.5YR5/2 断）灰褐7.5YR5/2	内）白化粧土打刷毛目 灰釉		肥前産 17世紀第4四半期～18世紀前半
275	P57	磁器染付	小碗端反形	9.6	5.7	4.2	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	外）山水文・圏線 高台外）二重圏線 高台内）圏線	畳付に灰白色の砂が付着。	肥前産
276	P57	陶器	中碗丸形	11.6	—	—	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	淡黄色を帯びる半透明の釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
277	P73	陶器	皿又は鉢	約21.2	—	—	—	外）灰白2.5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1	口錆 灰釉	口縁部稜花形。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
278	P82	土師質土器	杯又は小皿	—	—	5.2	—	にぶい橙7.5YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内面に強い多段のロクロ目。	
279	P105	陶器	土瓶	7.6	—	—	—	外）緑灰10GY5/1 断）黄灰2.5Y6/1	銅緑釉	内面と口縁端部無釉。緑灰色の釉。	
280	P105	陶器	中碗丸形	11.2	—	—	—	外）灰白10YR8/2 断）浅黄橙10YR8/3	灰釉	釉は焼成不良気味で白濁。御本が入る。	尾戸窯か

Tab.17　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
281	P96	青磁	碗	—	—	—	—	外）灰オリーブ5Y5/2 断）灰白2.5Y8/2	外）細線刻蓮弁文 青磁釉	灰オリーブ色の半透明の釉。	中国 龍泉窯系 15世紀～16世紀前半
282	P58	土師質土器	人形	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	千手観音	型作り前後貼り合わせ。背面は接合部で剥離。	
284	埋甕1	陶器	甕	27.8	35.8	16.3	33.2	外）灰褐7.5YR4/2 内）暗褐7.5YR3/3 断）灰白10YR7/1	鉄釉	外面上位に多条の沈線。内面ロクロ目。内面下位に粘土帯接合痕。外底ナデ。内面施釉。外底施釉で中央の釉は拭き取る。外面上位に黒色の釉を流し掛け。内面に鉄釉を刷毛塗り。内底に灰白色の粗砂による円形の砂目。	能茶山窯か 底部横に焼成後穿孔。
285	埋甕2	陶器	甕	—	—	22.5	—	外）にぶい赤褐5YR4/3 断）褐灰7.5YR5/1	鉄釉	内面ロクロ目。外底に板状の圧痕とナデ。内面施釉。にぶい赤褐色の釉。内底に目痕5足。	能茶山窯
286	SX1	磁器染付	小碗端反形	7.6	—	—	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）宝文		肥前産
287	SX1	青磁	中碗	10.4	—	—	—	外）明緑灰7.5GY7/1 断）灰白N8/	青磁釉		肥前産 1630～1650年代
288	SX1	白磁	小碗端反形	8.4	—	—	—	外）白 断）白	白磁釉		肥前産
289	SX1	磁器染付	猪口	6.5	—	—	—	外）白 断）白	外）二重圏線 高台内）圏線	透明釉は貫入が入る。	肥前産
290	SX1	磁器染付	中皿折縁形	19.4	—	—	—	外）灰白N8/ 断）白	内）櫛歯文・圏線・不明文様		肥前産 1620～1640年代
291	SX1	陶器	中碗	11.4	—	—	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	灰白色を帯びる透明の釉。御本が入る。	尾戸窯
292	SX1	陶器	中碗	11.4	—	—	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）灰白5Y7/1	灰釉	灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。御本が入る。	尾戸窯か
293	SX1	陶器	中碗	10.0	—	—	—	外）にぶい黄橙10YR7/4 断）浅黄橙10YR8/3	灰釉	内外面ロクロ目。外面下位無釉。透明の釉が薄く掛かる。	尾戸窯又は京都
294	SX1	陶器	中碗	11.0	6.1	5.4	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰黄2.5Y7/2	灰釉	京焼風陶器。外底中央に円圏状の段。高台無釉。灰黄色を帯びる透明の釉。	肥前産 17世紀後半 高台内に銘印あり。
295	SX1	陶器	中碗	—	—	4.9	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
296	SX1	陶器	碗	—	—	3.4	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる透明の釉。	京都又は京都系
297	SX1	陶器	中皿	—	—	7.5	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰黄2.5Y7/2	灰釉	京焼風陶器皿か。高台無釉。灰黄色を帯びる透明の釉。	肥前産
298	SX1	陶器	小皿	—	—	4.6	—	外）灰7.5Y6/1 断）灰白N7/	灰釉	唐津系灰釉陶器。高台内無釉。畳付に粗砂が付着。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。内底に砂目。	肥前産 1610～1630年代
299	SX1	陶器	擂鉢	18.8	—	—	—	外）にぶい赤褐5YR4/3 断）黄灰2.5Y6/1	鉄釉	外面ロクロ目。内面櫛目。	丹波か
300	SX1	土師質土器	杯又は小皿	—	—	5.8	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。内面ロクロ目。外底回転糸切り。	
301	SX1	窯道具	トチン	6.0	5.5	6.5	—	外）にぶい橙5YR7/3 断）にぶい橙5YR7/4	胎土中に粗砂を多く含む。	外面ユビオサエ・ナデ。	尾戸窯か
302	SX3	磁器染付	中碗端反形	10.6	—	—	—	外）灰白7.5GY8/1 断）白	外）植物・圏線 口縁内）二重圏線 見込み）圏線	胎土は透明感をもつ。	関西系 19世紀前半～中葉
303	SX3	磁器染付	中碗端反形	10.8	—	—	—	外）白 断）白	外）花文か 口縁内）帯線・圏線		肥前産 1820～1860年代
304	SX3	磁器染付	中碗丸形	10.3	—	—	—	外）白 断）白	外）唐草文・圏線	唐草文は2本線描きによる。	肥前産
305	SX3	磁器染付	猪口桶形	7.7	5.8	5.6	—	外）灰白10Y8/1 断）白	外）植物・土坡・二重圏線 口縁内）四方襷 見込み）圏線	透明釉は貫入が入る。	肥前産

Tab.18　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
306	SX3	白磁	小杯 端反形	6.2	—	—	—	外）灰白7.5Y7/1 断）白		高台無釉。	肥前産
307	SX3 上層	青磁 染付	中碗 丸形	11.3	6.2	4.6	—	外）明緑灰10GY7/1 内）灰白2.5GY8/1 断）灰白N8/	外）青磁釉 口縁内）四方襷 見込み）二重圏線・手描きによる五弁花文 高台内）角枠内渦「福」		肥前産 18世紀後半
308	SX3	陶器	中碗 丸形	11.4	—	—	—	外）灰白5Y7/2 断）灰黄2.5Y7/2	灰釉	灰白色を帯びる透明の釉。	尾戸窯
309	SX3	陶器	小皿 丸形	12.4	—	—	—	外）暗褐7.5YR3/3 断）褐灰10YR6/1	鉄釉	外面中位に沈線。暗褐色の釉。見込み蛇ノ目釉剥ぎ後白土を施す。	能茶山窯 1820年代以降
310	SX3	土師質 土器	小皿	7.0	1.0	5.6	—	にぶい黄橙10YR7/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油痕。
312	Ⅱ層	陶胎 染付	中碗 腰張形	11.4	—	—	—	外）灰白7.5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1	外）東屋山水文か・二重圏線	内外面白化粧後透明釉。呉須は暗緑灰色に発色。	肥前産 17世紀末～18世紀前半
313	Ⅱ層	青磁 染付	中碗 丸形	10.3	5.5	4.2	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	外）青磁釉 見込み）手描きによる五弁花文	明緑灰色の釉。	肥前産 18世紀
314	Ⅱ層	磁器 染付	小杯 端反形	7.8	3.9	3.0	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白N8/	外）不明	透明釉は白濁する。畳付に白色の砂が付着。	肥前産
315	Ⅱ層	磁器 染付	小杯	5.8	3.7	2.6	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）蘭	外面に緩やかなロクロ目。外底に灰白色の粗砂が付着。	肥前産 1630～1640年代
316	Ⅱ層	青磁	鉢 端反形	—	—	—	—	外）オリーブ灰 5GY6/ 断）灰白N8/	青磁釉	オリーブ灰色の釉。	肥前産
317	Ⅱ層	磁器 染付	五寸皿 丸形	13.8	3.6	9.5	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）如意頭連続唐草文・圏線 高台外）二重圏線 内）菊花・丸に不明文様	蛇ノ目凹形高台。呉須は暗青灰色に発色。	肥前産
318	Ⅱ層	磁器 染付	蓋物蓋	笠部径 8.15	2.4	かえり径 6.8	—	外）白 断）白	外）変形字・蝶・雷文帯	内面施釉。かえり無釉。かえりにアルミナ砂を塗布。	肥前産
319	Ⅱ層	磁器 染付	仏飯器	5.5	—	—	—	外）白 断）白	外）半菊文		肥前産
320	Ⅱ層	磁器 染付	不明	3.2	—	—	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）不明	内面無釉。	肥前産
321	Ⅱ層	土師質 土器	五徳か	27.0	6.2	22.0	—	にぶい橙5YR6/4	胎土中に金雲母を含む。	内外面回転ナデ。	関西産 口縁部内面と内面上位に強い煤と吹きこぼれ状の滲み。体部外面に煤。
322	Ⅱ層	窯道具	トチン	6.9	7.2	7.3	—	外）灰白7.5YR8/1 断）にぶい橙 7.5YR6/4		外面ナデ・ユビオサエ。底部凹凸。上面と側面に自然釉。	尾戸窯か 上面に印刻による窯印あり。
323	Ⅰ層	磁器 染付	小碗 丸形	9.0	4.8	3.3	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）圏線・山水文 高台外）圏線	畳付に砂が付着。	肥前産
324	Ⅰ層	磁器 染付	五寸皿 丸形	13.2	3.8	7.4	—	外）灰白7.5Y8/1 断）灰白N8/	外）連続唐草文・圏線 高台外）二重圏線 内）花唐草文・土坡に草・二重圏線 高台内）圏線 口錆	畳付に灰白色の砂が付着。	肥前産
325	Ⅰ層	磁器 染付	五寸皿 端反形	13.1	4.3	8.0	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）連続唐草文・圏線 高台外）二重圏線 内）唐草文・雪輪・二重圏線 高台内）圏線	口縁部輪花形。唐草文は2本線描きによる。	肥前産
326	Ⅰ層	磁器 染付	餌猪口	5.4	2.5	4.7	—	外）白 断）白	外）草花文	摘みを貼付。外底回転ケズリ。外底無釉。	肥前産

Tab.19　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
327	Ⅰ層	白磁	小杯 端反形	6.4	4.1	2.7	—	外）白 断）白	白磁釉	高台無釉。	肥前産 1630～1650年代
328	Ⅰ層	陶器	大碗 丸形	15.0	—	—	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）灰白5Y7/1	灰釉	外面下位に回転ケズリによる稜線。オリーブ灰色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯か
329	撹乱	陶器	中碗 丸形	11.8	7.7	4.8	—	外）浅黄2.5Y7/3 断）白	灰釉	高台施釉。浅黄色を帯びる透明の釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
330	Ⅰ層	陶器	中碗	11.2	—	—	—	外）灰白7.5Y7/1 断）灰白7.5Y7/1	灰釉	外面に緩やかなロクロ目。灰白色を帯びる透明の釉。	
331	Ⅰ層	陶器	中碗	—	—	5.0	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	外面下位回転ケズリ後ナデ。外面下位無釉。灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	
332	Ⅰ層	陶器	中碗	9.0	—	—	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y8/1	灰釉	外面ロクロ目。灰オリーブ色を帯びる透明の釉。口縁部外面に別個体の陶器片が溶着。	
333	Ⅰ層	陶器	小碗	—	—	4.4	—	外）灰オリーブ7.5Y6/2 断）灰白5Y7/1・にぶい黄橙10YR7/3	灰釉	高台無釉。釉は焼成不良で白濁。	尾戸窯
334	Ⅰ層	陶器	小碗 杉形	—	—	3.5	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白2.5Y8/2	外）鉄絵による若松文 灰釉	高台無釉。	京都・信楽系 18世紀後半
335	撹乱	陶器	餌猪口	5.1	2.1	3.8	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	把手無し。外底回転ケズリ。外面下位無釉。灰白色の釉。釉は焼成不良気味で白濁。	
336	撹乱	陶器	灯明受 皿	6.5	5.0	3.1	—	外）黒褐7.5YR3/2 断）褐灰10YR5/1	鉄釉	外底回転糸切り。外面下位無釉。黒褐色の釉。	能茶山窯 1820年代以降
337	Ⅰ層	陶器	土瓶蓋 又は 急須蓋	笠部径 6.2	2.5	かえり径 4.3	摘み径 2.1	外）灰白10Y8/1 内）灰黄褐10YR6/2 断）褐灰10YR6/1	外）鉄絵と呉須による文様 白化粧土・灰釉	外面型作りによる籠状の文様。松笠形の摘みを貼付。径2㎜の円孔あり。	
340	SK14	陶器	植木鉢	4.8	3.7	2.6	—	外）にぶい赤褐5YR5/4 断）にぶい橙5YR6/4	焼締め	内外面回転ナデ。外底回転糸切り。底部に径4㎜の円孔。	近代
341	SK10	陶器	瓶 徳利	3.8	24.3	8.7	14.2	外）灰白2.5Y8/2 内）暗赤褐2.5YR3/1 断）褐灰5YR4/1	外）酸化コバルトによる文字「廿代筋　土佐酒造株式會社　名酒若□」 白化粧土・透明釉・鉄釉	内面ロクロ目。内面施釉。高台内無釉。外面白化粧後透明釉。内面暗赤褐色の釉。	能茶山窯か 近代
342	SK10	陶器	瓶 徳利	3.0	24.9	8.8	14.7	外）暗赤褐5YR3/2 断）褐灰7.5YR4/1	外）白土イッチン描きによる文字「高知　篠原□□形北通」「銘□一等賞　富士未三十七号」 鉄釉	内面ロクロ目。内面施釉。高台内無釉。暗赤褐色の釉。	能茶山窯か 近代
343	SD1	磁器 染付	小碗 丸形	8.8	5.2	3.7	—	外）白 断）白	外）竹・草花 高台外）圏線 高台内）角枠内渦「福」	透明釉は焼成不良気味で白濁する。	肥前産 17世紀末～18世紀
344	SD1 上層	磁器 染付	小皿 盤形	9.4	2.4	5.8	—	外）白 断）白	外）帯線 内）山水文		肥前産
345	SD1	磁器 染付	五寸皿 丸形	13.4	3.5	8.0	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）連続唐草文・圏線 高台外）二重圏線 内）桜・二重圏線 高台内）圏線・不明		肥前産
346	SD1	磁器 染付	極小皿 変形形	—	1.0	—	—	外）白 断）白	内）コンニャク印判による文様	貼付高台。透明釉は貫入が入る。呉須は暗青灰色に発色。	肥前産
347	SD1 上層・下層	磁器 染付	薄手酒 杯	7.4	2.8	2.8	—	外）白 断）白	高台外）櫛歯文	薄手。	肥前産 19世紀前半～中葉

Tab.20　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
348	SD1 礫集中	陶器	中碗	—	—	5.8	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	京焼風陶器。外底中央に円圏状の段。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。文様の有無は不明。	肥前産 1660～1690年代 高台内に「清水」銘印あり。
349	SD1 礫集中	陶器 色絵	小皿	—	—	—	—	外）緑 断）灰白2.5Y8/2	内）型による花文 緑色の釉	内面型による陽刻文様。内外面施釉。	珉平焼
350	SD1 上層	陶器 色絵	不明	—	—	6.2	—	外）黄橙10YR7/8 断）灰白2.5Y8/2	黄橙色の釉	内面施釉。高台無釉。	珉平焼
351	SD1 上層	陶器	小皿	—	—	—	—	外）灰黄2.5Y6/2 断）にぶい黄橙 10YR6/3		唐津系灰釉陶器。口縁部溝縁状。灰黄色を帯びる半透明の釉。	肥前産 1610～1630年代
352	SD1 下層	陶器	小皿	—	—	4.5	—	外）にぶい黄橙 10YR7/2 断）灰白10YR8/1	灰釉	高台施釉。灰白色を帯びる半透明の釉。内底と畳付に砂目。	肥前 内野山窯 17世紀
353	SD1 下層	陶器	蓋	—	—	4.0	—	外）灰オリーブ5Y5/2 断）黄灰2.5Y6/1	灰釉	手捏ねによる亀形の摘みを貼付。内外面回転ナデ。外底回転糸切り。外底無釉。灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	尾戸窯
354	SD1 中層	陶器	蓋	笠部径 10.1	—	—	—	外）灰白5Y8/1 断）にぶい黄橙 10YR7/3	外）鉄絵による竹文 口錆 白化粧土・灰釉	内外面白化粧後透明の釉。	瀬戸・美濃か
355	SD1 上層	陶器	不明	—	—	15.4	—	外）灰白7.5Y8/1 断）灰白10YR8/2	樽形 灰釉	外面下位に粘土帯を貼付しヘラによる斜方向のキザミ。底部の1箇所に長方形の孔を穿ち注口を貼付。内面無釉。外底施釉。灰白色の釉。	尾戸窯か
356	SD1 上層	土師質 土器	白土器 小皿	11.0	2.5	6.4	—	灰白10YR8/2	無文	内外面ヨコナデ。外底直線方向のナデ。	尾戸窯 口縁部にタール状の焦げ。
357	SD1 下層	土師質 土器	焜炉	16.7	—	—	—	外）灰白2.5Y8/1 断）にぶい橙5YR7/4	白化粧土	内外面回転ナデ。口縁部に手捏ねによる突起を貼付。体部上位の数箇所に円孔。内外面に白土。	口縁部に煤。
358	SD1 下層	土師質 土器	焜炉 筒形	—	—	—	—	にぶい橙5YR6/4	胎土中に金雲母を含む。	窓をもつ。外面ナデ・ミガキ。内面イタナデ。	関西産 窓の右側に角枠内「三□□製造□樅山勇」銘印あり。
359	SD1	施釉 土器	ミニチュア 釜蓋	径 2.9	1.2	—	—	外）橙2.5YR6/8 断）橙5YR6/6	橙色の低火度釉	型押し成形。下面ユビオサエ・ナデ。上面施釉。内面無釉。	
360	SD1 床	施釉 土器	ミニチュア 鍋	5.2	—	—	—	外）橙5YR7/6 内）橙2.5YR6/6 断）浅黄橙10YR8/3	橙色の低火度釉	把手の有無は不明。内外面回転ナデ。内面施釉。外面無釉。	
361	SD1 下層	土師質 土器	泥面子	径 2.0	0.5	—	—	橙5YR7/6	花文	型押し成形。上面に型による陽刻文様。下面ナデ。	
362	SD1 上層	土師質 土器	泥面子	径 2.4	全厚 0.7	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	三ッ葉柏文	型押し成形。上面に型による陽刻文様。下面ユビオサエ・ナデ。	
365	SD1 上層	土師質 土器	土錘	全長 4.8	全厚 1.5	全幅 1.5	重量 8.8g	橙5YR6/6		外面ユビオサエ・ナデ。径0.5cmの穿孔。	
366	SD1 上層	窯道具	匣鉢	22.8	—	—	—	外）灰褐7.5YR5/2 断）にぶい黄橙 10YR7/3	胎土中に粗砂を多く含む。	内外面強いロクロ目。外面は自然釉がかかり変色。	尾戸窯か
367	SD1	窯道具	匣鉢	—	—	18.7	—	外）にぶい黄褐 10YR5/3 断）にぶい黄橙 10YR7/3	胎土中に粗砂を多く含む。	内外面ロクロ目。外底回転糸切り。	尾戸窯か
368	SD1 上層	窯道具	ハマ	径 5.7	0.9	4.3	—	外）にぶい黄橙 10YR7/3 断）灰白2.5Y8/1		上面ナデ。下面回転ケズリ。下面周縁に円錐ピンの剥離痕。上面に製品の高台痕が残る。	尾戸窯か
369	SD1 上層	窯道具	ハマ	径 9.4	1.3	6.9	—	外）にぶい褐 7.5YR6/3 断）灰白N7/		上面回転糸切り。下面回転ナデ。上面に輪状の高台痕。下面周縁に灰白色の円錐ピンの剥離痕。	尾戸窯か

Tab.21　遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
371	SD1 上層	磁器 染付	中碗 丸形	10.4	5.3	3.1	—	外）白 断）白	型紙刷り・酸化コバルトによる文様 外）扇・団扇・菊花・唐草文 口縁内）宝珠繋ぎ 見込み）松竹梅円形文・菊花・圏線		肥前産又は肥前系 近代 明治10年代以降
372	SD1 下層	磁器 染付	中碗 平形	14.3	4.7	4.8	—	外）灰白N8/ 断）灰白N8/	型紙刷り・酸化コバルトによる文様 外）窓に菊花・唐草文 高台外）圏線 口縁内）宝珠繋ぎ	畳付に灰白色の砂が付着。	肥前産又は肥前系 近代 明治10年代以降
373	SD1 上層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 10.8	2.1	—	摘み径 4.8	外）白 断）白	型紙刷り・酸化コバルトによる文様 外）唐子・菊花・唐草文 摘み外）縞 摘み内）圏線 内）宝珠繋ぎ		肥前産又は肥前系 近代 明治10年代以降
374	SD1 上層	磁器 染付	段重	9.6	3.1	9.2	—	外）白 断）白	銅板刷り・酸化コバルトによる文様 外）花唐草文	内面と外底施釉。口縁部内面と端部無釉。高台脇無釉。	肥前産又は肥前系 近代 明治20年代以降
375	SD1 上層・下層	陶器	擂鉢	30.0	—	14.3	—	外）暗赤褐5YR3/3 断）褐灰5YR5/1	鉄釉	外面と内面上位に暗赤褐色の釉。体部外面回転ナデ。内面に浅く細かい櫛目。内底に不定方向の櫛目。外底に粗砂が付着。	能茶山窯か 近代
376	SD1 下層	陶器	土管	接合部径 32.9	—	—	径 27.0	外）暗赤褐5YR3/3 断）にぶい橙 7.5YR6/4	鉄釉	内面にロクロ目。内面施釉。接合部内外面無釉。暗赤褐色の釉。	近代 能茶山窯か
377	SD1 上層	磁器 染付	蓋	笠部径 4.7	0.7	かえり径 3.2	—	外）白 断）白	外）鹿・「鹿印 練歯磨」	型押し成形。内面にチヂレ目。内面施釉。かえり無釉。	近代 明治26年発売
381	撹乱	磁器 染付	中碗 丸形	9.8	4.1	3.1	—	外）白 断）白	酸化コバルト銅板転写による文様 外）玩具・二重圏線 高台外）圏線		肥前産又は肥前系 近現代
382	Ⅰ層	陶器	徳利	—	—	—	—	外）灰白10Y8/1 内）オリーブ褐 2.5Y4/3 断）褐灰10YR5/1	外）酸化コバルトによる文字「銘酒」 白化粧土・透明釉	内面施釉。外面白化粧の後透明釉。	能茶山窯 近代
383	撹乱	陶器	不明	—	—	—	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	透明釉	外底に緑色の釉下彩による裏印。	近現代 裏印あり。
384	撹乱	陶器	おろし皿	10.0	2.7	4.8	—	外）にぶい橙 7.5YR6/4 断）浅黄橙10YR8/3	灰釉	内底におろし目。外面下半無釉。内面施釉。	能茶山窯か 近代又は近世
385	Ⅰ層	陶器	擂鉢	17.4	7.3	7.6	—	外）黒褐7.5YR3/1 内）にぶい橙5YR6/3 断）灰褐5YR6/2	鉄釉	口縁部外面に2条の凹線。体部内面から内底まで連続した櫛目。外面上半と口縁部内面に黒褐色の釉。	能茶山窯か 近代
386	撹乱	陶器	擂鉢	34.0	—	—	—	外）黒褐5YR3/ 断）褐灰5YR5/1	鉄釉	口縁部外面に2条の凹線。体部内面櫛目。口縁部内面櫛目後回転ナデ。内面無釉。暗赤褐色の釉。	能茶山窯か 近代
387	Ⅰ層	陶器	灯明受皿	7.2	5.3	5.1	—	外）明赤褐5YR3/3 断）黄灰2.5Y6/1	鉄釉	外底回転糸切り。外面下位無釉。明赤褐色の釉。	能茶山窯か 近代
388	撹乱	土師質土器	焜炉	30.0	28.4	29.9	33.6	にぶい橙7.5YR6/4・黒褐7.5YR3/1	胎土中に金雲母を含む。	貼付高台。窓の有無は不明。体部上位に径1.5cmの円孔。口縁部内外面回転ナデ。内面の粘土帯接合部付近にユビオサエ。体部外面イタナデ・ミガキ。体部内面ヨコハケ。外底イタナデ。	内面に煤。

Tab.22　遺物観察表（石製品・金属製品・ガラス製品・骨格製品）

図版番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）			重量（g）	特徴・使用痕他
				全長	全厚	全幅		
59	SK15	銅製品	切羽	—	0.1	—	［3.5］	周縁に刻み目。
167	SK21 上層	石製品	砥石	［9.9］	2.2	5.2	［172.2］	凝灰岩製。上面と下面は使用により窪む。刃物を研いだとみられる筋状の痕が残る。
168	SK21 上層	石製品	砥石	［6.4］	2.0	5.1	［80.0］	砂岩製。上面と下面は使用により窪む。刃物を研いだとみられる筋状の痕が残る。
169	SK21 上層	石製品	砥石	［7.5］	4.1	5.0	［19.8］	凝灰岩製。側面は使用により窪む。
170	SK21 上層	骨格製品か	不明	［6.5］	0.4	0.9	［6.0］	用途不明の棒状製品。断面楕円形。
171	SK21 下層	銅製品	匙	［7.8］	0.1	［4.6］	［10.6］	
172	SK21	銅製品	煙管 雁首	火皿径 1.4	—	—	—	ラウ接合部は欠損する。
173	SK21 上層	銅製品	煙管 吸口	全長 約7.8	ラウ接合部径 約1.1	吸口径 0.4	［13.4］	側面に接合痕。歪みあり。
174	SK21 上層	銅製品	雁首銭	径 2.5×2.2	厚さ 2.0	—	3.4	煙管雁首の火皿部分を潰す。
207	SK25 下層	銅製品	煙管 吸口	5.7	ラウ接合部径 1.0	吸口径 0.5	6.8	側面に接合痕。
208	SK25 下層	銅製品	不明	15.8	径 0.4	—	7.5	棒状製品。断面円形。球形の頭部をもつ。上位に多条の沈線。
283	P58	石製品	石臼	径 28.0	全厚 7.6	—	［1.6 kg］	砂岩製。
311	SX3	石製品	硯	［11.1］	2.1	8.1	［288］	粘板岩製。箱形。海部を欠損。陸部の中央は使用により窪む。外底に釘彫り。
339	Ⅰ層	石製品	硯 箱形	［14.8］	3.1	7.9	［583］	凝灰岩製。海部を欠損する。墨が付着。
363	SD1	銅製品	煙管 雁首	—	—	ラウ接合部径 1.0	［4.3］	火皿を欠損する。
370	SD1 下層	石製品	石臼	復元径 約33.2	全厚 9.2	—	［3.3 kg］	砂岩製。上臼。下面の中心付近に径2.2㎝深さ2㎝の穿孔。側面に径2.2㎝深さ2.5㎝の穿孔。上面から下面に貫通する径3㎝の円孔あり。下面に回転方向の擦痕。
378	SD1	ガラス製品	小瓶	—	—	底径 3.5×3.0	［27.3］	明治26年発売 無色透明。変形形。外底に型による陽刻の文字「二八水」。
379	SD1 上層	骨製品	不明	［8.9］	1.0	1.2	［9.9］	近代 灰白色。歯ブラシの柄か。断面円形。
380	SD1	骨製品	不明	［7.3］	0.6	1.0	［5.1］	近代 灰白色。歯ブラシの柄か。断面円形。

※法量・重量とも［　］は残存分。金属製品で錆がみられるものも［　］表記した。

Tab.23　遺物観察表（古銭）

図版番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）			重量（g）	備考
				外径	穿径	厚さ		
190	SK24 上層	銅銭	寛永通寶	2.6	0.6	0.1	［3.0］	新寛永　文銭
191	SK24 上層	銅銭	紹聖元寶か	—	—	0.1	［1.6］	北宋　紹聖元寶か 1094年初鋳
364	SD1	銅銭	寛永通寶	2.4	0.6	0.1	2.6	新寛永

※欠損するものは重量を［　］で示した。

Tab.24　遺物観察表（瓦）

図版番号	出土地点	種類	法量（cm）			色調	特徴	備考（生産地・銘）
			瓦当高 瓦当径	文様区高 文様区径	平瓦厚			
175	SK21	軒丸瓦	—	—	—	外）灰N4/ 断）灰白N7/	三巴文。	
176	SK21	軒桟瓦 右桟瓦	—	—	1.6	外）黄灰2.5Y5/1 断）黄灰2.5Y6/1	中心飾りは丁字か。外側に均整唐草文。	「ウエ」銘印あり。
338	撹乱	棟飾瓦	—	—	—	外）灰N4/・黄灰2.5Y6/1 断）灰白2.5Y7/1	陽刻の文字文。	

Tab.25　遺物観察表（木製品）

図版番号	出土地点	器種	法量（cm）			特徴・使用痕他
			全長	全厚	全幅	
257	SE1 4層	箸	23.6	—	中位0.6 先端0.4	側面に面取りを施す。断面不整形。先端部は窄まる。
258	SE1 井戸側 No.1	井戸側板	［49.5］	2.0	中位13.8 下端14.7	側面は内側が狭くなるように斜めに削る。内外面に鋸痕とみられる斜方向の加工痕が残る。外面の中位にタガ痕とみられる帯状の圧痕。下位に帯状の窪み。
259	SE1 井戸側 No.2	井戸側板	［44.2］	2.0	中位10.3 下端10.5	側面は内側が狭くなるように斜めに削る。外面に鋸痕とみられる斜方向の加工痕が残る。外面の中位にタガ痕とみられる帯状の圧痕。下位に帯状の窪み。
260	SE1 井戸側 No.3	井戸側板	［44.8］	2.0	中位9.2 下端9.3	側面は内側が狭くなるように斜めに削る。外面に鋸痕とみられる斜方向の加工痕が残る。外面の中位にタガ痕とみられる帯状の圧痕。下位に帯状の窪み。
261	SE1 井戸側 No.4	井戸側板	［49.0］	2.0	中位14.0 下端14.5	側面は内側が狭くなるように斜めに削る。内外面に鋸痕とみられる斜方向の加工痕が残る。外面の中位にタガ痕とみられる帯状の圧痕。下位に帯状の窪み。
262	SE1 井戸側 No.5	井戸側板	［53.7］	2.1	中位10.3 下端10.6	側面は内側が狭くなるように斜めに削る。外面に鋸痕とみられる斜方向の加工痕が残る。外面の中位にタガ痕とみられる帯状の圧痕。
263	SE1 井戸側 No.6	井戸側板	［49.0］	2.1	中位14.0 下端14.1	側面は内側が狭くなるように斜めに削る。内外面に鋸痕とみられる斜方向の加工痕が残る。外面の中位にタガ痕とみられる帯状の圧痕。
264	SE1 井戸側 No.7	井戸側板	［50.4］	2.0	中位17.4 下端18.2	側面は内側が狭くなるように斜めに削る。内外面に鋸痕とみられる斜方向の加工痕が残る。外面の中位にタガ痕とみられる帯状の圧痕。

※［ ］は残存分。井戸側板の出土地点No.は検出時の側板の配置順（南→北）を示している。

［遺物観察表凡例］

1）法量・重量：［　　］は残存分。

2）色調：外）は外面、内）は内面、断）は断面を表している。色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帳』による。

第Ⅵ章　考察

第1節．絵図・文献にみる近世の大川筋と尾戸遺跡

はじめに

本調査区が所在する江ノ口川北岸の一帯には、現在「大川筋」の町名が残っている。近世、江ノ口川（大川）は郭中の外堀の役割を果たしていたが、その北岸にも東西の筋があり、筋に沿って侍屋敷が並んでいた。当時の絵図には多数の屋敷並みが描かれており、その一角にある本調査区では、侍屋敷に関連するとみられる近世の遺構と遺物が多く検出されている。

本節では、関連の絵図や文献から得られる情報を読み解きながら、周辺の景観や居住者の動きをたどり、この地域が歴史的にどのような変遷を遂げてきたのかを検討してみたい。そして、今次検出遺構と遺物の性格を探る手掛かりとしたい。

1．近世江ノ口村の景観

本調査区が立地する江ノ口川北岸の一帯には「大川筋」の町名が残っている。ここは、近世に郭中に集められていた侍の居住地が、一部、江ノ口川対岸の江ノ口村地内に置かれ、川の北岸に沿って侍屋敷町が形成されたものである。この一帯は、近世には郭中の一部とみなされてきたが、明治初年には城下の各町と区分されて、江ノ口村・比島村と役場を同じくし、明治22年に「大川筋」が江ノ口村の大字となった。その後、明治34年に江ノ口町の大字となり、大正6年からは高知市の町名となっている。

しかし、近世の絵図では他の地名がみえ、18世紀後半の郭中図（「御家中御侍屋敷附」[註1]）には「大川端」と「尾戸」、19世紀前半の絵図（「天保元年高知之圖」[註2]）には「大川渕」と記されている。この様に、本調査区をとりまく環境は時代によって変化があるため、まずはこの一帯に関係の深い江ノ口村を含め、中世から近世までの周辺の様子を把握しておきたい。

なお、江ノ口川北岸の一帯は時代によって様々な呼称があるが、以下では現在の町名「大川筋」を用いることとする。

近世以前

江ノ口村の村域は、天正15年（1587）11月13日の『大高坂之郷地検帳』[註3]の注記に「此帳大高坂大川ヨリ北地東ハひ島海を詰テ西ハ杓田境四郎カ岡ヲ限テ南ハ大川ヲ限北ハ久万ノ江限此内之田数あり」と記された範囲に含まれており、中世の大高坂之郷に属している。しかし、ここには「江ノ口」の地名は見えず、「江ノ口村」は近世以降につけられた村名とみられる。

江ノ口川北岸部に属する地名のうち、同地検帳に見出せるものでは「ヲト」があり、「尾戸」をさすものであろうか。これ以外には地検帳の記載内容を現在位置と照合させることができないが、「ヲト」の項目の前には「江ノ上大道ノ南ノ添」「シヤセフ大道添」「西ノ窪大道ノ添」「道懸テ」など、「江」や「大道」に関わる記述がみられ、周辺の状況が窺える。また同地検帳には、国主一門の番地又は寺社の所領にあたる「分」や、国侍や一領具足、職人などに支給された番地にあたる「給」の記

載が示されているが、「ヲト」の周辺には「国沢分」で国侍などの給地になった番地が多くみえている。（史料1）

近世の江ノ口村

山内氏による藩政が始まり、諸政策の中で新たに近世の村切が行われると、中世の大高坂之郷の一部を引き継いで、近世村としての江ノ口村が誕生することとなる。村の成立時期は不詳で、近世初頭の村の様子を伝える史料は少ないが、中期になると若干の史料が存在する。そこでこれらの史料から、江ノ口村の村域、村高、人口等についてみてみたい。

18世紀前葉頃の編纂とされる『土佐州郡志』(註4)には「属㆓大高坂郷㆒ 在㆓府城北㆒ 東西四十町南北十二町余村 隔㆓一川㆒興㆓諸士ノ家㆒接スレ譲ヲ 里民五百戸東限㆓塩田堤㆒西限㆓小高坂㆒北限㆓久万川㆒皆平田也」とあり、当時の村域の範囲を知ることができる。また、村名の由来については「諸細流合㆓并スル江水㆒処故ニ名㆓江之口ト㆒」とある。

次に村高、人口、産物等から、近世の江ノ口村をみてみたい。(註5) まず元禄13年（1700年）の『元禄郷帳』には総石高一千四四〇石とあり、『元禄地払帳』には、江ノ口村の総石高一千九八一石余、うち本田高一千四四〇石余り、新田高五四〇石余、本田のうち蔵入地一千二五三石余、残りは安養寺善衛門の知行などとある。これによれば、藩政期以降に開発された新田は全体の3割程で、中世までの土地開発が一定進められたうえに、安定した村落経営が行われていたものと思われる。

人口については寛保3年（1743年）の『寛保郷帳』に戸数二五八、人数一千三〇一とみえている。産物は『土佐州郡志』に「陶器 尾戸焼 在㆓尾戸㆒瓷窯二戸」とあり、越瓜、蕪菁（カブラ）などの農産物とともに、江ノ口川北岸に窯場があった尾戸焼も産物の一つとされている。

2. 屋敷並みの形成と変遷

寛文9年（1669）頃の藩撰図と推定されている「寛文己酉高知絵図」(註6)（Fig.50－図1）には、詳細な郭中の屋敷割りとともに、近郊農村の家並みや郭中外の屋敷割りの様子も描かれている。

これによると、南北を江ノ口川と久万川に挟まれた江ノ口村の村域には、耕作地や農村の家並みが描かれ、道は中ノ橋から北へ向かう愛宕道と、村の西部を東西に通る久万道がみえている。また、江ノ口川の北岸に沿って東西の筋が描かれている。侍屋敷は愛宕街道の周辺と江ノ口川北岸沿いに集中しており、後者の屋敷並みは、東西に通る久万道と水路によって村の集落と隔てられている。また江ノ口川を挟んで対岸にある郭中との間には、数箇所に橋が架けられている。

では、ここに見られる屋敷並みはいつ頃から形成され始め、近世を通じてどのように変化していったのだろうか。以下、各時期の絵図をもとに周辺の景観とその変遷をみていきたい。

侍屋敷の出現と周辺の施設

江ノ口川北岸の侍屋敷は「寛文己酉高知絵図」の他に、『皆山集』に収められた寛文7年（1667）の「寛文七年図」(註7)にも描かれている。しかし、それ以前の絵図、正保元年（1644）の「正保土佐国城絵図」(註8)や慶安5年（1652）の「慶安五年高知廓中絵図」(註9)には侍屋敷が描かれていない。そのため、これらの絵図情報からは、慶安5年（1652）以降、寛文7年（1667）までの間に江ノ口川北岸の屋敷並みが形成されたことが推定できるが、この間、この一帯ではどのような動きがあったのだろうか。

再び「寛文己酉高知絵図」を見ると、屋敷並みの西端には藩の施設とみられる「御弓場」があり、数棟の侍屋敷を経て東へ向かうと、「焼物師」と書かれた区画がみえる。そしてそこに連房式登り窯とみられる窯と数棟の建物が描かれている。

後者は藩の陶器窯であった尾戸窯である。尾戸窯は、承応3年（1654）の『忠義公書状』(註10)（史料2）に「焼物いたし候釜、江之口お戸之小山にうたせ…」の記述がみえるように、書状の前年にあたる承応2年（1653）に、藩主忠義の命によって大坂の陶工久野松伯が招かれ、尾戸に陶器窯が開かれたものである。松伯のもとでは森田久右衛門と山崎平内が技法を学び、その後も、森田家と山崎家が代々尾戸窯での製作に従事している。(註11) また、森田家文書の『勤役年譜書』(註12) 延宝6年（1678）の項には「上下三人扶持被成下候」とみえ、この時、森田家は三人扶持の身分を与えられている。

その他、寛文年間頃の尾戸窯に関わる記事では、『桂井素庵筆記』(註13) の寛文4年（1664）9月21日の条がある。ここでは「此日竹の筒の如く成花生買申也。但京町唐津屋にて買申也。又其花生かはぬさきに江の口遠土の唐つやへ参花生買に参申候へとも、忠義公のかうろを焼申に付花生もなし。其より戻り申也。」との記述が見られ、尾戸焼の窯元をさすとみられる「唐つや」で、民間向けに尾戸焼の販売が行われていたことが分かる。

一方、「御弓場」の開設時期については詳細が分からないが、「御弓場」のすぐ南、江ノ口川西岸に沿って「桜御馬場」がみえている。この「桜御馬場」は『皆山集』に寛文元年（1661）に開設されたとあり(註14)、周辺の整備が17世紀中頃以降に進んでいたことが推察される。

さらに同絵図では、江ノ口川南岸に「川原町」の町名と侍屋敷がみえており、そこから東の尾戸へ渡る川原町橋が架けられている。『皆山集』によると、「川原町」は慶安元年（1648）に開かれた侍町とされており(註15)、17世紀中頃以降、土堤で囲われた郭中の外側部分へも、家臣団居住区が拡張されていく様子がここからもみてとれる。

これらのことから、郭中に接する江ノ口川沿岸の一帯では、17世紀中頃以降から藩の施設が開設され、併せて周辺の整備と侍屋敷の配置が進められていったと推察される。

大川筋の居住者と変遷

次に、大川筋に屋敷を与えられた侍の身分や知行の石高についてもみてみたい。「寛文己酉高知絵図」では、西端から東へ38棟程の侍屋敷が並んでいる。ここに記された侍名のうちで、万治3年（1660）の『万治三年分限帳』(註16)、寛文2年（1662）の『寛文二年卯正月　日　御家中侍衆分限帳』(註17) に記載を確認できるものは少ないが、「二百石 長瀬三介」、「百石 横田平太夫」、「五十石 森岡弥八郎」などがみえており、知行50～200石の中級武士や上級武士が認められている。

次に、各時期の絵図を用いながら、本調査区が所在した大川筋西側の一帯について居住者や施設の動きをみてみたい。（Tab.26）

まず、元禄年間（1688～1704）の状況を表わしたとされる「建依別高知城郭之図」(註18)（Fig.50－図2）では、西角から「弓場」「竹島」「野本」「□□」「前ノ」「出間」「西野」「中山」「ヤキ物師」「□□」となっており、この頃には「弓場」と「ヤキ物師」が引き続き所在している。

一方、延享3年（1746）の写図である「高知城郭図絵」(註19)（Fig.50－図3）では、西角から「□□」「宮地」「松下」「渡辺」「前野」「石川」「中村」「久万」となっており、元禄年間の居住者が全体的に

入れ替わっている。さらに、もと「弓場」があった区画には記載がなく、「ヤキ物師」は南側に移動している。また、延享3年（1746）～寛延年間（1748～1751）の状況を表わしたと推定される「高知廓中図」[註20]（Fig.51－図4）でも、西角から「アキ」「□□」「松下」「渡辺」「前野」「石河」「中村」「久万」となっており、大きな変化がない。そしてここでも「焼物師」は筋の南側にあり、「森田」「山崎」の家名が記されている。

次に、天明4年（1784）の「御家中御侍屋敷附」[註1]では、西角から空白「宮地」空白「渡辺」「大脇」「石河」「中村」「久万」、享和元年（1801）の「高知御家中等麁図」[註21]（Fig.51－図5）では、西角から「伊藤」「宮地」「大黒」「渡辺」「小林」「石河」「中村」「久万」となっており、この頃は西側に変化があるが、東側は延享～寛延年間までの状況を引き継ぐものが多い。

そして天保元年（1830）の「天保元年高知之圖」[註2]（Fig.51－図6）、弘化年間（1844～1848）の「弘化年間舊郭中絵図」[註22]（Fig.51－図7）も同様で、19世紀初めから幕末近くまで、この一帯の居住者には殆ど変化がないようにみえる。

次に居住者の入れ替わりが多いのは幕末前後であり、慶応年間（1865～1868）の状況を表わした「慶応初年廓中高知街図」[註23]（Fig.51－図8）では、数棟に変化がみえている。

災害と復興

さて、各期の絵図をみると、大川筋の侍屋敷では18世紀前半に居住者の入れ替わりが最も多く、以降は幕末頃まで変化が少なかった。また、藩の「弓場」についても、元禄年間（1688～1704）の「建依別高知城郭之図」（Fig.50－図2）までは大川筋の西角にあり、延享3年（1746）の図（Fig.50－図3）で見えなくなるなど、やはりこの間に移転が行われている。侍屋敷の配置替えには家系の断絶や家禄の変化など、家毎の諸事情も反映されるだろうが、全域に入れ替わりが生じた背景としては、この時期、城下に甚大な被害をもたらした火災の影響が考えられよう。そこで以下では、元禄11年と享保12年の大火について関連の記事を取り上げ、江ノ口川周辺の状況を確認しておきたい。

まず、城内の下屋敷と太鼓丸が焼失した元禄11年（1698）の大火について、『南路志』に収められた記事「十月六日出火、御侍屋敷焼失之覚」[註24]には、焼失した北奉公人町、内堤、帯屋町筋、大門町、本町筋、中島町、与力町、南片町の侍屋敷が列挙されているが、ここには大川筋に関した記載が認められない。

次に享保12年（1727）の大火については、『南路志』[註25]に収められた「城下大火、御城本丸まで焼失　附公義御差出」の記事に、大手門、西ノ口大門、北ノ口大門を除いて、天守、本丸、二の丸、三の丸をはじめとする城内の殆どが焼失した他、郭中の侍屋敷387軒と、廿代町、細工町、種崎町、蓮池町、農人町、新町、新市町、北奉公人町、堺町、唐人町、浦戸町、掛川町、朝倉町の町屋が焼失したとあり、郭中の被害の様子が記されている。

上述の記事では郭中外についての記述が省かれているため、大川筋周辺の状況が分からない。しかし、『皆山集』に収められた『警余記』[註26]には「享保十二年二月朔日午下刻高知城越前町西側中程伊野辺条助と云う処士の家より出火て近辺の家々に焼移る…（中略）…西大門の火ハ川原町より尾戸の陶師の辺迄焼通り櫻の馬場の火ハ川岸を下りへ焼け外江ノ口を北東へ移り行程ニ愛宕筋より東ハ田を限りて焼拂ひぬ…（中略）…又三ノ丸焼終て其火武藝屋敷へ移り大川筋南筋を限り北ハ残り

なく夫より堀を越て商陌へ焼通り京町種崎町農人町皆竪を限りて北の分山田市北鉄砲町筋迄残なく類焼す」とみえ、享保12年の火災で大川筋も被害を受けていたことが分かる。

尾戸窯についても、享保12年の被害に関連した記録が残されている。『森田家古記録』(註27)の享保十二年二月一日の項には「越前町より出火、御城内御家中新町迄焼失の事、尾戸焼物所悉焼失の事」とあり、大火によって窯場が焼失したことが窺える。また同記録の元文四年（1739）六月の項には、「尾戸御焼物所細工所両家共建続新に二間梁に十三間に御建下さる　但一人前に向五間ひぢに一間半惣瓦葺也、ひちより御用之御焼物御見分所　薬調合□用間に被仰付」、元文五年（1740）六月の項には「新に細工所の二間□に一挺づつ瓦葺雪隠一ヶ所づつ御御建下さる　但外輪の内も修覆被仰付也　但門は未の火災より度々修覆被仰付也」と、尾戸の焼物所と細工所が建てられたことが記されており、再建に13年を要したことが窺われる。

3. 尾戸遺跡の居住者と性格

居住者の推定

最後に、今次調査地点がどのような位置付けができるのか、検討しておきたい。

藩撰図と推定されその製図法の巧緻さが評価されている寛文9年の「寛文己酉高知絵図」には、通りごとに屋敷地の間口と居住した侍名が列記されている。これをもとに現在の市街地図と比較すると、江ノ口川の川筋が変更され、その周辺の町並みに変化がある以外には、現況の街路区画が近世の町割りを比較的良好に踏襲していることが見て取れる。（Fig.52－図9・10）そして、現代以降の改修によって区画に変化があった東部側を除き、近世当時の規模を比較的良好にとどめていると考えられる桜馬場の南北道路と、区画東端、西端の位置を、同倍率で重ね合わせ、今回の調査地点の位置を絵図上に推定復元したものがFig.52－図9になる。これによると、今次調査区は「島弥左衛門」の屋敷の範囲に入ることが推定される。

これ以降の絵図では現況位置との照合は困難であるが、先の「寛文己酉高知絵図」の「島弥左衛門」屋敷の周辺の屋敷割りなどから、対応関係を推定することが可能である。（Tab.26）これによると元禄年間の「建依別高知城郭之図」では「野本平左衛門」。延享3年の「高知城郭図絵」では「松下又□□」の名を線で消して「源四郎」「十兵衛」の追記。享和元年の「高知御家中等麁図」では「大黒代次」。弘化年間の「弘化年間舊郭中絵図」では「大黒忠次」。慶応年間の「慶応初年廓中高知街図」では「中村要助」の侍名を記した屋敷地を該当させることができよう。

そこで以下では、島、野本、松下、大黒氏について、史料に表れる各人物の跡目相続の期間や身分、役職などを検討し、尾戸遺跡の性格を知る手がかりとしたい。

島氏について

「寛文己酉高知絵図」に記された「島弥左衛門」は、先祖書が特定できず、詳細がつかめない。

野本氏について

野本氏については、山内家史料の『御侍中先祖書系図帳』(註28)に八代野本源之助直清差し出しの先祖書が収められている。同先祖書に記された初代から八代までの跡目相続の期間と身分、石高、役職などの内容は次の通りである。

先祖　津田斎

元祖　野本源左衛門直次　元和5年（1619）三人扶持、明暦4年（1658）知行百石、
　　寛文2年（1662）御馬廻、寛文5年（1665）知行百石を加増、寛文11年（1671）没

二代　平左衛門好通　寛文11年（1671）跡目　御馬廻、同年江戸勤当、
　　元禄8年（1695）知行百石を加増、元禄14年（1701）没

三代　覚太夫好澄　元禄14年（1701）跡目　御馬廻　知行三百石、宝永4年（1707）没

四代　平左衛門直之　宝永4年（1707）跡目　知行三百石、享保17年（1732）江戸勤当、
　　享保18年（1733）御城下火消役、延享3年（1746）没

五代　源左衛門直純　延享3年（1746）跡目、宝暦3年（1753）江戸勤当、明和5年（1768）没

六代　平左衛門茂勝　明和5年（1768）跡目、文化5年（1808）知行百石を加増、
　　文政13年（1830）没

七代　源左衛門直道　文政13年（1830）跡目　御馬廻、万延元年（1860）没

八代　源之助直清　万延元年（1860）跡目、知行五百石

同系図よると、野本氏は津田氏から分かれたもので、初代の野本源左衛門直次が、山内忠義公の代元和5年（1619）に召し抱えられ、寛文2年（1662）に御馬廻となっている。野本源左衛門は『万治三年分限帳』(註16)と『寛文二年卯正月 日　御家中侍衆分限帳』(註17)に記載があり、後者の分限帳では「百石 野本源左衛門」は筑州様衆に置かれている。

「建依別高知城郭之図」にみえる「野本平左衛門」は二代、四代、六代に同名が認められるが、元禄年間（1688～1704）という絵図の年代観と照らし合わせると、元禄14年（1701）に病死した二代の平左衛門好通が該当するとみられ、この時、野本氏は知行二百石である。

また、享保12年（1727）の大火の頃、同地点に居住していた可能性が高いのは四代の野本平左衛門直之であり、野本氏はこの時、知行三百石、御城下火消役等を努めている。

松下氏について

延享3年（1746）の写図「高知城郭図絵」（Fig.50－図3）に描かれた松下氏の屋敷部分は、「又□□」の名を線で消して「源四郎」「十兵衛」と改めており、後世の使用の中で修正が加えられたものと考えられる。「松下又□□」「松下源四郎」「松下十兵衛」なる人物の名は、『御侍中先祖書系図帳』の松下多仲差し出しの系図にあり、松下権兵衛宣綱を元祖とする松下家から分かれた松下又之進玄綱を二代目として、以下の系図に「又之進玄綱」「源四郎綱元」「十兵衛綱直」の名がみえている。

同先祖書に記された跡目相続の期間と身分、石高、役職などの内容は次の通りである。

先祖　松下源五郎國綱

元祖　松下権兵衛宣綱

（以下、略。三代松下多仲長幸の三男、松下源四郎克長が分家し、初代となる。）

初代　松下源四郎克長　七人扶持　元文4年（1739）没

二代　又之進玄綱　元文5年（1740）跡目、知行弐百五拾石　御馬廻、明和3年（1766）没

三代　源四郎綱元　明和4年（1767）跡目、明和8年（1771）江戸勤当、明和8年（1771）没

四代　十兵衛綱直　明和9年（1772）跡目、御馬廻　知行弐百石

五代　源四郎長元　天明3年（1783）跡目、御馬廻

同系図では、二代の又之進玄綱の跡目相続期間が元文5年（1740）～明和3年（1766）、三代の源四郎綱元が明和4年（1767）～明和8年（1771）、四代の松下十兵衛綱直が明和9年（1772）～天明3年（1783）の間となっている。そのため、「高知城郭図絵」が描かれた頃の居住者は二代の又之進玄綱であり、その後、四代目までの加筆がなされたと考えられる。この時、二代の松下又之進玄綱は御馬廻、知行弐百五拾石となっている。

五代目の没年は不明であるが、五代目をもってこの家系は途絶えている。そして、本屋敷地は18世紀末には大黒氏と入れ替わっている。

大黒氏について

大黒氏の先祖は長宗我部氏から出た杓田城主大黒太郎左衛門範宗とされている。大黒氏はその所伝によると、もと秦氏の一族で、遠祖の大黒太郎左衛門範宗が承久4年（1222）に杓田串田両所を知行とし、その後、元弘～建武（1331～1336・1338）の頃には、長宗我部秦兼光の五男に入り家を継いだとされている。また永禄～天正年間（1558～1592）には、長宗我部氏に従って功績をあげ土佐郡杓田領主となっている。(註29)

近世以降の大黒氏については、山内家史料の『御侍中先祖書系図帳』に九代大黒銀次郎差し出しの先祖書が収められており、初代の主計頭から九代銀次郎までの跡目相続の年代と没年、身分、石高、役職などの内容が記されている。同先祖書に記された跡目相続の期間と身分、石高、役職などの内容は次の通りである。

先祖　大黒主計頭　　長宗我部家ニ仕官　千石

元祖　茂左衛門勝正　元和9年（1623）登用、寛永14年（1637）御納戸方、
慶安元年（1648）参人扶持切米五石御加増、慶安4年（1651）知行百石、
寛文3年（1663）御馬廻　知行百五十石、延宝5年（1677）没

二代　茂左衛門勝盛　寛文5年（1665）跡目　御馬廻、元禄元年（1688）江戸勤当、
元禄16年（1703）没

三代　甚右衛門勝興　元禄16年（1703）跡目　御馬廻、享保5年（1720）江戸勤当、
寛保3年（1743）没

四代　藤□右衛門勝省　寛保3年（1743）跡目　知行百五十石、宝暦7年（1757）江戸勤当、
安永7年（1778）没

五代　与七兵衛勝孟　安永7年（1778）跡目、寛政12年（1800）没

六代　代次勝澄　　享和元年（1801）跡目、文化10年（1813）没

七代　忠次郎勝貞　文化10年（1813）跡目　御馬廻、嘉永2年（1849）没

八代　隆馬勝慶　　嘉永2年（1849）跡目　御馬廻、万延元年（1860）没

九代　銀次郎祐勝　万延元年（1860）跡目　七人扶持

ここにみえる先祖大黒主計頭は初代勝正の父で、長宗我部氏に属し千石を領したが、天正14年（1586）豊後戸次川の戦いで長宗我部信親とともに討死している。初代の茂左衛門勝正は元和9年（1623）に山内氏に召抱えられ、御納戸役等を勤めて、寛文3年（1663）に御馬廻百五十石となって

いる。以後、大黒家は近世を通じて御馬廻として山内家に仕えたことが分かる。

大黒氏の屋敷が大川筋で確認できるのは享和元年（1801）の「高知御家中等麁図」以降で、六代大黒代次勝澄が同絵図に記載された「大黒代次」、七代忠次郎勝貞が弘化年間（1844～1848）の「弘化年間舊郭中絵図」に記載された「大黒忠次」に該当すると考えられる。

しかし、大黒氏の屋敷は慶応年間（1865～1868）の「慶応初年廓中高知街図」ではもとの地点に無く、八代隆馬勝慶か九代銀次郎祐勝の代に屋敷替えがあったとみられる。

おわりに

ここまで、絵図や文献をもとに大川筋と周辺の動きをみてきた。大川筋では17世紀中頃に尾戸窯が開かれ、弓場や侍の屋敷並みもこの頃形成されたとみられる。本調査区の位置には、17世紀後半に島氏、17世紀後半～18世紀前葉に野本氏の屋敷があり、18世紀中葉～後半は松下氏、18世紀末～19世紀中葉は大黒氏、幕末には中村氏へと居住者が入れ替わった。

各期、屋敷替えが行われた背景の一つに享保12年（1727）の大火があるが、この時、居住していた可能性が高いのは野本氏で、大火の被害を契機に大川筋一帯で屋敷替えが進められた際、本屋敷地も廃絶した可能性がある。また、享保の大火以降に居住を開始した松下氏については、五代目が天明3年（1783）に跡目を継いだのを最後に家系が途絶えており、大黒氏への屋敷替えの時期もこの頃にあったのかもしれない。その後、幕末まで居住が続いた大黒氏も慶応年間には移転している。

本屋敷地に居住した野本氏は知行200～300石、松下氏は200～250石、大黒氏は居住前の四代目が150石の御馬廻りである。しかし、各氏の生活の実態や屋敷地の構造、災害時の被害の様子、屋敷替えの状況などについては、なお不明なところが多い。そのため、史料に表れ難いこれらの事柄については、発掘調査の成果をもとに後節にて検討することとしたい。

[註]

1) 高知市立自由民権記念館寄託　徳弘家資料。「御家中御侍屋敷附」は徳弘家五代目惣助の代に作られたもの。今井章博「侍屋敷調査帳と廓中図」『描かれた高知市』より引用。

2) 個人蔵。「天保元年高知之圖」は吉松清氏の模写。原図の伝来は不明であるが、図中の書き込みに、文政13年（1830）南鏡が作成した「土陽府御絵図」を、天保5年（1835）に鏡立敬人が改正作図した図の模写という図歴記録がある。大脇保彦「民撰御城下図」『描かれた高知市』より引用。

3)『長宗我部地検帳 土佐郡上』高知県立図書館　昭和1957年

4)『土佐州郡志』は宝永年間（1704～1711）に各村から差し出された『宝永風土記』をもとに山内家儒者緒方宗哲が編纂した官撰地誌とされる。『土佐州郡志 上 ― 復刻版』土佐史談会1983より引用。なお同引用文には「隔二一川ヲ一興諸士ノ家一接スレ譲ヲ」とあったが、返り点を追加して読み下しを行った。

5)「本田」は基本的に「地検帳」掲載の田・畑・屋敷である。「新田」は検地以降及び藩政期に入ってから開発された土地のことである。

6)「寛文己酉高知絵図」（高知市立市民図書館所蔵）は作成者や年時を示す奥書は欠落しており、図中の屋敷名などから松野尾章行が寛文9年頃の図と判定したと推測されている。また、同絵図は内容の詳細さと製図手法の正確さが高く評価されており、藩内用に藩が作成したものと推測されている。大脇保彦「高知城下町絵図について － 歴史空間の情報源としての吟味と課題」『土佐女子短期大学紀要8』土佐女子短期大学2001年

7) 高知県立図書館所蔵。『皆山集』三一巻所収。『皆山集』は松野尾章行が明治11～34年にかけて古文書・古記録を筆記した史料集。

8) 国立公文書館所蔵。「正保土佐国城絵図」の原本は正保元年に幕府が諸藩に国絵図とともに提出を命じて作成させた城絵図である。『描かれた高知市』より引用。

9) 高知市立市民図書館所蔵。「慶安五年高知廓中絵図」は絵図の左下隅に貼付された奥書の一部があり、慶安4年7月に要請を受け、以前の図との変化を書き加え、慶安5年正月に提出した図控という。『描かれた高知市』より引用。

10)『山内家史料 忠義公紀』「収録方文書」承応2年

11) 尾戸の窯場は、文政3年に能茶山に藩の磁器窯と陶器窯が開かれるに伴って、文政5年に能茶山へ移転している。

12)『勤役年譜書』は森田家が藩に提出したもので、七代鴨助と八代潤差し出しのものがある。丸山和雄『土佐の陶磁』より引用。

13)『桂井素庵筆記』は寛文3年から晩年までの桂井素庵の「万日帳」と名付けられた日記。写本は高知県立図書館所蔵。

14)「高知市沿革地図説」『土佐之国史料類纂 皆山集 第九巻』高知県立図書館 昭和50年

15)『皆山集』

16)『万治三年分限帳』『土佐之国史料類纂 皆山集 第七巻』高知県立図書館 昭和52年

17)『寛文二年卯正月　日　御家中侍衆分限帳』『土佐之国史料類纂 皆山集 第七巻』高知県立図書館 昭和52年

18) 高知市立市民図書館所蔵。「建依別高知城郭之図」は松野尾章行氏による写図で原図は不明。大脇保彦「元禄期の城下町絵図」『描かれた高知市』より引用。

19) 高知県立図書館所蔵。「高知城郭図絵」は延享3年（1746）年9月の写図であり、原図はそれ以前、町会所の位置などから元文5年（1740）以降の状況を示した図であったことが分かる。加筆・訂正も見え、実用にされていた痕跡も示している。大脇保彦「延享の大火前後の城下町絵図写図」『描かれた高知市』より引用。

20) 個人蔵。「高知廓中図」は図題がなく仮題で、原図も写した年次も不明である。しかし図中の内容から延

享の大火以降、寛延年間までの状況とされている。大脇保彦「延享の大火前後の城下町絵図写図」『描かれた高知市』より引用。

21) 安芸市立歴史民俗資料館所蔵。「高知御家中等麁図」は土佐藩家老五藤家に伝わる高知城下町絵図で、享和元年（1801）の原図を、文化8年（1811）に写したもの。

22) 高知市立市民図書館所蔵。「弘化年間舊郭中絵図」は個人所蔵の図を平尾道雄氏が写したもの。大脇保彦「幕末の廓中絵図」『描かれた高知市』より引用。

23) 高知市立市民図書館所蔵。「慶応初年廓中高知街図」は日根野弘宣氏が慶応年間の高知城下の侍屋敷の配置と居住状況を調査し復元したもの。作成は大正4年（1915）。岩河忠信「幕末の廓中絵図」『描かれた高知市』より引用。

24)『南路志』は文化12年（1815）、高知城下の豪商美濃家の武藤致和、武藤平道父子が編纂。『南路志』巻七十、豊昌公御代七付録　『土佐国史料集成 南路志 第七巻』高知県立図書館 平成6年

25)『南路志』巻七十五、豊敷公御代一　『土佐国史料集成 南路志 第七巻』高知県立図書館 平成6年

26)『土佐之国史料類纂 皆山集 第六巻』高知県立図書館 昭和48年

27) 丸山和雄『土佐の陶磁』雄山閣出版1973年

28)『御侍中先祖書系図帳』土佐山内家宝物資料館

29) 寺石正路『土佐名家系譜』歴史図書社 昭和51年

［参考文献］

平尾道雄「高知城下町の成立」『高知市史 上巻』高知市 昭和33年

丸山和雄『土佐の陶磁』雄山閣出版1973年

大脇保彦「高知城下町絵図について－ 歴史空間の情報源としての吟味と課題」『土佐女子短期大学紀要8』土佐女子短期大学2001年

寺石正路『土佐名家系譜』歴史図書社 昭和51年

山本泰三『土佐の墓』土佐史談会 昭和62年

『土佐之国史料類纂 皆山集』高知県立図書館

『土佐国史料集成 南路志』高知県立図書館 平成6年

『土佐国史料集成 土佐國群書類従』高知県立図書館2006年

『御侍中先祖書系図帳』土佐山内家宝物資料館

『特別展 絵図の世界』安芸市立歴史民俗資料館1998年

『改訂版 高知城下町読本』土佐史談会・高知市2004年

『描かれた高知市 高知市史 絵図地図編』高知市史編さん委員会絵図地図部会・高知市2012年

［絵図出典］

No.1)「正保土佐国城絵図」国立公文書館所蔵

No.2)「慶安五年高知廓中絵図」高知市立市民図書館所蔵

No.3)「寛文七年図」高知県立図書館所蔵

No.4)「寛文己酉高知絵図」高知市立市民図書館平尾文庫所蔵

No.5)「建依別高知城郭之図」高知市立市民図書館所蔵

No.6)「高知城郭図絵」高知県立図書館所蔵

No.7)「高知廓中図」個人蔵

No.8)「御家中御侍屋敷附」徳弘家資料 高知市立自由民権記念館寄託

No.9)「高知御家中等麁図」安芸市立歴史民俗資料館所蔵

No.10)「天保元年高知之圖」個人蔵

No.11)「弘化年間舊郭中絵図」高知市立市民図書館所蔵

No.12)「慶応初年廓中高知街図」高知市立市民図書館所蔵

※ 1～12は『描かれた高知市 高知市史 絵図地図編』より転載・引用。

Tab.26　絵図・史料にみる尾戸遺跡の変遷

No.	挿図番号	年代	資料名	1棟め（西角）	2棟め	3棟め（調査区推定地）	4棟め	5棟め	6棟め	7棟め	8棟め	9棟め	10棟め	11棟め（小道までの東角）
1		正保年間（1644～1648）	「正保土佐国城絵図」	記載なし										
2		慶安5年（1652）	「慶安五年高知廓中絵図」	記載なし										
3		寛文7年（1667）	「寛文七年図」	侍屋敷										
4	Fig.50－図1	寛文9年（1669）	「寛文己酉高知絵図」	御弓場	竹嶋	島「島弥左衛門」	宮崎	西野	出間	西野	西野	焼物師		馬渕
5	Fig.50－図2	元禄年間（1688～1704）	「建依別高知城郭之図」	弓場	竹島	野本「野本平左衛門」	□□	前ノ	出間	西野	中山	ヤキ物師		□□
6	Fig.50－図3	延享3年（1746）	「高知城郭図絵」	□□	宮地	松下（又□□を線消しして源四郎・十兵衛）	渡辺	前野	石川	中村	久万	中山	井上	□□
7	Fig.51－図4	推定1746～1750	「高知廓中図」	アキ	□□（□□の追記）	松下（松下を線消しして大黒忠次）	渡辺	前野（前野を線消しして小林）	石河（石河を線消しして大町	中村	久万	中山	井上	空白 □□ □□
8		天明4年（1784）	「御家中御侍屋敷附」	空白	宮地	空白	渡辺	大脇	石河	中村	久万	中山	井上	衣斐
9	Fig.51－図5	享和元年（1801）	「高知御家中等麁図」	伊藤	宮地	大黒「大黒代次」	渡辺	小林	石河	中村	久万	中山	井上	衣斐
10	Fig.51－図6	天保元年（1830）	「天保元年高知之圖」	中山	宮地	大黒	渡辺	大町		中村	□□	中山	井上	衣斐
11	Fig.51－図7	弘化年間（1844～1848）	「弘化年間舊郭中絵図」	中山	宮地	大黒「大黒忠次」	渡辺	小林	宮田	松村（中村か）	松並	中山	井上	衣斐
12	Fig.51－図8	慶応年間（1865～1868）	「慶応初年廓中高知街図」	野本	溝渕	中村「中村要助」	渡辺	小林	武市	中野	川端	中山	井上	衣斐

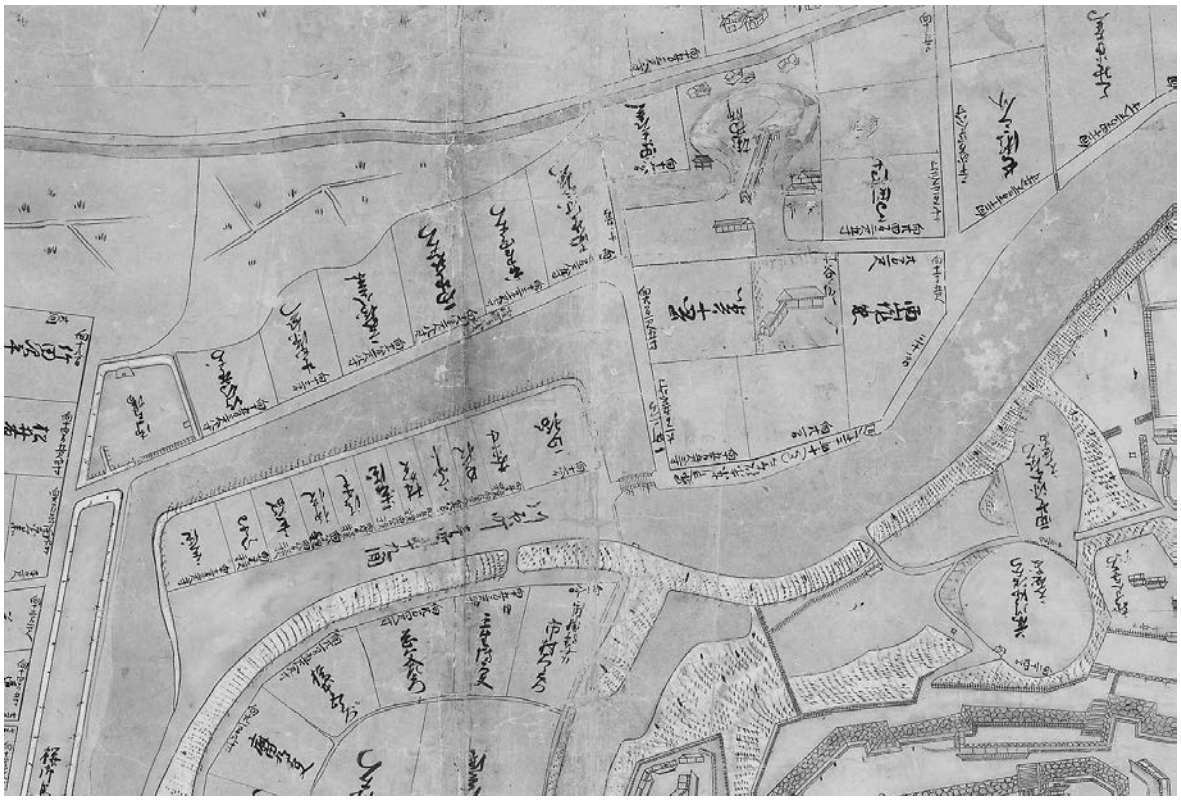


図1　「寛文己酉高知絵図」寛文9年（1669）
（高知市立市民図書館所蔵）

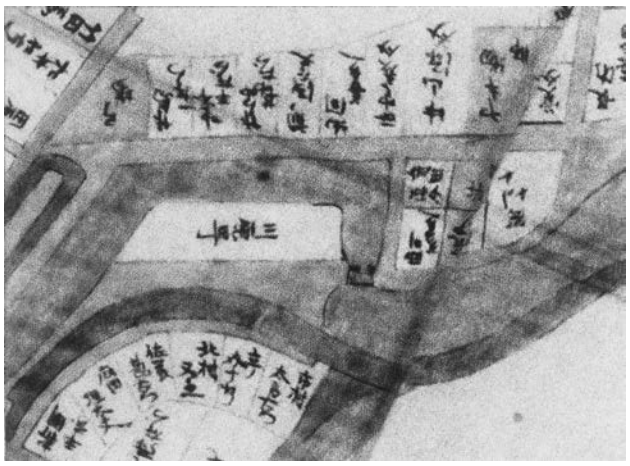


図2　「建依別高知城郭之図」
元禄年間（1688～1704）
（高知市立市民図書館所蔵）

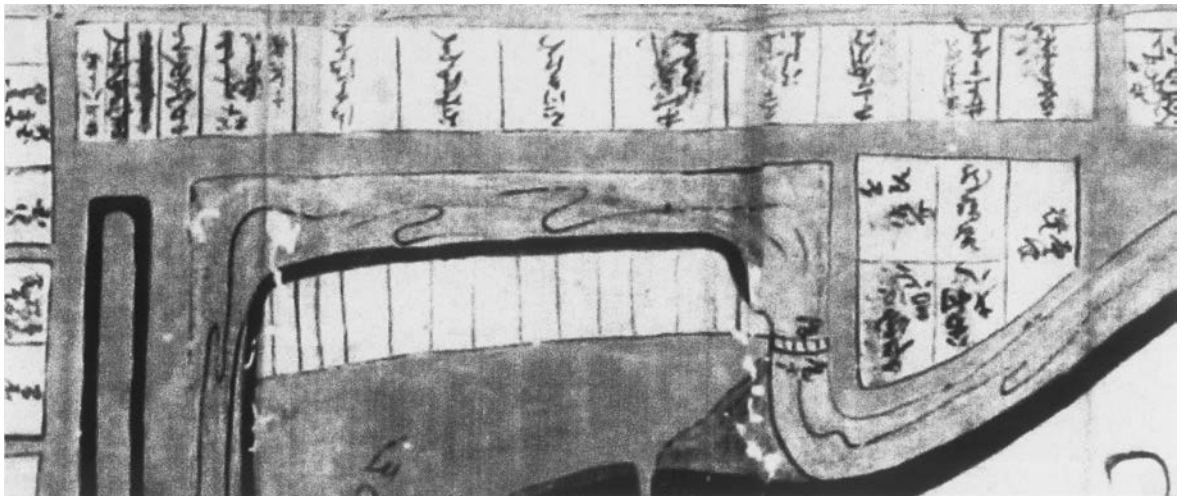


図3　「高知城郭図絵」延享3年（1746）写図（高知県立図書館所蔵）

Fig.50　絵図にみる尾戸遺跡の変遷（1）

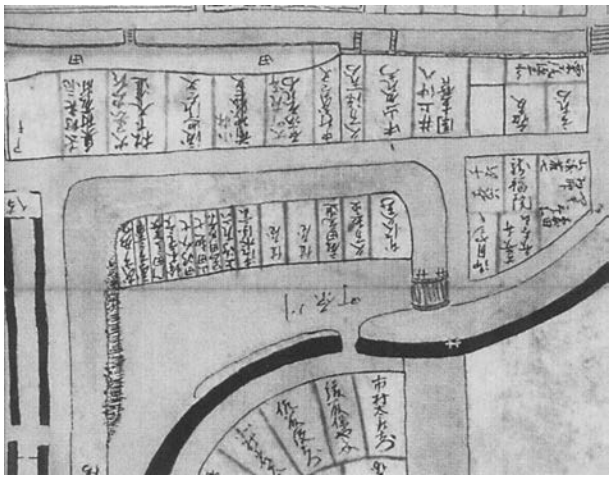


図4　「高知廓中図」
延享3年～寛延年間（1746～1750）（個人蔵）

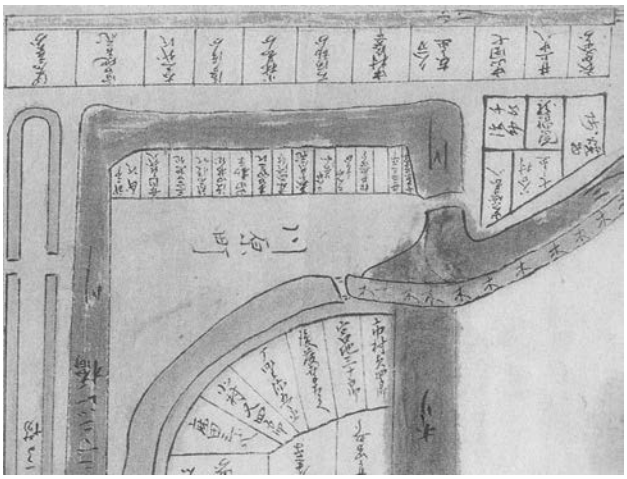


図5　「高知御家中等麁図」享和元年（1801）
（安芸市立歴史民俗資料館所蔵）

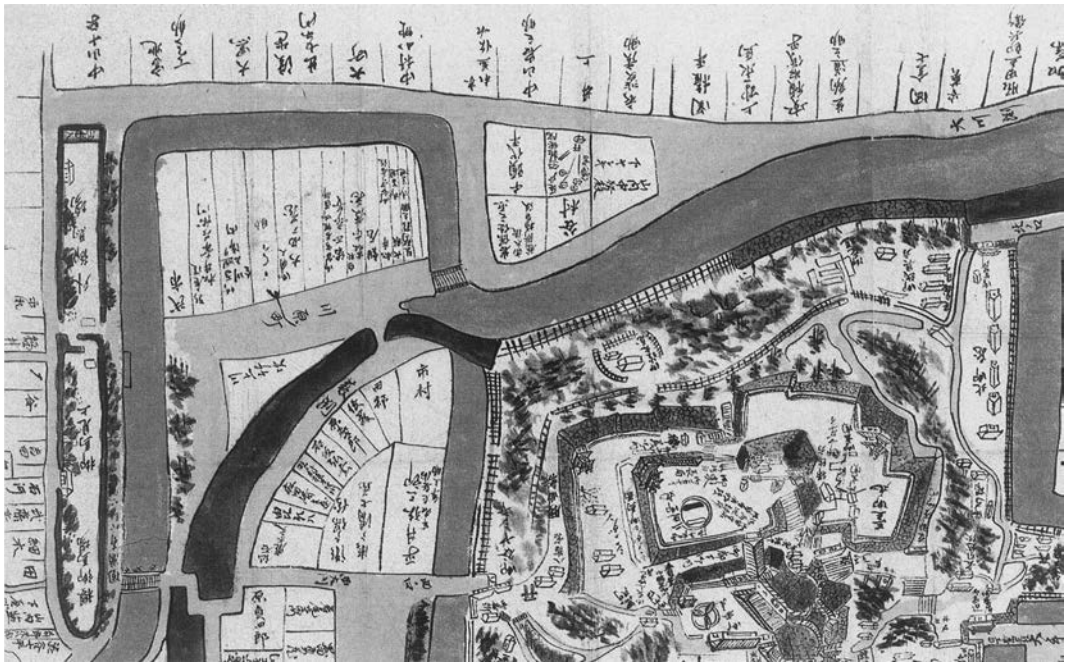


図6　「天保元年高知之圖」天保元年（1830）（個人蔵）

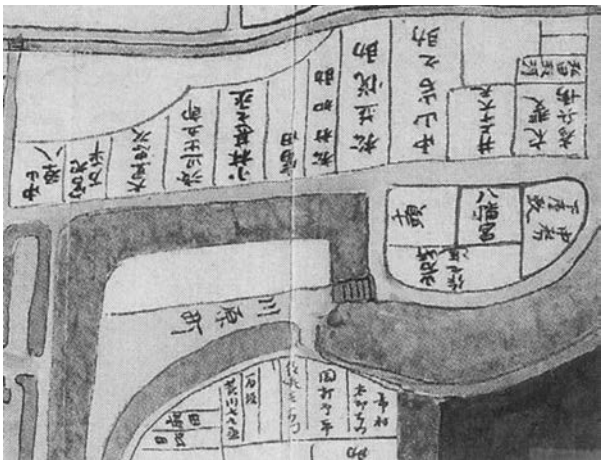


図7　「弘化年間舊郭中絵図」
弘化年間（1844～1848）（高知市立市民図書館所蔵）

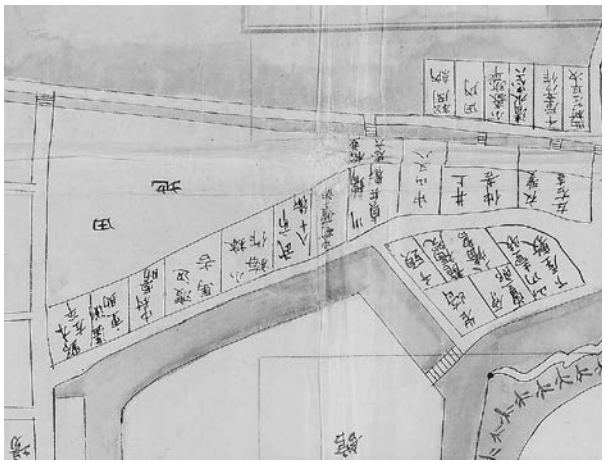


図8　「慶応初年廓中高知街図」
慶応年間（1865～1868）（高知市立市民図書館所蔵）

Fig.51　絵図にみる尾戸遺跡の変遷（2）

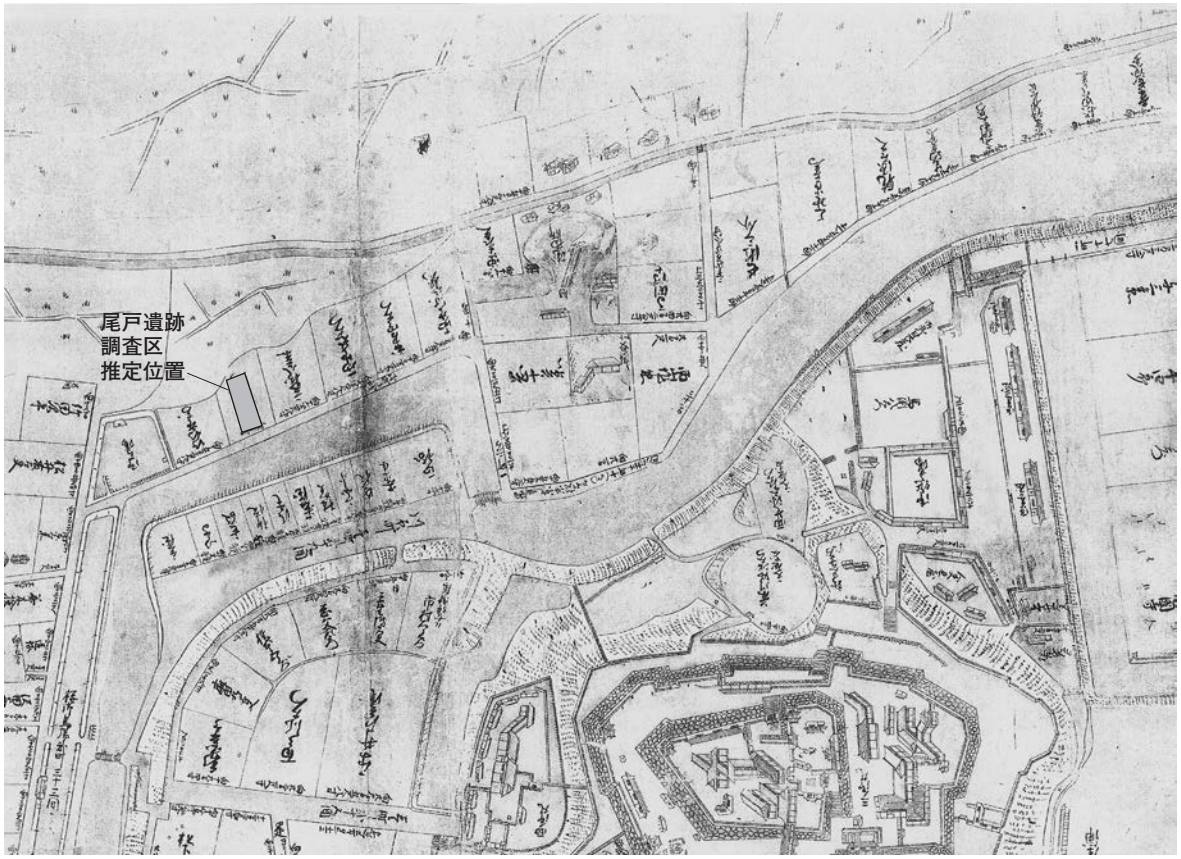


図9　「寛文己酉高知絵図」（高知市立市民図書館所蔵の絵図をもとに加筆）

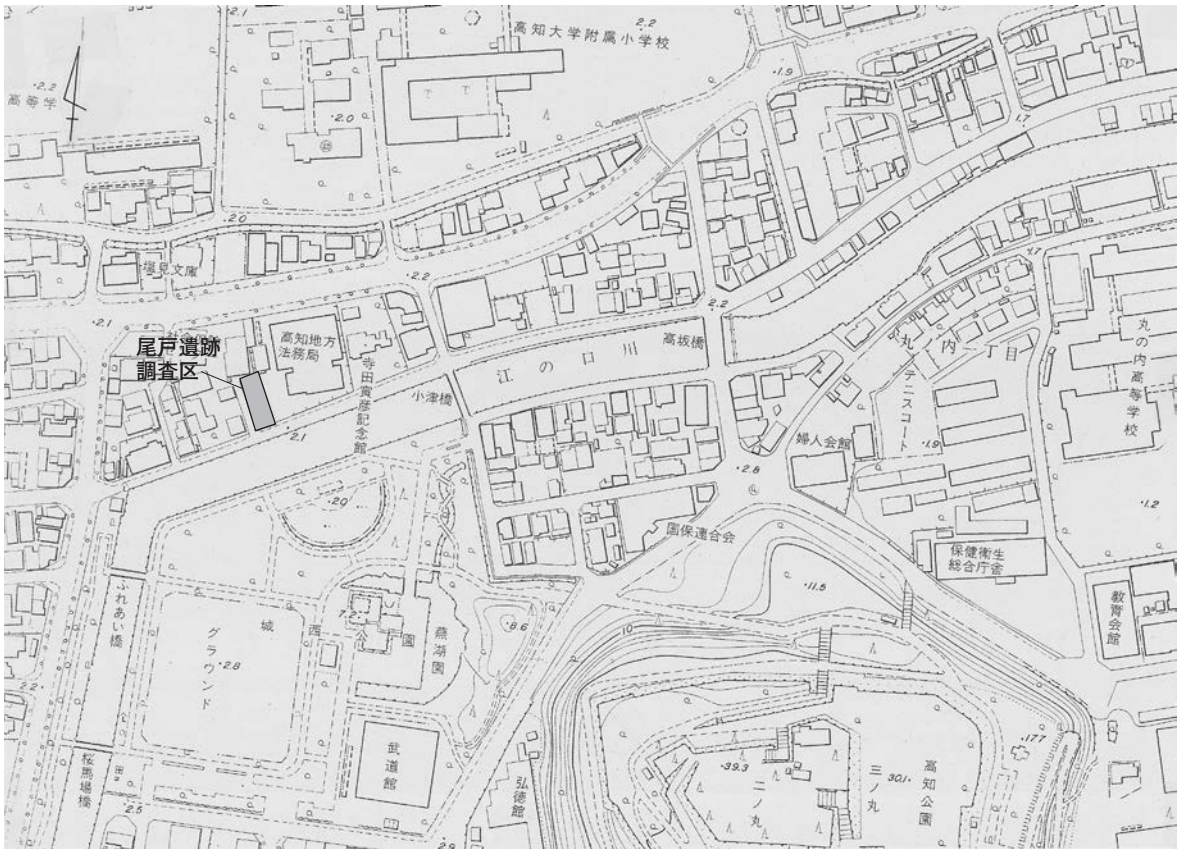


図10　平成13年地図（平成13年修正の「高知広域都市圏38」に加筆）

0　100m
（S=1/4000）

Fig.52　尾戸遺跡調査区の推定位置

史料1　『大高坂之郷地検帳』

江ノ上大道ノ南ノ添
一丶九代二分　上　同　同分　山本加兵衛　給

同しノ南ノ東
一丶壱反十代　出卅二分二分　上　同　同分　大宮大夫　給

四反タ
一丶四段十代　出四十八代一分　上　同　手作　大高坂権正分

同しノ南
一丶四十代　出十代　上　同　神兵衛扣　大高坂権正分

シャセフ大道添
一丶十代　出九代五分　上　同　国沢分　北岡源七郎　給

西ノ窪大道ノ添
一丶廿代　出十八代二分　上　同　同分　柿内源介　給

同しノ東前廿代地
一丶十八代　上　同　同分　同　孫左衛門　給

同しノ東道懸テ
一丶四十代　出廿六代二分　上　同　同分　国沢右衛門尉　給

同しノ東前卅代地
一丶廿六代　上　同　同分　国沢七郎兵衛殿　給

同しノ東前卅代地
一丶廿九代一分　上　同　国沢分　別府木工衛門　給

同しノ東道懸テ
一丶弐反　出廿三代五分　上　同　同分　柿内木衛門　給

同しノ東道懸テ
一丶十代　出十二代二分　上　大宮神田　同　非有扣

石立畠ノ後ヤ子添
一丶八代二分　上　同　国沢分　吉原藤兵衛　給

同しノ北ノトノ後道懸テ
一丶卅代　出一代　上　同　国沢分　国沢右衛門尉　給

同しノ東北ノ懸リ
一丶四十代　上　同　治部形□　道場分

ヲトノ後
一丶四十代　上　五台山分　同　窪田五郎左衛門扣　成吉分

同しノ西濱添
一丶十代　出四分　上　同　国沢分　嶋本太郎兵衛　給

同しノ西前十代地
一丶九代二分　上　同　同分　石本市介　給

西ノ窪
一丶四十代　出一代二分　同　国沢分　国沢左衛門尉　給

同しノ北道添
一丶廿九代　上　同　西本市介扣　五台山分　成吉分

高タ内外ヤシキ懸テ
一丶卅代　出十四代二分　上　同　国沢分　桑名太郎左衛門殿分

同し道タケ
一丶壱反　出十六代　上　同　同分　同し

同しノ西アキ畠
一丶卅代　出十一代二分　中ヤシキ　同　同分　西本市介　給

同しノ北
一丶五代　出三代　上　同　国沢分　柿内木衛門　給

西ノ窪
一丶壱反　出一代四分勾　上　同　同分　国沢孫介　給

同しノ西
一丶壱反　出廿七代二分　上　同　同分　西本忠兵衛　給

同しノ北前一反地
一丶四十五代　上　同　同分　吉田三郎左衛門殿分

同しノ北
一丶壱反　出十代　上　同　同分　国沢左衛門助　給

同しノ北前一反卅代地
一丶弐反廿三代三分　上　同　国沢七郎兵衛殿分

高タノ後
一丶弐反　出四十代五分　上　同　非有手作　別当分

史料2　『忠義公書状』

一、肥前焼物其元へ商人令持参候て、其元にも能土有之、焼物出来候ば重宝成候、又は家中侍共下々迄も遣用に致儀と被存、焼物いたし候者、其元へ下候様に内々令才覚候へと、大坂宮崎儀右衛門、植木一郎兵衛かたへ、去年の夏申遣、正伯と申焼物師壱人聞立置候へども、儀右衛門も其後相煩、一郎兵衛は大宮殿普請に付、京都へ罷上、其段百々平兵衛に申置候故、ふち方切米なとも少に而下度と申候ば、早々差下候様にと平兵衛方へ申遣候、其通彼者に申聞候へば、ふち切米に少も望無之、終四国より焼物出不申候間、罷下焼して見申度と申よし、大坂より申越に付、去年八月に其許へ呼下被申候由、可為其分候。

一、焼物いたし候釜、江之口お戸之小山にうたせ、下地冬中に仕、極月中旬に焼申候よし、可為其分候

一、茶入茶碗水差花入香炉皿之類、此外色々物数五百斗焼申候所に、新釜、其上道具する申台之土悪敷、くづれ候て過半損候よし、可為其分候

一、茶入茶碗花入皿、物数十二、くはんにう入仕立をいたし、何もに見せ申、分病中慰に見申様にと、対馬守納戸奉行共に言伝、目録差越被申、目録之通相屈候

一、相残焼物色々取揃、差越可被申得へども彼者妻子大坂就在之、年越に罷上度と申、罷上、仕立なども不仕候間、罷下仕立をもいたし候ば、大廻之船に差越可被申候旨、得其意候

一、大白染付なども焼申候よし申候へ共、左様の土、未見出し申さず間、連々を以、たづね出候ば焼可申候のよし、其外者、如形成土共其許に有之候と申候よし、可為其分候

一、右被差越候焼物、一段見事にやき申候、殊ふち切米も望不申、弥一段之事候、如被申越候、音信などにも遣候ため、又今下々の遣用にも旁重宝成事に候、今時分きりしたん御改弥きびしく候間、大坂へも申遣、左様之吟味をもよく被仕、以来之考を弥いたされ尤に存候

（承応三年）　三月廿七日　忠

野中主計殿
岡村平次殿
小倉弥右衛門殿

第2節. 尾戸遺跡検出遺構の性格と変遷

はじめに

今回の調査区は江ノ口川の北岸にあり、近世前期に形成された侍町の一角にある上級武士の屋敷跡にあたる。近世前期から後期にわたる居住者の変遷と周辺の景観の変化は、絵図や文献からもつかむことができ、今次調査地点が何度かの居住者替えをみながら、侍屋敷として機能し続けたことは前節にて触れた通りである。

今回の調査では、近世の侍屋敷に関わる掘立柱建物跡、井戸、土坑、ピット、埋甕その他の遺構を検出した。本節ではこれらの検出遺構の特徴をまとめ、屋敷地の空間構成と施設の構造、各期の変遷のあり方を見ていくこととしたい。また、前節にて明らかにされた大火の被害や各期の居住者替えなどの歴史事象が、遺構の検出状況にどのように現れているのかについても検討を行いたい。

1. 検出遺構の概要と変遷

近世の遺構は、掘立柱建物跡2棟、土坑33基、井戸1基、性格不明遺構3基、埋甕2基、杭群2箇所、及び近世又は近世の可能性のあるピット99個を検出した。本調査区では、遺構内や遺物包含層から15世紀後半～17世紀前半の遺物が少量出土しているが、検出遺構は17世紀後半以降のもので構成されている。また、近世の遺構は19世紀中葉まで連続して掘削されており、本地点が幕末まで屋敷地として機能し続けたことを示している。

前節までの検討によって、本地点では17世紀後半～18世紀前葉に島・野本氏、18世紀中葉～後葉に松下氏、18世紀末～19世紀中葉に大黒氏が居住したことが推定されている。そこで以下では、各氏の居住期間に従って時期区分を設定し、これに対応する主要な遺構を示すこととした。なお、各遺構の年代は、出土遺物や遺構間の切り合い関係をもとに廃絶時期を推定したものであるため、上記の時期区分に対応できないものもあるが、可能性の範囲に入るものを提示したうえで、各遺構の年代を追記することとした。(Fig.53)

1期：17世紀後半～18世紀前葉［主な推定居住者…島・野本氏］

SK15・31・SB1・2（17世紀後半～18世紀前葉）

SK13・19・23・26・28・30・33・34・SE1・SX1（18世紀前葉）

SK2・11・12・29（18世紀前半）、SK37（17世紀後半～18世紀前半）

2期：18世紀中葉～後葉［主な推定居住者…松下氏］

SK3（18世紀後半）

3期：18世紀末～19世紀中葉・・・［推定居住者…大黒氏］

SK1・6・7・9・18・SX2・埋甕1・2・杭群1・2（19世紀前半～中葉）

SK16・21・24・25・SX3（19世紀中葉）

本調査区では遺構廃絶のピークが18世紀前葉と19世紀中葉にあり、該当期を含む1期と3期の検出遺構が多くなっている。また、上記の区分では2期の遺構が少ないことに気付くが、これについては、この時期の遺構は出土遺物が少なく時期を特定できなかったことによっており、このことか

ら遺物廃棄量のピークも1・3期にあったことが分かる。

以下では、各期の検出遺構の特徴をまとめながら、屋敷の空間構成や施設の構造をみていきたい。

2. 17世紀後半～18世紀前葉の検出遺構と屋敷地

検出遺構の特徴

1期の遺構では、掘立柱建物跡SB1・2と、その他の建物の柱穴であった可能性をもつピット群、井戸跡SE1、土坑SK2・11～13・15・19・23・26・28～31・33・34・37、浅い掘り込み状の遺構SX1等が検出されている。

①掘立柱建物跡

掘立柱建物跡SB1・2は調査区の北部で検出した東西棟建物である。建物の規模は、SB1が1間×3間で、梁間2.14m、桁行5.06m、SB2は1間×2間までを確認し、梁間2.20m、桁行方向の確認長3.50mで、双方の建物は規模や柱間寸法が類似している。軸方向はSB1がN－63°－E、SB2がN－65°－Eである。SB1・2は重複しており、周辺にも柱穴の可能性をもつピットが多数分布することから、この周囲には掘立柱建物が繰り返し建てられていた様子が窺える。

②井戸

SE1は木製の井筒を伴う円形の井戸であり、掘立柱建物と柱穴が集中する地点の南側で検出されている。掘り方の規模は径2.78m、深さ1.84mで、これに板組の井筒が埋め込まれている。井戸側板の床は標高－0.3mの地点まで達しており、調査中には標高0m前後から井戸内に水が湧き出ていた。本調査区の場合、近代の道状遺構が標高1.71mで検出されているため、本屋敷地は当時の地表から地下1.7m程で豊富な地下水が得られる立地にあったと考えられる。

SE1掘り方の埋土中には17世紀末以降の遺物が含まれており、SE1が設置された時期は17世紀末以降と推定される。また、井戸埋め戻しの埋土中からはSX1と接合関係をもつ青磁鉢（239）が出土しており、18世紀前葉に掘削されたSX1と同時にSE1が廃絶していたことが分かる。

③土坑・性格不明遺構

この時期に特定できた土坑・性格不明遺構には、SK15・19・23・28・31・33・34など径が1m未満の小型のものと、SK13・19・26・30・SX1など径が2mを越える大型のものがある。その多くは廃棄遺構と考えられるが、1m未満の小型の土坑については遺物量が少ない傾向があり、性格が分かり難い。また、SX1・SK23・28・33・34とSK13・19・26・30は1期屋敷地の最終段階に掘削されたと考えられる遺構群である。

屋敷の空間構成と建物

さて、これらの検出遺構から屋敷地の構造を推定すると、屋敷正面と推定される南のラインから7.5m程奥の位置(註1)に井戸が設置され、井戸の周辺に小型の掘立柱建物が配置された様子が窺える。調査区内では瓦葺き建物の位置を示す礎石は検出することができなかったが、SB1・2の柱穴内とSK2・12・13・15・30・SE1・SX1から瓦片が少量出土しており、周辺に瓦葺き建物が存在していた可能性がある。しかし、井戸の周囲には柱穴の可能性をもつピットが他にも多数分布しており(註2)（Fig.8）、この時期、屋敷の奥空間の建物は掘立柱建物が主体となっていたことが推定される。

享保の大火と関連の遺構

次に、調査区内に多数分布する廃棄遺構にも注目したい。今回の調査区では、17世紀～18世紀前半の遺物を含む遺構で、埋土中に焼土や炭化物を多く含むものが複数あった。また、これらの遺構内には白色系の角礫が廃棄されており埋土の特徴が共通する他、遺構間で遺物の接合関係が認められ、複数の遺構への遺物廃棄が同時であったことが示されている。そこで、以下では関連の遺構についてその特徴をまとめておきたい。該当するものは、建物跡SB1・2の上面に掘削された廃棄遺構群（SX1・SK23・28・33・34）、大型の廃棄土坑群（SK13・19・26・30）である。このうち遺物の接合関係は、SX1と井戸SE1間で確認されている。

まず、まとまった遺物廃棄が認められた遺構には、SB1・2の上面を覆うように掘削された大型で浅い遺構SX1と、その直下で検出されたSK23・28・33・34がある。SX1の埋土中からは焼土は検出されていないが、5～10㎝大の石灰岩の角礫が多く含まれており、周辺の施設の解体等が暗示される。また、SK23・28・33・34は埋土中に炭化物を多く含み、SX1と埋土や遺物の出土状況が共通することから、同時期に掘削された遺構群と考えられるものである。これらの遺構内からは青花や初期伊万里、肥前産白磁や青磁、青磁大鉢、尾戸焼など、上質の陶磁器が多く出土している。

また、井戸SE1の南北には、径2.3～2.7mの大型の土坑SK19・13・26・30が近接して掘削されており、これらの大型土坑群からも当時の生活用具が多く出土している。このうち、SK13は埋土中に焼土ブロックと炭化物を多く含んでおり、火災との関連が窺われるものである。また、SK13下層からは石灰岩の角礫が出土しており、SX1との共通性が認められる。同様に、SK19も埋土中に炭化物を多く含み、床面から南壁にかけて石灰岩、チャート、砂岩、その他川原石からなる5～10㎝大の角礫・円礫が多く出土している。また、SK26・30も、埋土中に炭化物や炭化した木片が多く含まれている。

さて、これらの遺構群の時期については、出土遺物から導くとおよそ17世紀末～18世紀前半に捉えられるのであるが、屋敷地の生活基盤でもある井戸SE1が同時に埋め戻され、建物群の上面を覆うように廃棄遺構が掘削されている状況からみると、この時、屋敷地全体の機能が停止するような非日常的な出来事が起きていたことが推定される。

この時期に推定される災害を挙げると、城下町に大きな被害を与えた元禄11年の大火（1698）、享保12年（1727）の大火があるが、前節までの検討で触れたように、本地点が位置する大川筋一帯の侍屋敷は享保12年の大火で被害を受けており、その後、一帯の居住者が大きく入れ替わっている。また、出土遺物内にも18世紀前葉までの陶磁器製品が認められている。このため、今回の廃絶遺構群については、享保12年の火災直後の屋敷地の片付け跡であった可能性が高い。

ただし、本調査区では火災の痕跡を示す焼土層は未確認で、遺構内の焼土や炭化物の量も西弘小路遺跡や高知城跡で検出された火災関連遺構[註3]に比較すると少ないものであった。また、二次被熱を受けた陶磁器や瓦片の出土等も確認できなかった。そのため、本屋敷地が当時どの程度の被害を受けていたのかについては不明な点が多い。

なお、今回の調査では、近隣の尾戸窯で使用されていたとみられる窯道具が多く出土しているが、窯道具が出土した近世の遺構は、火災関連遺構のSK13・SE1・SX1と18世紀前半に比定されたSK2

に限定されている。これらのことから、火災直後、被災した尾戸窯からの廃棄物が周辺の屋敷地内にもたらされていたことが推定される。

3. 18世紀後半～19世紀中葉の検出遺構と屋敷地

検出遺構の特徴

2・3期のうち、18世紀中葉頃の遺構については詳細が不明なものが多かったため、以下では18世紀後半～19世紀中葉の遺構を中心にその特徴をみていきたい。

①杭群

杭群1・2を検出した。調査区の南部で検出された杭群2は東西方向に不規則に分布し、柵列の並びを特定することはできなかったが、屋敷地の南側を区切る境界施設であった可能性がある。一方、調査区北部で検出した杭群1は、南北に延びる2条の杭列が0.8～0.9m前後の幅をもって平行に並び、途中から東へ屈曲した後、再び南方向に向かう様子がみられるなど、変則的に配置されていた。

②埋甕

埋甕1・2を検出した。埋甕1は胴部最大径33㎝、器高35㎝の甕（284）を地中に埋めているもので、甕の体部下位には焼成後穿孔が穿たれている。埋甕1・2とも在地の能茶山窯産の甕を使用しており、1820年代以降に比定される。

③土坑

土坑には径1m未満（SK1・6・9・16・18）のもの、径1～2mのもの（SK3・24・25）と、3m以上のもの（SK21）があった。このうち大型の土坑SK21には陶磁器・土器その他の生活道具一式とともに、多量の瓦片や白色系の角礫が廃棄されている。

④性格不明遺構

SX3は調査区北部で検出した溝状の遺構で、19世紀中葉の廃棄土坑SK21の上面を切っており、19世紀中葉に掘削された遺構である。用途は不明であるが、杭群1と同様に南北に延びた後東側に方向を変えており、当時の屋敷地の北側の境界付近の構造を表わしているとみられる。埋土中には多量の瓦片と白色系の角礫が廃棄されており、建物や施設の取り壊しと同時期に埋め戻されたことが窺える。

建物と境界施設

近世後期の建物については、掘立柱建物跡の柱穴や瓦葺き建物に伴う礎石とも未検出であり、建物の構造や配置は明らかにできなかった。しかし、19世紀中葉のSK21・SX3からは多量の瓦片が出土しており、この時期、敷地内に瓦葺きの建物が多数存在していたことが分かる。

次に、調査区の南部と北部で検出した杭群の分布から、屋敷地の境界付近の構造を知ることができた。前節で検討した寛文9年の「寛文己酉高知絵図」（Fig.50－図1）によると、屋敷地の南面には東西の筋があり、筋に面した屋敷の南側が正面になっている。そのため、杭群2は屋敷の正面付近に設置された柵など、境界施設の一部と考えられる。また、その他の屋敷南面部分の構造については塀や溝などの施設も推定されるが、石列、溝等の遺構は検出されておらず、特定できなかった。一方、同絵図では屋敷地の北側は耕作地となっており、屋敷地との境界ラインは緩やかにカーブを

描く様に表現されている。杭群1は位置的にも屋敷地と耕作地との境界付近にあるため、境界に付属する施設であったのかもしれない。

南北方向の境界施設については、本調査区が屋敷の境界部分に当たっていない可能性が高く、検出できていない。しかし、調査区の西部で検出した近代の溝SD1はN－20°－Wの軸方向をもちながら南北方向に延びており、近代以降新たに設けられた屋敷区画の境界施設と考えられるものである。

19世紀中葉の動きと関連遺構

最後に、近世後期の屋敷地では、3期の終わりにあたる19世紀中葉に遺構廃絶のピークが認められている。これらの遺構内には19世紀中葉までの陶磁器や土器が多量に廃棄されているが、明治初頭の遺物は含まれていない。

絵図によると、近世後期に本地点に居住した大黒氏が慶応年間には移転しており、この時期、居住者の入れ替えが行われたことが明らかになっている。今回の検出状況においても、屋敷地の北部に大型の廃棄土坑SK21が掘られて多量の生活用具が廃棄されており、居住者の転居に伴う片付け跡の様子がみられている。また、この時期廃絶した遺構内には多量の瓦片や石灰岩の角礫も含まれており、この時、建物や塀などの施設も取り壊されていたことが分かる。

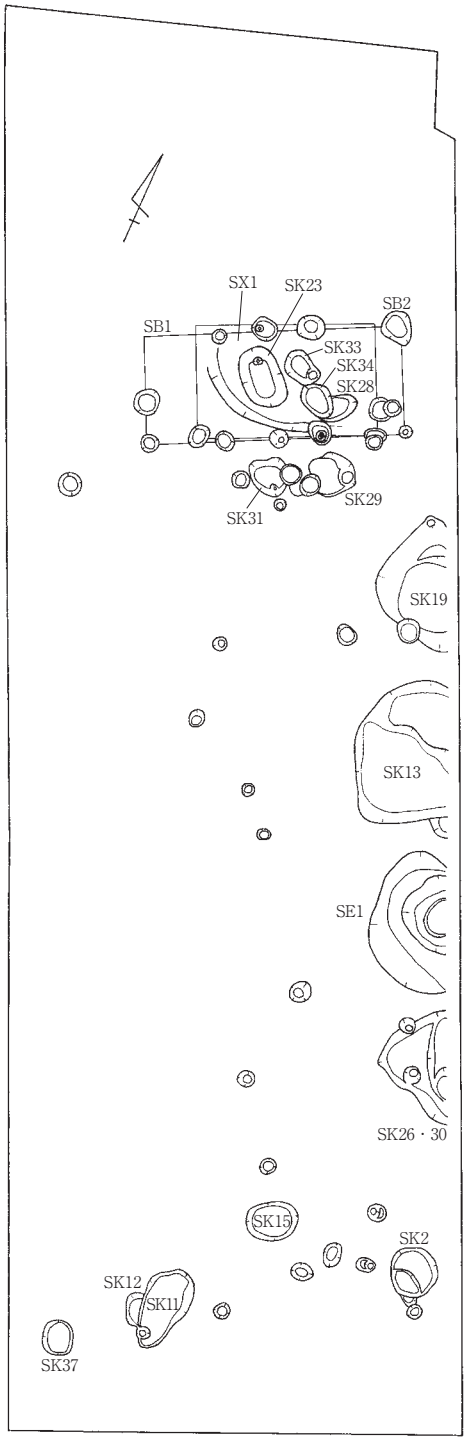
その後近代には、南北の溝SD1による新たな屋敷区画が現れ、このSD1も明治30年代頃には埋め戻されたとみられている。SD1の軸は、近世前期の掘立柱建物跡SB1・2と類似し、近世後期の杭群2ともほぼ垂直に交わることから、近世の屋敷地の軸は近代まで引き継がれていたことが窺われる。

［註］

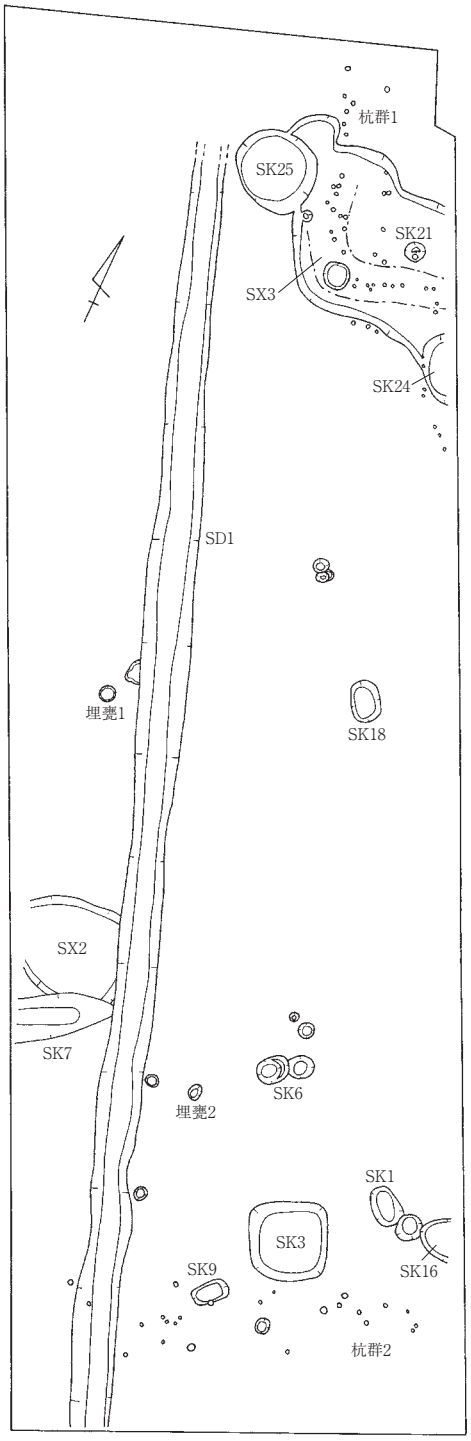
1) 屋敷の正面付近に設置された境界施設と考えられる杭群2を南の境界ラインとして、およその距離を導いたものである。

2) Fig.53図上に表したピットの他にも、出土遺物が無く時期を特定できないが、埋土が18世紀前葉以前の遺構と同じタイプのピットが多数あった。これらのピットの分布状況についてはFig.8を参照されたい。

3) 西弘小路遺跡SX4・11・22、高知城跡平成17年度調査地点SK3・4、高知城跡平成19年度試掘調査地点SX1、高知城跡平成21年度調査地点SK2～4・7・8・10・12・13・SE1は18世紀前葉の火災関連遺構であり、遺構内から焼土ブロックや炭化物、二次被熱を受け変質した陶磁器や瓦片等が多量に出土している。『高知城跡』高知市教育委員会2009、『西弘小路遺跡』高知市教育委員会2010、『史跡高知城跡・高知城跡』高知市教育委員会2013



17世紀後半～18世紀前葉



18世紀後半～19世紀中葉
（SD1は明治）

0　5m
（S=1/150）

Fig.53　尾戸遺跡検出遺構の変遷

第3節. 尾戸遺跡出土遺物の様相

はじめに

今回の調査では、本地点に侍屋敷が展開した17世紀後半から19世紀中葉の遺構が検出され、陶磁器、土器、石製品、金属製品、木製品等からなる様々な遺物が出土している。これらはここに居住した上級武士とその家族が所有した生活用具であり、その暮らしぶりを伝えるものである。またこの中には、18世紀前葉以前の尾戸焼を含む廃棄資料や、幕末の屋敷地の廃絶に伴って一括廃棄された良好な資料が含まれている。

本節では、これらの出土資料に含まれる陶磁器・土器の様相を検討し、居住者の生活形態や経済力、嗜好等を知る手掛かりとしたい。また、一括性の高い資料が得られた幕末の廃棄資料や、各期に流通する尾戸焼にも注目し、城下町における各生産地製品の流通実態などについても検討することとしたい。

1. 陶磁器・土器の様相

前節で触れたように、本調査区は17世紀後半以降侍屋敷となっており、17世紀後半に島氏、17世紀後半～18世紀前葉に野本氏、18世紀中葉～後半に松下氏、18世紀末～19世紀中葉に大黒氏が居住したと推定される。この時、居住した野本氏は知行200～300石、松下氏は200～250石、大黒氏は居住前の四代目が150石であり、何れも御馬廻りであった。

各遺構出土資料には、推定される廃棄年代と居住者との対応関係が分からないものが含まれるが、以下では17世紀後半～18世紀前半、18世紀後半～19世紀中葉の2期に分け、各期の出土資料の特徴をみていくこととしたい。

(1) 17世紀後半～18世紀前半

この時期の遺構出土資料には、SK2・11～13・15・19・23・26・28～31・33・34・37・SE1・SB1・2・P21・38・48・56・57・73・SX1出土資料等がある。

器種組成と各生産地製品の需要

磁器は大碗・中碗・小碗・小杯・皿・鉢・猪口・盃台・瓶・水滴・うがい茶碗・合子・蓋物、中国産青花と青磁は碗・小杯・皿、陶器は中碗・小碗・皿・鉢・擂鉢・壺・甕・瓶・灯明受皿・餌猪口、土器は土師質土器の杯・皿・人形、瓦質土器の火鉢、他に窯道具などの器種が出土しており、磁器には供膳具、貯蔵具、文房具、化粧具、陶器には供膳具、調理具、貯蔵具、灯明具、飼育具などの用途の製品が含まれている。また土器は、土師質土器の杯、皿などに用途不明のものがあるが、灯明受皿としての使用痕跡をもつ小皿が含まれ、灯明具、暖房具、人形などの用途が認められる。

生産地別にみると、磁器は肥前の製品で占められ、これに中国産の青花・青磁が少量含まれている。陶器では、やはり肥前が最も多いが、他に瀬戸、京都又は京都系、備前、尾戸窯の製品が認められる。各地の陶器製品の内容をみると、碗は肥前産の高台施釉の灰釉丸碗（223・224・225他）、京焼風陶器の碗（181・294）、皿は肥前産の唐津系灰釉陶器小皿（298・SB1・SK19・31・P48出土資料）、

内野山窯の緑釉蛇ノ目釉剥ぎ小皿（SB1・2・SK11・22・26・33・P56出土資料）や白化粧土打刷毛目の小皿（274）、京焼風陶器の中皿（297）など、肥前の製品が多く含まれており、これらの肥前産陶器が日用の食器として需要されていたことが分かる。他の生産地製品では、京都又は京都系の灰釉碗（296）、京都系の半球形小碗（10）がみえ、備前の製品は擂鉢（8・58・69・217・242）、甕（SK19・P56出土資料）、灯明受皿（48・267）、小瓶（216）が受け入れられている。その他、在地の尾戸窯の製品も認められている。

出土資料の特徴と居住者の生活形態

今回の出土資料には、初期伊万里の中皿（290）、白磁小杯（212・232）、青磁中碗（287）など17世紀前半までに生産された初期の肥前産磁器が含まれている。また、1650～1670年代に東南アジア輸出向けに生産された雲竜荒磯文大碗（54）もあり、国内流通が少ない製品の所有も認められた。一般に、集落部に磁器が普及し始めるのは18世紀以降とされるが、尾戸遺跡ではそれ以前から磁器の所有が見えており、居住者の高い経済力が看守できる。初期伊万里の出土量は比較的少ないが、これについては17世紀後半以降に居住が開始された本遺跡の性格を反映したものかもしれない。

また国内製品の他にも、景徳鎮窯系の青花碗（5）、青花小杯（66）、青花皿（67・221）、龍泉窯系青磁碗（281）などの中国製品が認められた。青花は、1620～1640年代にかけて生産された中国景徳鎮窯系の古染付が当時、茶の湯の道具として珍重されているが、当遺跡においても青花小杯（66）の所持がみえ、本屋敷地の居住者がこうした嗜好性の高い製品を所有できる経済力を持っていたことを物語っている。一方、青花碗（5）、青花皿（67・221）、青磁碗（281）などの15世紀後半～16世紀の製品については出土の背景が分かりにくいが、本調査区では他に中世の遺構や遺物が散見されないため、骨董として求められたものだろうか。

上記の肥前産磁器や中国製品の他にも、供膳具では、白磁盃台（39）、染付大皿（271）、青磁大鉢（239・273）、色絵磁器小碗（P57出土資料）、京都系の色絵小碗（SK12出土資料）などの上質の製品が認められており、これらを使用した上級武士の食事形態や饗応の姿が見てとれる。また、茶の湯に用いたとみられる天目形碗（43）や尾戸焼の碗、茶入とみられる備前焼の小瓶（216）も認められている。

供膳具以外の器種では、染付水滴（37）などの文房具、白磁又は染付のうがい茶碗（38）や色絵の合子（40）などの化粧具が含まれており、女性を含めた家族の暮らしぶりを伝えている。

一方、土器では、千手観音を表わした土人形（11・282）が出土しており、居住者の信仰の姿を見ることができる。

(2) 18世紀後半～19世紀中葉

この時期の遺構出土資料には、SK1・3・6・7・9・16・18・21・24・25・P51・63・72・77・83・93・埋甕1・2・SX2・SX3出土資料等がある。

器種組成と各生産地製品の需要

磁器は中碗・小碗・小杯・薄手酒杯・皿・鉢・猪口・燗徳利・蓋物・瓶・紅皿・水滴、陶器は中碗・小碗・小杯・皿・捏鉢・片口・擂鉢・鍋・土瓶・甕・瓶・柄杓・餌猪口・灯明受皿・火鉢・焜炉又は風炉・植木鉢、土器は、土師質土器の杯・皿・焙烙・焼塩壺・焜炉・竈・火消し壺・人形、瓦質土器の火

鉢・焜炉、施釉土器の皿・ミニチュア・人形などの器種が出土しており、この時期になると多様な用途の製品が認められている。

陶磁器の生産地についてみると、肥前に加えて、備前、瀬戸・美濃、京都・信楽系、堺・明石系、丹波、在地の尾戸窯と能茶山窯など、各地の製品が需要されている。在地と肥前以外の生産地製品では、磁器は瀬戸・美濃産の染付小皿（SK6出土資料）、関西系の色絵徳利（112）、陶器は京都・信楽系の灰釉小碗（128・129）・灰釉小杯（130）・柄杓（135）・灯明受皿（136・189）、瀬戸・美濃産の緑釉火鉢（142）・焜炉（205）、丹波の甕（25・138・204）、備前の擂鉢（SK6出土資料）、堺・明石系の擂鉢（133・134）などが見えており、特に関西方面からの製品流入が目立つ。

さらに19世紀には、1820年代以降生産を開始した在地の能茶山窯製品が加わり、生産地別組成に大きな変化が現れている。19世紀中葉の一括廃棄資料が得られたSK21・25出土資料を用いて、各地製品の需要のあり方をみてみると（Tab.27）、磁器では肥前産又は肥前系が82.2％、能茶山窯が14.4％、関西系が2.5％、瀬戸・美濃が0.8％となっている。また陶器では、能茶山窯22.2％、尾戸窯13.3％、尾戸窯又は能茶山窯1.1％、京都・信楽系12.2％、堺・明石系6.7％、瀬戸・美濃4.4％、丹波3.3％、肥前3.3％、備前1.1％、在地系・産不明32.2％となっており、ここでも在地製品が一定の比率を占めている。(註1)

このように、能茶山窯の陶磁器製品は19世紀中葉には高い比率を占めるようになっているが、今回の出土資料全体に見られる能茶山窯の磁器製品は、中碗（72・73・75・192・193）、小碗（83）、碗蓋（105・106・200）、小皿（91）、五寸皿（89）、鉢（98）、蓋物（110）などの器種で構成されており、供膳具、特に日用の食器が主体をなしている。また陶器でも、小皿（309他）、捏鉢、瓶（139）、甕（284・285）、灯明受皿（336）があり、供膳具、調理具、貯蔵具、灯明具などの日用の生活用具が多く認められている。こうした器種構成からも、能茶山窯製品が日用品を中心に多く買い求められていた様子が分かる。

出土資料の特徴と居住者の生活形態

一方、供膳具の一部や、文房具、化粧具などについては、上質な製品も認められた。まず供膳具では、肥前産の染付大皿（23・93）、色絵小杯（86）、色絵の薄手酒杯（87）、関西系の色絵燗徳利（112）などがみられている。大皿は主に供宴の場に供されたものであり、上級武士の供宴のあり方や食文化の一端をみることができるものである。その他の器種では、大黒天を表わした肥前産の白磁水滴（202）、軟質施釉陶器の人形又は水滴（51）などの文房具、紅皿（111・203・270）、染付合子（62）などの化粧具があり、趣向を凝らした文房具や化粧具には肥前の製品が用いられている。

このように、供膳具の一部や、文房具、化粧具などで、上級ランクの陶磁器や嗜好性の高い製品が所有される一方、日用食器や調理具、貯蔵具、灯明具などの生活道具については、集落部にも流通する在地の陶磁器や各地の量産品ランクの陶磁器が多く使用されており、こうした陶磁器所有のあり方にも当時の上級武士の生活形態が表れている。

この他には、陶器製の餌猪口や植木鉢などの飼育や園芸の楽しみに用いた道具、施釉土器の団扇形のミニチュア（163・164）、ミニチュアの碗（165）、魚（166）などの玩具や人形もみられており、本遺跡が女性や子どもを含めた家族が生活する居住空間であったことが示されている。

Tab.27　SK21・25陶磁器の生産地別出土点数 と組成比

	磁器						陶器										
	能茶山	肥前産・肥前系	瀬戸・美濃	関西系	中国	磁器計	尾戸	尾戸又は能茶山	能茶山	肥前	瀬戸・美濃	京都・信楽系	備前	堺・明石系	丹波	在地系・不明	陶器計
中碗・碗	12	32	1			45	11			2		1				6	20
小碗	1	13		1		15						5					5
小杯・薄手酒杯		9				9						1					1
大皿		1				1											
中皿		1				1				1							1
小皿・五寸皿	2	15				17		1	10							2	13
鉢	1	5				6											
猪口		4				4											
擂鉢													1	6			7
捏鉢・片口									6								6
鍋																5	5
土瓶																3	3
燗徳利				2		2										1	1
瓶・徳利		9				9			2							1	3
壺・甕															3	5	8
蓋物	1	4				5											
焜炉・火鉢											4					1	5
灯受明皿												3					3
紅皿		3				3											
水滴		1				1											
柄杓												1					1
餌猪口																2	2
植木鉢																1	1
不明							1		2							2	5
点数計	17	97	1	3	0	118	12	1	20	3	4	11	1	6	3	29	90
組成比 %	14.4 %	82.2 %	0.8 %	2.5 %	0.0 %	99.9 %	13.3 %	1.1 %	22.2 %	3.3 %	4.4 %	12.2 %	1.1 %	6.7 %	3.3 %	32.2 %	99.8 %

2. 尾戸窯関連の遺物

今回の調査では尾戸窯に関連する遺物が多く出土している。以下では、廃棄年代を特定できた遺構出土資料を中心に、尾戸窯関連の出土資料の様相をまとめておきたい。

①17世紀後半～18世紀前半

SK13出土資料（18世紀前葉）［中碗（41・42）・餌猪口（47）・器種不明（50）・ハマ（52）］

41は高台無釉の丸形灰釉中碗で、42も同様のタイプとみられる。47は灰釉の餌猪口で、外底にナデを施している。50は器種不明の把手の部分である。

SK23出土資料（18世紀前葉）［中碗（180）・碗又は鉢（179）・小皿（183）］

180は高台無釉の灰釉中碗で、体部の厚みが2～3㎜前後であり、18世紀以降の尾戸焼碗に比べると薄手である。高台は、高台内を曲線的に削り出し、高台内に渦状の鉋痕を残した作り方が18世紀

以降の尾戸焼碗に共通するが、高台の外側に削り出しによる稜が巡らされている点に違いがある。また、体部外面下位にも回転削りによる稜線が明瞭に残されている。179は灰釉の碗又は鉢で、体部の厚みが5㎜前後の厚手のものである。180と同様に体部外面下位に回転削りによる稜線が明瞭に残されている。183は高台施釉の灰釉の皿で、薄手の体部をもつ。ロクロ成形の後、口縁部の三方を内側に押して変形させている。高台内に渦状の鉋痕が残る。

SK30出土資料（18世紀前葉）［器種不明（215）］

215はたたら成形によるもので、箱形の形態をもつ器とみられる。

SE1・SX1出土資料（18世紀前葉）

［中碗（291・292・295）・皿か（240）・器種不明（243）・匣鉢（246～256）・トチン（301）］

291は丸形又は筒丸形になるとみられるタイプの碗で、体部の厚みは3㎜前後と薄手である。灰白色を帯びる半透明の釉を施し、釉は0.5㎜前後の細かい貫入が入り、表面に御本が見られる。成形、調整、釉薬とも丁寧で上質の碗である。292も丸形又は筒丸形になるとみられる碗で、体部の厚みは3㎜前後と薄手である。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施しており、御本が入る。295は高台無釉の碗の底部で、高台内を曲線的に削り出している。畳付、底部付近の器壁とも、後出の尾戸焼碗に比較して薄手である。成形、調整とも丁寧で上質の作りである。

240は皿とみられるもので、体部は4～5㎜と厚手である。243はたたら成形による箱形の体部をもつもので、内面施釉。246～256は匣鉢、301はトチンである。

P73（17世紀後半～18世紀前葉）［皿又は鉢（277）］

277は灰釉の皿又は鉢で、ロクロ成形の後口縁部を稜花形に削り出し、口錆を施している。

SK2（18世紀前半）［中碗（18）・瓶（19）］

18は灰釉の丸形中碗で、成形、調整とも上質の作りのものである。灰白色を帯びる半透明の釉を施し、釉は貫入が入る。19は鉄釉瓶の底部で、高台内を曲線的に削り出し、高台内に渦状の鉋痕を残している。

②18世紀

試掘調査SK1出土資料（18世紀）［水指又は甕（1）・碗蓋（2）］

1は灰釉の水指又は甕で、外面に鉄絵を描く。底部は平底であるが、外底中央に浅い渦状の鉋痕を残している。2は黒象嵌による暦手文を施した灰釉の碗蓋である。

③19世紀中葉

SK21・24・25・SX3出土資料（19世紀中葉）［中碗（118・119～124・186・187・308）・器種不明の把手（144）・白土器小皿（151・152・206）・土師質土器小皿（153）］

中碗は、器高がやや高い丸碗（119・120・122・123・308）と、器高の低い丸碗（186）、広東形碗（118）、腰張形碗（121）がある。碗は器壁が厚くなり4㎜前後のものが多い。186は器高の低い丸形の灰釉中碗で、鉄絵で格子文を描くもの。187は灰釉の中碗で、白土と鉄絵で梅花文を描くものである。118は広東形の灰釉中碗で、高台施釉。鉄絵による竹文が描かれる。121は腰張形の灰釉碗で、高台無釉であるが、高台内の削り出しが鋭角的になっている。124も高台内を鋭角的に削り出すものである。またこの時期の碗の中には、灰釉が光沢の強い透明の釉で貫入が粗いもの（121・

123・308）があるなど、釉薬にも変化が認められる。

白土器小皿は、高砂文（151）、松竹梅鶴亀文（152・206）が出土している。

尾戸遺跡出土資料の位置付け

さて、ここまで17世紀後半から19世紀中葉までの尾戸窯製品の特徴と変化をみてきたが、最後に、近年までの遺跡出土資料と比較しながら、今次資料の位置付けを考えてみたい。

今回の調査では、享保12年（1727）の大火直後、屋敷地の廃絶に伴って掘削されたとみられる廃棄遺構群とこの時廃絶した井戸SE1内から尾戸窯に関連する遺物が出土しており、18世紀前葉以前の製品像を伝える貴重な資料が得られている。

ここに含まれる灰釉碗（180）は薄手の体部や特徴的な高台の作りを示すもので、類例の高台外面に稜をもつタイプの尾戸焼碗は、山内家上屋敷が所在した丸の内三丁目遺跡（東京都千代田区丸ノ内三丁目）の元禄11年（1698）大火に伴う廃棄資料に認められている。[註2] また、その他の碗（291・292・295）も、薄手の体部をもつ上質な作りのものであった。この様な薄手の碗は、丸の内三丁目遺跡の同出土資料の他、尾戸窯跡からも少量出土しており[註3]、17世紀後半から18世紀前葉にかけて、こうしたタイプの尾戸焼が製作されていたことが明らかにされている。

この時期の尾戸焼は出土が江戸の上屋敷や窯跡に限定され、これまで県下の消費地遺跡からの出土例が殆ど無かったが、これは初期の尾戸焼が贈答品や藩用品の製作に重点を置いて製作されていたことによると考えられる。文献では、享保初年頃、六代藩主豊隆から「尾戸焼物師申付事」として出された通達[註4]に「尾戸焼物師共、向後ハ惣而諸品念入候手きは能き細工指止、麁相之仕成ニて御国中末末迄要用可相達雑物器焼出シ可申事」との記事がみえ、今後は手間をかけた上手の品は差し止め、民間向けの雑器を製作するようにとの意向が示されている。尾戸焼贈答の記事は七代藩主豊常の代までは続いており、通達が即座に藩窯経営の転換に結びついたとは捉え難いが、この通達が出された18世紀初め頃から、販売用の尾戸焼の製作に重点が置かれるようになっていったことが窺える。また、17世紀後半にも尾戸焼の民間販売が行われていたことは、前節で触れた『桂井素庵筆記』寛文4年（1664）の記事からも窺える。

今回の様に、18世紀前葉以前の尾戸焼が消費地からまとまって出土する事例は珍しい。しかし、本地点からは窯道具などの販売品以外の遺物も多く出土しているため、被災した尾戸窯の片付けに伴って、販売ルートに乗らない製品や窯道具などが近隣地に廃棄された可能性もある。また、販売品であった場合でも、本遺跡は窯場の近隣に立地し、城下町でも特に初期の尾戸焼を入手しやすい環境にある。そのため、この時期の尾戸焼が一般に城下のどの範囲まで流通していたのかという問題については出土事例の蓄積を待ち、今後の課題としたい。

次に、今回、18世紀後半に特定できる資料は得られなかったが、19世紀中葉の廃棄資料であるSK24からは、鉄絵や白土と鉄絵を組み合わせた文様意匠の碗（186・187・118）が出土している。同様の意匠の碗は、文政5年（1822）以前の資料にあたる尾戸窯跡出土資料[註5]に多く認められる他、城下町の上級武士の屋敷跡にあたる西弘小路遺跡からも、おおらかな筆ぶりで草文、笹文、稲束、宝文などの鉄絵を描いた丸碗が、18世紀後半のSK24・35・50出土資料（西弘小路遺跡781・1134）に認められている。また白土と鉄絵を組み合わせた文様意匠は、18世紀末～19世紀初頭のSK25出土

資料（西弘小路遺跡841）に見えている。

19世紀中葉の廃棄資料になると、それまでの主流であった茶碗の系譜を引くやや器高が高い丸碗（119・120・122・123・308）に加えて、器高の低い丸碗（186）や広東形碗（118）、腰張形の碗（121）など、新たなタイプの碗が現れている。器高の低い丸碗は飯碗とみられるもの、広東形碗も1780年代以降流行した肥前産広東形碗の影響を受けた飯碗であり、日用食器としての用途の碗が増加している。また、成形の面でも、高台内を鋭角的に削り出すタイプ（121・124）が現れるなど、高台の作り方に変化がみえている。また灰釉についても、透明で光沢が強く粗い貫入が入るもの（121・123・308）が増え、釉薬にも変化がみられている。

こうした様相は西弘小路遺跡[註6]の状況とも共通し、19世紀からは器高の低い丸碗や広東形碗が多く出土するようになっている。そして、これらの消費地遺跡の資料は、近世後期以降、日用品製作に重点を置いた生産体制へと経営を転換させた藩窯の姿を映しているように思われる。

しかしその一方で、茶の湯碗の系譜を引く丸碗は、19世紀以降も引き続き製作されており、今回の遺構出土資料にも多数含まれていた。こうした大振りの茶碗は、肥前や京都などの主要生産地では18世紀後半には生産が途絶え、煎茶の流行を背景とした小碗に主体が移っている。しかし、尾戸窯では旧来の茶碗が生産され続け、城下町に流通しているのであり、そこに茶陶の製作を目的として開始された尾戸窯の本質と、地方窯の独自性が表れているといえよう。

［註］

1）数値はいずれも推定個体数。個体数の算出は、口縁部点数と底部点数をもとに行った。この場合、接合不能な複数の口縁部片でも形態、調整痕、釉調、胎土等の観察から同一個体とみられるものは1個体とみなしてカウントした。また底部は同一個体の口縁部を伴わないもののみを1個体としてカウントしている。なお、碗蓋、鍋蓋、土瓶蓋、急須蓋、壺蓋、その他器種不明の蓋については、蓋と身が同一個体かどうか特定できないものがあり、個体数のカウントが重複する可能性があったため、出土点数計、組成比の項目から除外した。また窯道具も除外した。なお各資料中の染付碗蓋の出土点数は次の通りである。SK21－10点、SK25－6点。なお、尾戸窯製品については実態の分からないものがあるため、京焼と識別のつかないものを「京都系」としてカウントした。また、肥前産の陶器碗2点と皿1点の内容は17世紀後半～18世紀前半に生産された京焼風陶器と白化粧土刷毛目皿である。

2）『丸の内三丁目遺跡』東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター1994　関連の尾戸焼は未報告資料であり、遺物実測図は『尾戸遺跡』に掲載している。浜田恵子「消費地遺跡出土の尾戸焼とその製品流通」『尾戸遺跡』高知市教育委員会2007

3）薄手で白象嵌を施した碗（尾戸遺跡－図版255）、薄手で呉須絵を施した碗（同－318）、薄手の灰釉碗（同－323）などが出土している。『尾戸遺跡』高知市教育委員会2007

4）平尾道雄『土佐藩工業経済史』より引用。

5）尾戸の窯場は、文政3年に能茶山に藩の磁器窯と陶器窯が開かれるに伴って、文政5年に能茶山へ移転しているため、尾戸窯跡出土資料内には文政5年（1822）の移転以前に製作された尾戸焼が含まれている。

6）浜田恵子「西弘小路遺跡出土の尾戸焼について」『西弘小路遺跡』高知市教育委員会2010

写　真　図　版

調査前風景（北西より）

完掘状況（北より）

PL. 2

南部完掘状況（北より）

北部完掘状況（北より）

調査区西壁

SE1 セクション（南より）

PL. 4

SE1 セクション（西より）

SE1 井戸側検出状況（西より）

SE1 遺物出土状況（239）

SE1 井筒半截状況（西より）

SK1・2・16・17 完掘状況（南より）

SK7・SX2・SD1 セクション（南より）

SK11・12 セクション（南より）

SK13 セクション（南より）

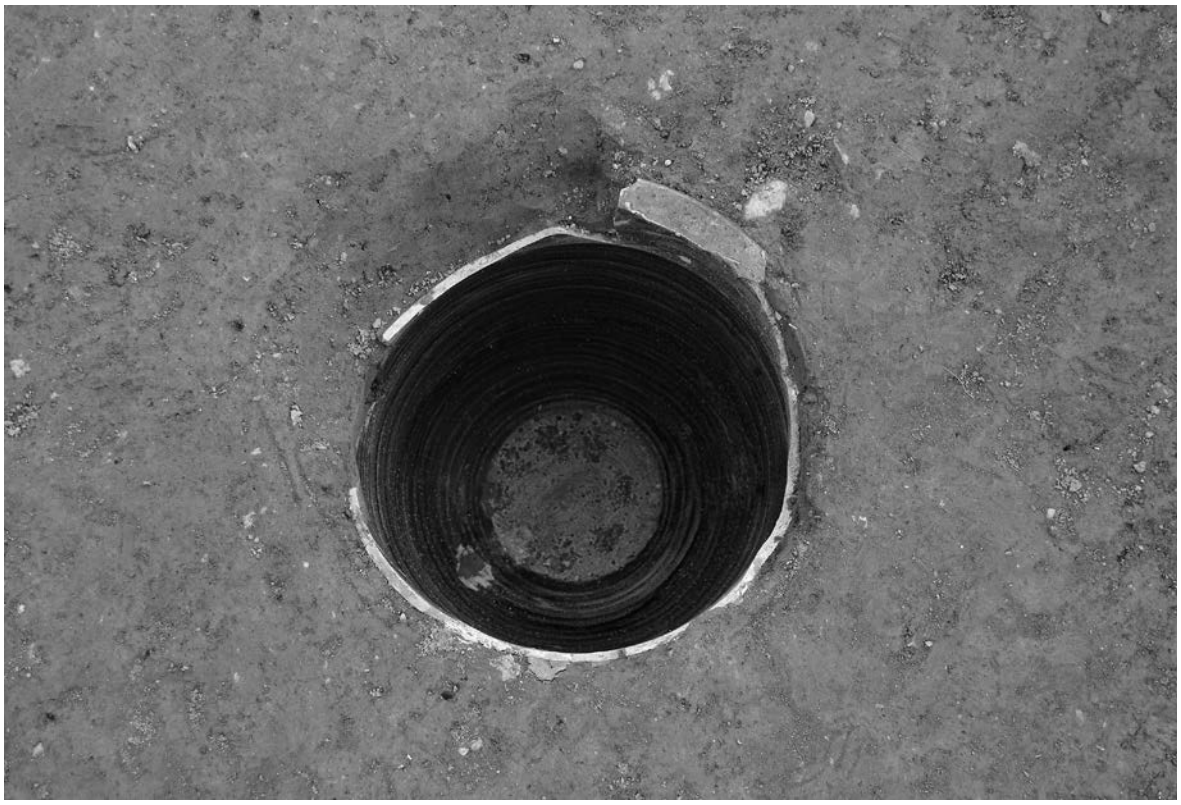
SK19 礫出土状況（北西より）

SK19・20 完掘状況（南西より）

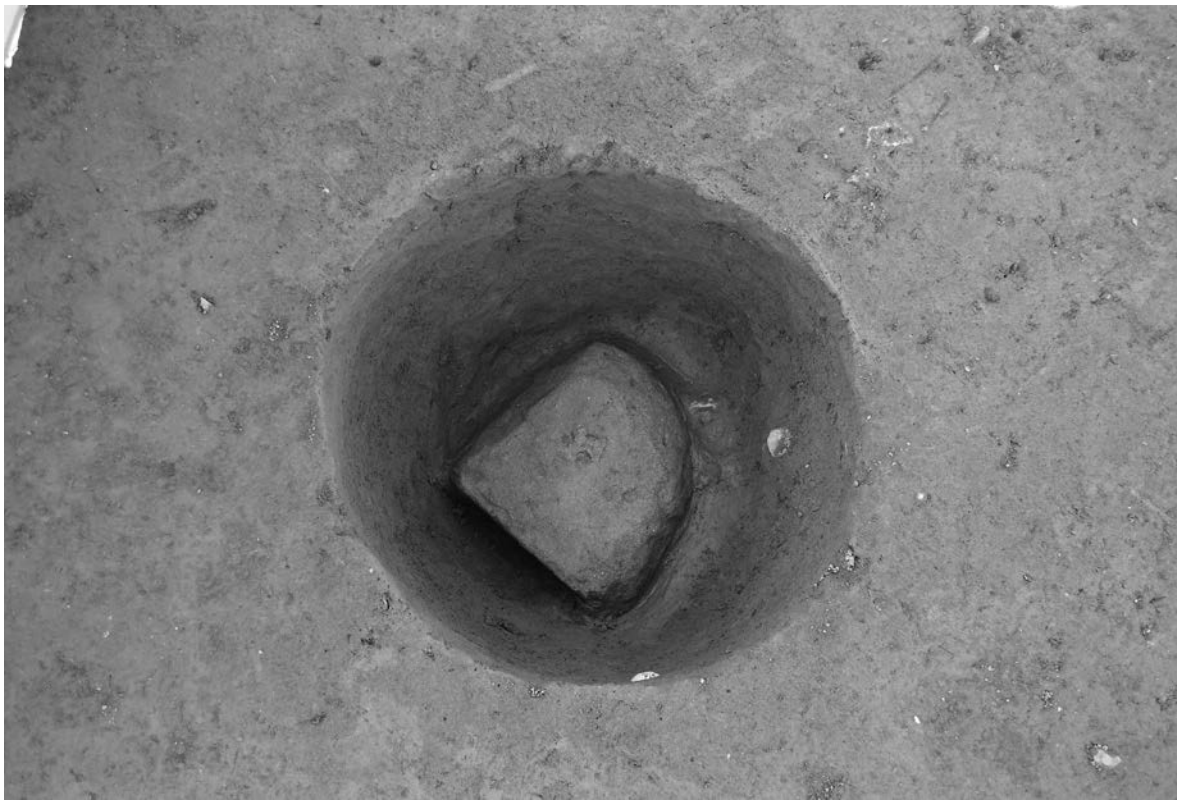
SK21・SX3 セクション（南より）

SK25 セクション（西より）

SK22・P68 セクション（東より）



埋甕 1（284）



P64 礫出土状況

SK23・33・SX1 遺物出土状況（北より）

PL. 12

SD1 セクション（南より）

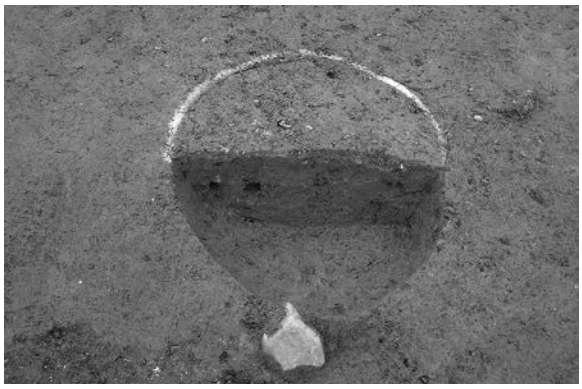
SD1 礫出土状況（南より）

SD1 遺物出土状況（370）

SD1 遺物出土状況

SK2 セクション（南より）

SK6 セクション（西より）



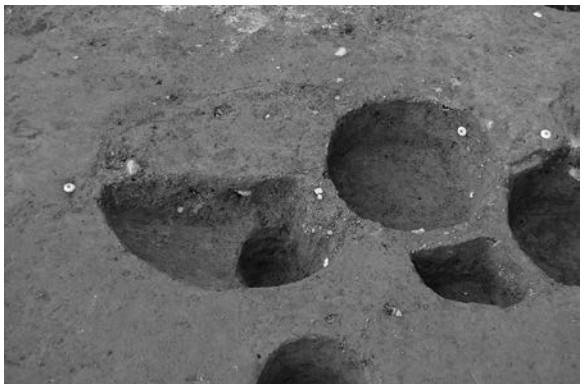
SK8 セクション（南より）

SK14・P29 セクション・P28（南より）

SK26・30 完掘状況（西より）

SK27 セクション（南より）

SK28・34 完掘状況（南より）



SK31 セクション・P58・73・74（南より）

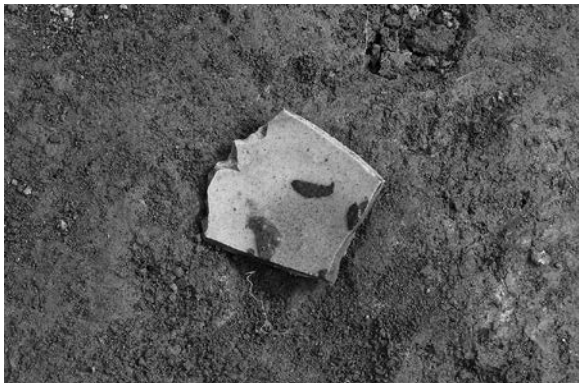
P6礫出土状況

埋甕2（285）

SK23遺物出土状況（182）

SK23遺物出土状況（183）

SK33遺物出土状況（222）

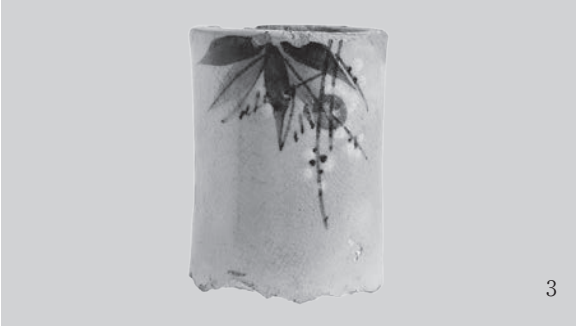


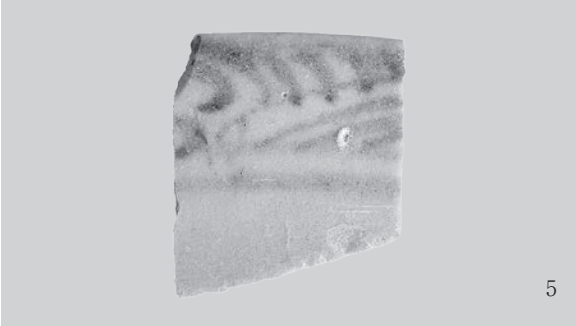
SX1遺物出土状況（298）

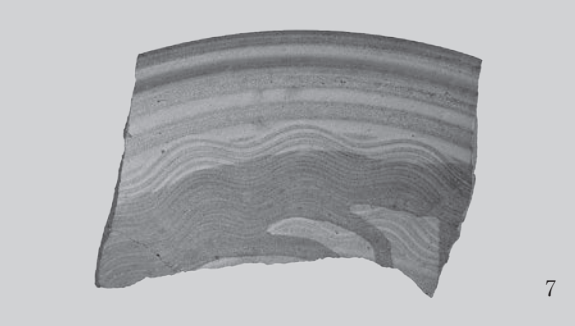
SE1遺物出土状況（239）

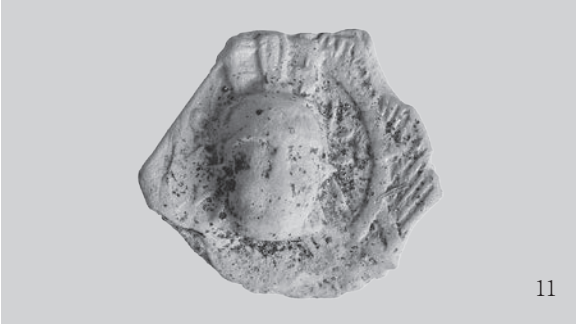
平成23年度試掘調査SK1遺物出土状況（1）

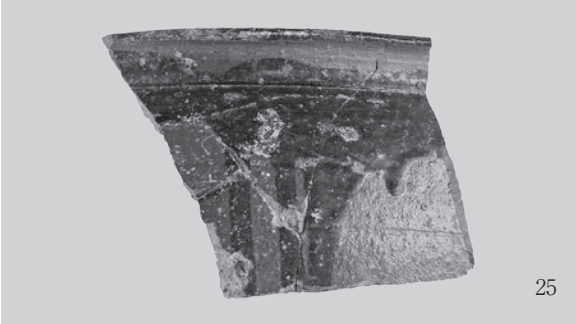
PL. 16



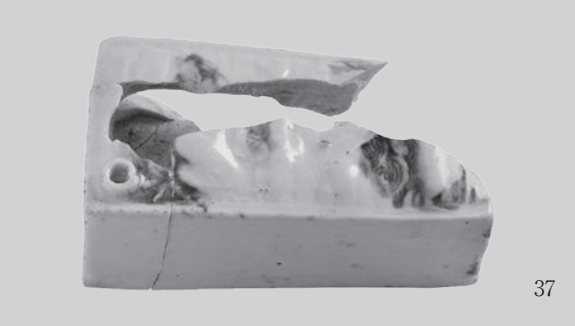




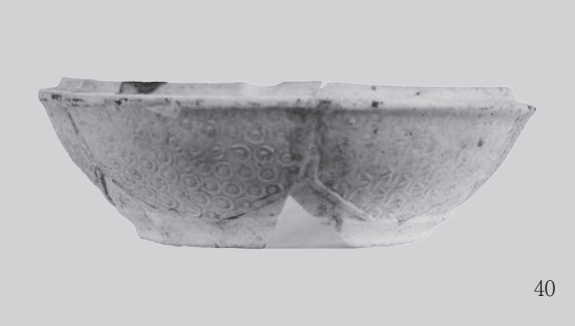




平成23年度試掘調査TP4－SK1・TP3－Ⅱ層・TP4－Ⅱ層・SB1－P6・7・SB2－P5・SK2・3・13・Ⅱ層出土遺物


37

39


40

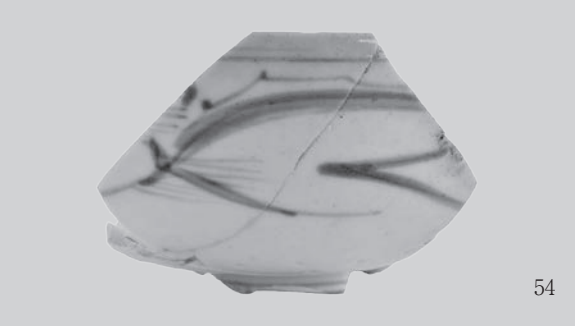
43

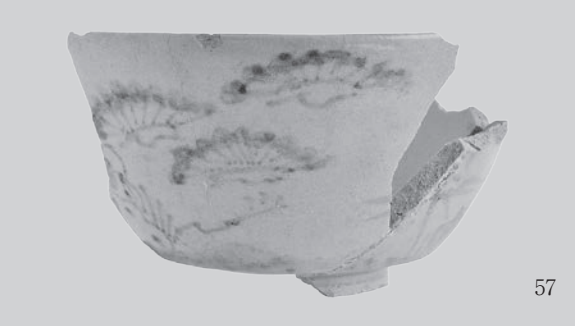
44

45

47

51


54


57

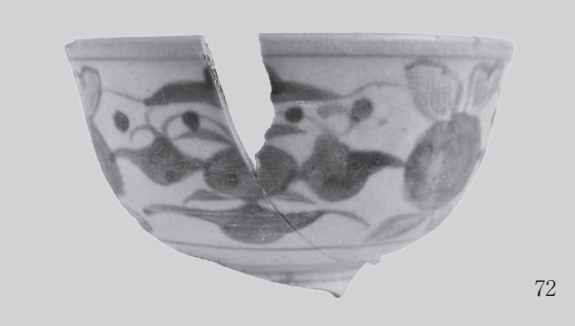
SK13・15出土遺物

PL. 18

60

63

69


72

77

83

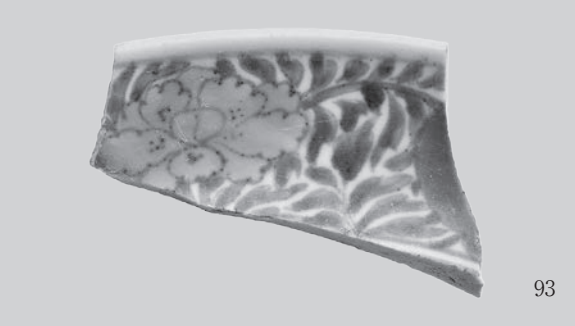
86

91

89

89

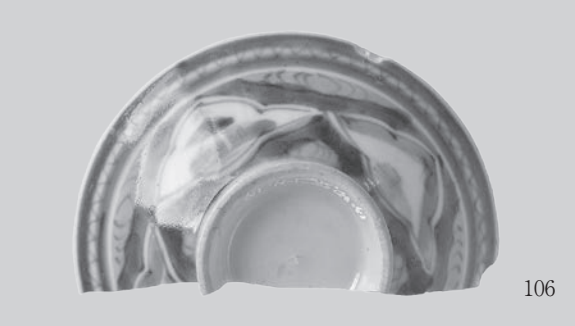
SK16・19・21出土遺物

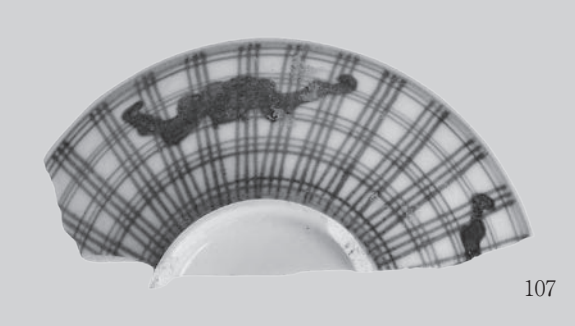

93

95

103

105


106


107

113

114

117

126

SK21 出土遺物

PL. 20

132

132

143

144

146

148

162

162

163

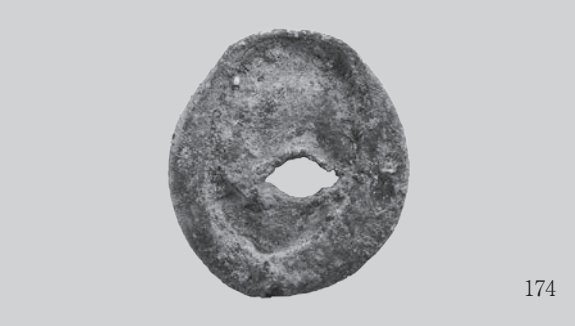
164

SK21 出土遺物

165

166

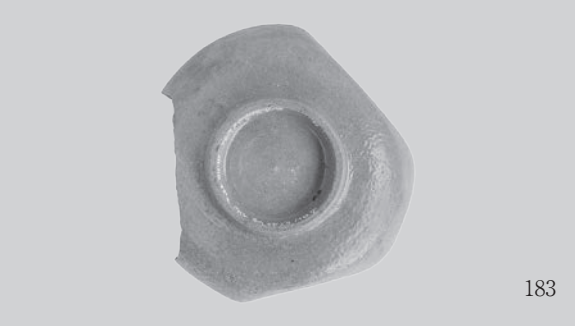
172

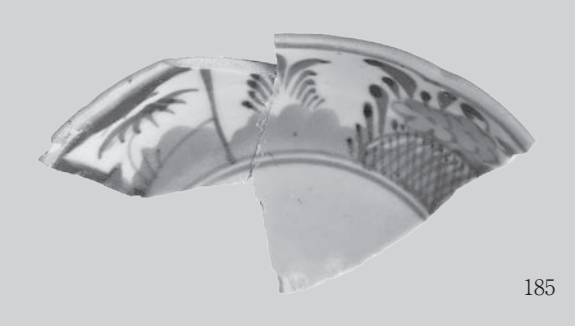

174

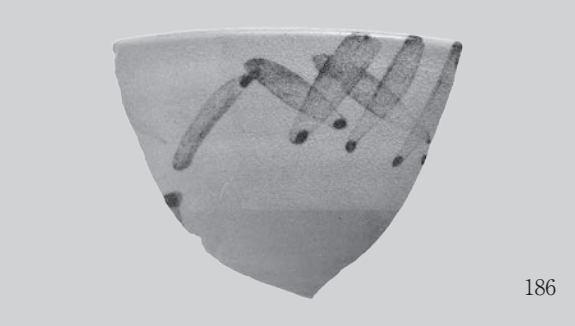
180

182

183


183


185


186

SK21・23・24出土遺物

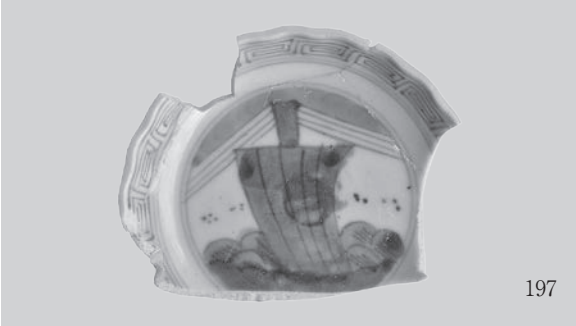
PL. 22

188

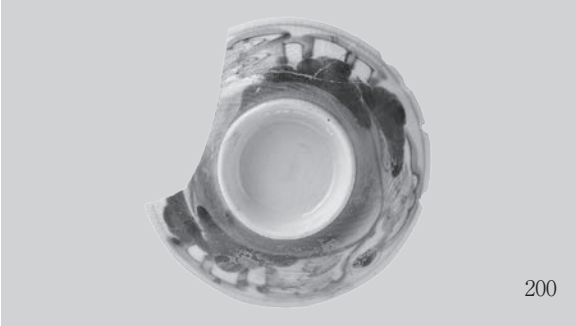
190

192

195


197

199

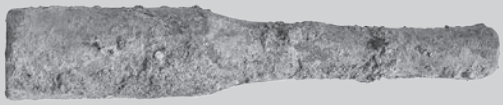

200

200

201

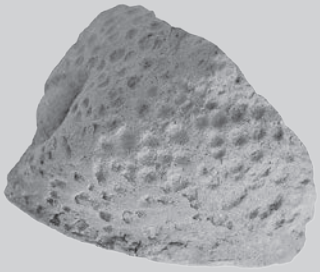
202

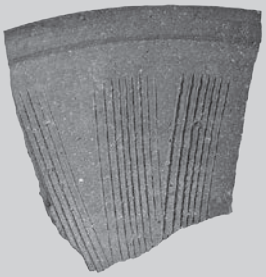
SK21・24・25出土遺物


207

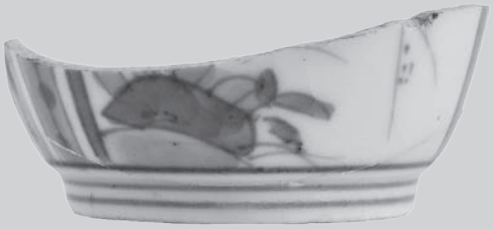
208

210

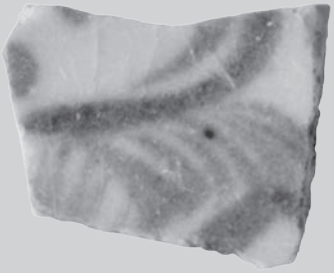

211

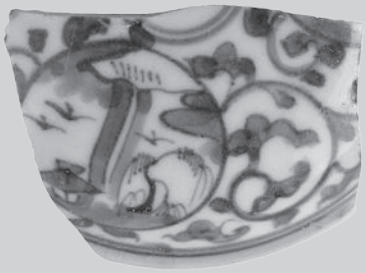

217

220


222

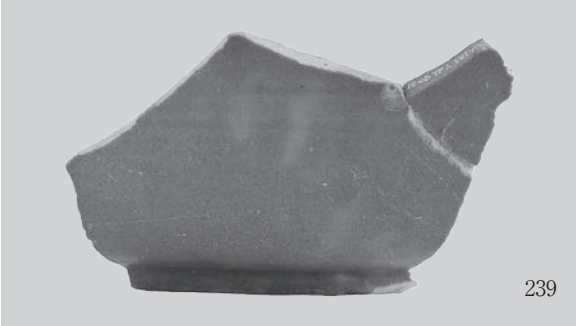
222

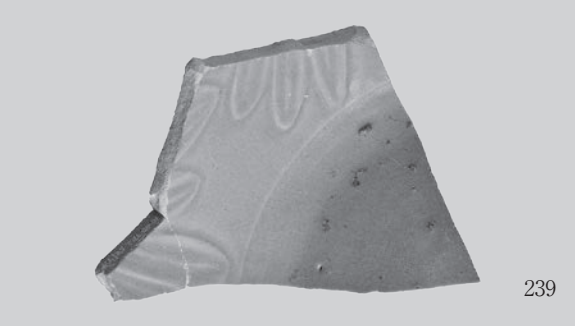

221


238

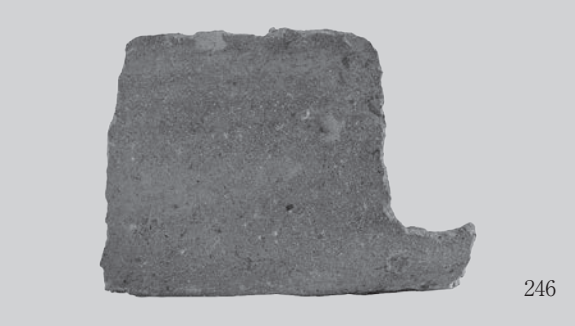
SK25・26・30・31・33・SE1 出土遺物

PL. 24

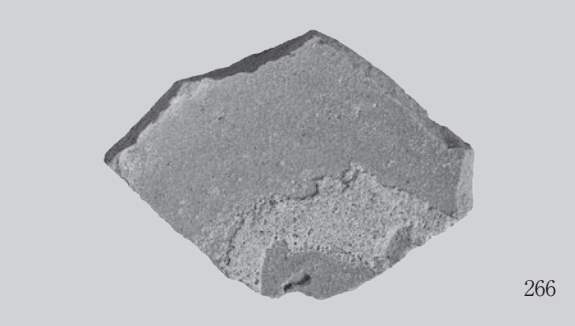

239


239

241


246

248


266

275

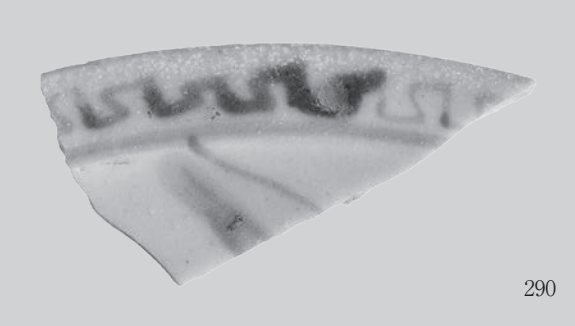
281

282

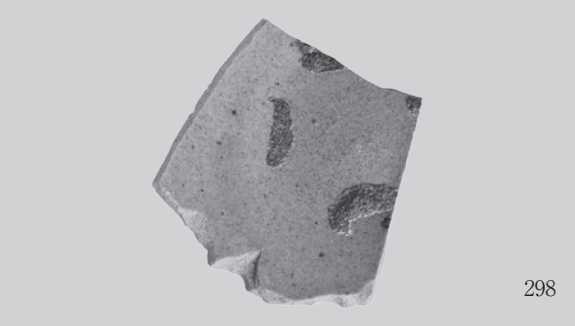
283

SE1・SX1・P21・57・58・96出土遺物

284


290

294

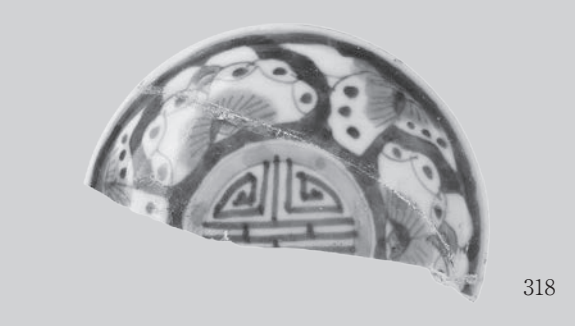

298

299

301

314

315

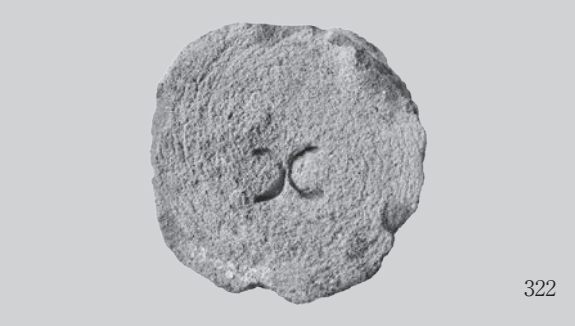

318

321

埋甕1・SX1・Ⅱ層出土遺物

PL. 26

322


322

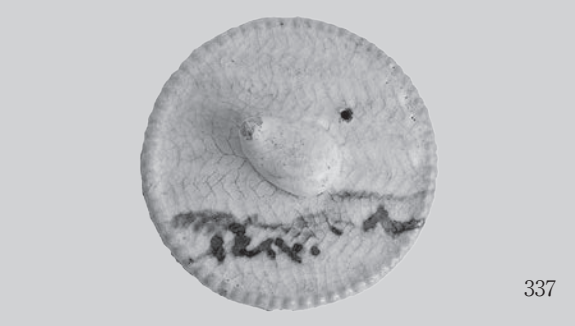
324

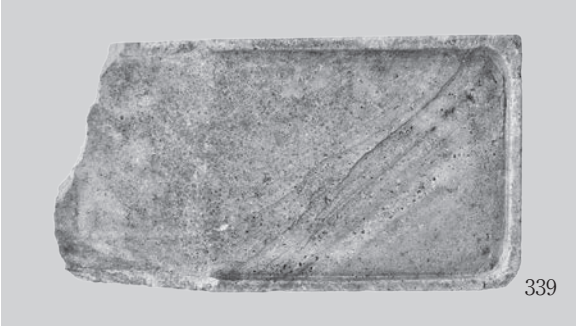
335

336

338

337


337


339

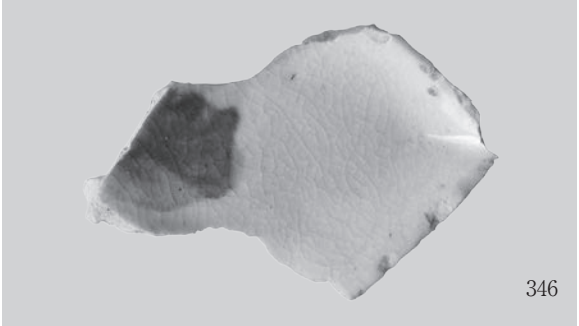
340

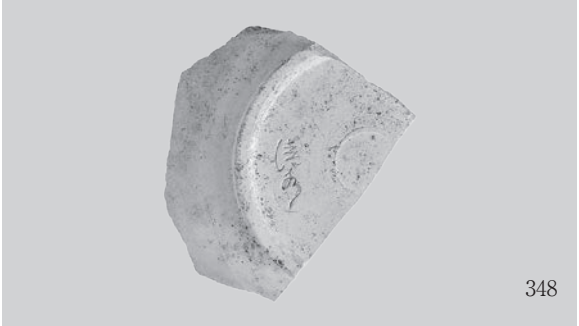
Ⅰ・Ⅱ層・撹乱・SK14出土遺物

341

342

343

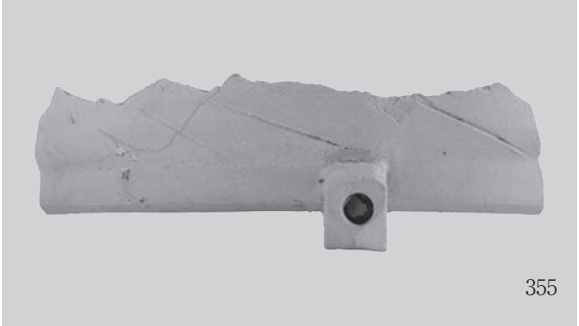

346


348

353

349

354


355

359

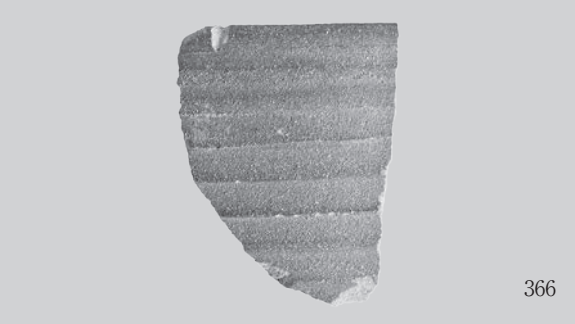
SK10・SD1 出土遺物

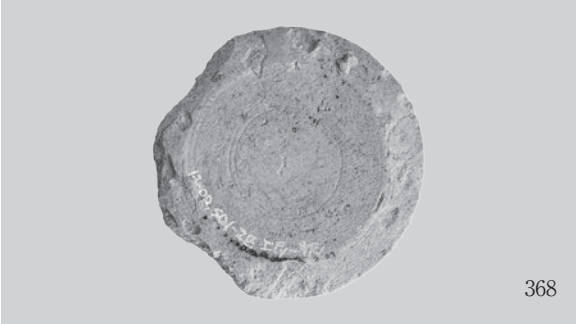
PL. 28

361

364

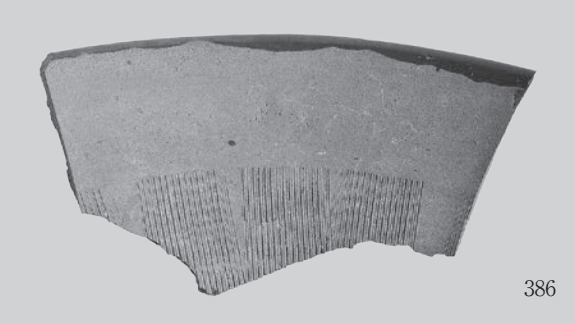
365


366


368

377

381


386

387

380

379

SD1・Ⅰ層・撹乱出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	おどいせき
書名	尾戸遺跡
副書名	共同住宅立体駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高知市文化財調査報告書
シリーズ番号	第39集
編著者名	浜田恵子・梶原瑞司
編集機関	高知市教育委員会
所在地	〒780－8571　高知県高知市鷹匠町2丁目1－43　Tel. 088－832－7277
発行年月日	西暦　2015年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″		㎡	
尾戸遺跡（おどいせき）	高知県高知市（こうちけんこうちし）小津町（おづちょう）25番地	39201	10068	33度33分47秒	133度31分40秒	20014年1月7日～1月29日	245㎡	共同住宅立体駐車場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
尾戸遺跡	屋敷跡	江戸時代	掘立柱建物跡 土坑 井戸 ピット 溝 杭跡 性格不明遺構	近世陶磁器・土器 貿易陶磁器 金属製品 石製品 木製品 瓦	近世の侍屋敷に伴う掘立柱建物跡・土坑・井戸・溝・ピットを検出。

高知市文化財調査報告書第39集

尾　戸　遺　跡

共同住宅立体駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015年３月

発行　高知市教育委員会
〒780－8571　高知県高知市鷹匠町2丁目1－43
民権・文化財課
電話088－832－7277
印刷　共和印刷株式会社